

江
馬
氏
城
館
跡
VI

江馬氏城館跡 VI

—整備工事に伴う下館跡の発掘調査—

二〇一〇

飛驒市教育委員会

2010

飛驒市教育委員会

飛驒市文化財調査報告書 第1集
江馬氏城館跡調査報告書 第7集

え ま し ろ やかた あと
江 馬 氏 城 館 跡 VI

—整備工事に伴う下館跡の発掘調査—

2010

飛驒市教育委員会



2000 年度調査 園池跡転倒石除去後全景写真（西から）



2001 年度調査 地鎮遺構 SP 94 墨書き土師器皿出土状況（2 枚目の土師器皿、西から）

序

飛騨市は、平成 16 年 2 月 1 日に、旧古川町、旧河合村、旧宮川村、旧神岡町の 2 町 2 村が合併して誕生しました。本市は、岐阜県の最北端に位置し、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接している人口 28,199 人、面積 792.31 km² でその約 92% を森林が占めており、周囲を 3,000 m を越える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれた地域です。

神岡町は飛騨市の東に位置し、古くから鉱山の町として栄えてきましたが、近年は採鉱跡の地底空間を活用した東京大学のスーパー・カミオカンデや東北大大学のカムランドなどにより宇宙の神秘を探る最先端の実験観測が行われている町として世界に名が知られています。

町の中心を流れる高原川右岸の殿段丘の水田の中に江馬氏の館・庭園跡であるとされた「五ヶ石」が古くより顔を出していましたが、1976 年の土地改良工事をきっかけに行なった調査により、貴重な文化遺産として「江馬氏城館跡」が町民の前に姿を現しました。

1993 年から始まった本格的な発掘調査及び整備はいよいよ本年で一応の完了となります。本事業の特質すべき成果としては、室町時代の武家屋敷における希少な庭園の発掘であるとともに景石が雄大な山並みを背景に凛として立つ力強さを感じさせる庭であること、また、下館の構造配置が室町將軍邸と酷似していることなどが挙げられます。今日までの調査の成果は本報告書に詳細に記しておりますが、本報告書が今後の文化遺産の研究の礎として、更には文化保護への関心を高める一助となれば幸いと考えます。

最後となりましたが、発掘調査及び、整備事業の推進に当たり、多大なご支援・ご協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、殿地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

飛騨市教育委員会

教育長 松 葉 正

例　　言

- 1 本書は、岐阜県飛騨市神岡町殿に所在する江馬氏城館跡下館跡（岐阜県遺跡番号 21625 - 00093）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、史跡整備工事に伴うものである。史跡の復元資料とする目的として 1994 年度から実施しており、その 7 ~ 14 年目の調査である。
- 3 発掘調査は、文化庁記念物課、岐阜県教育委員会社会教育文化課、江馬氏城館跡調査整備整備委員会の指導のもとに、発掘調査は平成 2000 ~ 2004、2007 年度に、整理作業は平成 2000 ~ 2010 年度に、国庫補助事業として実施した。
- 4 本書の執筆は、第 4 章第 2 節は大平愛子、それ以外は三好清超が行った。また編集は三好が行った。
- 5 地形測量・空中写真測量の一部は、（株）日本テクニカルセンターに委託して実施した。
- 6 遺物の写真撮影の一部は、（有）村坂印刷に委託して実施した。
- 7 園池の花粉分析は、（株）パレオ・ラボに委託して実施し、その報告を第 3 章第 3 節に掲載した。執筆は新山雅広による結果をもとに三好が行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・個人名は五十音順）。

尼崎博正、市原富士夫、井上典子、内田和伸、大野博史、小野健吉、小野正敏、柏木健一、
加藤允彦（故人）、川上貢、川部誠、工藤圭章（故人）、古賀信幸、小島道裕、近藤大典、
坂井秀弥、佐藤秀樹、佐藤正知、杉本宏、吹田直子、千田嘉博、高橋順之、滝一男、龍居竹之介、
都竹清隆、中井均、成瀬正勝、早川万年、平澤毅、藤澤良祐、増野晋次、松野晶信、三宅唯美、
本中眞、山上雅弘

旧地権者各位

殿区、江馬遺跡保存会、神岡鉱業株式会社、岐阜県城館研究会、北陸中世考古学研究会

なお現地調査・整理作業の各過程で多くの方々にご指導・ご教授をいただいたが、本報告書における文責は各担当者にある。

- 9 本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。従来の当遺跡の発掘調査との整合性を考慮し、日本測地系を使用した。ただし、地区割においては、（X = 35878.577、Y = 13064.049）を原点として任意の調査座標網を設定した。水準は T.P. である。
- 10 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 1989 『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 11 調査記録及び出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯..... 1

 第1節 事業に至る経緯..... 1

 第2節 事業の経過..... 2

 第3節 これまでの調査..... 6

 第4節 調査の経過と方法..... 8

第2章 遺跡の環境..... 13

 第1節 地理的環境..... 13

 第2節 歴史的環境..... 15

第3章 発掘調査の成果..... 23

 第1節 基本層序..... 23

 第2節 遺構と遺物の概要..... 25

 第3節 2000～2001（平成12～13）年度園地・礎石建物SB46地区調査..... 32

 第4節 2001（平成13）年度礎石建物SB43地区調査..... 68

 第5節 2002（平成14）年度I地区調査..... 75

 第6節 2002（平成14）年度II地区調査..... 82

 第7節 2003（平成15）年度I地区調査..... 88

 第8節 2003（平成15）年度II地区調査..... 94

 第9節 2004（平成16）年度調査..... 99

 第10節 2007（平成19）年度調査..... 107

第4章 総括..... 113

 第1節 出土遺物と層序の関係..... 113

 第2節 下館跡の遺構変遷..... 115

 第3節 下館における園地のあり方..... 125

 第4節 総括..... 127

引用・参考文献..... 129

別表..... 131

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図 調査地区周辺の地形と発掘区位置図	4
第 2 図 江馬氏下館跡の位置図	13
第 3 図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡	14
第 4 図 中・近世の吉城郡の交通路	19
第 5 図 土層断面柱状図	25
第 6 図 土師器皿分類図	30
第 7 図 瓦器分類図	31
第 8 図 園池跡石材色分け図及び番号図	33
第 9 図 園池跡断面図位置図	34
第 10 図 2000～2001年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査平面図	35
第 11 図 園池跡検出状況平面図	37
第 12 図 園池跡完掘状況平面図	39
第 13 図 園池跡南北方向トレンチ土層断面図（1）	41
第 14 図 園池跡南北方向トレンチ土層断面図（2）	43
第 15 図 園池跡東西方向トレンチ土層断面図（1）	45
第 16 図 園池跡東西方向トレンチ土層断面図（2）	46
第 17 図 園池跡立面図位置図	49
第 18 図 転倒石除去後の景石立面図（1）	50
第 19 図 転倒石除去後の景石立面図（2）	51
第 20 図 2000～2001年度園池地区出土遺物実測図（1）	52
第 21 図 2000～2001年度園池地区出土遺物実測図（2）	53
第 22 図 地鎮遺構 SP 94 土師器皿出土状況実測図	54
第 23 図 地鎮遺構 SP 94 出土遺物実測図	54
第 24 図 花粉化石分布図	57
第 25 図 2000～2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図（1）	58
第 26 図 2000～2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図（2）	60
第 27 図 2000～2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図（3）	62
第 28 図 礎石建物跡 SB 46 実測図	65
第 29 図 板塀跡 SA 47 実測図	67
第 30 図 2000～2001年度礎石建物 SB 46 地区出土実測図	67
第 31 図 2001年度礎石建物 SB 43 地区調査平面図	69
第 32 図 2001年度礎石建物 SB 43 地区調査断面図	70
第 33 図 2001年度礎石建物 SB 43 地区出土遺物実測図（1）	72
第 34 図 2001年度礎石建物 SB 43 地区出土遺物実測図（2）	73
第 35 図 2002年度 I 地区調査平面図	75

第 36 図 2002 年度 I 地区調査断面図	76
第 37 図 土壙に伴う柱穴列跡 SA 55・SA 56 実測図及び南堀跡平面図	77
第 38 図 2002 年度 I 地区調査南堀跡断面図	79
第 39 図 2002 年度 I 地区出土遺物実測図	81
第 40 図 2002 年度 II 地区調査平面図	83
第 41 図 2002 年度 II 地区調査断面図	84
第 42 図 磁石建物跡 SB 44・SB 49 実測図	85
第 43 図 2002 年度 II 地区出土遺物実測図	88
第 44 図 2003 年度 I 地区調査平面図	90
第 45 図 磁石建物跡 SB 43 実測図	91
第 46 図 2003 年度 I 地区調査古銭埋納遺構 SP 15 実測図	92
第 47 図 2003 年度 I 地区出土遺物実測図	93
第 48 図 2003 年度 II 地区調査平面図	95
第 49 図 2003 年度 II 地区調査断面図 (1)	96
第 50 図 2003 年度 II 地区調査断面図 (2)	97
第 51 図 2003 年度 II 地区出土遺物実測図	99
第 52 図 2004 年度調査平面図	100
第 53 図 2004 年度調査南堀跡断面図	101
第 54 図 2004 年度出土遺物実測図 (1)	104
第 55 図 2004 年度出土遺物実測図 (2)	105
第 56 図 2004 年度出土遺物実測図 (3)	106
第 57 図 2007 年度調査平面図	109
第 58 図 2007 年度調査 西堀跡箱堀実測図	110
第 59 図 2007 年度調査 西堀跡薬研堀実測図	111
第 60 図 2007 年度調査出土遺物実測図	112
第 61 図 江馬氏下館跡遺構主軸方位図	119
第 62 図 江馬氏下館跡 I 期の遺構配置図 (13 世紀後半～14 世紀代)	121
第 63 図 江馬氏下館跡 II A 期の遺構配置図 (14 世紀末～15 世紀後半)	122
第 64 図 江馬氏下館跡 II B 期の遺構配置図 (15 世紀末～16 世紀初め)	123
第 65 図 江馬氏下館跡周辺の近世村落復元図	124
第 66 図 東～南汀線立石据付断面模式図	126
第 67 図 西～北西汀線及び中島景石据付断面模式図	126

表目次

第 1 表 整備計画	2
第 2 表 江馬氏城館跡調査整備委員会	2
第 3 表 事務局の体制	3
第 4 表 江馬氏下館跡の発掘調査実績表	5
第 5 表 江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表	6
第 6 表 基本構想	6
第 7 表 調査基準点網設置原点杭国土座標値	11
第 8 表 遺構略号表	11
第 9 表 江馬氏関係年表	17
第 10 表 江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表	21
第 11 表 過去の調査との土層対応表	24
第 12 表 出土遺物の種類・器種別組成表	28
第 13 表 土師器皿分類表	29
第 14 表 瓦器分類表	32
第 15 表 花粉化石一覧表	57
第 16 表 2000～2001 年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査 建物跡計測表	63
第 17 表 2000～2001 年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査 板塀跡・柵列跡計測表	64
第 18 表 2000～2001 年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査 溝跡計測表	64
第 19 表 2001 年度礎石建物 SB 43 地区調査 建物跡計測表	71
第 20 表 2001 年度礎石建物 SB 43 地区調査 不明遺構計測表	71
第 21 表 2002 年度 I 地区調査 柵列跡計測表	78
第 22 表 2002 年度 I 地区調査 布堀り溝跡・溝跡計測表	80
第 23 表 2002 年度 I 地区調査 堀跡計測表	80
第 24 表 2002 年度 I 地区調査 土坑計測表	80
第 25 表 2002 年度 II 地区調査 建物跡計測表	87
第 26 表 2002 年度 II 地区調査 土坑計測表	87
第 27 表 2003 年度 I 地区調査 建物跡計測表	91
第 28 表 2003 年度 I 地区調査 溝跡計測表	91
第 29 表 2003 年度 II 地区調査 堀跡計測表	98
第 30 表 2003 年度 II 地区調査 土坑計測表	99
第 31 表 2003 年度 II 地区調査 溝跡計測表	99
第 32 表 2004 年度調査 堀跡計測表	102
第 33 表 2007 年度調査 堀跡計測表	108
第 34 表 調査地区ごとにおける遺物数量	113
第 35 表 調査地区ごとにおけるm ² 当たりの遺物数量	114

第36表 調査地区ごとにおける土師器の出土割合	114
第37表 遺物種類ごとにおける年代別数量	115
第38表 年代別の遺物数量	115
第39表 下館跡検出遺構の主軸方位による群分け	116
第40表 下館跡検出遺構と基本層序	117
第41表 遺物の出土を伴う遺構と遺物・遺構の年代観（堀外地区）	118
第42表 遺物の出土があった遺構との切り合い関係による遺構群の年代観（堀外地区）	118
第43表 下館跡検出遺構の主軸方位による群分け	119
第44表 堀外地区における遺構の切り合い関係	120
第45表 遺構変遷表	120
第46表 柱穴跡断面形分類表	135

別表目次

別表1 遺構一覧表	131
別表2 2000～2001年度園池・礎石建物SB46地区、2001年度礎石建物SB43地区柱穴跡計測表	134
別表3 2002年度Ⅰ地区調査柱穴跡計測表	136
別表4 2002年度Ⅱ地区調査柱穴跡計測表	137
別表5 2003年度Ⅰ地区調査柱穴跡計測表	138
別表6 2003年度Ⅱ地区調査柱穴跡計測表	139
別表7 2004年度調査柱穴跡計測表	139
別表8 遺物計測表	140

写真図版目次

- 卷頭図版 2000 年度調査 園池跡検出状況全景（西から）
2001 年度調査 地鎮遺構 SP 94 墨書き土師器皿出土状況（2枚目の土師器皿、西から）
- 図版 1 神岡町遠景写真（北から）、下館跡全景（西から）
図版 2 園池跡東汀線景石、中央部岩島景石
図版 3 園池跡汀線
図版 4 園池跡、礎石建物跡 SB 46、柵列跡 SA 47、地鎮遺構 SP 94
図版 5 礎石建物跡 SB 43、不明遺構 SX 43、土壙基底部、土壙に伴う柱穴列跡 SA 55c・SA 56c
図版 6 南堀跡、礎石建物跡 SB 44・SB 49、古銭埋納遺構 SP 15、礎石建物跡 SB 41・SB 64
図版 7 北堀跡、南堀跡延長部、西堀跡薬研堀、西堀跡箱堀
図版 8 2000～2001 年度 園池・礎石建物 SB 46 地区出土遺物（1）
図版 9 2000～2001 年度 園池・礎石建物 SB 46 地区出土遺物（2）
図版 10 2000～2001 年度 園池・礎石建物 SB 46 地区出土遺物（3）
図版 11 2000～2001 年度 園池・礎石建物 SB 46 地区出土遺物（4）
図版 12 2001 年度 礎石建物 SB 43 地区出土遺物（1）
図版 13 2001 年度 礎石建物 SB 43 地区出土遺物（2）
図版 14 2002 年度 I 地区調査出土遺物
図版 15 2002 年度 II 地区調査出土遺物
図版 16 2003 年度 I・II 地区調査出土遺物
図版 17 2004 年度 南堀地区出土遺物（1）
図版 18 2004 年度 南堀地区出土遺物（2）
図版 19 2004 年度 南堀地区出土遺物（3）
図版 20 産出した花粉化石

第1章 調査の経緯

第1節 事業に至る経緯

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する飛騨市神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には、中世にこの地域の豪族・江馬氏が築いたと伝わる城跡が点在している。

高原川右岸に広がる段丘上の飛騨市神岡町殿地区には、古文書・古絵図等に「江馬之下館」と記される江馬氏下館跡が所在する。地元では古くから、殿字中通りの水田の中に残る5つの大きな石を「五ヶ石（御花石）」と呼び、中世高原郷を中心に活躍した地方有力武士である江馬氏の館・庭園跡であると言い伝えてきた。

神岡町（当時、現飛騨市。以下同じ。）・神岡町教育委員会は1976・77年度にかけて、この殿地区において土地改良工事に先立つ試掘調査を実施し、庭園跡、南・西の堀跡や建物跡の一部を確認した。特に庭園跡は、森蘊・庭園文化研究所所長（故人）により、室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受けた。庭園文化研究所による庭園測量図などの調査成果を基に、1977年度には岐阜県史跡「江馬館庭園跡」の指定を受けた。

1978年度には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業に採択され、館跡規模の確認を目的として本格的な発掘調査を実施した。この調査によって、下館跡は中世武家居館跡として全国的に見て非常に遺存状態のよいことが明らかとなった。1979年度には、下館跡は江馬氏との関連が伝わる6つの山城跡（高原諏訪城跡、洞城跡、石神城跡、寺林城跡、政元城跡、土城跡）とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた（1980年3月21日指定）。

1993年度には、神岡町・神岡町教育委員会では、江馬氏城館跡は国民共有の文化遺産であるという認識のもとに、その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査と整備事業を計画した。この整備事業では、史跡の公有化及び保護・保存を目的に、調査研究結果に基づいた歴史公園としての整備復元を目指した（第1表）。

1994年度には、各分野の学識経験者で構成した調査整備委員会を発足させ（第2表）、発掘調査の指導や助言、整備方法の提言を受けることになった。なお、事業の実施に当たっては文化庁・岐阜県教育委員会からの指導・助言を受けた。また同年度より史跡整備工事に先立つ発掘調査を実施した。

1998年度に、神岡町・神岡町教育委員会では江馬氏城館跡調査整備委員会の提言を受けて『史跡江馬氏城館跡整備基本構想』（以下、『基本構想』とする。）を策定し、1999年度には『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画』（以下、『基本計画』とする。）を策定した。この計画に基づき、2000年度より整備事業を進めた。

2003年度に、神岡町は近隣の古川町・河合村・宮川村と合併して飛騨市となり（2004年2月1日）、当事業は飛騨市・飛騨市教育委員会により継続実施することになった。

第1表 整備計画

整備計画	① 史跡として活用でき、歴史学習が身近にできる環境づくり ② 親しみやすく休息できる散策空間の整備 ③ 文化遺産を保護・保全していくための整備
事業内容	① 館跡は、史跡として活用できるので、調査結果に基づいて整備復元する。 ② 江馬氏城館跡全体を関連づけた施設を整備する。 ③ 出土遺物を整理し展示するための施設を整備する。 ④ 歴史学習に親しみやすくするために、散策、休憩の場としての空間を整備する。

第2表 江馬氏城館跡調査整備委員会

年度	委員長	委員 (建築)	委員 (考古学)	委員 (造園)	委員 (町長・市長)	委員 (江馬遺跡保存会長)	
1994	牛川喜幸 (故人)	吉岡泰英 (2009年度は 委員長を兼務)	前川 要	加藤允彦 (故人)	川上 伍 (故人)	田家幸夫	
1995			宇野隆夫			洞口英夫	
1996			前川 要			沖野好夫	
1997						山本 登	
1998						家越一三	
1999						井口和美	
2000						川上定義	
2001						吉中公男	
2002				宇野隆夫		沖野好夫	
2003						渡邊哲男	
2004						宮垣秀雄	
2005						結城泰宏	
2006						田中幸一	
2007				丸山 宏	船坂勝美	中家信二	
2008						山越守孝	
2009	吉岡泰英						

第2節 事業の経過

事業主体は飛騨市教育委員会事務局である（第3表）。

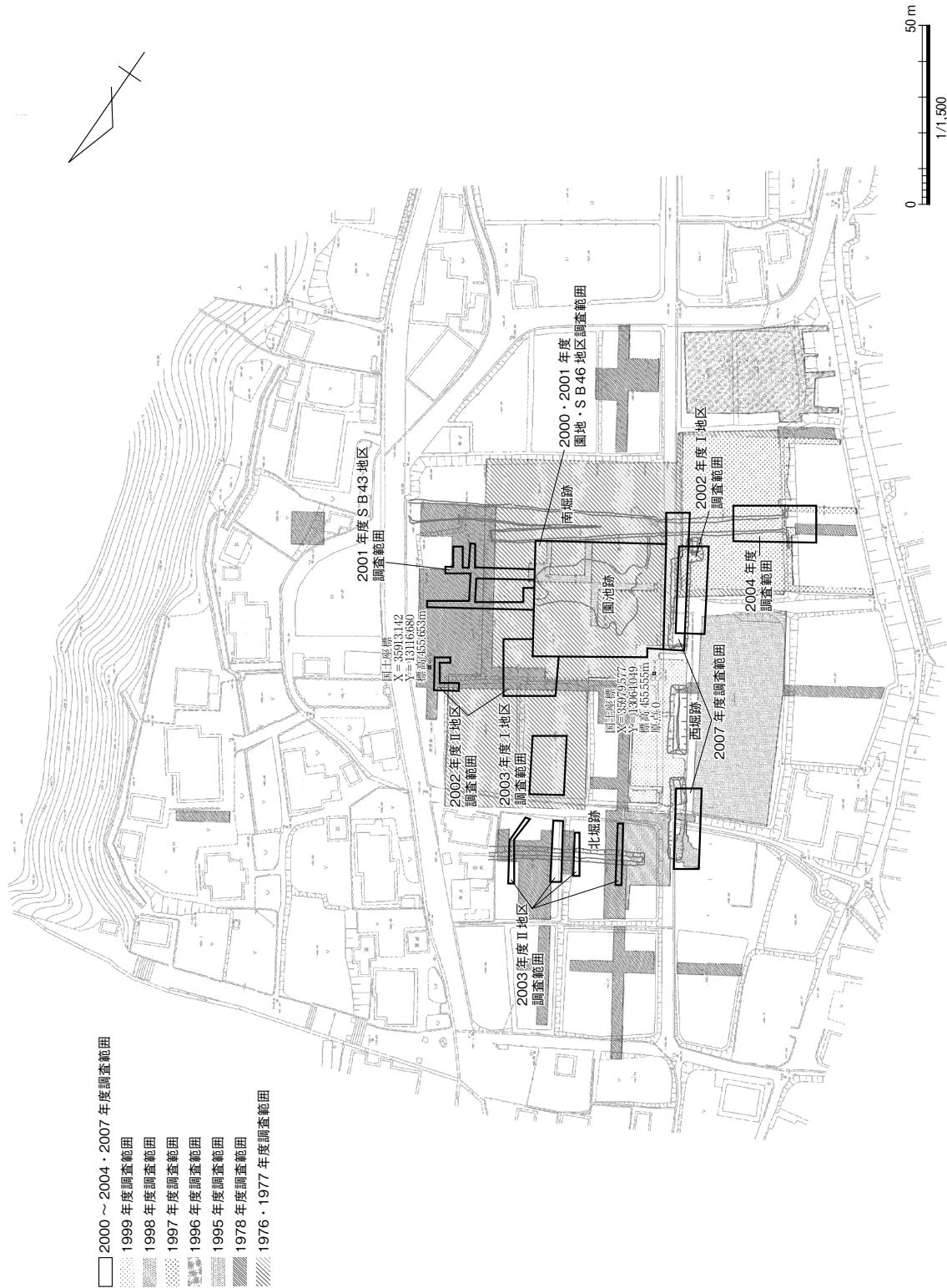
1994年度から、遺跡の保護・保存及び整備に必要な資料を得ることを目的とした発掘調査を、調査整備委員会の指導に基づき計画的に実施している（第1図、第4表）。また、史跡指定地のうち遺構保存地区の公有化事業を進めている（第5表）。

1998年度には、1976～1978、1994～1997年度までの発掘調査成果及び史跡指定地の公有化、史跡整備事業を具体化するため『基本構想』を策定し、基本理念と整備テーマを設定した（第6表）。『基本構想』では、下館跡を江馬氏城館跡史跡整備のパイロット地区と位置づけ、1999年から2008年までの10年間を史跡江馬氏城館跡整備の当面事業計画期間として、主に下館跡地区公有地部分の整備を行うこととした。また2009年度以降、概ね20ヶ年をかけて、山城跡等の整備事業を進めるものとした。

この基本構想を実現化するため、1999年度には『基本計画』を策定し、2000年度から2008年度を事業計画期間として下館跡の整備工事を行っていく計画とした。

第3表 事務局の体制

年 度	事業主体	事務局	
2000	神岡町教育委員会事務局	教育長 課長 社会教育係長 担当	堀本昌義 荒木英昭 洞垣満雄 大平愛子（学芸員）、三好清超（嘱託）
2001	神岡町教育委員会事務局	教育長 課長 社会教育係長 担当	堀本昌義 荒木英昭 古川勝利 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2002	神岡町教育委員会事務局	教育長 課長 社会教育係長 担当	堀本昌義（4～5月）、松葉正（6～3月） 森 文雄 古川勝利（4～5月）、福永聰（6～3月） 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2003 (2003年4月～ 2004年1月)	神岡町教育委員会事務局	教育長 課長 社会教育係長 担当	松葉 正 森 文雄 福永 聰 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2003 (2004年2～3月)	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 生涯学習課長 文化財係長 担当	松葉 正 幅 雅久 森 文雄 大庭久幸 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2004	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 生涯学習課長 文化財係長 担当	松葉 正 幅 雅久 森 文雄（4～9月）、中矢正志（10～3月） 大庭久幸 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2005	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 生涯学習課長 文化財係長 担当	中齋英雄 水田博生（4～9月）、洞垣満雄（10～3月） 松井良一 斎藤和彦 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2006	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 生涯学習課長 文化財係長 担当	巣之内健二 洞垣満雄 住田清美 斎藤和彦 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2007	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 文化課長兼文化財係長 担当	巣之内健二（4～3月）、松葉 正（3月） 中嶋国則 永尾正博 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2008	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 文化課長兼文化財係長 担当	松葉 正 水谷兼太郎 谷口 功 大平愛子（学芸員）、三好清超（学芸員）
2009	飛騨市教育委員会事務局	教育長 事務局長 文化振興室長 文化財係長 担当	松葉 正 岩塙泰男 前田重信（4月）、岩塙泰男（4・5月、兼務）、 平澤千人（5～3月） 澤村雄一郎 大平愛子（学芸員）（4～12月） 三好清超（学芸員）



第1図 調査地区周辺の地形と発掘区位置図 縮尺1/1,500

第4表 江馬氏下館跡の発掘調査実績表

年 度		調 査 地 区	調査面積 (m ²)	事業費 (千円)	備 考
西暦	年号				
殿地区的土地改良工事に先立つ試掘調査（1976～1979年）					
1976	S 51	庭園周辺	2,940	—	
1977	S 52	堀内地区北東部建物群 南堀・西堀端部周辺	2,610	—	岐阜県史跡「江馬氏庭園」指定
1978	S 53	南堀外側地区 遺跡範囲確認調査	3,060	10,000	奈良国立文化財研究所・福井県教育庁朝倉氏遺跡 発掘調査研究所の指導を受ける〔国〕
1979	S 54		—	—	国史跡『江馬氏城館跡』の指定 〔1980（昭和55）年3月21日〕
史跡整備に先立つ事前発掘調査（1994～1998年）					
		1994～1996：富山大学人文学部考古学研究室に委託			
1994	H 6	堀跡地区	1,630	22,446	〔国〕
1995	H 7	門前地区	1,210	24,310	〔国〕
1996	H 8	園池地区 工房（南辺）地区	140 890	17,348	〔県〕
		以後、神岡町単独の調査体制に移行			
1997	H 9	南堀延長部周辺地区	1,429	18,620	〔県〕
1998	H 10	堀内地区北西隅部	288	7,691	〔県〕
史跡整備工事に伴う発掘調査（1999年～2009年）					
		1999～2000年度：史跡等保存整備事業（一般）			
1999	H 11	堀内地区西辺 (主門・脇門周辺部)	500	7,182	西側土堀位置を確定するための発掘調査〔国〕
2000	H 12	堀内地区庭園	900	14,498	庭園整備工事に伴う、園池埋土および景石転倒状況確認 のための調査〔国〕
		2001年度：史跡等活用特別事業			
2001	H 13	堀内地区庭園及びその周辺 (SB 46・SB 43周辺確認 トレンチ)	1,214	15,057	庭園整備工事の景石据え直しに伴う景石転倒状況確認、 工事施工に伴う礎石建物 SB 43・SB 46 位置確定のため の再確認調査〔国〕
		2002～2006年度：史跡等総合整備活用推進事業			
2002	H 14	堀内地区南西隅部	300	11,711	工事施工に伴う西側土堀（主門～南端部）柱穴確認 及び礎石建物 SB 44・49 再確認調査〔国〕
2003	H 15	堀内地区 SB 44・49 再確認 堀内地区 SB 41 再確認 北堀周辺再確認	220 200 110	7,398	工事施工に伴う礎石建物 SB 41 及び北側土堀位置の再確 認調査〔国〕
		2004年2月、町村合併により飛騨市となる			
2004	H 16	南堀延長部再調査 西堀（薬研堀、主門～脇門） 再検出	160	5,597	工事施工に伴う南堀延長部堀埋土掘削調査、 西堀（薬研堀、主門～脇門）掘り残し埋土掘削調査〔国〕
2005	H 17	工事に伴う確認調査	—	5,092	工事施工箇所における遺構面深度確認トレンチ調査〔国〕
2006	H 18	工事に伴う確認調査	—	9,329	工事施工箇所における遺構面深度確認トレンチ調査〔国〕
		2007～2009年度：史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業			
2007	H 19	西堀（薬研堀、箱堀）再検出	394	5,740	西堀（薬研堀、箱堀）掘り残し埋土掘削調査〔国〕
2008	H 20	工事に伴う立会調査	—	2,240	工事施工箇所における掘削時の立会調査〔国〕
2009	H 21	工事に伴う立会調査	—	10,533	工事施工箇所における掘削時の立会調査〔国〕
		合 計	18,195	194,792	

※備考の〔国〕は国庫補助事業であること、〔県〕は県費補助事業であることを示す。

※調査面積の総計は各調査面積の合計であり、調査地区は重複があるため史跡の面積と一致しない。

※事業費は、補助対象外経費も含む。

第5表 江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表

事業年度	面積 (m ²)	事業費(千円)	備考
1978（昭和 53）以前	4,197	-	家屋移転補償 1 件含む〔直〕
1995（平成 7）	3,575	116,661	家屋移転補償 1 件含む〔先〕
1996（平成 8）	8,176	224,077	先行取得償還により、事業実施
1997（平成 9）	2,178	52,597	償還期間：平成 9～18 年度
1998（平成 10）	2,170	48,174	付属構築物移転補償 1 件含む〔直〕
2003（平成 15）	1,106	61,304	〔直〕 家屋移転補償 1 件、丈量測量 1 件含む〔直〕
公有化済総面積	21,402	502,813	
未公有化総面積 下館跡遺構保存地区総面積	3,580 24,982		

※備考欄の〔直〕 = 直接買上げ、〔先〕 = 先行取得を示す

第6表 基本構想

基本理念	① 遺跡の保存 ② 歴史的価値の追求と整備による活用 ③ 地域住民の意向を尊重した歴史公園としての整備
整備テーマ	—神岡の歴史と文化の発信基地「江馬の館」— いま、飛騨の地に蘇る花の御所づくり

1999 年度～2001 年度は文化庁の史跡等保存整備事業（一般）、2002 年度は史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）、2003～2005 年度は史跡等総合整備活用推進事業、2007～2009 年度は史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備（史跡等保存整備）事業の採択を受け、発掘調査及び整備工事を進めた。

事業推進にあたり、神岡町時代には 5 回にわたり計画の見直しを行い、最終的には 2009 年度までを事業計画期間とした。2007 年 10 月には下館跡の整備完了地区については史跡江馬氏館跡公園として一部供用を開始した。2010 年度には全敷地において供用を開始する予定である。

第3節 これまでの調査

江馬氏下館跡は、高原郷を治めた中世武士である江馬氏が築いた居館跡であり、1980 年度に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

これまでの調査により、館は東側の山を背に、北・西・南側の三方を堀で囲まれ、南堀は段丘斜面まで延長されていることが分かっている。堀の内側を「堀内地区」、外側を「堀外地区」とし、2000 年度以降の調査の前提となる、1999 年度調査以前の調査知見について、その概要をまとめると。

1. 堀内地区の調査成果（付図）

堀で囲んだ館跡の中心部、堀内地区の規模は東西推定 114 m、南北 97 m である。

東側は山を背にして残りの三方を堀跡と土塙跡で囲んでいる。三本の堀跡は直接はつながらないこと、南堀跡は掘り直しを行い新旧 2 本があること、また館の外まで堀を延長していること、西堀跡は薬研堀であること、西堀跡には 2 カ所の土橋を設けていることなどを確認した。土塙跡も館を囲んでおり、西堀跡の 2 カ所の土橋の位置において、南側に主門跡、西側に脇門跡を確認した。このことより館は西側を正面としていたことが分かった。

堀内地区では、礎石建物跡9棟、掘立柱建物跡1棟、柵列跡4列、溝跡等を検出した。南西隅部には東西28m、南北14mの不正楕円形の園地跡を確認した。

礎石建物跡群は、礎石抜き取り穴跡の切り合い関係、礎石跡検出レベル及び主軸方位の違いから2時期あることを確認している。ほぼ同位置で各時期の礎石建物跡を検出しており、堀内地区では同じ性格の礎石建物跡が各時期に配置されていたと考えられる。

2. 堀外地区的調査（付図）

1978年度調査では遺構の広がりを確認するため、堀の外側でもトレンチ調査を行っている。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレンチを北側4本・南側1本設定した。西側は西堀から段丘端部まで伸びる東西トレンチを1本、段丘端部に東西方向に2本、南北方向に1本のトレンチを設定した。各トレンチでは柱穴跡・土坑・堅穴住居跡等を検出した。

1995年度から1997年度にかけて、西堀跡西側から史跡指定地南辺にかけての調査を行い、堀外地区は南堀跡延長部を境としてさらに2区画に分かれることが分かった。南堀跡延長部の北側を、館正面において江馬氏に仕える武士が控えていた門前区画、南側を館で使用する諸道具類の制作・修理等を行う職人の工房区画に分けていることが分かった。

門前区画では、掘立柱建物跡8棟、柵列跡8列、井戸跡11基、竈跡1基、広場跡や道路跡などを検出した。堀内地区の礎石建物跡と同時期の遺物を伴う建物跡が多く、道路跡や広場跡なども確認している。

工房区画では、掘立柱建物跡17棟、柵列跡11列、堅穴住居跡3棟、土坑、炉跡等を確認した。堅穴住居跡に炉跡が伴うこと、鉱物が溶けたカラミや生漆が付着した漆塗膜が包含層より出土した。

これらのことより下館跡では、館の整備時に堀外地区においても館に必要な施設を計画的に配置し、その区画の使い分け、武士と職人が住み分けを行っていたと考えられる。

3. 出土遺物

中世の遺物は5,600点ほどが出土しており、その出土量は堀内地区に多い。堀外地区においては門前区画では極端に少ないものの、工房区画では一定量の出土があった。出土遺物は、土師器の皿、瓦器の風炉・火鉢、瀬戸美濃の茶碗・壺甕類・香炉、珠洲焼の甕・すり鉢などの国内産陶磁器の他に、青磁の碗・皿・花瓶、白磁の皿、青白磁の梅瓶、天目茶碗など中国製陶磁器も多数出土している。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時期の遺物で構成され、15世紀代の遺物量が最も多く、館の最盛期と考えられる。

第4節 調査の経過と方法

1. 調査の経過

2000年度 園池地区調査

5月 22日 調査地区設定。
 5月 25日 過去の調査埋戻し砂人力掘削開始。
 6月 12日 神岡東小学校教師1名3年生30名来跡。
 6月 13日 平成12年度第1回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡委員・宇野委員・丸山委員指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・大野博史氏来跡。
 7月 13日 富山大学大学院生1名、学生1名来跡。
 7月 26日 静岡県菊川町教育委員会 塚本和宏氏来跡。
 7月 27日 日本鉱山史研究会・20名来跡。
 7月 31日 埋戻砂除去完了、航空写真撮影。
 8月 2日 神岡西小学校教師1名5・6年生9名来跡。
 8月 2・3日 江馬氏城館跡調査整備委員会委員・丸山宏先生現場指導。
 8月 4日 遺構埋土掘削、実測、写真撮影開始。
 8月 9日 吉城郡教育研究会来跡。
 8月 22日・23日 平成12年度第2回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・宇野・丸山委員指導。
 文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏来跡。
 8月 24日 愛知学院大学教授・福島金治氏、恵那市役所・三宅唯美氏、桑名市教育委員会・齊藤埋氏、平野亜紀氏、愛知学院大学大学院生・長沼毅氏、勝亦貴之氏来跡。
 9月 14日 岐阜大学助教授・早川万年氏来跡。
 9月 29日 平成12年度第3回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・宇野・丸山委員指導。
 文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏来跡。
 10月 2日 山口市教育委員会・古賀信幸氏、福岡市教育委員会・大庭康時氏来跡。
 10月 29日 神岡町おもしろ探偵団来跡。
 10月 30日 野村庭園研究所・野村勘治氏、齋藤庭園・齋藤忠一氏来跡。
 11月 9日 国立歴史民俗博物館助教授・小島道裕氏、富山大学教授・前川要氏、富山大学・学生3名来跡。
 11月 11日 文化庁主任文化財調査官・坂井秀弥氏来跡。
 11月 25日 現地説明会、110名参加。
 11月 30日 高所作業車写真撮影。
 12月 1日 第9回江馬氏城館跡調査整備委員会。
 文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏来跡。
 12月 2日 航空写真撮影。金沢市埋蔵文化財センター・向井裕知氏、立山町教育委員会田中幸生氏、国府町教育委員会岩花秀明氏来跡。
 12月 11日 現場埋戻し作業開始。
 12月 14日 文化庁文化財審議会専門委員・龍居竹之介氏、岐阜県教育委員会・大野雅俊氏来跡。
 12月 20日 現場作業終了。
 3月 2日 第10回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・川部誠氏来跡。

2001年度 園池・SB 46地区調査

5月 18日 調査地区的設定。

5月 25日 2000年度調査埋戻し土の除去開始。

5月 29・30日 平成13年度第1回江馬氏下館跡調査検討部会。吉岡・宇野・丸山委員指導。
 文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・滝一男氏来跡。

6月 4日 園池遺構人力掘削、実測、写真撮影開始。

6月 21日 SB 46 遺構人力掘削、実測、写真撮影開始。

7月 3日 確認トレーナー人力掘削、実測、写真撮影開始。

7月 5日 美濃加茂市教育委員会・藤村俊氏来跡。

7月 8日 山田公民館25名来跡。

7月 16日 岐阜大学助教授・早川万年氏、岐阜県歴史資料館・山田昭彦氏、小林時造氏来跡。

7月 25日 同志社大学教授・鋤柄俊夫氏来跡。

7月 31・8月 1日 第11回江馬氏城館跡調査整備委員会。

文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・大野博史氏来跡。

8月 8日 国立歴史民俗博物館助教授・小島道裕氏来跡。

8月 25日 京都造形芸術短期大学長・尼崎博正氏、宇治市教育委員会・杉本宏氏、吹田直子氏、龍谷大学学生1名来跡。

8月 31日 神岡東小学校 教師2名6年生23名来跡。

9月 5・6日 平成13年度第2回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・丸山委員指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏来跡。

9月 7日 兵庫県教育委員会・山上雅弘氏来跡。

9月 17日 垂井町教育委員会・中川尚子氏来跡。

10月 17日 平成13年度第3回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡委員・宇野委員・丸山委員指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・滝一男氏、大野博史氏来跡。

10月 31日 福井県南条町教育委員5名来跡。

11月 2日 神岡東小学校教師1名6年生3名来跡。

11月 15日 富山市教育委員会・古川知明氏、鹿島昌也氏来跡。

11月 18日 発掘調査掘削の終了。

11月 21日 航空写真撮影。

11月 22日 高所作業車写真撮影。

12月 5日 第12回江馬氏城館跡調査整備委員会。

文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・滝一男氏来跡。

12月 7日 現場作業終了。

2月 15日 平成13年度第4回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・宇野・丸山委員指導。(財) 京都市埋蔵文化財研究所長・川上貢氏指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・大野博史氏出席。

2002年度 I・II地区調査

5月 13日 調査地区的設定。

5月 22日 重機掘削、人力掘削開始。

5月 28日 第13回江馬氏城館跡調査整備委員会。

文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、

5月30日	岐阜県教育委員会・大野博史氏来跡。 実測、写真撮影開始。	氏・尾木輝夫氏、滋賀県近江町教育委員会・宮崎幹夫氏、滋賀県山東町教育委員会・桂田峰男氏来跡。
6月5日	神岡町おもしろ探偵団来跡。	11月26日 第16回江馬氏城館跡調査整備委員会。 岐阜県教育委員会・佐藤秀樹氏来跡。
6月13日	文化庁名勝委員会委員、現地指導。東京農工大学教授・亀山章氏、東京大学教授・熊谷洋一氏、ブラック研究所専務・杉尾邦江氏、日本大学教授・吉田博宣氏、文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、文化庁文化財調査官平澤毅氏来跡。	12月15日 現場作業終了。
6月30日	東京大学教授・西村幸夫氏来跡。	2004年度 南堀跡延長部調査
8月26日	長岡造形大学教授・飛田範夫氏来跡。	5月12日 旭保育園児童・40名来跡。
9月4・5日	平成14年度第1回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡委員・丸山委員指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・大野博史氏来跡。	5月13日 調査地区設定。
10月10・11日	第14回江馬氏城館跡調査整備委員会。 文化庁主任文化財調査官 加藤允彦氏、岐阜県教育委員会 大野博史氏来跡。	5月16日 復元主門現地説明会・30名来跡。
10月18日	航空写真撮影。	5月19日 人力掘削、実測、写真撮影開始。
10月30・31日	平成14年度第2回江馬氏下館跡整備検討部会。宇野・丸山委員指導。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・大野博史氏・成瀬正勝氏来跡。	5月28日 神岡中学校1年生90名来跡。
11月10日	現地説明会・30名参加。	6月11・18日 中日文化センター 60名来跡。
12月3日	高所作業車写真撮影。	6月25日 第17回江馬氏城館跡調査整備委員会。 文化庁文化財調査官・平澤毅氏、岐阜県教育委員会・成瀬正勝氏来跡。
12月6日	現場作業終了。	7月4日 現地説明会20名参加。
2003年度 I・II地区調査		
4月16日	第15回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁主任文化財調査官・加藤允彦氏、岐阜県教育委員会・佐藤秀樹氏来跡。	7月7日 神岡西小学校2学級、山田小学校来跡。
5月15日	調査地区的設定。	7月8日 帝京大学山梨文化財研究所・畠大介氏、鈴木稔氏来跡。
5月26日	重機掘削開始。	7月18日 山梨県立甲府南高等学校40名来跡。
5月29日	人力掘削、実測、写真撮影開始。	7月28日 千代の松原公民館高齢者大学・25名来跡。
6月10日	神岡町教職員初任者研修3名来跡。	8月10・12日 飛驒市わくわく探検隊46名来跡。
7月4日	平成15年度第1回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡委員・宇野委員・丸山委員指導。岐阜県教育委員会・佐藤秀樹氏来跡。吉城郡教育委員研修会現場視察。	8月20日 神岡の歴史探訪講座・8名来跡。
7月11日	上宝村立本郷小学校教師1名6年生20名来跡。	9月3日 千葉大学教授玉井哲雄氏、教員・大学院生・学生15名来跡。
7月16日	神岡西小学校教師1名6年生40名来跡。	9月26日 走る市政バス40名来跡。
8月12日	埼玉県教育委員会・浅野晴樹氏、福島県・飯村均氏、東京大学出版会・増田三男氏、江戸東京博物館・斎藤慎一氏来跡。	9月29日 神岡町シルバー学級来跡。
8月29日	全国史跡整備市町村協議会東海大会視察研修。 文化庁調査官・市原富士夫氏、三重大学名誉教授・八賀晋氏来跡。	10月3日 江馬公民館45名来跡。
9月7日	藤橋会観月会、200名参加。	10月11日 人形師・ホリヒロシ氏来跡。
9月10日	高所作業車写真撮影。	10月13日 神岡中学校職場体験2年生2名受入。
9月24日	神岡東小学校 教師1名4年生5名来跡。	10月15日 平成16年度第1回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・丸山委員指導。文化庁文化財調査官・平澤毅氏、岐阜県教育委員会・成瀬正勝氏来跡。
9月27日	文化財庭園保存技術者協議会 45名来跡。	10月24日 釜崎公民館70名来跡。
10月15日	平成15年度第2回江馬氏下館跡整備検討部会。吉岡・丸山委員指導。岐阜県教育委員会・佐藤秀樹氏来跡。	11月9日 可児市文化財保護審議委員会委員来跡。
11月11日	滋賀県伊吹町博物館友の会20名来跡。	11月15日 帝京大学山梨文化財研究所・萩原三雄氏、史跡新府城跡整備保存委員会委員・山岸虎雄氏、山梨県埋蔵文化財センター・八巻與志夫氏、韋崎市教育委員会・山下孝司氏・閔間俊明氏来跡。
11月18日	滋賀県米原町教育委員会・中井均氏・高畠光昭氏、滋賀県伊吹町教育委員会・高橋順之	11月24日 高所作業車写真撮影。
		11月26日 下呂市教育委員会、20名視察。
		12月12日 ノーベル街道交流ツアーアー、80名来跡。
		12月14日 現場作業終了。
		12月15日 山口市教育委員会・増野晋次氏来跡。
2005年度 史跡整備工事に伴う立会調査		
6月17日	第18回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁調査官・平澤毅氏、岐阜県教育委員会・成瀬正勝氏来跡。	8月3日 吉城高校・生徒1名職場体験。
		8月17日 日干しレンガ作り体験教員4名・子供2名。
		8月19日 市政バスわくわく探検隊、34名来跡。
		8月28日 吉田公民館35名来跡、飯山寺保存会歴史研修15名来跡。

10 第1章 調査の経緯

9月3日	日干しレンガ作り体験、32名参加。	7月31日	全体写真撮影。
9月5日	鹿児島県準人町教育委員会視察。	8月1日	現場作業終了、埋戻し。
9月13日	飛騨市教員初任者研修の土壙作り体験。	8月8日	江馬氏下館跡整備検討部会。丸山委員現場指導。
9月22日	神岡小学校6年生土壙作り体験。	8月23日	文化庁主任文化財調査官・小野健吉氏来跡。 丸山委員指導。
10月1日	富山県埋蔵文化財センター友の会来跡。	9月12日	小牧市文化財保護審議会、9名来跡。
10月27日	走る市政バス見学。	10月16日	神岡中学校教師1名生徒21名来跡。
10月29日	走る市政バス見学。	10月26日	飛騨City人財会議来跡。
11月20日	宮川町区長会20名来跡。	10月28日	史跡江馬氏館跡公園オープニングイベント、約2500名参加。
12月2日	神岡小学校4名来跡。		
12月4日	神岡小学校3名来跡。		
12月11日	会所上棟式、330名参加。		
2006年度 史跡整備工事に伴う立会調査			
2月10日	長野市教育委員会・森田利枝氏来跡。	2008年度 史跡整備工事に伴う立会調査	
4月1日	朔日会に遺跡説明。	8月12日	第22回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁主任文化財調査官・小野健吉氏、岐阜県教育委員会・近藤大典氏来跡。
6月1日	第19回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁調査官・平澤毅氏、岐阜県教育委員会・松野晶信氏来跡。	2009年度 史跡整備工事に伴う立会調査	
7月5日	富山市民大学18名来跡。	9月2日	第23回江馬氏城館跡調査整備委員会。文化庁調査官・内田和伸氏、岐阜県教育委員会・近藤大典氏来跡。
7月17日	神岡町同級会「九会」、草抜きボランティア。		
7月23日	復元会所現場説明会351名参加。		
8月10日	飛騨市小中学校社会科担当教員16名来跡。		
8月20日	富山興業㈱現場見学、30名来跡。		
8月21日	走る市政バス見学。		
9月5日	飛騨市教員初任者研修、3名来跡。		
9月8日	中日文化センター、28名来跡。		
9月12日	吉城高等学校学生、41名来跡。		
9月15日	中日文化センター、35名来跡。		
9月22日	神岡小学校6年生現場見学。		
10月1日	江馬公民館、50名来跡。		
10月2日	富山市公民館連合、11名来跡。		
10月5日	つくば市教育委員会視察。		
10月6日	丸山委員現地指導。		
10月31日	飛騨市老人クラブ連合会女性研修会、65名来跡。		
11月1日	文化庁調査官・平澤毅氏、丸山委員、整備状況確認。		
11月6日	飛騨市老人クラブ連合会、35名来跡。		
11月8日	第20回江馬氏城館跡調査整備委員会。		
11月14日	富山市長・森雅志氏来跡。		
11月22日	富山市議会議員来跡。		
2007年度 西堀跡箱堀・薺研堀の調査			
5月7日	調査地区設定。		
5月9日	重機掘削。		
5月15日	人力掘削、実測開始。		
5月16日	山の村保育園・旭保育園、30名来跡。		
5月30日	岐阜県教育委員会・小山徹氏、松野晶信氏来跡。		
6月1日	古川中学校教師1名生徒12名来跡。		
6月5日	河合小学校教師2名3年生12名来跡。		
6月13日	飛騨市議会文教厚生委員15名来跡。		
6月24日	復元会所内覧会、470名参加。		
7月5日	古川町女性会、30名来跡。		
7月8日	寺林公民館、27名来跡。		
7月13日	第21回江馬氏城館跡調査整備委員会。岐阜県教育委員会・柏木賢一氏来跡。		
7月19日	神岡町シルバー学級・78名来跡。		

2. 調査の方法

(1) 遺跡の標示

遺跡番号は 21625 - 00093 である（岐阜県教育委員会 2001）。遺跡略号は Gifu Emayakata をあらわした GE としている。

(2) 調査区の設定

基準点網の設定は 1978 年度調査時に使用した座標をもとに行っている（第 7 表）。当時の保存原点である杭 1 を原点 0 とし、杭 1 と杭 2 を結ぶ軸線を Y 軸、杭 1 を通りこれに直交する軸線を X 軸とした。当遺跡で新たに座標を設定したため、国土座標とは軸線が一致しない。座標は 1 m を単位とした数値によって表示している。座標の方向は X 軸が磁北から西へ約 33 度振る。

(3) 調査の方法

2000 ~ 2001 年度調査では人力により表土除去及び遺構検出、遺構内埋土掘削を行った。2002 ~ 2004、2007 年度調査では、表土を重機により除去後、人力により遺構検出、遺構内埋土掘削を行った。なお、必要に応じて、幅 50 cm 程のサブトレンチを設定し、土層堆積状況の理解に努めた。

個々の遺構調査については、柱穴跡は柱痕跡や抜き取り跡を平面的に観察した後、半裁して断面観察を行ない、完掘はしなかった。土坑等の大型の遺構は半裁あるいは四分割法を用いて発掘した。なお柱穴跡の完掘、半裁の区別は、巻末の別表に記した。

(4) 遺構番号

江馬氏下館跡の発掘調査では、遺構の性格に応じて略号を用いている（第 8 表）。

なお、遺構番号は、SB・SA・SI・SD・SV・SX については下館跡全体を通番で数えた。欠番もある。SP のみは調査年度毎に 1 から数えている。調査範囲が過去の調査範囲と重複している場合、現場での番号に調査年度の西暦下 2 衔を記載し、2000 年度調査の SP 1 の場合は「00-SP 1」のように表記した。

第 7 表 調査基準点網設置原点杭国土座標値

下館跡 発掘調査地内 保存原点杭		本来の調査基準点網設置原点杭の 座標値（1994 年測量）		1995 ~ 2009 年度調査時の調査基準点 網設置原点杭の座標値（1999 年測量）		備 考
		直角座標第 7 系 国土座標値 (日本測地系)	調査座標値	直角座標第 7 系 国土座標値 (日本測地系)	調査座標値	
杭 1	(X 座標)	35878.577	0.00	35878.674	0.06	今後、現地保存原点杭 1 は「杭 11」と読み替える
	(Y 座標)	13064.049	0.00	13064.107	0.10	
	(レベル)	455.555	455.555	455.543	455.543	
杭 2	(X 座標)	35913.142	0.00	35913.145	0.00	
	(Y 座標)	13116.680	62.98	13116.678	62.98	
	(レベル)	455.653	455.653	455.652	455.652	

※ レベル値単位は m

第 8 表 遺構略号表

略号	遺構種別	略号	遺構種別	略号	遺構種別
SB	建物跡・門跡	SA	柵跡、柱列跡	SI	竪穴住居跡
SD	溝跡	SK	土坑跡、倒木痕	SP	柱穴跡、穴跡
SV	石積み跡、石列跡	SF	道路跡	SX	その他の遺構

(5) 遺構の主軸

遺構の主軸は下館跡の調査座標網のX・Y軸に対する傾きを「主軸（XあるいはY）－角度（°）－傾きの振れの方向（S、EあるいはW）」で表記した。磁北で例えると、磁北はX軸より33.0° 東に振っているので、「X-33.0°-E」のように表記する。

(6) 実測・記録

遺構の全体平面図・断面図・園池景石立面図は、原則として縮尺20分の1で割り付け実測を行った。柱穴跡の断面図は堆積に層位があるものについて作成した。

出土遺物の取り上げは、出土した層序及び前述した座標を用いたX・Y座標を小数点以下2桁まで、出土レベルを少数点以下3桁まで記録した。

写真撮影は遺構検出状況、土層断面、遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は高所作業車を用いて撮影した。

(7) 遺構の埋め戻し

各年度調査終了後、同位置において遺構の整備工事を実施している。整備工事に伴い、遺構養生マットまたは砂により遺構を養生した後、現場掘削土において30～40cm厚さの埋め戻しを行った。なお園池跡の池底については、調査で検出した池底全面に厚さ5cmの保護砂を敷いた後、厚さ10cmの黒土による版築を行い、池底造成を行った。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1. 飛驒市の地勢

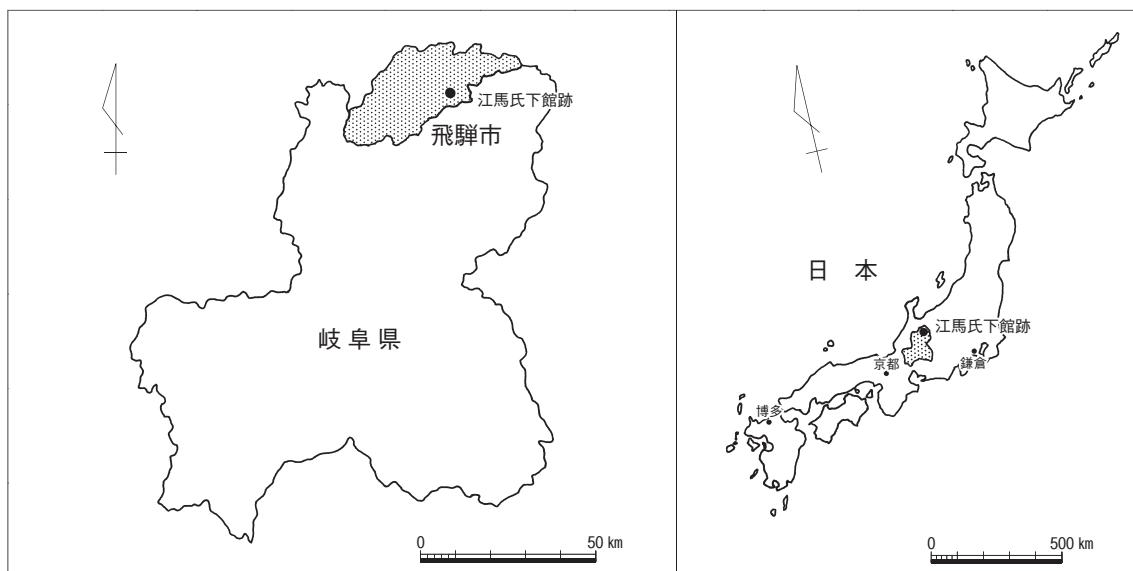
飛驒市は岐阜県最北部に位置する。2004年2月に、古川町・河合村・宮川村・神岡町が合併し誕生した。人口は約28,000人、面積は792.31km²である。市域のほとんどは山地・森林であり、起伏が激しく標高差が700mもある複雑な地勢である。

江馬氏城館跡は飛驒市神岡町に位置する（第2図）。神岡町内の集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地しており、河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘上に成立している。市街地中心部の標高は約400mを測る。神岡町は中世には飛驒国吉城郡高原郷¹⁾に属し、1950年に舟津町・阿曾布村・袖川村が合併し、神岡町として町制を施行したものである。江馬氏下館跡の所在する殿区は町制施行前は阿曾布村に属していた。

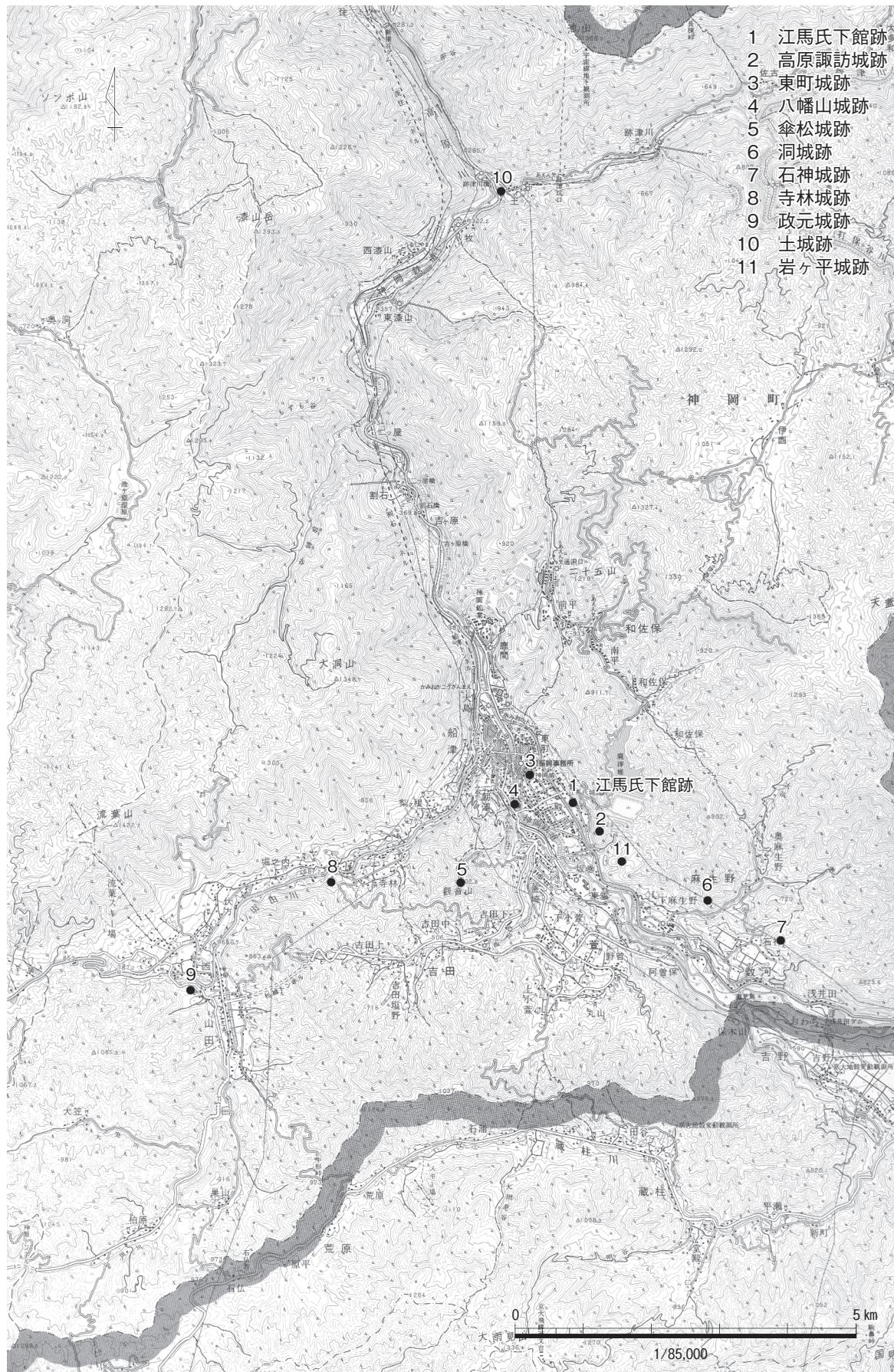
2. 遺跡立地

江馬氏下館跡は高原川中流域右岸にある段丘中央部、標高約455mに立地する（第3図）。この段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川、双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川（神通川水系右支）と、神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山（標高1,327m）および天蓋山（標高1,527m）付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり、尾根の南端頂および稜線延長には「高原諏訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水管が通ったためその水量は減ってしまったが、かつては山麓裾部に豊富な湧水や谷水があり、この地域への水源となっていた。



第2図 江馬氏下館跡の位置図



第3図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡 縮尺 1/85,000

遺跡南側は、和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約1kmの付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが、現在は工業団地や運動公園となっている。

遺跡西側は西堀跡から約55m西の付近において、高原川が形成した標高差約7mの段丘斜面が自然の要害をなしている。その対岸の段丘を向野と呼び、旧神岡鉱業社宅街であり、現在は一般住宅地となっている。

遺跡北側は南側と同様に低位段丘が広がる。その段丘端部には東町城跡が位置している。この遺跡は『飛州志』に「江馬之御館」と記されるものである。現在は神岡城の模擬天守閣が建てられている。この遺跡北側は段丘上で最大の広がりを持つ。かつて農耕地として利用していたが、第2次大戦後、神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化、学校建設等によって市街地化した。東町城跡から眺望できる最下位段丘上は江戸時代より周辺農村の商業地として発展し、現在も市街地が広がっている。

下館跡以外にも、飛騨市神岡町・高山市上宝町には、江馬氏に関連すると伝えられる城館跡が多く残る。下館跡の東側背後にある高原諏訪城跡や前述の東町城跡の他、洞城跡・石神城跡・寺林城跡・政元城跡・土城跡・傘松城跡・尻高城跡・苧生茂城跡・天元城跡などがある。これらの山城の立地についても、河岸段丘上に成立した集落の背後に立地しているものが多い。なお、高山市国府町の梨打城跡、富山県大山町の中地山城なども江馬氏との関係が伝えられている。

3. 遺跡周辺の現地形と原地形

遺跡周辺は1972年から実施した土地改良事業によって、その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形（原地形）は、『土地改良事業計画概要書』（昭和47年10月31日付、岐阜県知事平野三郎宛、神岡町営土地改良事業施行認可許可申請書）によると、「旧来の圃場は極めて小さく、そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で、地質は洪積層に属する。地質は地表から0～30cmまでは茶褐色粘質土質腐食土壌、30～80cmまでは黒色泥質土壌で花崗岩礫が混っている。80cm以上は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」としている。このように遺跡周辺は南北に細長く緩傾斜で広がり、東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く、傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い山麓の起伏が多い高地を削り取り、その土砂によって段丘端部の低地を埋めた。その結果、下館跡西部の外郭部分は土砂の著しい移動がなされ、原地形は失われた。また江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく、土地改良事業とあいまって埋立て、宅地化、工場敷地等の開発が進み、市街地近郊として様相を一新し、かつての地形とはその姿を大きく変えている。

第2節 歴史的環境

1. 高原郷の歴史

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。麻生野・石神・殿・坂巻・朝浦・釜崎・東雲・小萱・割石など高原川により形成された河岸段丘上及び吉田など吉田川によって形成された河岸段丘上や、柏原・山田・梨ヶ根など山田川沿いの河岸段丘上では、縄文時代の土器・石器が出土している。麻生野地区からは縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土し、坂巻地区からは縄文時代早期の押型文土器が出土している。割石地区や東雲地区、吉田地区では縄文時代中期の北陸系土

器が出土し、石神地区では後～晚期の縄文土器が出土している。縄文時代を通してこれらの河川沿いに人々が暮らしていたようである。

一方、高原郷からは弥生式土器の出土は麻生野地区、梨ヶ根地区で破片を確認した他は存在を知られていない。

飛騨における古墳の確認例は国府・吉川を中心とする古川盆地と、高山盆地の宮川水系に集中している。本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では、山田川沿いの柏原古墳が唯一の確認例である。遺物では、古墳時代の土師器が吉田地区、東雲地区で出土している。

奈良・平安時代に入ると、遺跡・遺物ともに発見していない。

鎌倉時代については、吉田地区に所在し岐阜県史跡の傘松城跡などの遺跡の他、小萱地区に所在し国重要文化財（建造物）の指定を受けている薬師堂が確認できる。薬師堂は解体調査により、現在の建物は鎌倉時代建立の前身堂の部材を一部利用して室町時代初期に再建したと分かっている。

室町時代に至ると、江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになり、江馬氏と関連する山城も多く確認できる。上述のとおり史料からも江馬氏が高原郷を支配していたことが分かる。

天正10年（1582）、江馬氏は姉小路（三木）氏に敗れ、滅亡する。1585年には、姉小路氏（三木氏）を滅ぼした金森長近によって飛騨国は支配されることになった。金森氏は、江馬氏の血を引く分家の左京家を神岡に配置し、釜崎地区に金森左京邸跡が残っている。また鉱山資源に目をつけ、金森宗貞を金山奉行として鉱山開発に当たらせた。その屋敷跡が東茂住地区に所在し、金森宗貞邸跡として岐阜県史跡の指定を受けている。

元禄6年（1693）、飛騨国が天領となってからは鉱山も含め高原郷は幕府の直轄となった。

2. 江馬氏の歴史

飛騨市神岡町・高山市上宝町では、室町時代になると江馬氏に関連した館跡や山城跡の遺跡が見つかっている。史料からも江馬氏はこのころから高原郷を治めるようになったことがわかる。江馬氏関連の史料については、葛谷鮎彦氏、小島道裕氏による論考（葛谷1970、小島1996・1998・2003）に詳しい。以下に簡略に示す。

葛谷氏によると、高原郷の江馬氏は、13世紀中頃に伊豆国田方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）を領有していた鎌倉幕府執権北条氏か、その在地御家人である伊豆の江馬（江間）氏のいずれかの一族が飛騨に所領を得て高原郷に入ったようである（葛谷1970）。その後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長したと推定できる。

小島氏は文献から14～15世紀の江馬氏について検討している。高原郷の江馬氏が史料上に表われるのは14世紀中葉の南北朝期のことである。現在のところ、初見史料は「天龍寺造営記」暦応5=康永元年（1342）の記事であり、天龍寺造営の儀礼において、小侍所の武士として「江馬左近将監忠継」が佐々木佐渡判官入道（京極高氏（尊誉））の進めた馬を引いたとの記録から、江馬氏が幕府直属の武士であったことが確認できる。

14世紀後半になると、飛騨での江馬氏の活動の様子が史料上で確認できる。「山科家文書」応安5年（1372）から嘉慶2年（1388）までの記録では、「江馬能登三郎」、「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この3人の出自や系譜は明らかでないが、高原郷で伝えられる江馬氏と同族と考えられる。「江馬但馬四郎」は広瀬氏を通じ管領細川頼之から室町幕府の公務執行命令を受けており、また伊勢

第9表 江馬氏関係年表

暦年代		江馬氏の動向	文献	日本史上の動き	
13世紀		北条氏の一門または伊豆の江馬氏の一族、高原郷に入る。		鎌倉時代	
1300					
1342		「江馬左近将監忠継」 天龍寺造営の儀礼の際に小侍所の武士として佐々木佐渡判官入道（京極高氏（尊誉））の馬を引いた。	(1)	1321 後醍醐天皇 建武の新政 1336 足利尊氏 京都に入る。 南北朝の分裂。	
1372		「江馬但馬四郎」 広瀬氏を通じ、管領細川頼之から、山科家領を横領した守護代を排除するよう命令を受ける。	(2)	1378 足利義満 室町殿（花の御所）に移る。	
1381		「江馬但馬四郎」 伊勢貞長を通じ、管領斯波義将から山科家領を横領した守護代を排除するよう命令を受ける。	(2)		
1383		「江馬能登三郎」 山科家領飛騨国江名子・松橋を押領する。	(2)		
1388		「江馬民部少輔」 室町幕府奉公人より山科家領段銭催促を停止するよう命令を受ける。	(2)	1392 南北朝の統一。	
1400				室町時代	
1471		「江馬左馬助」 室町幕府奉公人より山科家領を現地で治めるよう命令を受ける。	(3)	1467 応仁の乱始まる。	
1472		「江馬左馬助」 管領細川勝元から山科家に忠節を尽くすよう指示を受ける。	(3)		
1484		「江馬三郎左衛門元経」 小八賀郷の代官に任命される。	(4)		
1489		万里集九、高原郷・荒城郷を訪れ「江馬氏」の饗応を受ける。	(5)		
1491		「江間殿」 室町幕府奉行人から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられる。 以後、「江馬氏」北野社領の飛騨国荒木郷の所領經營を委任される。	(6)		
1492		「和尔平太」 江馬氏の使いとして、北野社に年貢を南円院に納める旨の返答を行う。	(6)	戦国時代	
1500					
1565		甲斐武田氏、越後上杉氏の両勢力から圧力を受ける。この頃の江馬氏の当主は「左馬介時盛」であるが、息子「常陸介輝盛」と対立する。 この頃、越中まで勢力を伸ばす。		1551 第1回川中島の合戦。	
1572		「輝盛」、父「時盛」を殺害。高原諏訪城支配。		1572 武田信玄没。	
1576		上杉氏の軍勢、飛騨侵攻。輝盛降伏。			
1582		「輝盛」、織田信長を後盾とした南飛騨の三木自綱と対立。 「輝盛」、吉城郡荒城郷で姉小路（三木）自綱軍に敗れ、討死。高原諏訪城落城。		1578 上杉謙信没。 1582 本能寺の変、織田信長没。	
1600				1600 関ヶ原の合戦。	

・〈江馬氏に関する記述がみられる古文献〉

(1)『天龍寺造営記』、(2)『山科家文書』、(3)『山科家礼記』、(4)『烏丸家文書』、(5)『梅花無尽藏』、(6)『北野社家日記』

・16世紀中葉以降の記事は『岐阜県史』通史編中世 1969 岐阜県、『岐阜県史』通史編近世 1968 岐阜県による。

貞長を通じ管領斯波義将から室町幕府の公務執行命令を受けている。「江馬能登三郎」は山科家領飛騨国江名子・松橋を押領した。「江馬民部少輔」は室町幕府の公務執行命令を受けている。これらのことから、14世紀末には高原郷にいた江馬氏の一族が室町幕府から地域を代表する武士と認識されて、その公務を執行したり、逆に反抗する力をもっていたことがわかる。「山科家札記」文明3年(1471)・同4年(1472)の記録では、「江馬左馬助」が室町幕府より公務執行命令を受けたり、管領細川勝元から山科家への忠誠を誓う指示を受けたことが記されている。このことからは15世紀後半には幕府の有力者と強い繋がりを持ち、また認められるだけの力を持つ武士であったことがわかる。また、「烏丸家文書」文明18年(1484)の記録では「江馬三郎左衛門元経」が小八賀郷の代官に任命されたことが分かり、「北野社家日記」延徳3年(1491)・同4年(1492)の記録からは、「江間殿」が室町幕府奉行人松田長秀・飯尾為規から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられ、以後「江馬氏」が北野社領の飛騨国荒木郷の所領經營を委任されたことが分かる。このことからは、江馬氏が高原川流域に留まらず古川盆地にまでその勢力を拡大し、15世紀末まで在地域の有力な武士として室町幕府との関係を保っていたことが判る(小島1996・1998・2003)。

戦国時代になると動乱の中の江馬氏の活動が記されている。飛騨は甲斐の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間でその双方から圧力を受けていた。江馬氏は武田氏に従って越中攻略に参加し、中地山城(富山县富山市大山町)の城主になるなど、越中に進出する。また、天正4年(1576)には上杉氏の飛騨侵攻により江馬輝盛は降伏している。(葛谷1970)。

天正10年(1582)、本能寺の変によって織田信長が没すると、上杉方の江馬輝盛と織田方で飛騨南部を支配していた姉小路(三木)自綱とが飛騨全域の支配権をめぐって戦うに至った。決戦は両氏の領地境である荒城郷八日町(現高山市国府町)において行われ(八日町合戦)、江馬輝盛が敗れて討死にし、本城である高原諫訪城も落城した。このことは飛騨市古川町太江にある寿楽寺の大般若經裏書によく伝えられている(葛谷1970)。このようにして、中世の飛騨北部に雄飛した江馬氏は、近世への転換期に領主としての姿を失うこととなった。

3. 高原郷の街道

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の最北端に位置し、越中・信濃と接していることから古くより交通の要所となっていた。中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。各地から鎌倉へ通じる鎌倉街道が整備されていた。飛騨のみならず、北陸諸国から鎌倉のある関東方面に向かうには、飛騨山脈を越え、信濃・甲斐に抜けるのが最も近道であり、飛騨の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から高原郷を抜けて信濃に至る有峰街道であり、鎌倉幕府が倒れた後は飛騨・北陸諸国と信州を結ぶ道として信濃街道あるいは信州街道と呼ばれるようになった。また飛騨と越中を結ぶ街道を越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つであった。高原郷内にはこれらの主要街道を連絡する幾つかの脇街道も通っていた(第4図)。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃街道(鎌倉時代は有峰街道)とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても主要街道と連絡がとれる。また江馬氏と関係がある山城は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で重要な意味をもつことであったことが分かる。

4. 中世城館

(1) 高原諏訪城跡

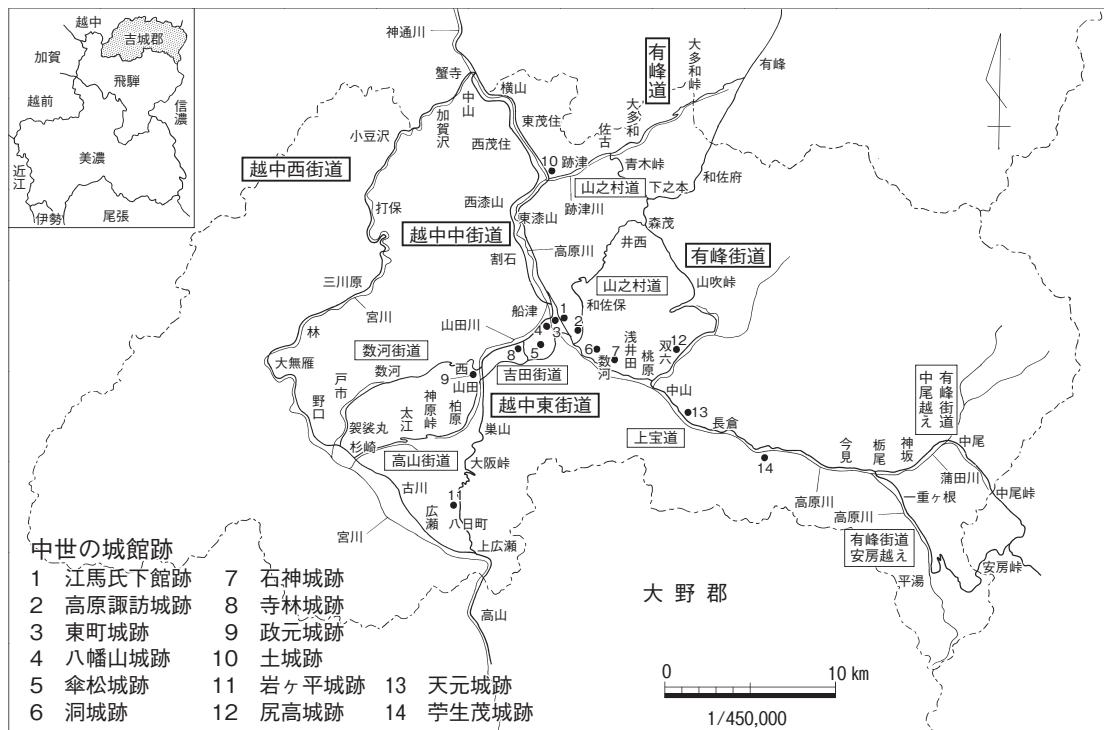
神岡町殿宇保木戸平に所在する。江馬氏下館跡の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木戸平（城山）山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く、包囲された印象をうけるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的攻撃しにくい位置にある。高原諏訪城の南裾において山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡する。高原諏訪城は江馬氏の本城であると伝えるが、築城年代・築城者ともに不明である。

本丸は南北 30 m・東西 16 m の長方形の平場であり、その下には幅 6 ~ 10 m の腰曲輪がある。本丸北側尾根の延長に竪堀や堀切を設け、尾根筋からの攻撃を防いでいる。本丸の南方、直高 12 m 下に東西の方向には山地を掘り切った長さ 42m・幅 18m の堀切がある。この堀切より 5.5m 下った所に、東西 9.6 m・南北 20 m の二の丸（出丸）があり、幅 5 m 前後の腰曲輪がめぐる。二の丸の南端に竪堀と堀切を設けている。

(2) 洞城跡

神岡町麻生野に所在する。『飛州志』には城主は麻生野右衛門大夫直盛と記している。この人物は永禄7年（1564）に55歳（一説には57歳）で没しており、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年（1578）8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたと伝わっている。

山頂に東西 42 m、南北 13 m の長方形の本丸を設け、本丸西側に東西 33 m、南北 14 m の曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に 1 本ずつの豊堀を設ける。また、本丸北側には堀切を設け尾根筋の防御としている。



第4図 中・近世の吉城郡の交通路 縮尺1/450,000

(3) 石神城跡

神岡町石神に所在する。洞城と石神城は共に高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、また二つの城の間に広がる河岸段丘面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。

本丸は東西 27 m・南北 19 m の楕円形の平場であり、東側に南北方向の堀切、西側の南北それぞれの斜面に 1 本ずつの堅堀を設ける。この堅堀の西側に平場が、平場の南西端部に東西方向の堀切がある。

(4) 寺林城跡

神岡町寺林に所在する。玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。本丸は東西 23 m・南北 10 m の方形の平場であり、西に 3 段の平場が連なるが、堀切、堅堀はない。

(5) 政元城跡

神岡町西に所在する。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三墓峠を越える本道と、数河峠を越える脇道（数河街道）に分かれ、政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝える。本丸は東西 20 m・南北 10 m の楕円形の平場であり、幅 4 ~ 10 m の腰曲輪がめぐる。西側に東西 16 m・南北 10 m の曲輪がある。その南に堀切を設け、尾根筋への防御としている。

(6) 土城跡

神岡町牧に所在する。高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山に位置する。高原郷の主要街道である越中東街道と、鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、江馬氏との関係が伝えられる越中中地山城（富山県富山市大山町）との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

(7) 東町城跡

神岡町東町に所在する。江馬氏下館跡の北方、殿段丘の段丘端部に位置する。『飛州志』によれば「江馬之御館」とある。江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縄張りで江馬氏が造り、後の金森長近の入国際には、その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされる。

(8) 岩ヶ平城跡

神岡町殿宇岩ヶ平に所在する。高原諏訪城跡の南側、和佐保川を挟んだ対岸に位置し、平坦地を 5 ヶ所確認している。青磁碗、珠洲甕、瀬戸美濃焼すり鉢・天目茶碗などの中世期の遺物を採取しており、五輪塔もある。高原諏訪城から望むことができること、山の村道に隣接すること、出土遺物などから、江馬氏下館に関連する中世期の館または寺院跡の可能性を想定できる。なお、5 ヶ所の平坦地の内 2 ヶ所において、地元では「江馬の馬隠し場」の伝承がある。

(9) 梨打城跡

高山市国府町八日町に所在する。古川盆地を流れる宮川の支流・荒城川が東の山峡に入った、北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた山頂に位置する。越中東街道がこの城の東裾を抜けて大阪峠から高原郷に入り、梨打城はその守りであったと考えられる。『飛州志』には高原郷諏訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記され、江馬氏が南方を固めるために造った出城と考えられる。築城者、築城年共に不明である。天正 10 年（1582）の八日町合戦で江馬輝盛が姉小路（三木）自綱に破れた際、本城

高原諏訪城と共に落城したと伝わる。本丸は南北 36 m、東西 24 m の不整三角形の平場であり、幅 4 ~ 8 m の腰曲輪がめぐる。本丸を中心に三又状に伸びる尾根上に曲輪を設け、堀切、堅堀で防御している。

第 10 表 江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表

番号	城館跡名	読み	別称	標高(m)	比高(m)	下館からの直線距離(km)	立地	指定	所在地
1	下館跡	しもやかたあと	-	455	-	-	河岸段丘面上	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町殿
2	高原諏訪城跡	たかはらすわじょうあと	江馬城えまじょう 旭山城あさひやまじょう 旭城あさひじょう	619	164	0.5	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町殿
3	東町城跡	ひがしまちじょうあと	江馬之御館 えまのおやかた 沖野城おきのじょう 野尻城のじりじょう	443	-	0.9	段丘尻	市史跡	岐阜県飛騨市 神岡町東町
4	八幡山城跡	はちまんやまじょうあと	-	451	30	1	山頂	市史跡	岐阜県飛騨市 神岡町朝浦
5	傘松城跡	かさまつじょうあと	吉田城よしだじょう	802	373	2.1	山頂	県史跡	岐阜県飛騨市 神岡町吉田
6	洞城跡跡	ほらじょうあと ほらのじょうあと	麻生野城あそやじょう	536	74	2.4	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町麻生野
7	石神城跡	いしがみじょうあと	杏城あんずじょう 二越城ふたごえじょう	703	183	3.7	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町石神
8	寺林城跡	てらばやじょうあと	玄蕃城げんぱじょう	632	76	3.7	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町寺林
9	政元城跡	まさもとじょうあと	山田城やまだじょう	741	39	6.2	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町西
10	土城跡	どじょうあと	鬼ヶ城おにがじょう	352	62	9.2	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県飛騨市 神岡町牧
11	岩ヶ平城跡	いわがひらじょうあと	-	464	20	1	尾根筋先端頂部	-	岐阜県飛騨市 神岡町殿
12	梨打城跡	なしうちじょうあと	-	749	197	12.5	山頂	-	岐阜県高山市 国府町
13	尻高城跡	しったかじょうあと	-	-	-	7	-	-	岐阜県高山市 上宝町尻高
14	天元城跡	てんげんじょうあと	-	-	-	9.5	尾根筋先端頂	-	岐阜県高山市 上宝町岩井戸
15	苧生茂城跡	おうもじょうあと	-	-	-	14.2	-	-	岐阜県高山市 上宝町苧生茂
16	中地山城跡	なかちやまじょうあと	-	380	55	26	台地	市史跡	富山県富山市 大山町中地山

・番号は第 4 図 中・近世の吉城郡の交通路図と一致する。

※1 古代には荒城郡であったが、鎌倉時代より吉城郡の名前が使われるようになる。中世は混在しており、どちらの名称も使用している。江戸時代以降は吉城郡が使われるようになった。
ここでは、室町時代のことを言っており、吉城郡を使用する。

第3章 発掘調査の成果

第1節 基本層序

層序は各調査地区壁及びトレーンチ断面において観察した。上層より、表土、土地改良土、旧耕作土、B期遺構面構築土、A期遺構面構築土、下館基盤土、地山に大別できる。さらに土質などにより細分できるため、細分層序を示す場合は〈括弧〉を付けて記述する。またこれまでの調査所見を参考に層序の判断を行ったが、2000～2007年度調査での知見を新たに整理したため、層名は前報告書を踏襲していないものもある（第11表）。なお、調査地区ごとに確認できる土層が異なる（第5図）。基本層序を各調査地区の残りの良い箇所で観察した。各節で断面図とともに詳述する。

第I層表土 上層より、1994～1999年度に行われた調査の埋め戻し土〈I i層〉、1978年度調査後に行われた土地改良工事の客土による現耕作土〈I ii層〉、農道や耕地の造成土〈I iii層〉に細分できる。1994～1999年度調査の「表土」に対応する。

第II層土地改良土 土地改良工事の際の客土の盤土である。石英小礫を多く含む明黄褐色の砂質土である。1994～1997年度調査の「土地改良土（盤土）」、1998・1999年度調査の「土地改良土」に対応する。

第III層旧耕作土 下館廃棄後、近世以降にかけて行われた一帯の耕地化から1970年代に行われた土地改良工事までの耕作土及び農道の造成土である。中世から近世の遺物を包含する。上層より、1976～1978年度調査埋め戻し土〈III i層〉、旧耕地に伴う耕作土〈III ii層〉、耕作によって鉄分が堆積した鉄分堆積層〈III iii層〉、下館廃棄後の近世以降の一帯の耕地造成土〈III iv層〉、園池区域で近世期に畦畔を設けた際の盛土〈III v層〉、園池南西隅部の近世石組み据え付け土〈III vi層〉、園池を近世期に埋め戻した人為的堆積土層〈III vii層〉、B期遺構面構築土が耕地化の際に崩壊した〈III viii層〉に細分できる。1994年度調査の「カドミ汚染土」、1995～1999年度調査の「旧耕作土」に対応する。

上記の3つの土層、第I～III層を合わせ、1978年度調査での「第I層表土・耕作土・土地改良土層」、「第II層床土」に対応する。

第IV層B期遺構面構築土 館を整備した下館II期のうち、後半のII B期の建物礎石を埋めた整地土層及び園池造成土である。堀内地区でしか確認できない上、後世の削平により残りは悪い。土質の違いにより、上層より、園池造成土〈IV i層〉、地山ブロック混じり黒褐色土〈IV ii層〉、1.5～1cmの大の小礫を多く含む褐色粘質土の〈IV iii層〉、園池北側汀線の下層造成土〈IV iv層〉に細分できる。〈IV iii層〉は、1978年度調査の「第III層褐色土層」に対応し、1998・1999年度調査の「A・B期遺構面構築土」に対応する。1994～1997年度調査では確認していない。

第V層A期遺構面構築土 下館II期のうち前半のII A期の整地土層である。堀内地区でしか確認できない。II B期の整地の際に削平を受けており、全ての調査区では確認できない。土質の違いにより、上層より明褐色粘質土が帶状に堆積する黒褐色粘質土〈V i層〉、地山ブロック混じり黒褐色粘質土（最下層に灰色細砂が薄く層状に堆積する）〈V ii層〉に細分できる。

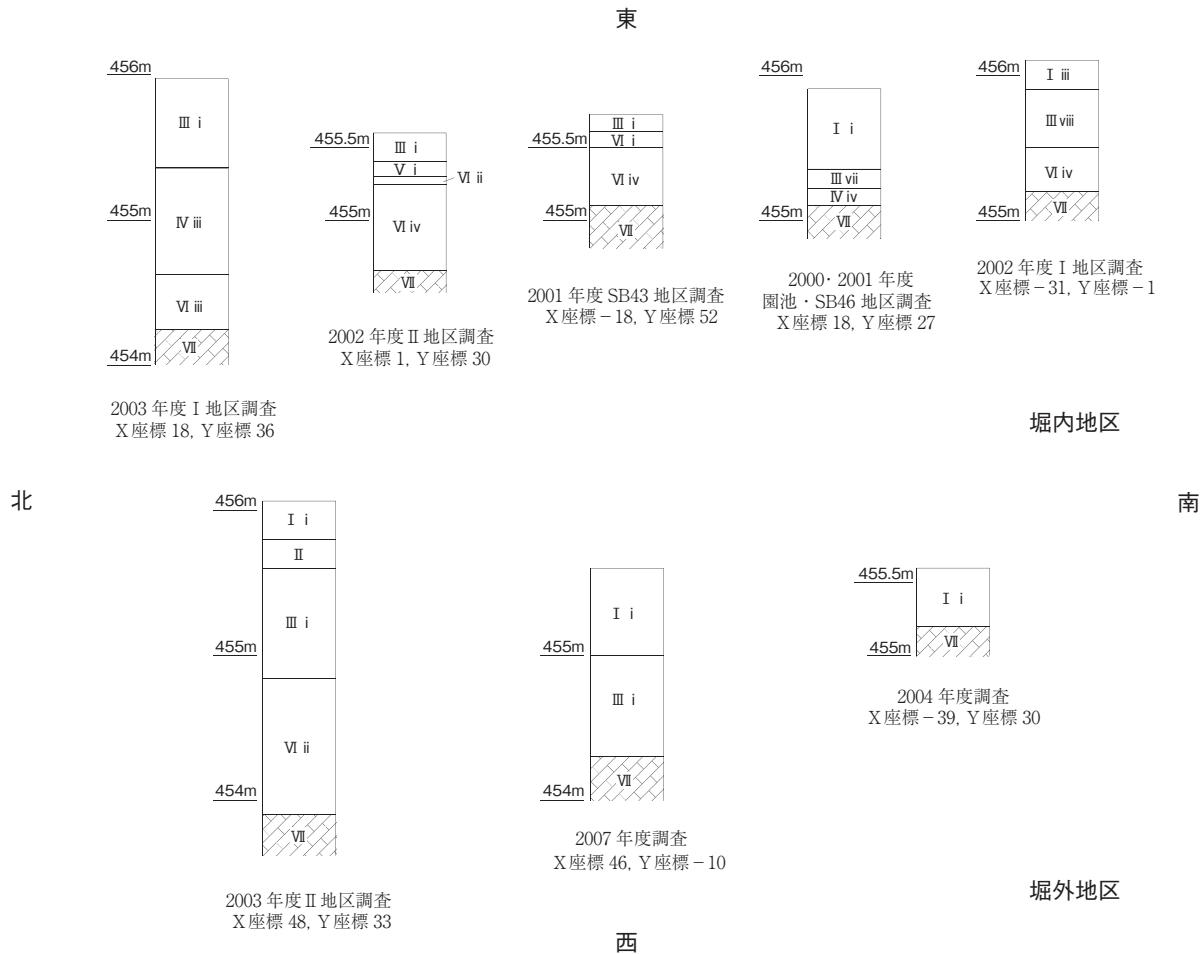
第VI層下館基盤土 中世時期の基盤層と考えられる黒褐色粘質土層である。堀外地区では確認できない。土質の違いと遺物の有無から、上層より、粘性強く小礫多く混じり鉄分が浸透する赤黒色粘質土の〈VI i層〉、粘性強く小礫多く混じる茶褐色粘質土の〈VI ii層〉、かわらけ細片や縄紋土器片を含む黒褐色土の〈VI iii層〉、遺物を含まない黒褐色土の〈VI iv層〉に細分できる。〈VI iii層〉及び〈VI iv層〉は1978年度調査の「第IV-I 黒色砂質土」に、1994年度調査の「地山1」に対応し、1998・1999年度では〈VI iii層〉が「下館基盤層〈基盤造成土〉」に、〈VI iv層〉が1999年度報告「下館基盤層〈自然堆積土〉」に対応する。なお、1994～1997年度調査では確認していない。

1978年度調査の「第IV-II 層茶褐色土」に対応する土層は、今回の調査では確認できなかった。

第VII層地山 この地域一帯の基盤層である。暗灰黄色～明黄橙色砂礫土である。1978年度調査の「第V層地山」に、1994年度調査の「地山2」に、1995～1999年度調査の「地山」に対応する。

第11表 過去の調査との土層対応表

調査年度	2000～2007			1998・1999	1997	1996	1995	1994	1976～78						
第I層 表土	I i	1994～1999年度調査の埋め戻し土		表土	表土	表土	表土	表土	I・II						
	I ii	1978年度調査後に行われた土地改良工事による土													
	I iii	農道の造成土													
第II層 土地改良土	II	土地改良工事の基盤土		土地改良土	土地改良土(盤土)	土地改良土(盤土)	土地改良土(盤土)	土地改良土(盤土)							
第III層 旧耕作土	III i	1976～1978年度調査の埋め戻し土や、攪乱土		旧耕作土	旧耕作土	旧耕作土	旧耕作土	カドミ汚染土	I・II						
	III ii	旧耕地の造成土													
	III iii	耕作によって鉄分が堆積した土層													
	III iv	近世以降の一帯の耕地造成土													
	III v	園池区域で近世期に畦畔を設けた土層													
	III vi	園池南西隅部の近世石組みを据え付けた土層													
	III vii	園池を近世期に人為的に埋め戻した土層													
	III viii	B期遺構面構築土が耕地化の際に崩壊した土層													
第IV層 B期遺構面構築土	IV i	小礫が混じる褐色土		A・B期 遺構面構築土					第III褐色土層						
	IV ii	地山ブロック混じり黒褐色土													
	IV iii	1.5～1cm大の小礫を多く含む褐色粘質土													
	IV iv	園地北側汀線の下層を造成した黒褐色粘質土													
第V層 A期遺構面構築土	V i	明褐色粘質土が帶状に堆積する黒褐色粘質土							地山1 第IV-I層 黒色砂質土						
	V ii	地山ブロック混じり黒褐色粘質土（最下層に灰色細砂が薄く堆積する）													
第VI層 下館基盤土	VI i	粘性強く小礫多く鉄分が浸透する赤黒色粘質土		下館基盤土 (基盤造成土)					地山2 第V層						
	VI ii	粘性強く小礫多く混じる褐色粘質土													
	VI iii	かわらけ細片や縄文土器片を含む黒褐色土													
	VI iv	遺物を含まない黒褐色土													
第VII層 地山	VII	しまりがよい黄橙色砂礫土		地山	地山	地山	地山	地山2							



第5図 土層断面柱状図

第2節 遺構と遺物の概要

1. 遺構の概要

(1) 2000～2001年度 園池・礎石建物 SB 46 地区調査の概要

園池跡 園池跡の整備工事に伴い、埋土の堆積状況、池底の状況、景石転倒状況および据え付け痕跡の確認を目的として、発掘調査を行った。調査範囲はX座標-10～-36、Y座標0～36、面積は900 m²である。

園池跡は最大部で東西27m、南北12mを測り、東西に長い不整橢円形である。トレチにより、園池堆積土下層より近世遺物が出土し、園池内は近世の耕地化の際に地山池底付近まで攪乱をうけ、中世期の堆積土はほぼ残存していないこと、園池内で検出した景石の大半が耕地化の際に押し倒されており、元位置をとどめていないことを確認した。園池跡南側陸部分から、地鎮のために埋納したと考えられる墨書き師器皿が出土し、この土師器皿の年代から、発掘調査により確認できる園池跡は遅くとも16世紀初めには完成したものと推定できた。

礎石建物跡 SB 46・板塀跡 SA 47 紣石建物跡 SB 46・板塀跡 SA 47 については、復元工事に先立ち、遺構位置と庭園との層序関係の確認を目的として再検出を行った。調査範囲は索石建物跡 SB 46 が X 座標 -15 ~ -5、Y 座標 -36 ~ 19、調査面積は 150 m²、板塀跡 SA 47 が X 座標 -5 ~ -10、Y 座標 0 ~ 19、調査面積 95 m² である。園池跡との層序関係により、園池跡と索石建物跡 SB 46 は一体的に造成したことを見た。墨書き土器皿の年代から、索石建物跡 SB 46 も 16 世紀初めに庭園と同時に造られたと判断できた。また、1978 年度報告において「A 期・B 期の 2 時期に整理でき、A 期から B 期へ建て替える」(神岡町教育委員会 1979) としていたが、A 期建物跡である索石建物跡 SB 46 が 16 世紀初めのものであることから、A・B 期建物跡の前後関係が逆転する可能性が推定された。

(2) 2001 年度索石建物 SB 43 地区調査の概要

索石建物跡 SB 43 整備工事に先立ち、索石建物跡 SB 43 および園池東側の区画施設跡を確認するためのトレンチ調査を行った。トレンチ 1 は X 座標 -16 ~ -23、Y 座標 36 ~ 39.5 及び X 座標 -16 ~ -18、Y 座標 39.5 ~ 66.5、調査面積 64 m²、トレンチ 2 は X 座標 -25 ~ -28、Y 座標 36 ~ 52、調査面積 48 m²、トレンチ 3 は X 座標 -16 ~ -27、Y 座標 52 ~ 53.5、調査面積 17 m²、トレンチ 4 は X 座標 -27 ~ -28.3、Y 座標 53.5 ~ 61.5、調査面積 10 m²、トレンチ 5 は X 座標 -28.3 ~ -34、Y 座標 55.5 ~ 58、調査面積 14 m²、トレンチ 6 は X 座標 -27 ~ -35、Y 座標 52 ~ 54、調査面積 12 m²、合計調査面積 179 m² である。トレンチ 1 では索石建物 SB 43、索石建物 SB 51 とされる索石抜き取り穴跡を再確認したが、柱並びを確認できなかった。また、トレンチ 1・2 において園池東側の区画施設跡を確認できなかった。トレンチ 2 では不明遺構 SX 43 を検出し、トレンチ 5・6 では 1978 年度以前の調査でも検出している不明遺構 SX 44 を再検出した。調査面積が狭く、その性格は明らかにし得なかった。

(3) 2002 年度 I 地区調査の概要

西側土塀跡（主門跡以南） 堀内地区南西隅部において、西側・南側土塀復元工事に先立ち、西側土塀主門～南端部の土塀柱穴列跡及び堀内地区南西隅部の土塀跡の位置確認を目的として調査を行った。調査範囲は X 座標 -6 ~ -44、Y 座標 -7 ~ 1.3、調査面積 300 m² である。

1999 年度調査で確認した主門北側の西側土塀柱穴列跡 SA 55 a・SA 55 b、SA 56 a・SA 56 b に続く布掘り溝跡 SD 21・SD 24 及び 2 本の柱穴列跡 SA 55 c・SA 56 c、その南端（西側土塀南端）においては一部分ではあるが土塀基底部盛土を確認した。トレンチ断面層位および柱穴の重複状況から、土塀は少なくとも 2 時期あることが分かった。

(4) 2002 年度 II 地区調査の概要

索石建物跡 SB 44・索石建物跡 SB 49 1978 年度調査概報において、堀内地区の索石建物跡は「A 期・B 期の 2 時期に整理でき、A 期から B 期へ建て替える」(神岡町教育委員会 1979) としていたが、2001 年度の調査において、その前後関係が逆転する可能性が想定された。このため、索石建物跡 SB 44 (1978 年度概報 A 期建物)・索石建物跡 SB 49 (同 B 期建物) 重複箇所において、前後関係および立体的表示整備を行う索石建物跡 SB 44 遺構位置の再確認を目的として調査を行った。調査範囲は、X 座標 -5 ~ 7、Y 座標 30 ~ 36、X 座標 -9 ~ 7、Y 座標 36 ~ 46、調査面積 232 m²、索石建物跡 SB 44 東辺確認のための 5 トレンチが X 座標 -3.7 ~ 5.9、Y 座標 54.5 ~ 60.5、調査面積 36 m²、合計調査面積 268 m² である。索石建物跡 SB 44・索石建物跡 SB 49 再検出箇所では、それぞれの索石跡・索石抜き取り穴跡の直接の切り合いはなかったが、検出面等の土層堆積状況を確認した結果、索

石建物跡 SB 44 の礎石抜き取り穴跡検出面土層の下層において、礎石建物跡 SB 49 の礎石据え付け土層を確認した。このため礎石建物跡 SB 49 が礎石建物跡 SB 44 に先行することを確認した。これにより、1978 年度概報の遺構前後関係に基づき、遺構変遷の整理を行った 1994～1999 年度調査検出遺構についても検出土層や出土遺物の再確認及び検討を行い、江馬氏下館時期変遷の再整理を行った。再整理後の遺構変遷については、第 4 章第 2 節において報告する。

(5) 2003 年度 I 地区調査の概要

礎石建物跡 SB 41 紣石建物跡 SB 41 東部分周辺において、整備工事に伴い、遺構位置再確認および礎石建物跡 SB 41・42 間の渡り廊下遺構の有無の確認を目的として調査を行った。調査範囲は X 座標 18.5～34、Y 座標 26.5～36.5、調査面積は約 155 m² である。礎石建物跡 SB 41 南側（X 座標 24 以南）で、南東側に接する礎石建物跡 SB 42 につながる渡り廊下遺構の精査を行ったが、遺構は検出できなかった。

(6) 2003 年度 II 地区調査の概要

北側土塀跡 北側土塀推定位置および北堀において、整備工事に伴い、土塀跡位置及び北堀跡との層序関係を再確認するため 4 本のトレンチを設定して調査を行った。1 トレンチは X 座標 42～57.5、Y 座標 10～12 内で幅 1.5 m、調査面積 24 m²、2 トレンチは X 座標 44.5～54.5、Y 座標 21～22.5、調査面積 15 m²、3 トレンチは X 座標 42.5～60、Y 座標 27.5～31、調査面積 46 m²、4 トレンチは X 座標 41～57、Y 座標 37.7～41.5、調査面積 22 m²、合計調査面積 107 m² である。1998 年度調査で確認した北側土塀基底部石列跡 SV 01・02 の東への延長、土塀基底部について確認することができなかった。

(7) 2004 年度調査の概要

南堀跡 南堀整備工事に先立ち、横断橋跡の確認及び 1997 年度南堀延長部周辺調査時に掘り残した南堀跡延長部埋土の掘削調査を行った。調査範囲は X 座標 -45.5～-37、Y 座標 -41～-18、調査面積 110 m² である。南堀横断橋に関わる遺構については確認しなかった。

(8) 2007 年度調査の概要

西堀跡 西堀跡薦研堀（主門跡より南側）及び箱堀（脇門より北側）の整備工事に先立ち、埋土の掘削調査を行った。薦研堀は X 座標 -33.5～-6、Y 座標 -10～-3、調査面積 189 m²、箱堀は X 座標 34～54、Y 座標 -10.5～-5、調査面積 110 m²、合計調査面積 299 m² である。

2. 遺物の概要

(1) 出土遺物の種別割合

2000～2007 年度調査で出土した遺物は、下館に関連する中世の土器・陶磁器片等 2,007 点の他に、数量的には少ないが縄文土器や近現代陶磁器など 220 点を確認し、合計 2,227 点であった。遺構に伴う遺物は 369 点、中世期の造成土と考えられる第Ⅳ層 B 期遺構面造成土、第Ⅴ層 A 期遺構面造成土、第Ⅶ層下館基盤土に伴う遺物は、それぞれ 163 点、3 点、19 点である。

中世の土器・陶磁器片等の内訳は、土師器 1,319 点（69.31 %）、瓦器 115 点（5.73 %）、珠洲焼 130 点（6.48 %）、八尾焼 51 点（2.54 %）、瀬戸・美濃焼 161 点（8.02 %）、その他の国産陶器 35 点（1.75 %）、青磁 42 点（2.09 %）、白磁 18 点（0.90 %）、青白磁 1 点（0.05 %）、青花 6 点（0.30 %）、中国製天目茶碗 11 点（0.55 %）、鉄製品 22 点（1.10 %）、銅製品 6 点（0.30 %）、石製品 16 点（0.80 %）である。

全体の割合比では、土師器が 69 % と大半を占める。次いで瀬戸・美濃焼 8 %、珠洲焼 6 % と続くが、土師器以外は 1 割にも満たない。

(2) 遺物の分類基準

遺物の分類については、まず陶器や磁器、産地等の種別分類、碗や皿等の器種分類を行い（第12表）、それぞれの器形等から細分類を行った。その中から、遺構や整地土層に伴うこと、口縁部が残存することなどを基準に204点を抽出し、図化した。

第12表 出土遺物 種類・器種別組成表

種類	器種	破片数	%	
土師器	皿	1,391	69.31	69.31
	風炉	1	0.05	
	火鉢	15	0.75	
	風炉・火鉢	95	4.73	
	不明	4	0.20	
瓦器	壺	6	0.30	5.73
	甕	85	4.24	
	壺甕	21	1.05	
	片口鉢	2	0.10	
	すり鉢	15	0.75	
	不明	1	0.05	
珠洲焼	甕	41	2.04	6.48
	壺甕	8	0.40	
	不明	2	0.10	
	すり鉢	2	0.10	
	壺甕	1	0.05	
	甕	2	0.10	
八尾焼	すり鉢	29	1.45	2.54
	香炉	2	0.10	
	皿	19	0.95	
	壺	7	0.35	
	壺瓶	12	0.60	
	盤	42	2.09	
越前焼	瓶子	4	0.20	0.10
	碗	33	1.64	
	甕	1	0.05	
	不明	12	0.60	
	鉢	3	0.15	
	碗	8	0.40	
常滑焼	るつぼ	1	0.05	0.15
	甕	4	0.20	
	壺瓶	2	0.10	
	壺甕	8	0.40	
	不明	1	0.05	
	皿	1	0.05	
瀬戸・美濃焼	碗	2	0.10	8.02
	不明	3	0.15	
	すり鉢	29	1.45	
	香炉	2	0.10	
	皿	19	0.95	
	壺	7	0.35	
山茶碗	壺瓶	12	0.60	0.55
	盤	42	2.09	
	瓶子	4	0.20	
	碗	33	1.64	
	甕	1	0.05	
	不明	12	0.60	
その他国産土器・陶磁器	鉢	3	0.15	0.80
	碗	8	0.40	
	るつぼ	1	0.05	
	甕	4	0.20	
	壺瓶	2	0.10	
	壺甕	8	0.40	
青花	不明	1	0.05	0.30
	皿	1	0.05	
	碗	2	0.10	
	不明	3	0.15	
	壺	2	0.10	
	盤	1	0.05	
青磁	瓶子	1	0.05	2.09
	碗	33	1.64	
	不明	5	0.25	
	皿	11	0.55	
	不明	7	0.35	
	壺	1	0.05	
白磁	梅瓶	1	0.05	0.90
	碗	11	0.55	
	不明	2	0.10	
	皿	11	0.55	
	不明	7	0.35	
	壺	1	0.05	
青白磁	梅瓶	1	0.05	0.65
	碗	11	0.55	
	不明	2	0.10	
	皿	11	0.55	
	不明	7	0.35	
	壺	1	0.05	
その他中国製陶磁器	梅瓶	1	0.05	0.15
	碗	11	0.55	
	不明	2	0.10	
	皿	11	0.55	
	不明	7	0.35	
	壺	1	0.05	
土製品	輪羽口	1	0.05	1.01
	土製円盤	2	0.10	
	キセル吸い口	1	0.05	
	釣	8	0.40	
	鉄砲玉	1	0.05	
	カラミ	11	0.55	
鉄製品	不明	1	0.05	0.30
	キセル吸い口	1	0.05	
	火箸	1	0.05	
	古銭	4	0.20	
	砥石	5	0.25	
	碁石	4	0.20	
石製品	石鍋	1	0.05	0.80
	茶臼	3	0.15	
	硯	1	0.05	
	鉢	2	0.10	
	合計	2,007	100.00	100.00

土師器 器種は皿のみである。まず手づくね成形によるT類とロクロ成形によるR類に分けた。さらに形態と調整の違いからT類を8種に、R類を5種に細分類した（第6図、第13表）。

瓦器 器種は火鉢と風炉である。口縁部形態を主として6種に分類した（第7図、第14表）。

珠洲焼 器種別には、壺6点、甕85点、すり鉢15点、片口鉢2点、その他1点である。年代観については、生産地で示されている編年（吉岡1994）に従った。

八尾焼 器種は大半が甕である。未発達なN字状口縁を持つ第1群と、口縁部が垂れ下がる第2群に分類した（酒井1990）。八尾焼の年代は13世紀前半から14世紀末までと考えられており、この時期を通じて貯蔵具として使用したと考えられる。

瀬戸・美濃焼 器種別には、碗33点、皿19点、盤類42点、壺7点、甕1点、すり鉢29点、瓶子4点、香炉2点、その他24点である。年代観については、生産地で示されている編年（藤澤2007）に従った。

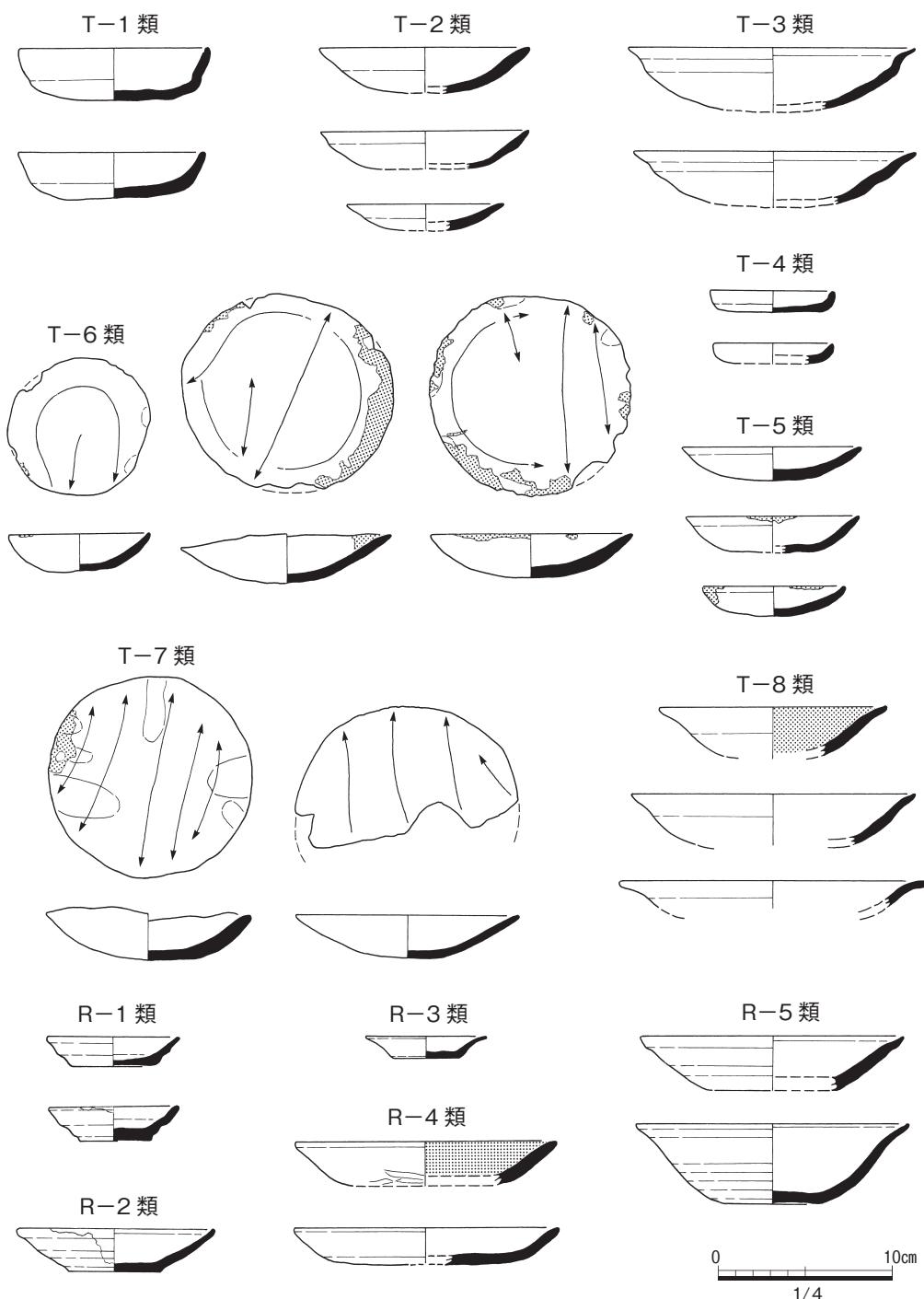
青磁 器種別には、碗33点、皿2点、盤1点、瓶子1点、その他5点である。年代観については、国立歴史民俗博物館集成の分類に従った（国立歴史民俗博物館1993）。

白磁 器種は、皿11点、不明7点である。年代観については、国立歴史民俗博物館集成の分類に従った（国立歴史民俗博物館1993）。

青花 器種は、碗2点、皿1点である。年代観については、国立歴史民俗博物館集成の分類に従った（国立歴史民俗博物館1993）。

第13表 土師器皿分類表

分類	口縁部	口縁端部	体部	底部	器形	胎土
T-1類	垂直に立ち上がり、一段のナデ	丸い	-	-	-	-
T-2類	一段のナデ	上方へつまみ上げるか、外反	ゆるく内湾	-	-	-
T-3類	強く外反させて段を付ける	薄い	-	-	大型の皿	灰白色で精良
T-4類	-	-	底部から屈曲気味に立ち上がる	平坦	小皿	-
T-5類	浅い一段のナデ ナデ幅が狭い	-	内面を「の」の字または不規則にナデ	丸底及び平底	-	-
T-6類	調整痕なし	-	内面だけに複数方向の不規則なナデ	平坦にしない	不整円形	-
T-7類	調整痕なし	-	内面だけに一方向のナデ	平坦にしない	不整円形	-
T-8類	ナデにより強く外反	-	器壁の薄い	-	-	-
R-1類	ゆるく外反	-	底部の境目にはロクロ目による段を有する	回転糸切り痕	浅い小皿	-
R-2類	-	外側に面取り風にヘラ調整が施される	ゆるく外へ開く	回転糸切り痕	-	-
R-3類	強く外反する	-	-	-	-	-
R-4類	ゆるく外反	-	直線的に開く	静止ヘラ削り	浅い皿型	-
R-5類	ゆるく外反	-	直線的に開くものと、ゆるく内湾するものがある	回転ヘラ削り	杯に近い深めの器形	-



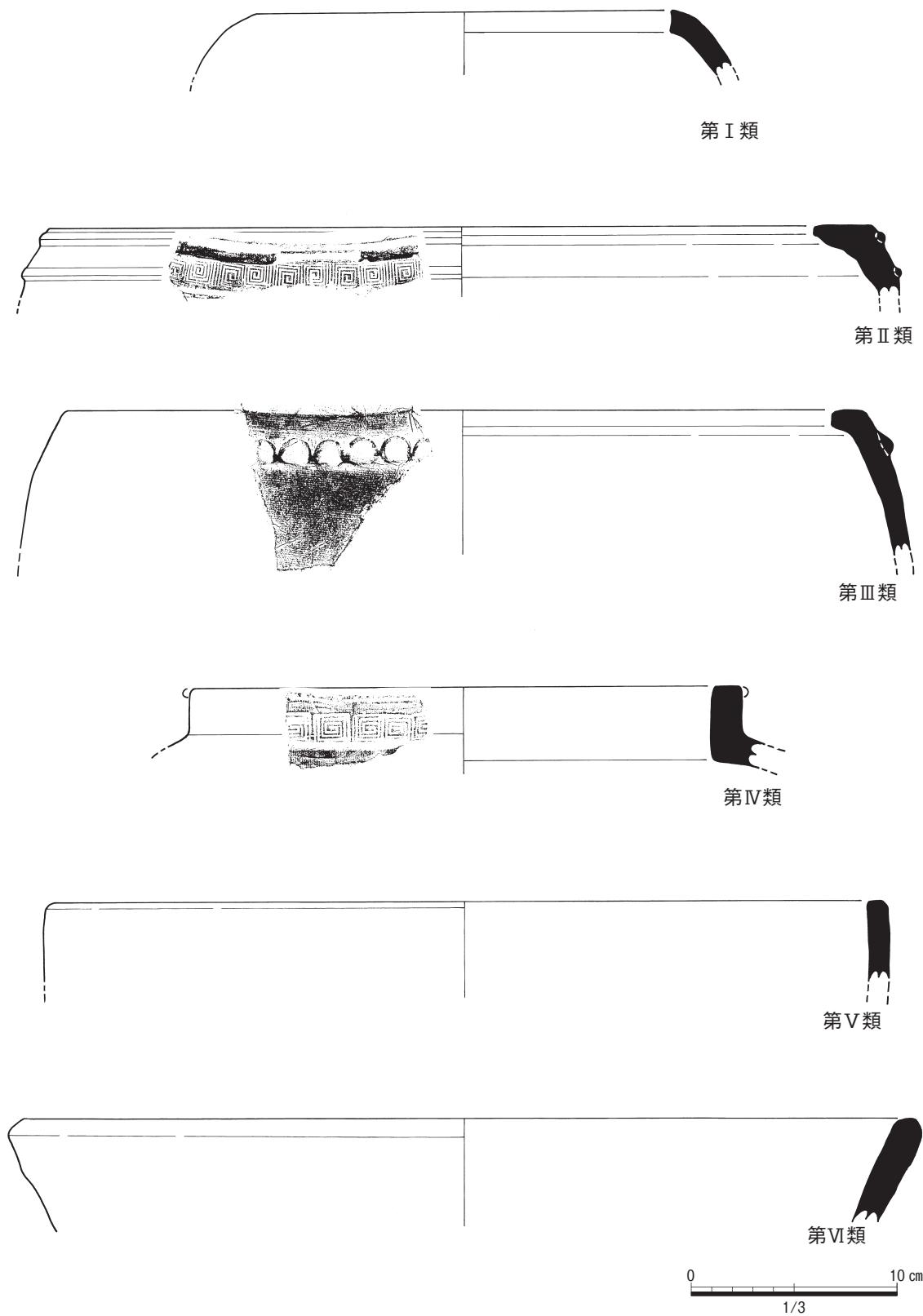
手づくね成形 (T類)

- T-1類 体部が屈曲ぎみに立ち上がるるもの。
- T-2類 口縁部に一段の横ナデを強く施すもの。
- T-3類 口縁部を薄くし、強く外反させて段をつけるもの。
- T-4類 体部が屈曲ぎみに立ち上がる小皿。
- T-5類 口縁部に一段の横ナデを浅く施すもの。
- T-6類 内面に不規則にナデを施し、口縁部の調整を省略するもの。
- T-7類 内面に一方向のナデを施し、口縁部の調整を省略するもの。
- T-8類 横ナデにより口縁部を強く外反させるもの。

轆轤成形 (R類)

- R-1類 口縁部がゆるく外反する小皿。底部は回転糸切り。
- R-2類 口縁外側をヘラで面取りするもの。底部は回転糸切り。
- R-3類 口縁部が強く外反するもの。底部は静止ヘラ削りか。
- R-4類 浅い皿型で、体部が直線的に開くもの。底部は静止ヘラ削り。
- R-5類 深い杯型で口縁部がやや外反するもの。底部は回転ヘラ削り。

第6図 土師器皿分類図



第7図 瓦器分類図

第14表 瓦器分類表

分類	口縁部	口縁外面	胴部	外 面	器 形
第Ⅰ類	強く内湾	-	-	-	太鼓形
第Ⅱ類	肥厚して強くない湾	上面が水平	-	菊花文や雷文などを2本の隆線の間に施す。	太鼓形
第Ⅲ類	内側に折られる	上面が水平	-	念珠文	太鼓形
第Ⅳ類	高さ2cmほど垂直に立つ	-	-	-	肩が大きく張り、下部に向かってゆるくすぼみながら筒状の形状をなす
第Ⅴ類	ほぼ垂直に立ち上がる	-	-	丸底及び平底	筒形
第Ⅵ類	斜め上方に直線的に開く	-	-	-	平面四角形

第3節 2000～2001（平成12～13）年度園池・礎石建物SB46地区調査

2000～2001年度にかけて、復元工事に伴い園池跡、礎石建物跡SB46、板塀跡SA47の調査を行った（第10図）。園池は、第1章で述べたように「五ヶ石（御花石）」の伝承がある。その五ヶ石は景石No.135、223、650、666、728の5石である（第8図）。

これまで1976～78、1995年度の2度調査を行っている。この調査により、園池跡は堀内地区の南西隅部に位置すること、南・西側は土塀を挟んでそれぞれ南堀跡・西堀跡と接すること、北東側には鑑賞施設である会所と考えられる礎石建物跡SB46が接すること、北西側には主門側からの目隠しとなる板塀跡SA47が接すること、汀線及び景石など園池を構成する主要遺構が明らかとなっていた。

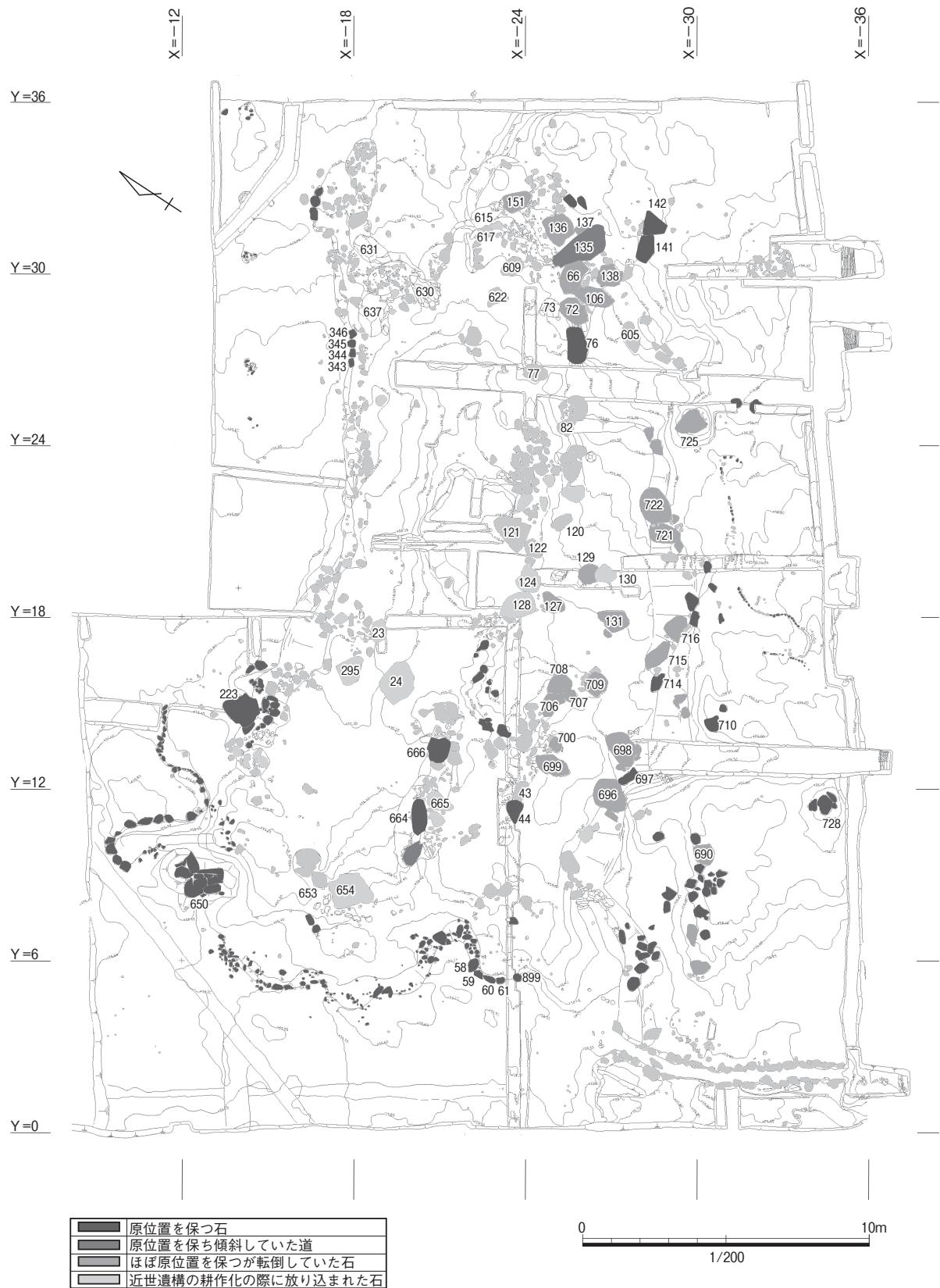
今回の調査では、園池跡では規模、埋土の堆積と池底の状況、景石転倒状況及び据え付け痕跡の確認、作庭時期の確認を目的とし、礎石建物跡SB46、板塀跡SA47では遺構位置と園池跡との層序関係の確認を目的として、発掘調査を行った。

調査範囲は、X座標-4～-36、Y座標0～36、調査面積1,150m²である。なお、園池跡と西側土塀跡との層序関係を報告するため、断面H-H'は2002年度I地区調査断面図を合成した。

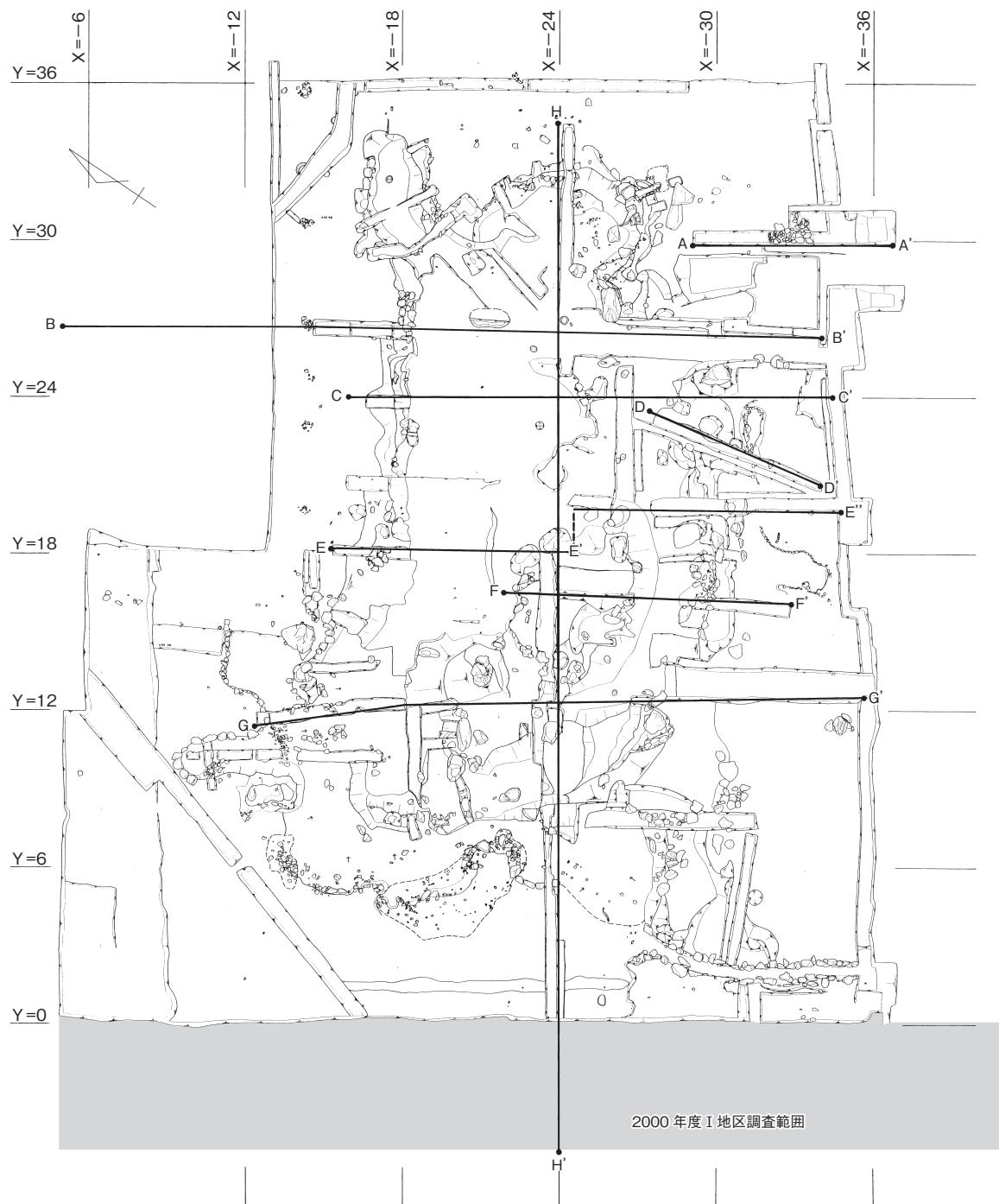
調査では、園池跡、礎石建物跡SB46、板塀跡SA47の他に、SB46の前身建物と考えられる礎石建物跡SB63、1999年度調査でも検出した門跡SB62、1978年度調査で完掘している布掘り溝跡SD29、それに伴う柱穴列跡SA59、土坑を検出した（第10～12図）。

層位は上層より、第Ⅰ層表土〈I i層〉〈I iii層〉、第Ⅱ層土地改良土、第Ⅲ層旧耕作土〈III i層〉〈III ii層〉〈III iv層〉〈III v層〉〈III vii層〉、第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV i層〉〈IV ii層〉〈IV iii層〉〈IV iv層〉、第Ⅴ層A期遺構面構築土〈V i層〉〈V ii層〉、第Ⅵ層下館基盤土〈VI iv層〉、第Ⅶ層地山を確認した（第9・13～16図）。

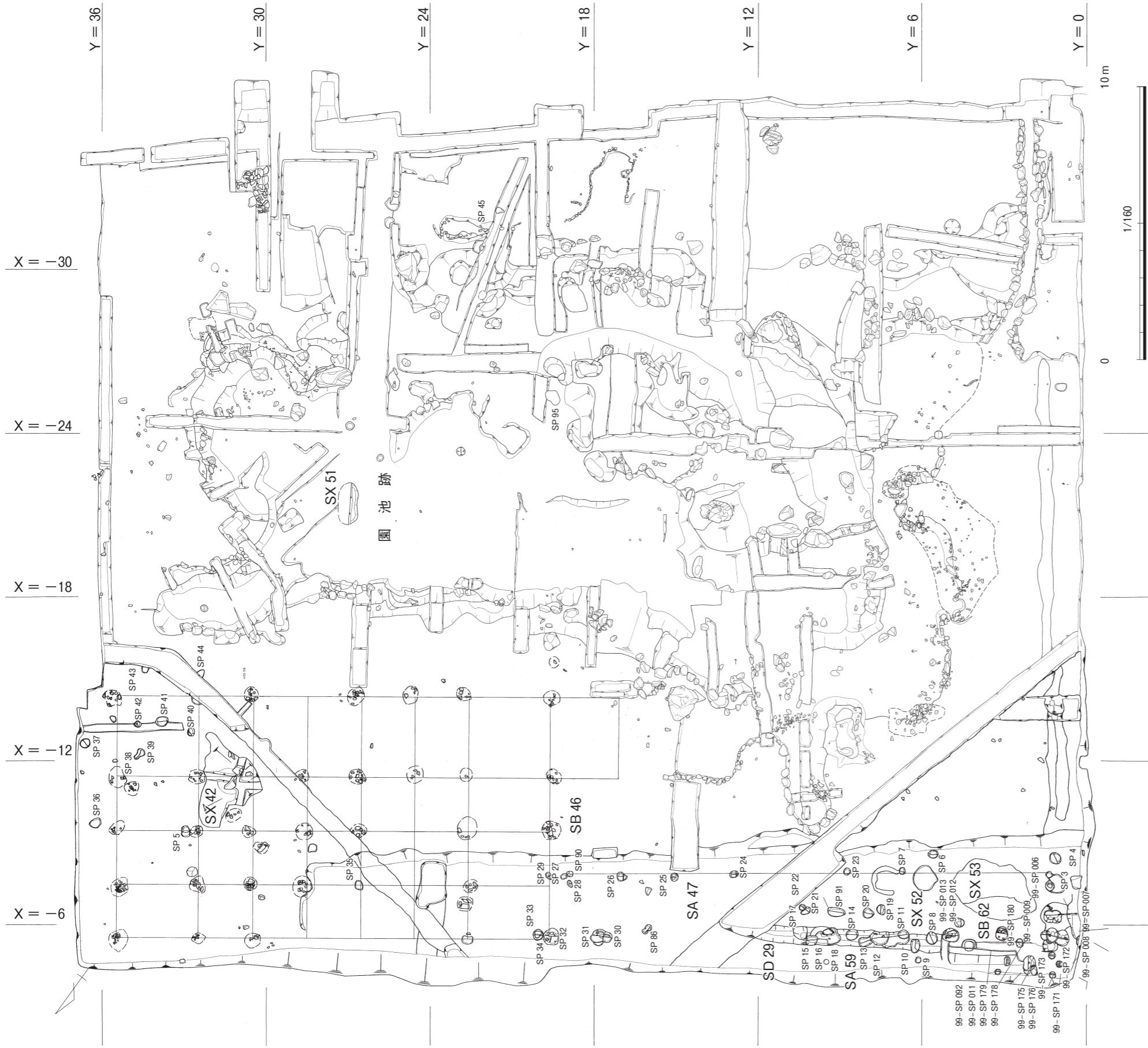
掘削は、第Ⅲ層旧耕作土〈III i層〉までを人力掘削し、まず1976～78年度調査終了時の検出面を再検出した。その後、第Ⅲ層旧耕作土〈III ii層〉～〈III vii層〉の深度・堆積の広がりをトレングループ掘削及び平面精査により明確にし、人力により掘削を行った。それより下層はトレングループ掘削に止めた。



第8図 園池跡石材色分け図及び番号図 縮尺 1/200



第9図 園池跡断面図位置図 縮尺 1/250



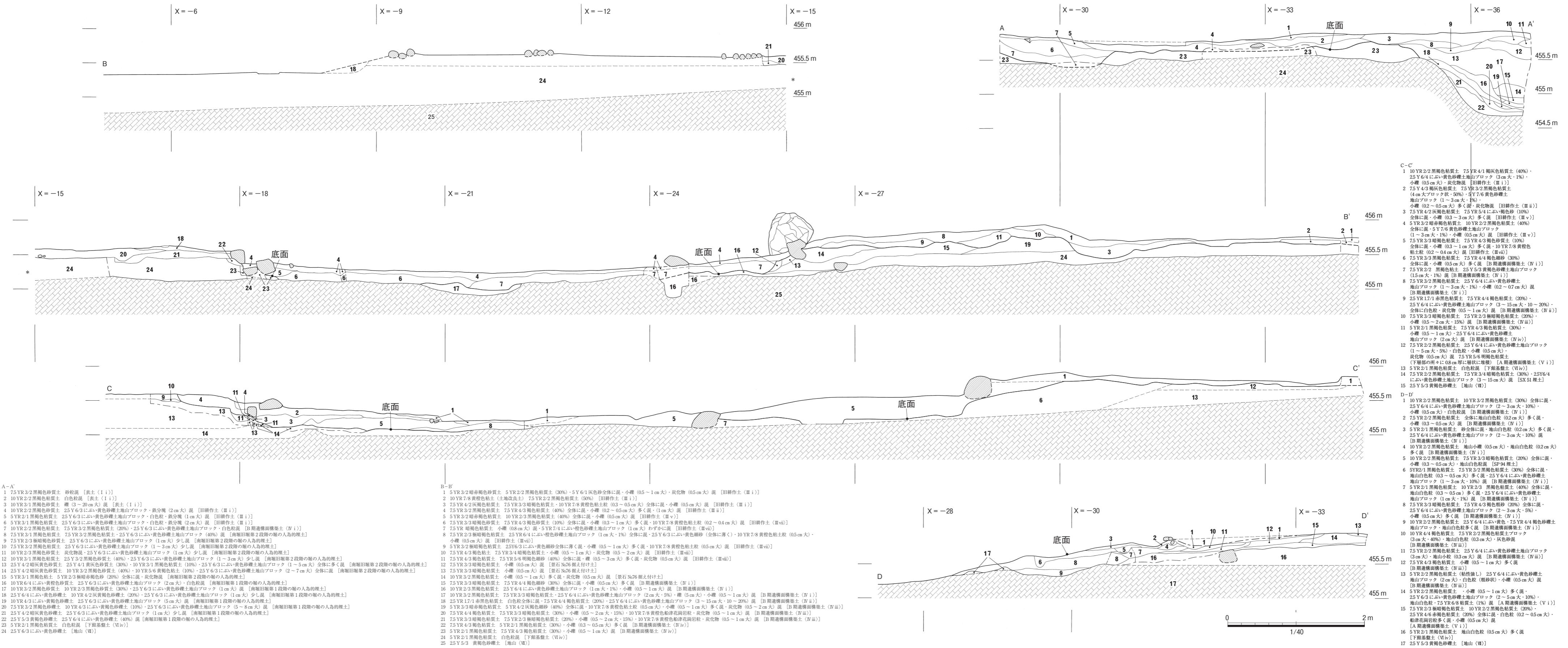
第10図 2000・2001年度園池・礎石建物SB46地区調査平面図 縮尺1/16



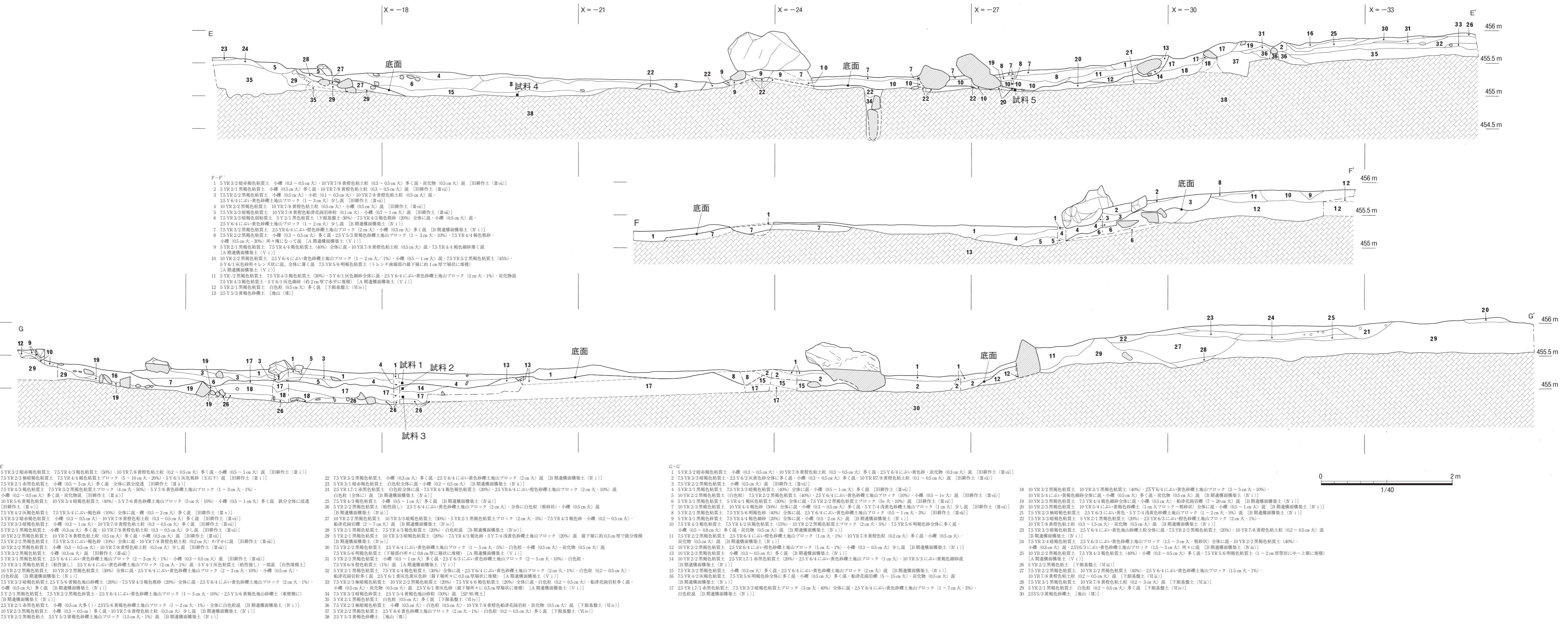
第11図 園池跡検出状況平面図 縮尺1/150



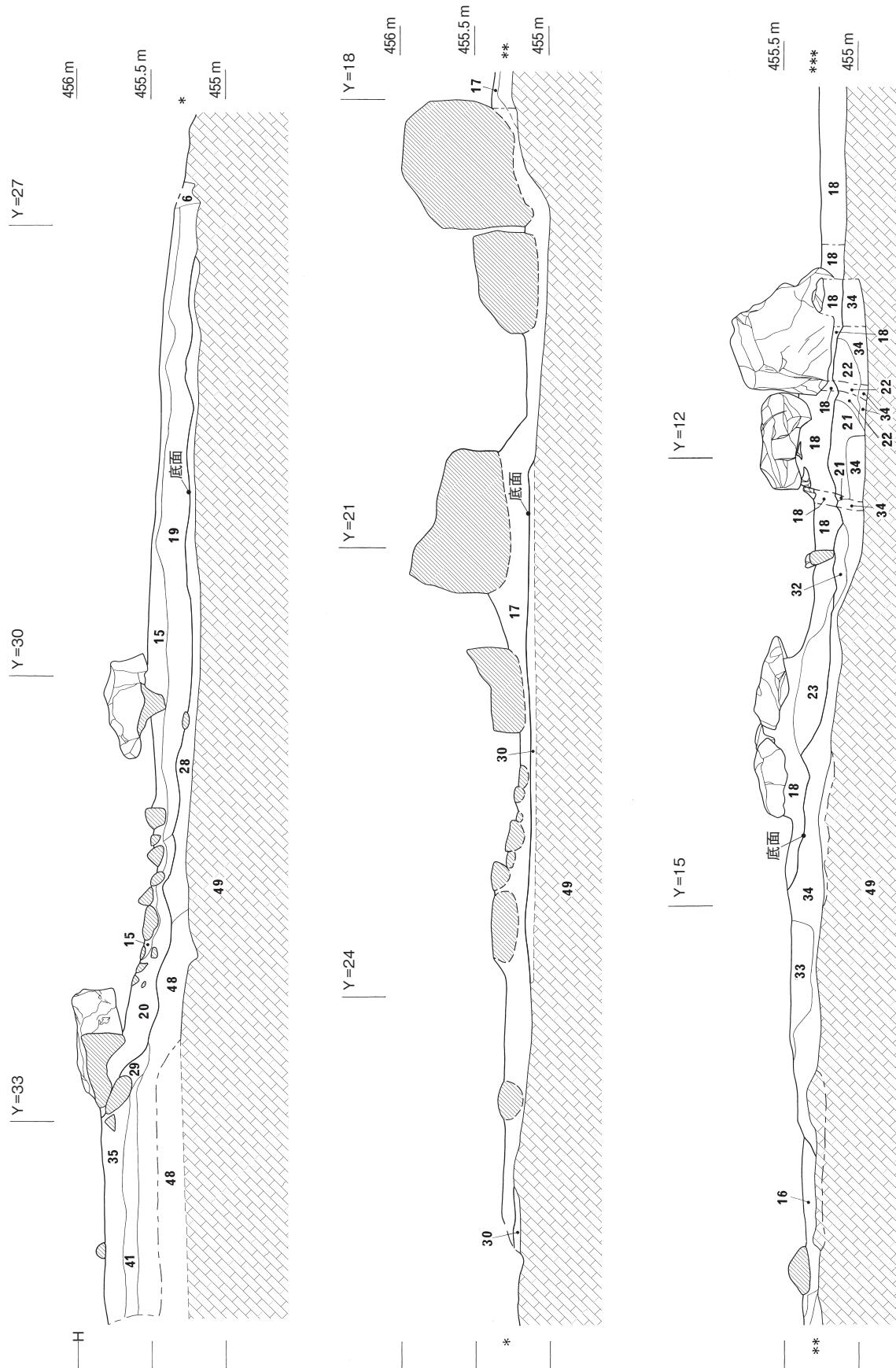
第12図 園池跡完掘状況平面図 縮尺1/150



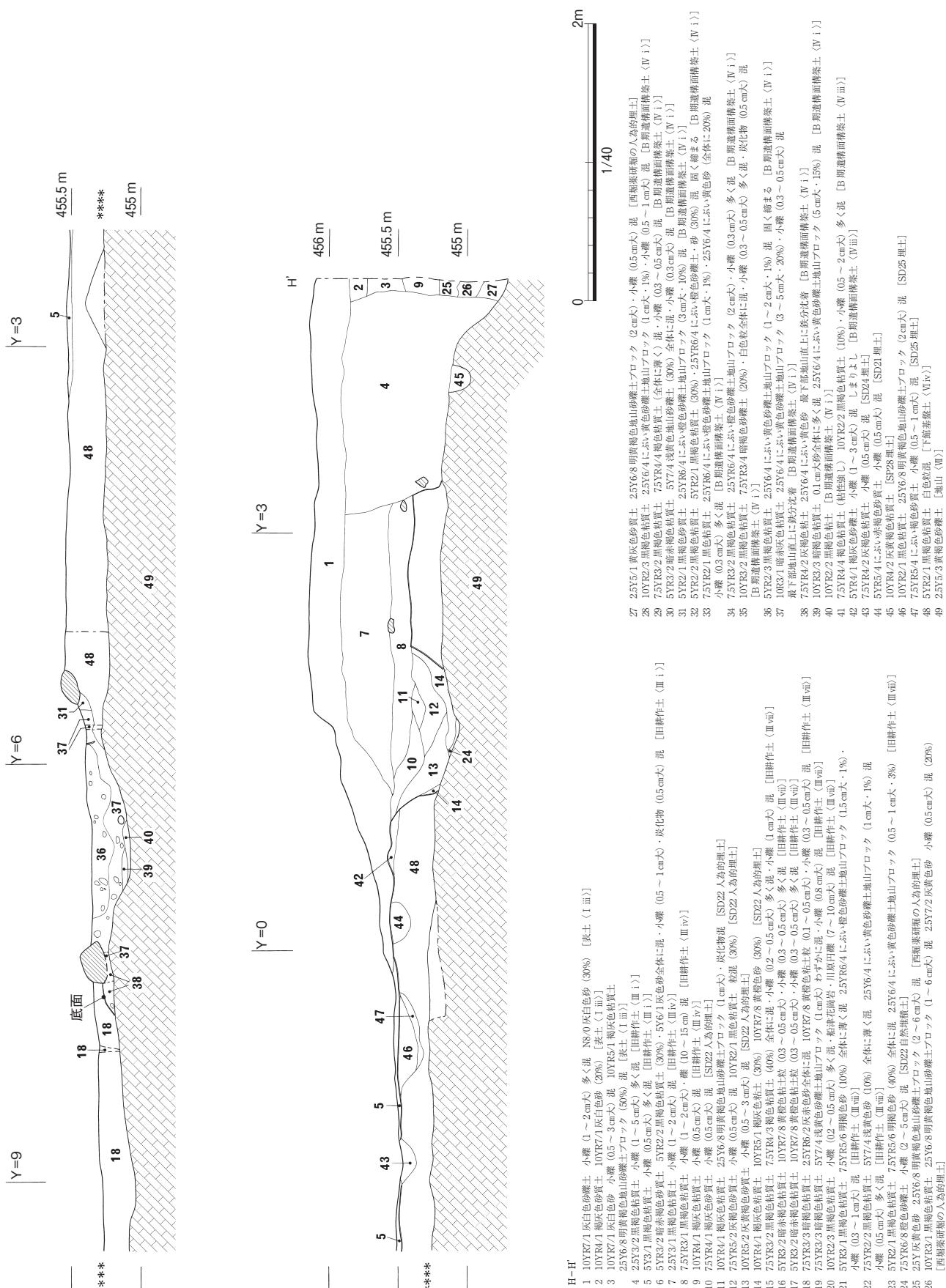
第13図 園池跡南北方向トレンチ土層断面図(1) 縮尺1/40



第14図 園池跡南北方向トレント土層断面図(2) 縮尺1/40



第15図 園池跡東西方向トレンチ土層断面図(1) 縮尺1/40



第16図 園池跡東西方向トレンチ土層断面図（2）縮尺1/40

1. 園池及び遺構内出土遺物

(1) 園池跡

景石転倒状況 調査掘削の過程で、第Ⅲ層旧耕作土には景石の大半が含まれることを確認した。このため景石を、①原位置を保つ景石、②原位置を保つが傾斜している景石、③原位置の近くにあるが転倒している景石、④近世以降の耕地化の際に転倒して原位置が分からぬ景石、に分類して②～④に該当する景石を掘り上げた(第8図)。ほとんどの景石が③④に該当し、掘り上げた景石は長径が1.5m～2m近くある大きなものが多く、園池は大きな石組みを持つ力強いものであったと想定された。

規模と形状 園池跡は最大部で東西27m、南北12mを測り、東西に長い不整橢円形を呈する。

東側汀線には、園池の中心となる大型の景石を配置している。傾いてはいたが園池北東隅に位置する景石No.135が長径2.2mを測り、園池では最も大きな景石である。その周囲にも1mを越える大きな景石No.136、66、72、76、138、606が散乱していた。このことより東側汀線は、園池北東隅に景石No.135を立石として配置し、その周囲に大きめの景石で石組みを成していたことが分かった。これら大きな石組みを持つ北東隅を園池の中心として、東側汀線は北へ向かって出入りを設けている。東側汀線周辺からは、原位置を留めないものの、長径1mを越える景石No.151、615、630、631が出土しており、大型の景石で護岸を施していたことが分かった。

北側汀線は礎石建物跡SB46に面し、その南側縁側を意識しながら直線的に東から西へ伸び、礎石建物跡SB46西端を境にさらに大きく西へ開ける。Y座標27付近では長径30cm程度の景石No.343、344、345、346の4石のホルンフェルスが原位置を留めている。また、北側汀線一帯からは転倒したと考えられるホルンフェルスが出土した。本来は礎石建物跡SB46の南側縁側に沿う部分にはホルンフェルス直線的に並べていたものと考えられる。なお、これらの護岸石の裏込め土(断面B-B'第18・20・21層)が礎石建物跡SB46の整地土を兼ねており、園池跡と礎石建物跡SB46は一体的に造成したことが分かった。

北西～西側汀線にかけては拳大の礫と褐色土層とで礫敷きを施していた。また西側汀線には、汀線に沿って最大約3m幅のテラス状の盛土(断面H-H'第36～38層)が認められた。これらのことから、北西～西側汀線にかけては、盛土の上に礫敷きを施し、洲浜状の様子を呈していたと考えられる。西側汀線と西側土塀との層序関係については、後世に第VI層下館基盤土〈VI iv層〉及び第VII層地山まで削平され、確認することができなかった。

南側汀線は東西方向へ緩やかな曲線を描いて伸びる。南側陸部と池底とは最大で1m程度の比高差があり、南側陸部上部には盛土(断面B-B'第15層、断面C-C'第6・7層、断面D-D'第1～9層、断面E-E'第16～21層、断面F-F'第6層、断面G-G'第11・12層)を行っている。その斜面では原位置を留めないものの長径1mを越える景石No.722、721、716、715、698、696が出土し、大型の景石で護岸を施したと考えられる。南側汀線と南側土塀跡及び南堀跡との層序関係については、後世に第VI層下館基盤土〈VI iv層〉まで削平され(断面A-A')、確認することができなかった。

園池中央より西寄りに中島の基底部と考えられる地山を掘り残した高まりを確認した。東西12m、南北6mであり、園池跡本体と同様に東西に長い不正橢円形を呈する。周辺には原位置を留めないものの、長径1mを越える景石No.43、699、709、127、128が出土し、大型の景石で中島にも護岸を施していたと考えられる。また中島の北西側には原位置を保つ景石No.666及びNo.664が位置し、それぞれの景石を中心とした2つの岩島があったと考えられる。

景石の石材と配置 景石の石材は主に、遺跡東側の山地に分布し、黄褐色を呈する船津花崗岩、遺跡西側に流れる高原川に分布し、青灰色を呈するホルンフェルスの2種類を使い分けている。

景石配置は、東側～南側汀線、中島岩島には大型の石材である船津花崗岩を使用し、礎石建物跡SB 46から最も近い北側汀線や大型景石の根元などにはホルンフェルスを使用している。これは礎石建物跡SB 46からの視点で、大型の船津花崗岩と鮮やかな色彩のホルンフェルスにより、景観に変化を持たせて景石配置を行っていたためと考えられる（第17～19図）。

埋土の堆積と池底の状況 園池跡中央部では池底まで第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲvii層〉が堆積しており、園池機能時の堆積は、断面E-E'第15層以外認めることができなかった。

池底については、第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲvii層〉を掘削後、東側では地山を、地形が東から西へ傾斜しているため、地山が低くなる園池北西部では盛土整地を行っていることを確認した。これらの池底は滯水能力はない。また、原位置を保つ景石の根石が見えている状況から、園池機能時の池底は近世耕地化による攪乱のため確認できなかったものと考えられる。後述するように導水路排水路も確認できないことから、園池では水を溜め続けることができなかったと考えられる。

導水路及び排水路 1978年度概報では、園池に伴う導水口を3ヶ所において検出しているが、それに続く導水路は不明であるとしている。1995年度報告では、その内の滝口と推定される東汀線部分について再調査を行ったが導水路を確認していない。今回の調査でも、導水路は確認できなかった。

排水路については、1978年度概報において南堀跡旧堀に接続する園池跡南西隅の石組み溝としていた。しかし、石組み溝の底面レベルが園池池底より高いレベルに位置し、南側陸部盛土より上層に位置するため、園池跡に伴う排水路とは考えることはできなかった。この他に排水路は確認しなかった。

園池の時期 同節（3）で述べるように、南側陸部の園池造成土から、館が完成した時に地鎮のために埋納したと考えられる墨書土師器皿が出土した。この土師器皿が16世紀初頭の年代を持つと考えられ、第Ⅳ層B期遺構面構築土〈Ⅳi層〉からの出土遺物で最も新しい年代を持つことから、発掘調査により確認できた園池跡は遅くとも16世紀初めには完成したと推定できる。

園池跡を造り始めた時期を断定する知見を得ることはできなかった。館内の建物跡はほぼ同じ位置で建て替えられていること、園池跡鑑賞施設である礎石建物跡SB 46も下層において礎石建物跡SB 63の一部を確認したことから、館が成立した当初から庭園的な空間があったものと推定できる。

遺物（第20・21図の1～23） 遺物は第Ⅳ層B期遺構面構築土〈Ⅳiii層〉から土師器の皿45点（1～7）、瓦器の風炉か火鉢1点、青磁の碗1点（8）が出土し、同遺構面直上において、土師器の皿25点（9～11）が出土した。

1～7は土師器皿である。1はT-2類、2はT-5類、3はT-6類、4～6はT-8類、7はR-2類に属する。1・3・5は胎土に砂粒を、4・6は胎土に気泡を含み、密である。1・4は口縁端部内外面にタールが、2は口縁端部内面にタールが、3は口縁端部内外面に煤・タールが厚く付着しており、灯明皿として使用したと考えられる。

8は青磁の碗である。体部外面に鎧蓮弁文を施す。明緑灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を含み、やや白濁している。胎土は気泡を含み、密である。色調は明緑灰色を呈する。龍泉窯系碗B1類に属し、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

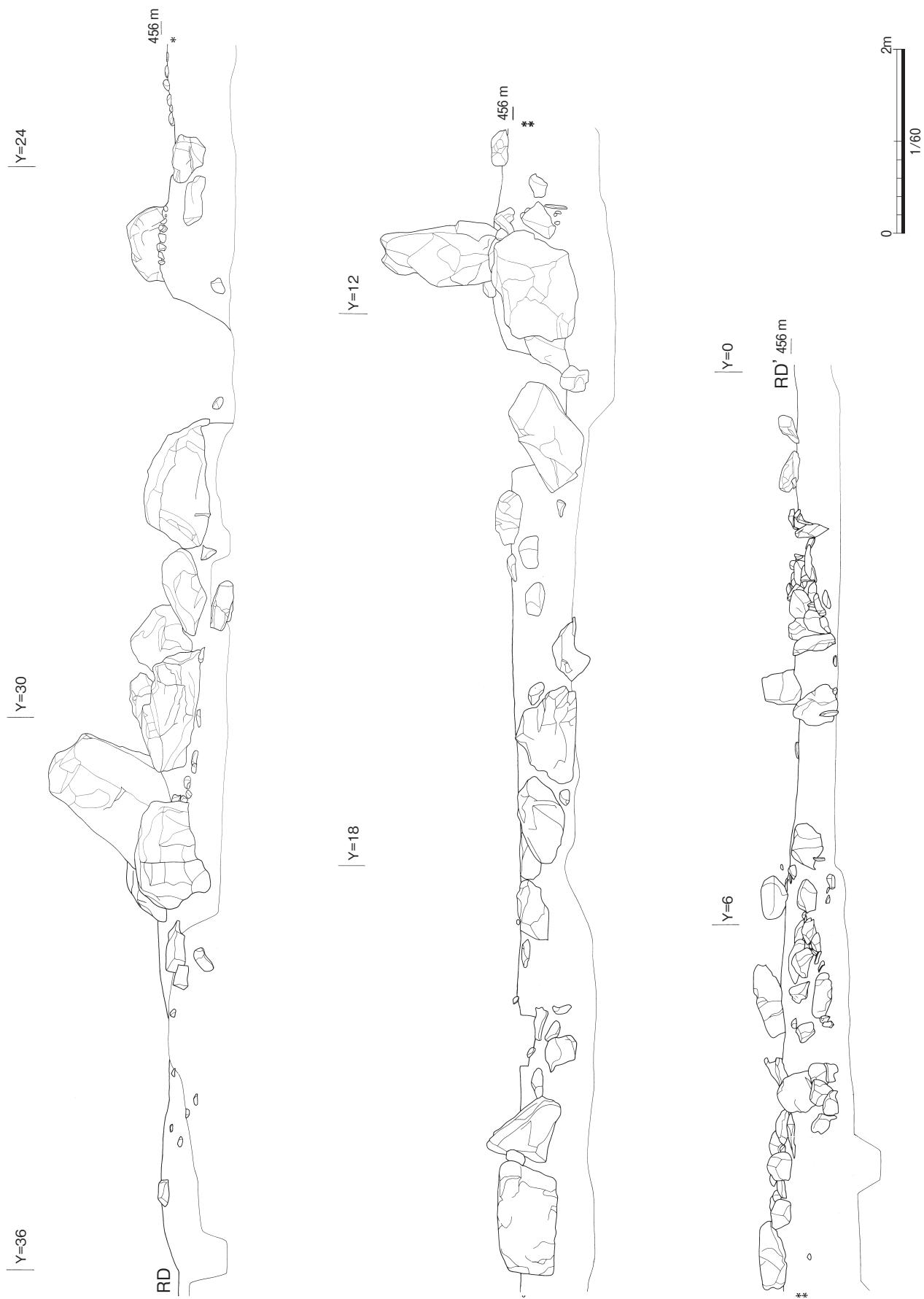
9～11は土師器の皿である。9はT-6類かT-7類に、10・11はT-8類に属する。10・11は胎

土に気泡を含み、密である。9は口縁端部内外面にタールが付着し、器壁が層をなして剥離しており、灯明皿として使用したと考えられる。

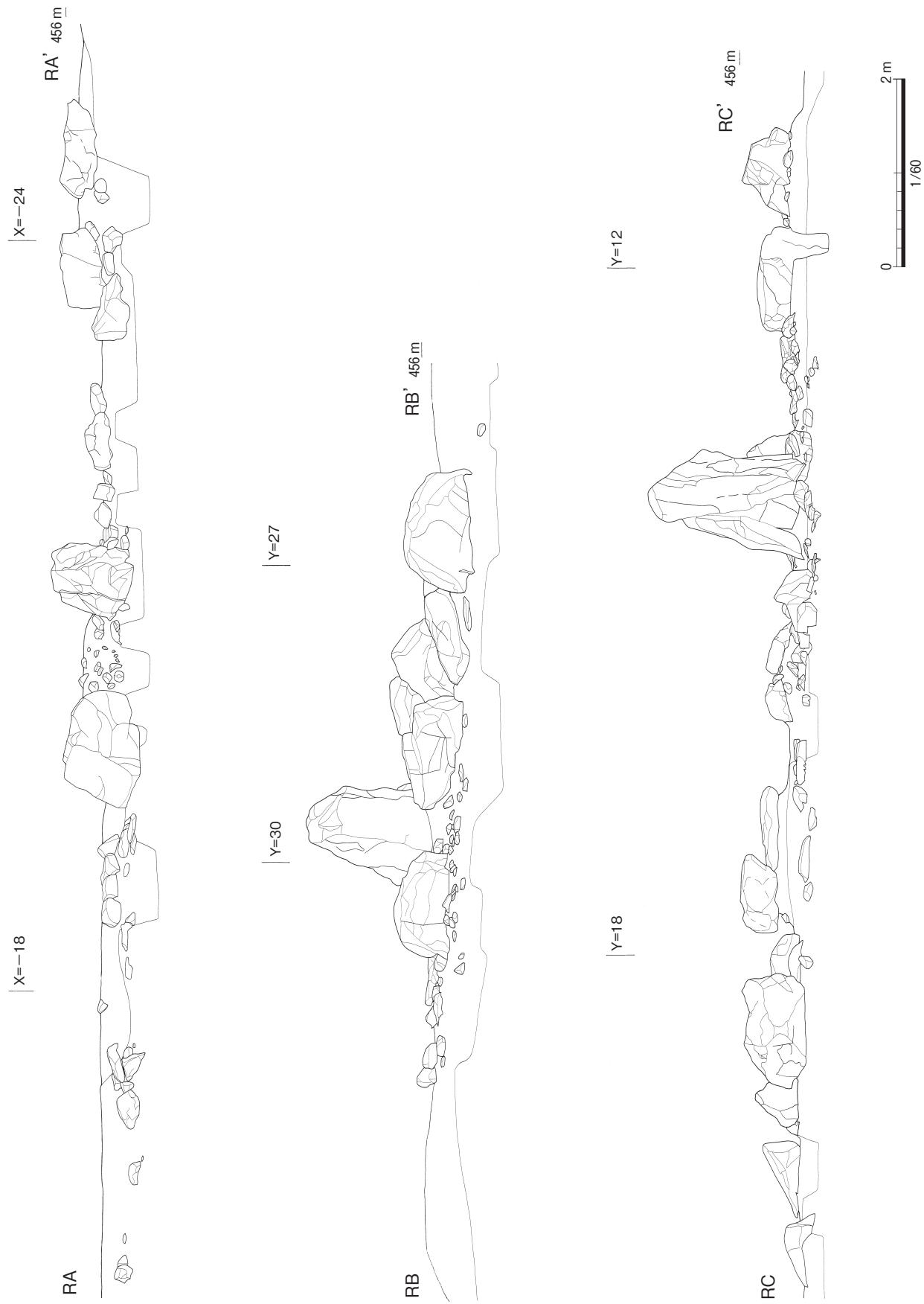
また、第IV層B期遺構面構築土〈IV i層〉から土師器の皿33点(12～18)、瓦器の火鉢1点(19)、瀬戸・美濃焼の碗1点(20)・壺1点・不明2点、山茶碗の碗1点(21)、珠洲焼のすり鉢1点(22)、



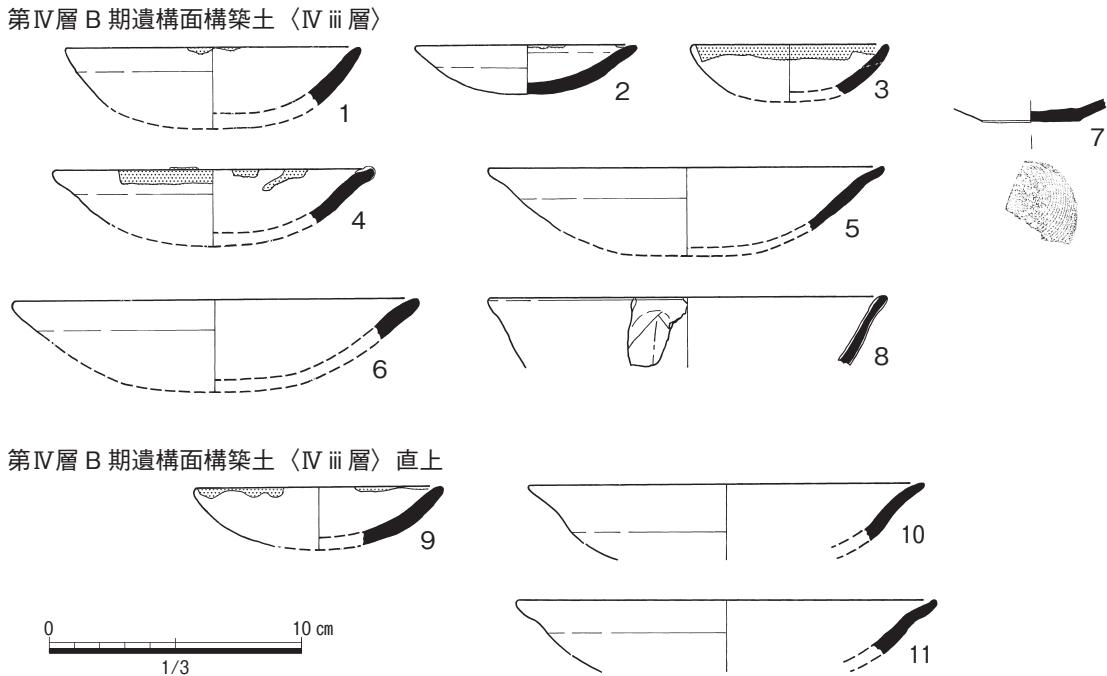
第17図 園池跡立面図位置図 縮尺1/200



第18図 転倒石除去後の景石立面図（1）縮尺1/60



第19図 転倒石除去後の景石立面図(2) 縮尺1/60



第20図 2000～2001年度園池地区出土遺物実測図(1) 縮尺1/3
(矢印はナデの方向を、■は煤・タールの付着範囲を示す。)

鉄製品の釘1点(23)及び墨書き土師器皿2点(24・25)が出土した。

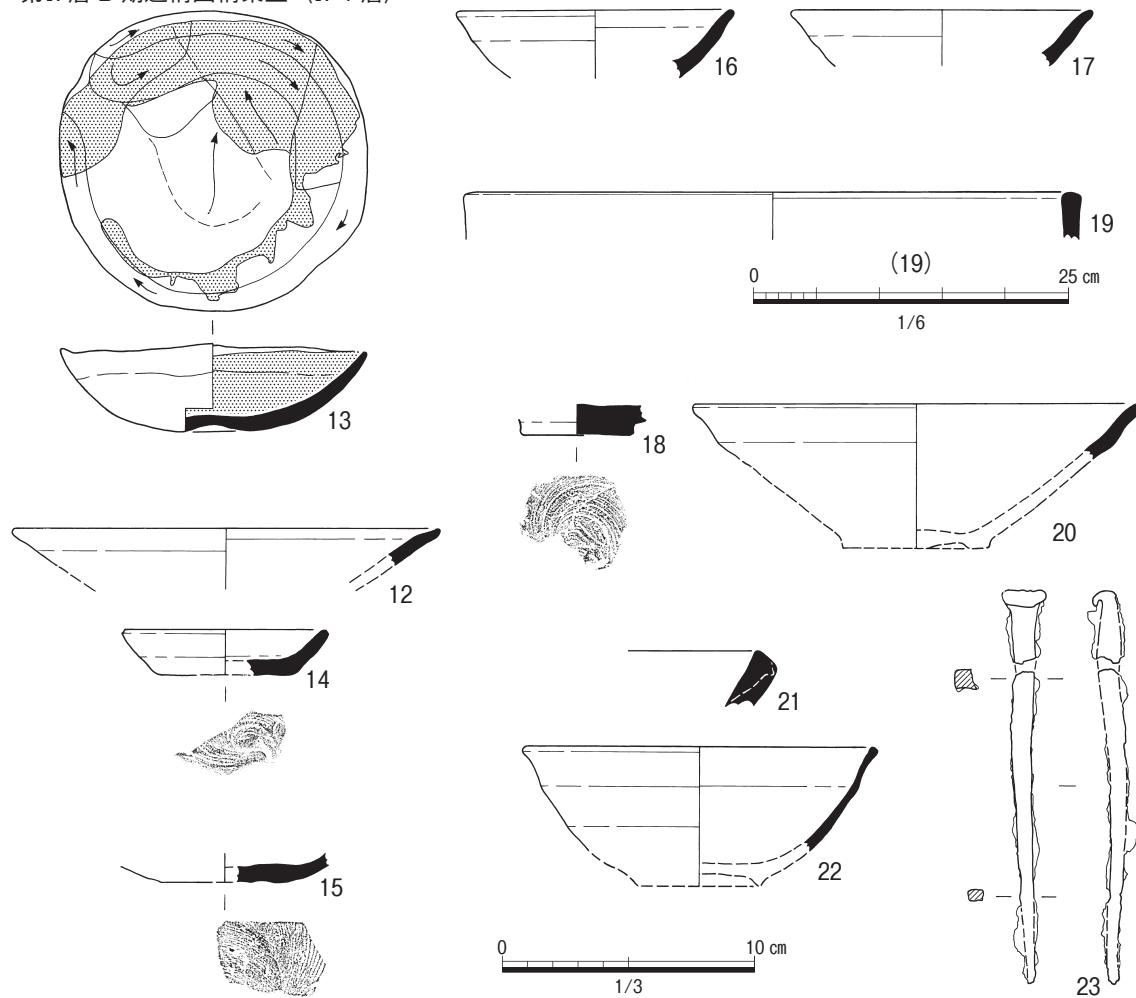
12～18は土師器の皿である。12はT-8類に、13はT類に、14はR-1類に、15～18はR類に属する。13及び15～18はこれまでの土師器皿の分類に当てはまらない。13は内面を不定方向にナデたあと、口縁部内外面をつまんで横ナデを施す。外面底部は無調整であり、底部中央が内面側にへこむ。内面に煤・タールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。15は内面底部と体部の境に回転横ナデを施しており、内面体部には指頭圧痕が残る。外面の調整は、体部立ち上がりから口縁部の方向に向かって箒削り調整を施しているが不明瞭である。底部には回転糸切り痕が残る。16はロクロ回転ナデ調整を体部内外面に施したあと、口縁部に施している。17はロクロ回転ナデ調整を体部外面、口縁部、体部内面の順で施している。18は内面には回転ロクロナデ調整を施し、外面底部には回転糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み、密である。12世紀代のものと考えられる。約3m離れ、第IV層B期遺構面構築土(IV i層)と第III層旧耕作土(III vii層)から出土した2破片が接合した。胎土に、14は砂粒と石英粒を、15は砂粒を、16は砂粒と気泡を含む。

19は瓦器の風炉か火鉢である。口頸部内面の炭素は失われている。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。色調は断面が浅黄橙色を、表面が褐灰色を呈する。1994年度調査報告分類の第V類に属する。

20は瀬戸・美濃の平碗である。口唇部は短くくびれ、口縁部は外反して直線的に開く。内外面に浅黄色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。

21は株洲のすり鉢である。口縁部は外傾して面を取り、内端を内方向にやや引き出す。胎土は気泡を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。株洲I～II期に属し、12世紀後半から13世紀前半ものである。22は山茶碗の碗である。器壁が薄く、体部はやや内湾気味に開く。口唇部はくびれ、口縁端部はやや丸い。内外面にロクロ回転ナデ調整痕が残るが、内面はよく摩耗し

第IV層B期遺構面構築土〈IV i層〉



第21図 2000～2001年度園池地区出土遺物実測図(2) 縮尺1/3 19は縮尺1/6
(矢印はナデの方向を、■は煤・タールの付着範囲を示す。)

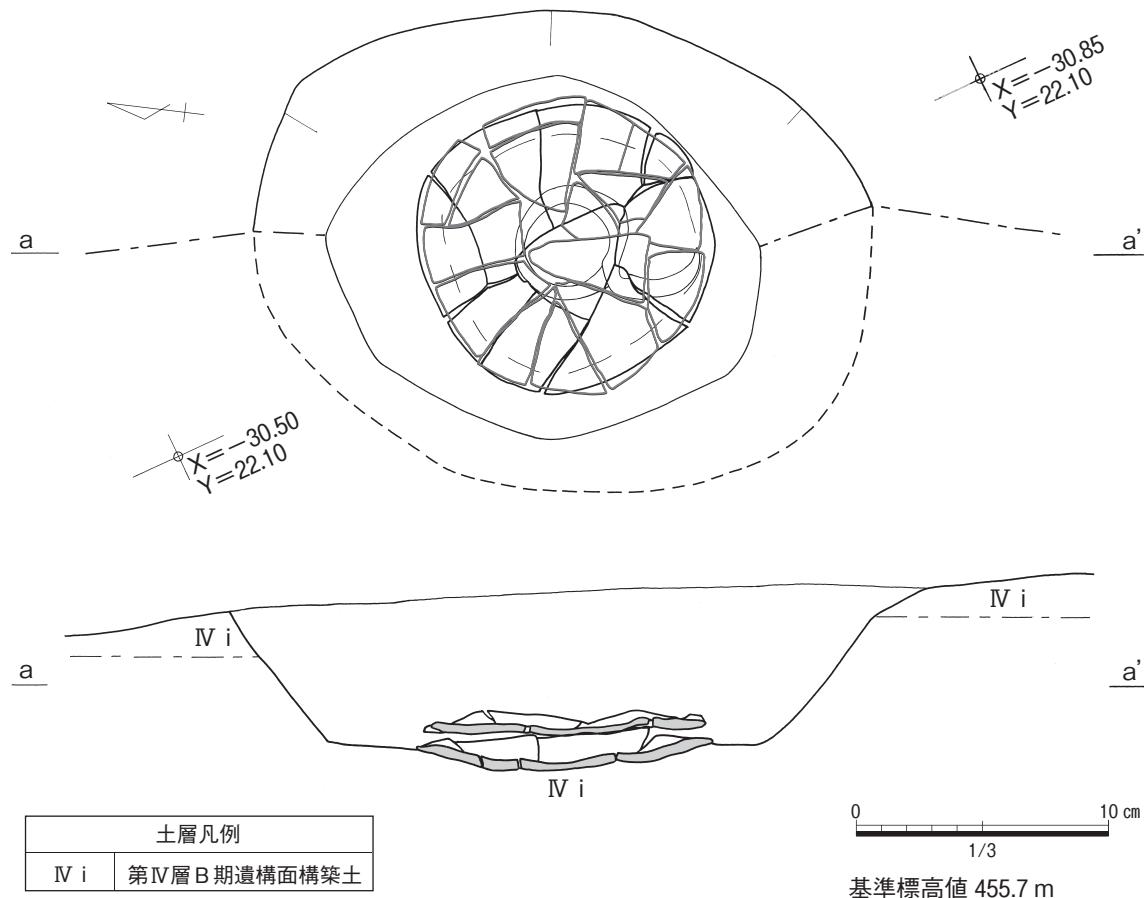
ている。胎土は密であり、色調は白色を呈する。北部系大畳大洞4型式に属し、14世紀前半のものである。

23は鉄釘である。全体に鋸が付着しており、先端部を欠損している。断面は四角形を呈する。

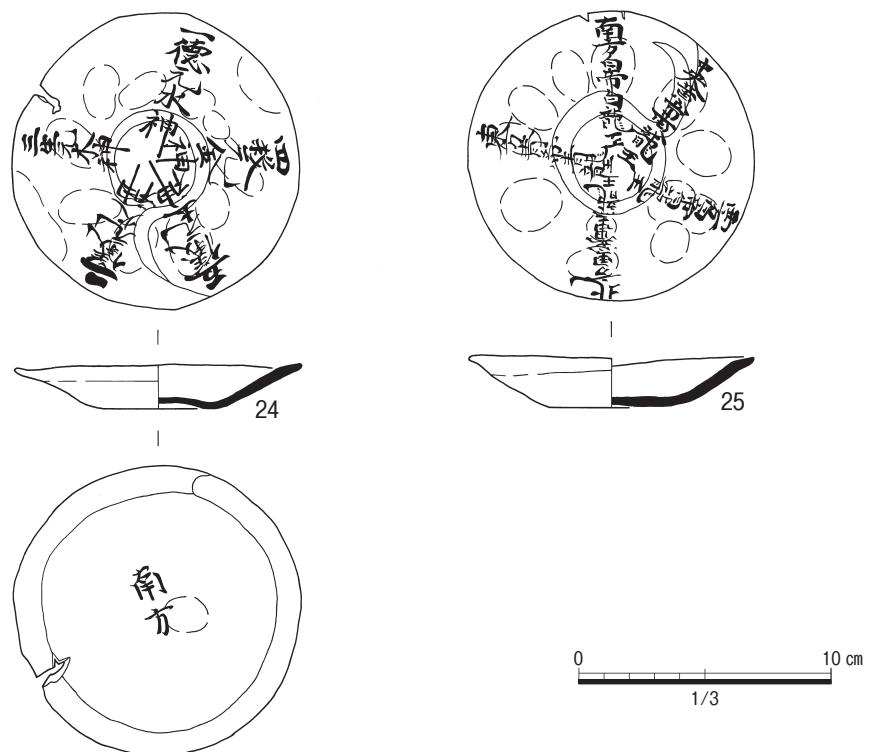
(2) 地鎮遺構

地鎮遺構 SP 94 園池跡南側陸部において、第IV層B期遺構面造成土〈IV i層〉内で地鎮遺構埋納穴SP 94を検出した。X座標-30.7、Y座標22.1に位置する。平面形は長径24cm、短径19cmの楕円形であり、深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面中央部から土師器の皿が2枚が内合わせに重なった状態で出土した(第22図)。上側が24、下側が25である(第23図)。

24・25は、ともに内面底部に一方向のナデを施し、口縁上部内外面をつまんで横ナデを施したあと、内面体部立ち上がりから口縁端部にかけて横ナデを施し、内面底部と体部の境が溝状にへこむ。外面体部から底部にかけては無調整であり、不明瞭ではあるが器形整形時のものと考えられる指頭圧痕が残る。内面体部にもナデ調整によって消されているものの、器形整形時の指頭圧痕と考えられる窪みが観察できる。京都の土師器皿の影響を強く受けているが、土質からは京都以外のところで作られと考えられる。江馬氏下館ではこの型式の土師器皿が出土していないことから搬入されたものと考えら



第22図 地鎮遺構SP94 土師器皿出土状況実測図 縮尺1/3



第23図 地鎮遺構SP94 出土遺物実測図 縮尺1/3

れる。京都伊野分類のIa-2類に類似し、内面底部と体部の境に溝状のへこみが観察できることから、16世紀初めのころのものと考えられる。

24は内外面、25は内面に墨書きが残る。24は内面体部から底部にかけて、口縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されている。「一徳元水神」「二儀元火神」「三生元木神」「四殺元金神」「五儀元土神」と判読できる。5つの数字と5つの神とを組み合わせた文句を記したと考えられる。外面は底部中央に「南方」と記されている。25も内面体部から底部にかけて口縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されている。「中央黄帝黄龍王」「西方白帝白龍王」「北方黒帝黒龍王」「東方青帝青龍王」「南方白帝白龍王」と判読できる。5つの方向と5つの色とを組み合わせた文句を記したと考えられる。

なお、25の文句のうち「西」と「南」の方向に「白」の色が組み合わされている。1999年度調査では脇門の北東4mに位置する99-SP148から同様の土師器皿を確認しており、その土師器皿には「西」に「白」、「南」に「赤」の色が組み合わされている。このため、25の文句は組み合わせを間違えて記した可能性が想定される。

1999年度調査で出土したものには、上側の土師器皿外面底部には「西方」と記されていた。それぞれの出土位置は下館の中では西寄り、南寄りに位置している。出土位置と下側の1枚の文句から、内面には同じ文句を記し、外面には埋める場所を記し、下館跡の東・西・南・北・中央の位置に埋納したと考えられる。また土師器皿が16世紀初めの年代から、このような地鎮行為を、園池跡や建物跡の建て替えが完成した時に行ったと考えられる。

(3) 園池堆積土の花粉分析

下館跡園池において、その自然堆積土、自然堆積土より上層の旧耕作土および下層の園池造成土から試料を採取し、園池構築前から園池機能時、さらに近世耕地化までの周辺の植物群・植生を明らかにするため、花粉化石群集の検討を行った。分析は新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）が行った。

試料の採取 花粉化石群集の検討は、試料1～5の合計試料について行った（第13・14図）。

試料1は断面G-G'第4層、園池を近世期に埋め戻した人為的堆積土層より採取した。土性は第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲvii〉であり、土色は、5YR3/1 黒褐色粘質土 7.5YR3/3 暗褐色粘質土(40%)全体に混・小礫(0.5～1cm大)多く混である。

試料2は断面G-G'第14層、B期の園池中島造成土より採取した。土性は第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV i〉であり、土色は10YR2/2 黒褐色粘質土 2.5YR1.7/1 赤黒色粘質土(20%)・2.5Y6/4にぶい黄色砂礫土地山ブロック(1cm大)・10YR5/3にぶい黄褐色細砂混である。

試料3は断面G-G'第17層、B期の園池池底造成土より採取した。土性は第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV i〉であり、土色は2.5YR1.7/1 赤黒色粘質土 7.5YR3/3 暗褐色粘質土ブロック(3cm大・40%)全体に混・2.5Y6/4にぶい黄色砂礫土地山ブロック(1～7cm大・5%)・白色粒混である。

試料4は断面E-E'第15層、園池の自然堆積土より採取した。土性は園池自然堆積土であり、土色は7.5YR3/1 黒褐色粘質土(粘性強し) 2.5Y6/4にぶい黄色砂礫土地山ブロック(2cm大・1%)混・5Y4/1 灰色粘質土(粘性強し)一部混である。

試料5は断面E-E'第20層、B期の園池南汀線裾部造成土より採取した。土性は第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV i〉であり、土色は10YR2/3 黒褐色粘質土小礫(0.3～0.5cm)多く混・10YR7/8 黄橙色粘土粒(0.3cm大)少し混である。

分析方法 花粉化石の抽出は、試料約3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1～2枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

分析結果 全試料で同定された分類群数は、樹木花粉12、草本花粉12、形態分類で示したシダ植物胞子2である。検討した試料は、大きく分けて、園池構築前、園池機能時、近世の3時期に区分される。以下に、この3時期に分けて花粉化石群集の記載を示す（第24図、第15表）。

園池構築前（試料2、3、5）の土層では、樹木花粉の占める割合は、約61～74%である。いずれの試料も概ね花粉組成は、類似しており、クリ属の圧倒的な高率（約66～87%）で特徴付けられる。次いで、トチノキ属が約5～23%で多産し、コナラ亜属も約3～7%で比較的目立つ。他に、マツ属、サワグルミ属-クルミ属、ハンノキ属、カエデ属などが低率で出現する。草本花粉では、タンポポ亜科が約8～17%で最も多産し、イネ科（約3～5%）、ヨモギ属（約3～7%）も比較的目立つ。他に、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属、他のキク亜科などが出現する。

園池機能時（試料4）の土層では、樹木花粉の占める割合は約58%である。クリ属が約84%と圧倒的な高率を占め、次いで、トチノキ属が約11%で多産する。他に、マツ属（不明）、スギ属、クマシデ属-アサダ属、カエデ属が低率で出現する。草本花粉では、タンポポ亜科が約20%で最も多産し、ヨモギ属（約6%）、イネ科（約5%）、アカザ科-ヒユ科（約3%）の順に出現する。他に、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ科、他のキク亜科が低率で出現する。

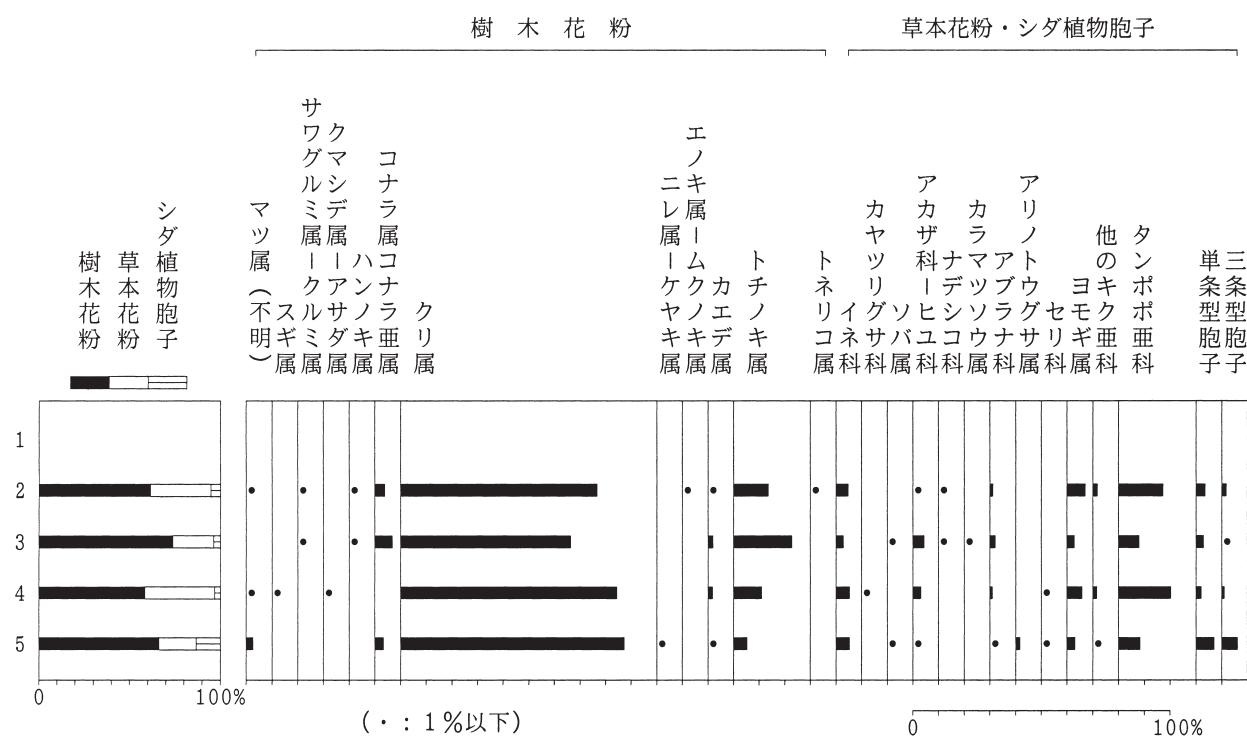
近世（試料1）の土層からは十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図を示すことができなかった。樹木花粉では、スギ属、ハンノキ属、クリ属、カエデ属、トチノキ属が産出した。草本花粉では、タンポポ亜科が比較的多産し、イネ科、アブラナ科、ヨモギ属、他のキク亜科が産出した。

考察 試料2、3、5の園池構築前の試料からは、クリ属およびトチノキ属が付近に多く生育していたであろうことが推察される。次に試料1からは園池機能時にもクリ属とトチノキ属が付近に多く生育していたと考えられる。また、試料1の花粉の保存状態から、園池機能時には常時滞水していなかったと考えられる。試料4の近世耕地化の際の造成土からはクリ属、トチノキ属、タンポポ亜科、ヨモギ属などの花粉を産出したものの、それらの依存状態が悪かった。滞水は無かったものと考えられる。

なお、園池構築前から近世を通じて、クリ・トチノキの割合が非常に高い。この傾向は1995年度調査においての園池堆積土層の花粉分析結果と同様である。このことからは付近に造林あるいは人為的に管理されたクリ林・トチノキ林があった可能性が高いと考えられる。

第15表 花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5
樹木						
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	1	-	1	4
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1	-	-	1	-
サワグルミ属ークルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	1	1	-	-
クマシデ属ーサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	1	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	1	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	4	7	-	5
クリ属	<i>Castanea</i>	3	79	67	92	131
ニレ属ーケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	1
エノキ属ームクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	1	2	2	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	4	14	23	12	8
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	1	-	-	-
草本						
イネ科	<i>Gramineae</i>	2	8	4	10	12
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	-	-	-	1	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	1	-	1
アカザ科ーヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	-	1	6	6	1
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	1	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	1	-	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	1	2	3	2	1
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	-	-	4
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	-	-	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	12	4	11	7
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	3	-	3	1
タンボボ亜科	<i>Liguliflorae</i>	10	29	11	38	19
シダ植物						
単条型胞子	<i>Monolete spore</i>	3	6	4	4	16
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	-	3	1	2	14
樹木花粉						
樹木花粉	Arboreal pollen	11	103	101	109	150
草本花粉	Nonarboreal pollen	18	56	31	72	47
シダ植物胞子	Spores	3	9	5	6	30
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	32	168	137	187	227
不明花粉						
不明花粉	Unknown pollen	9	23	20	20	24



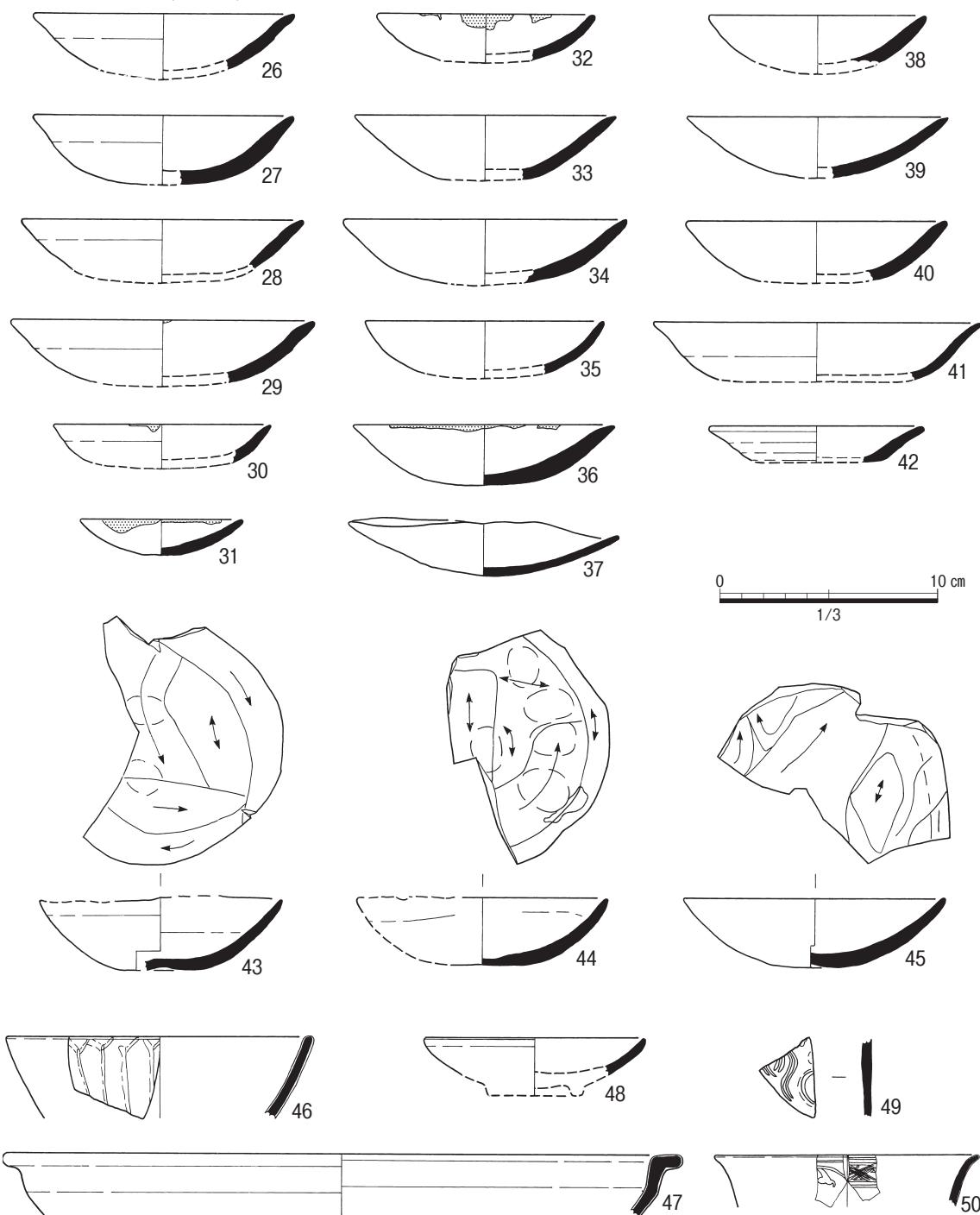
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第24図 花粉化石分布図

(4) 園池跡遺構外出土遺物

第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ vii層〉(第25・26図の26~73) 26~45は土師器の皿である。26~29はT-2類に、30はT-5類に、31~34はT-6類に、35~37はT-7類に、38~40はT-6類かT-7類に、41はT-8類に、42はR-3類に、43~45はT類に属する。43・44は内面を不定方向にナデたあと、口縁部内外面をつまんで横ナデを施す。外面体部から底部にかけては無調整であり、不明瞭ではあるものの、器形整形時の指頭圧痕と考えられる窪みが観察できる。底部中央が内面側にへこ

第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ vii層〉



第25図 2000~2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図(1) 縮尺1/3

(矢印はナデの方向を、■は煤・タールの付着範囲を示す。)

む。43は内面に不規則なナデ調整を施し、口縁部の調整を省略している。外面体部から底部にかけては無調整であり、不明瞭ではあるが、器形整形時のものと考えられる指頭圧痕が残る。内面体部にもナデ調整によって消されているものの、器形整形時の指頭圧痕と考えられる窪みが観察できる。底部中央が内面側にへこむ。胎土は、29・33・36～39が砂粒を、42が気泡を、43・44が砂粒と石英粒を含み、密である。29・31・32・36は口縁端部内外面にタールが、30は口縁端部外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。44は内面に漆がわずかに付着している。

46・47は青磁である。46は碗であり、体部外面に片切り蓮弁文を描く。ガラス質の明緑灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を含み、大きな貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B3類に属し、15世紀中頃のものである。47は盤である。口縁部が大きく外反する。ガラス質の暗オリーブ色の釉を厚く施す。釉は細かい気泡を含み、細かい貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰色を呈する。

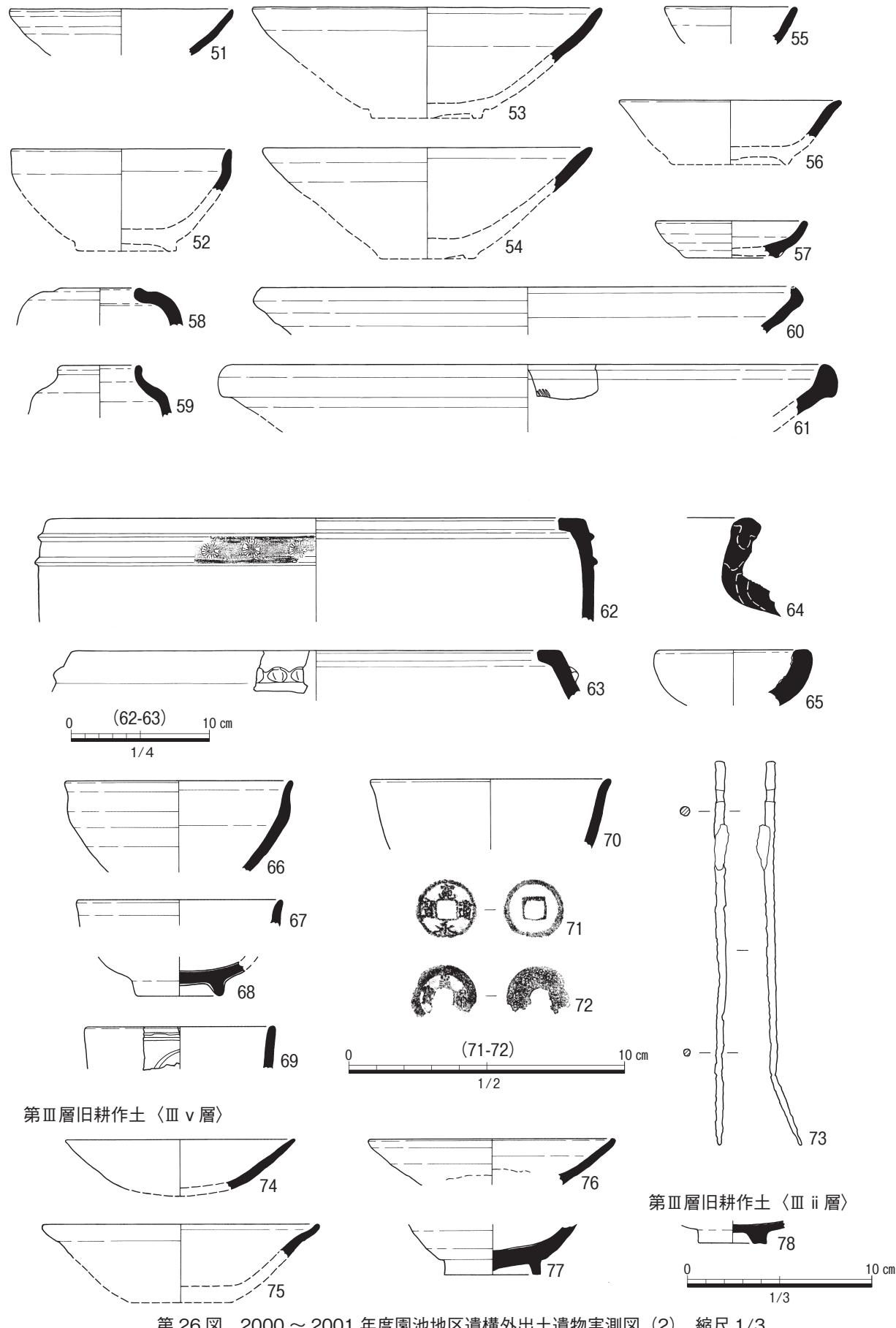
48は白磁の皿である。ガラス質の透明釉を施す。釉は細かい気泡を含み、貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。白磁16類に属し、15世紀前半のものである。

49は青白磁の梅瓶の体部破片である。体部外面に文様を施すが、小破片のためその絵柄は不明である。明緑灰色の釉を施すが、やや白濁している。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。二次被熱を受けている。

50は青花の碗であり、中国製染付である。口縁部が外反する。外面には口縁部に界線を巡らせ、体部に唐草文を施す。内面は口縁部に四方櫛文を巡らす。透明釉を施し、釉は細かい気泡を含み、細かい貫入が入る。胎土は黒粒を含む。色調は灰白色を呈する。染付碗B群に属し、14世紀末から15世紀中頃のものである。

51は山茶碗の碗である。器壁が薄く、体部はやや丸みを帯びて開き、口縁端部は内側に尖る。内外面にロクロ回転ナデ調整痕が残り、口縁部内外面には自然釉が残る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。北部系第11型式に属し、15世紀中頃のものである。

52～61は瀬戸美濃である。50は天目茶碗である。口唇部がくびれ、口縁端部は外反して細く伸びる。茶褐色と黒色の鉄釉を施す。胎土は細かい気泡を少し含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。53・54は平碗である。53は体部に丸みを持ち、口唇部が僅かにくびれる。内外面にオリーブ黄色の灰釉を施すが、表面には二次被熱による細かい気泡ができている。胎土は細かい気泡を少し含み、密である。色調は灰色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し、15世紀中頃のものである。54は口縁部が直線的に開く。内外面に淡黄色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期に属し、15世紀中頃～後半のものである。55は丸皿である。体部下方がやや丸みを持つ。内外面に灰釉を施すものの、二次被熱により失われている。胎土は細かい気泡を少し含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中期に属し、14世紀前半のものである。56は端反皿である。体部が直線的に開き、口縁部が外反する。内外面に灰オリーブ色透明の灰釉を施す。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期に属し、15世紀中頃～後半のものである。57は小皿である。体部がやや丸みを持って開き、口縁部は丸く収まる。内外面に灰オリーブ色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、やや粗い。色調は淡黄色を呈する。大窯第3段階に属し、16世紀後半のものである。58は耳付合子である。肩部が丸みを持ち、口縁端部は短く立ち上がる。内外面に鉄釉を施すが、二次被熱により外面



第26図 2000～2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図(2) 縮尺1/3
62・63は縮尺1/4 72・73は縮尺1/2

の釉は光沢が失われ、内面の釉はまだらに剥離している。暗赤褐色を呈する。胎土は気泡を含み、密である。色調は浅黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期に属し、15世紀中頃～後半のものである。59は耳付水滴である。ナデ肩で、口頸部は短く直立し、口縁端部は丸く収まる。内外面に褐灰色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。内面にはおはぐろと推定できる付着物が残る。古瀬戸後IV期に属し、15世紀中頃～後半のものである。58・59はすり鉢である。60は口縁部がやや内傾し、口縁端部は内側に折り返される。内外面に灰褐色の錆釉を施す。胎土は気泡を含み、やや粗い。色調は浅黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。61は口縁全体が肥厚し、底部に対して垂直方向に縁帯を形成する。内外面に褐灰色の錆釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は淡黄色を呈する。大窯第3段階に属し、16世紀後半のものである。

62・63は瓦器の火鉢である。62は胎土に白色砂粒と気泡を含み、密である。色調は断面が橙色を、表面がにぶい黄褐色を呈する。第II類に属する。63は胎土に石英と気泡を含み、密である。色調は断面が浅黄橙色を、表面が黒褐色を呈する。第III類に属する。

64は珠洲の壺である。口頸部はやや外傾し、口縁端部は丸みを持たせて面をとっている。体部外面には1cm幅に7条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は砂粒と気泡を含み、やや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は黄灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。

65は土師質の坩堝である。体部は厚く、丸みを持って立ち上がり、口縁端部は丸い。胎土は砂粒と気泡を含み、粗い。内面全面に銅と推定できる溶解物が付着し、表面には多数の気泡がみられる。

66～70は近世陶磁器である。66～68は瀬戸美濃焼である。66は天目茶碗である。口唇部がくびれ、口縁端部は外反する。暗褐色の鉄釉を施す。胎土は気泡を少し含み、密である。色調は浅黄橙色を呈する。連房第1小期に属し、17世紀初頭のものである。67・68は碗である。67は口縁端部がゆるく外反する。黒褐色の鉄釉を施す。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。連房第3～4小期に属し、17世紀後半のものである。68は底部破片である。高台底辺をのぞいて、明緑色透明の灰釉を施す。釉は気泡を多く含み、細かい貫入が入る。胎土は気泡を含み、粗い。色調は灰白色を呈する。連房第8小期に属し、18世紀後半のものである。69は肥前の碗である。口縁部がほぼ直立し、端部が丸く収まる。外面の口縁部に界線を巡らせ、体部に文様を施しているようであるが、小破片のため全体の意匠は不明である。灰白色の釉を施す。釉は気泡を多く含み、細かい貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。分類は不明である。70は碗である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く収まる。灰オリーブ色の灰釉を施す。釉は気泡を含み、細かい貫入が入る。胎土は細かい気泡を含み、粗い。色調は灰白色を呈する。産地は不明である。

71・72は古錢である。69は皇宋通宝であり、初鋳年は1038年である。70は寛永通宝であり、初鋳年は1636年である。

73は銅製品の火箸である。断面は円形を呈する。

第III層旧耕作土〈III v層〉(第26図の74～77) 74・75は土師器の皿である。74はT-6類かT-7類に、75はR-5類に属する。ともに胎土に砂粒を含む。

76・77は近世陶磁器である。76は越中瀬戸の皿である。体部はほぼ直線的に開き、口縁部がゆるく内傾する。内外面に回転ロクロナデ調整痕がよく残る。体部内外面に極暗褐色の鉄釉を施すが底部内外面は露胎である。胎土は砂粒と気泡を含む。色調は体部が褐灰色を、底部の露体の部分が橙色を呈する。登窯期に属し、17世紀前半のものである。77は丸碗である。高台は断面四角形を呈し、高

台周辺にはロクロ回転ナデ調整痕がよく残る。高台周辺をのぞいて明褐色と黒褐色の鉄釉を施す。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。

第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ ii 層〉(第26図の78) 78は近世陶磁器であり、瀬戸の湯飲み茶碗である。高台が断面四角形を呈する。全面に浅黄色の灰釉を施すが、高台底辺は釉を掻き取っている。釉は気泡を含み、貫入が入る。胎土は気泡を含む。色調は灰白色を呈する。連房第8小期に属し、18世紀後半のものである。

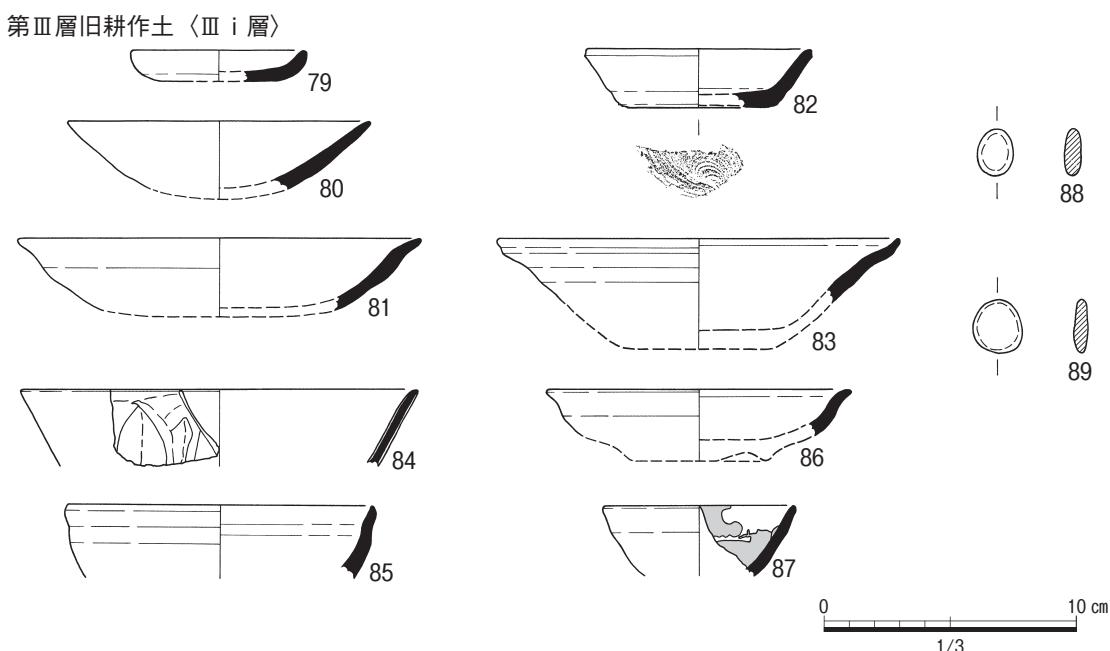
第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ i 層〉(第27図の79～89) 79～83は土師器の皿である。79はT-4類に、80はT-6類かT-7類に、81はT-3類に、82はR-1類に、83はR-5類に属する。80は胎土に砂粒を含む。83は焼成がやや悪い。

84は青磁の碗である。体部外面に鎧蓮弁文を施す。ガラス質のオリーブ灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を含む。胎土は気泡を含み、密である。色調は明青灰色を呈する。龍泉窯系碗B 1類に属し、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

85は中国陶磁の天目茶碗である。口唇部が強く屈曲し、底部に対して垂直方向に立ち上がり、口縁端部は内側に尖る。内外面に黄褐色と黒色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含む。色調は灰白色を呈する。

86・87は瀬戸美濃である。86は端反皿である。口唇部がくびれ、口縁端部が外反する。内外面に浅黄色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、やや粗い。色調は浅黄橙色を呈する。口縁端部内面に煤が付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。87は入子である。内外面無釉である。口縁部内外面には横ナデを施すが、外面体部は無調整であり、不明瞭ではあるが、器形整形時のものと考えられる指頭圧痕が残る。内面には紅と推察される付着物が残るが、二次被熱を受けて表面には気泡ができる。色調は灰白色を呈する。古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅱ期に属し、13世紀後半～14世紀前半のものである。

88・89は碁石である。88は白石であり、89は黒石である。



第27図 2000～2001年度園池地区遺構外出土遺物実測図(3)(■は紅の付着範囲を示す。)

3. 碇石建物跡 SB 46、板塀跡 SA 47

(1) 磁石建物跡 SB 46

1976～78年度調査において、X座標-4.9～-16.1、Y座標17.0～35.7の範囲で礎石建物跡SB 46を検出している。桁行7間、15.78m(8.8間)、梁行4間、8.87m(4.9間)の東西棟の建物である。桁行柱間は、東より2.96m(9.8尺)、1.97m(6.6尺)、1.97m(6.6尺)、1.97m(6.6尺)、1.97m(6.6尺)、2.96m(9.8尺)であり、梁行柱間は北より1.97m(6.6尺)、1.97m(6.6尺)、2.96m(9.8尺)である。南西隅に桁行2.46m(1.4間)×梁行2.96m(1.6間)の張り出し部を持つ。主軸はY-0.0°-Sを測る。

今回の調査では、第Ⅳ層B期遺構面構築土層〈IV ii 層〉及び〈IV iii 層〉において、礎石根石跡を28ヶ所、抜き取り穴跡1ヶ所を確認した。礎石はB期遺構面構築土層とともに削平を受けたものと考えられる。以前の調査で確認している礎石根石跡において、3ヶ所は確認することができなかった。

桁行の北から1～2列目及び梁行の西から1～5列目の範囲では、第IV層B期遺構面構築土〈IV ii層〉〈IV iii層〉が削平を受けており、礎石根石跡を確認することができなかった。この範囲では検出面が第V層A期遺構面構築土〈V i層〉であった。礎石根石跡2ヶ所、礎石跡1ヶ所、礎板石をもつ柱穴跡2基を確認しており、全体形状は把握できないものの、礎石建物跡SB 46に先行する礎石建物跡SB 63があったものと推察される（第28図、第16表）。

(2) 板塀跡 SA 47

1976～78年度調査において、X座標-7.6～-8.1、Y座標8.6～19.4の範囲で板塀跡SA 47として柱穴跡5基を検出していた。今年度では、同範囲において柱穴跡5基(SP 23～27)を再検出した他、その西への延長として柱穴跡2基(SP 1・SP 7)を確認した。合計7基の柱穴を確認したが、Y座標2.4～4.8においては倒木痕SX 53により、Y座標9.0～11.4においてはトレーナにより削平を受けており、柱穴跡を確認することができなかった。検出長は18.0 m(9.9間)であり、柱間はほぼ2.1 m(7尺)等間である。SP 1～SP 7間は5.2 mを測り、2.1 mでは柱間が合わない。これは、この位置に園池への出入り口等が存在し、この箇所だけ柱間が一定でなかった可能性を示すと考えられる。板塀跡SA 47を構成する柱穴は円形が多く、長径23～38 cm、深さ10～36 cmを測る。主軸はY-0.0°-Nを測る(第29図、第17表)。

(3) その他の遺構

庭園への通用門跡 SB 62 X座標 -5.8 ~ -5.4、Y座標 2.9 ~ 5.3 の範囲で東西棟の門跡を検出した。主軸は Y -0.0° -S を測る。検出面は第VI層下館基盤土層〈VI iv層〉である。板塀跡 SA 47 が礎石建物跡 SB 46 から西側土塀跡まで区画することから、それらに先行する遺構と考えられる。

布掘り溝跡 SD 29 X座標-4.9～-6.0、Y座標5.3～12.1の範囲に位置する。検出長は6.8mを測る。埋土は1996～98年度調査において完掘していた。主軸はY-3.0°-Sを測る。検出面は第VI層下館基盤土層〈VI iv層〉である(第18表)。

第 16 表 2000～2001 年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査 建物跡計測表

第17表 2000～2001年度園池・礎石建物SB 46地区調査 板塀跡・柵列跡計測表

遺構 No.	柱間	総長 (cm)	総長 (尺)	主 軸	出土 遺 物					備 考
					国産 土器	国産 陶器	中国産 陶磁器	鉄製品	その他	
SA 47	9	1800	59.41	Y - 0.0° - N	-	-	-	-	-	-
SA 59	5	520	17.20	Y - 0.0° - N	-	-	-	-	-	-

第18表 2000～2001年度園池・礎石建物SB 46地区調査 溝跡計測表

(単位: cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主 軸	出土 遺 物					備 考
								国産 土器	国産 陶器	中国産 陶磁器	鉄製品	その他	
SD 29	680	33	22	28	15	-	Y - 3.0° - S	-	-	-	-	-	柵列跡 SA 59 に伴う布掘り溝跡

柱穴列跡 SA 59 布掘り溝跡 SD 29 に伴う柱穴列であり、X座標 -4.9～-6.0、Y座標 5.5～10.7 の範囲に位置する。柱間隔は 0.9 m (3 尺) 等間と考えられる。6 基の柱穴跡を検出した。柱穴跡の平面形は円形・楕円形・不整形と一定でなく、長径も 40～100 cm、深さも 13～55 cm と一定でない。検出面は第VI層下館基盤土層〈VI iv 層〉である。庭園への通用門跡 SB 62 東接すること、検出面及び主軸方位から、板塀跡 SA 47 に先行する園池跡区画施設であると考えられる。

4. 遺構内出土遺物

柱穴跡 SP 5 (第30図の90) 90 は瀬戸美濃のすり鉢である。口縁端部は全体に肥厚し、下部へ垂れ下がり縁帯を形成する。内外面に褐灰色の錆釉を施す。胎土は石英粒を含み、密である。色調は浅黄橙色を呈する。大窯第2段階に属し、15世紀中頃のものである。

不明土坑 SX 42 (第30図の91～93) 遺物は土師器の皿 16 点 (91～93)、瀬戸美濃のすり鉢 1 点・器種不明 1 点が出土した。91～93 は土師器の皿である。91 は T-4 類に、92・93 は T-6 類か T-7 類に属する。91 は口縁端部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

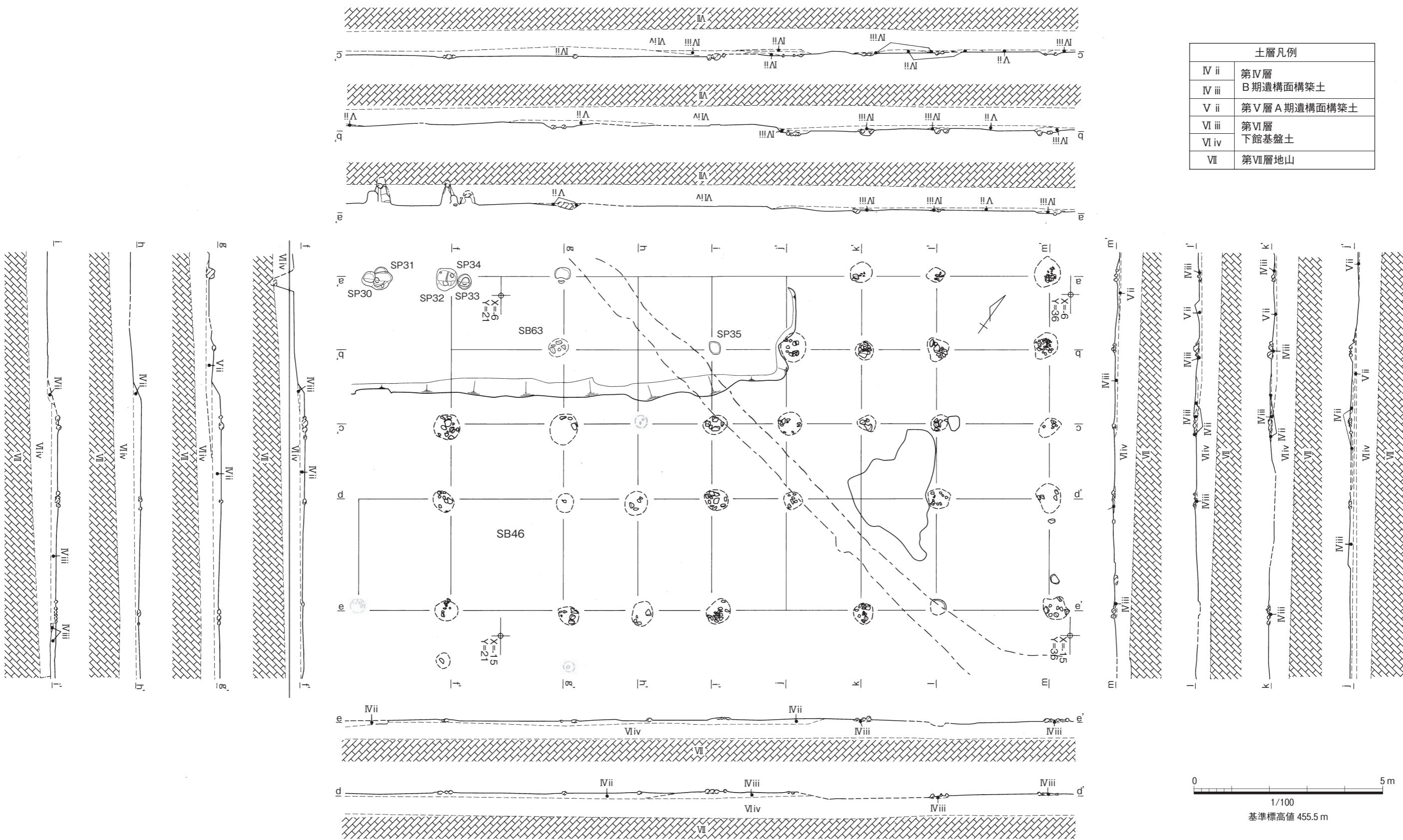
5. 礎石建物跡 SB 46 遺構外出土遺物

第III層旧耕作土〈III i〉(第30図の94～98) 94 は土師器皿であり、T-1 類に属する。

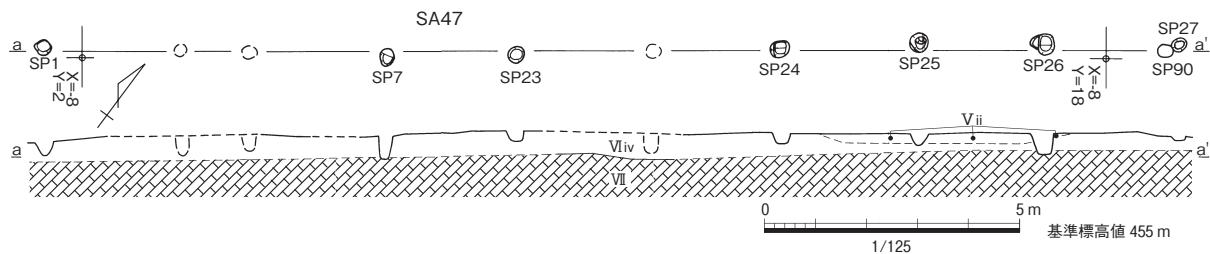
95 は山茶碗の碗である。器壁が薄く、口唇部はくびれ、外反気味に開く。内外面にロクロ回転ナデ調整痕が残り、内面にはまだら状に自然釉がかかる。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。北部系大畠大洞 4 型式に属し、14世紀前半のものである。

96・97 は瀬戸美濃である。96 は筒形香炉である。体部は直立し、口縁部が肥厚する。口縁部内面から外面体部まで淡緑色透明の灰釉を施すが、表面には二次被熱による細かい気泡ができている。胎土は気泡を含む。色調は灰白色を呈する。断面には漆による補修痕が残る。古瀬戸後 I 期に属し、14世紀後半のものである。97 は天目茶碗である。口唇部がわずかにくびれ、口縁端部は細く伸びる。茶褐色と黒褐色の鉄釉を内面から外面体部下方まで施す。胎土は気泡を少し含む。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後 I 期に属し、14世紀後半のものである。

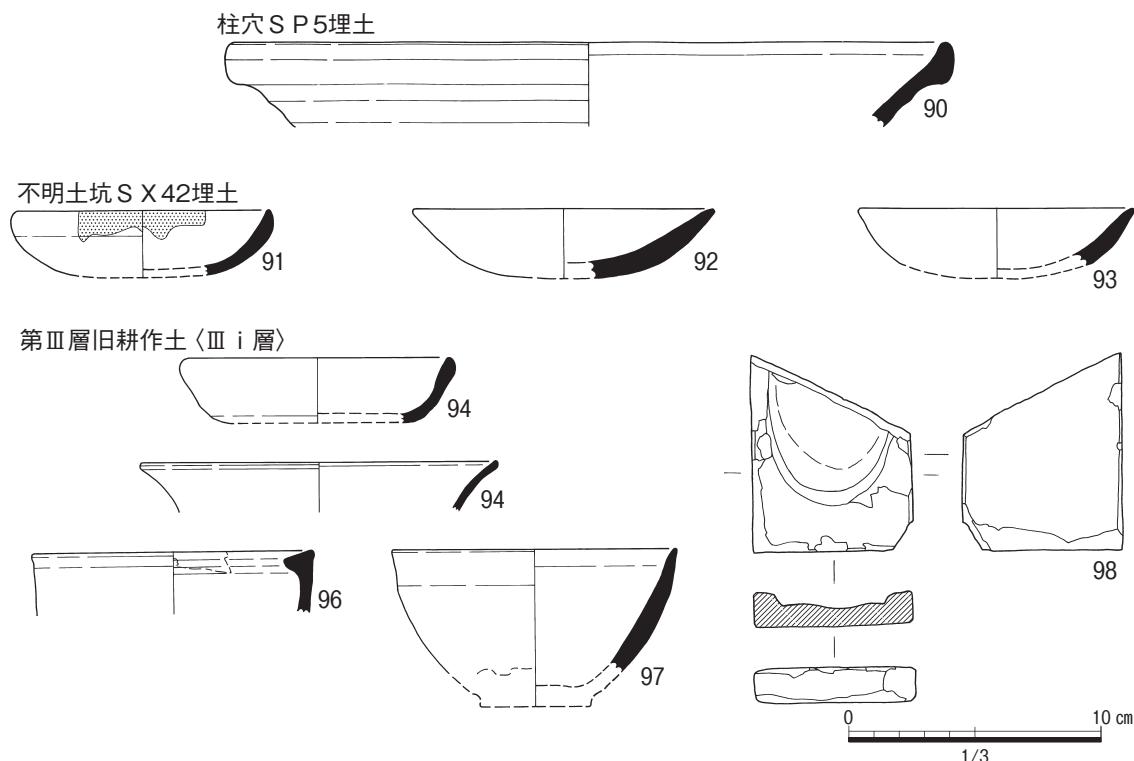
98 は石製品の硯である。表面を磨いて平滑にしており、角部には面取りを施している。上面の陸部分中央部は使用による摩耗によって窪んでいる。断面には漆による補修痕が残る。



第28図 磚石建物跡 SB46 実測図 縮尺1/100 (薄いラインは1976～78年調査で確認した遺構を示す。)



第29図 板塀跡SA 47 実測図 縮尺1/125

第30図 2000～2001年度 磯石建物SB 46地区出土遺物実測図 縮尺1/3
(は煤・タール付着範囲を示す。)

6. 小結

今回の調査により、園池跡とその北側の区画施設が明らかになった。

礎石建物跡SB 46は園池跡に北接し、会所の性格を持つと考えられた。その礎石根石跡と園池跡北側汀線に据えられた汀石が一体的に造成していることを確認し、このことから礎石建物跡SB 46が園池跡と同時に作られたことが分かった。板塀跡SA 47も礎石建物跡SB 46から西側土塀跡まで閉じていることが分かり、園池跡は礎石建物跡SB 46からでないと見学できないという館の構造が明らかになった。

園池跡の視点は会所である礎石建物跡SB 46である。そこから観た園池跡は、力強い景石と背後にある雄大な山並みを風景としていたことが明らかとなった。

作庭時期についての直接的な知見を得ることができなかったが、第IV層B期遺構面構築土(IV i層)と地鎮遺構から出土した墨書き師器皿の年代から、16世紀初めには園池跡や礎石建物跡SB 46が完

成していたと考えられる。一方、今年度調査で、礎石建物跡 SB 46 の前身建物と考えられる礎石建物跡 SB 63、また板塀跡 SA 47 の前身施設と考えられる柵列跡 SA 59 を確認した。園池跡とともに確認した建物跡とほぼ同位置に同じ機能を持つと考えられる施設を確認できたことから、園池跡も当初から存在したものと考えられる。

また、園池内において地山まで堆積する第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ vii 層〉から、連房第8小期に属する碗(66)が出土した。第2章で述べているように、18世紀代の文化・文政年間に下館周辺一帯は大規模に耕地化されたことが分かっている。18世紀後半の時期を持つ遺物の出土から、園池跡は最終的に文化文政年間に埋め戻されたと考えられる。

第4節 2001(平成13)年度礎石建物SB43地区調査

1978年度調査概報において遺構の状況が不明瞭な礎石建物跡 SB 43 を再確認するため、また園池の東側区画施設跡の確認のためトレンチ調査を行った。トレンチ1はX座標-16~-23、Y座標36~66.5のうち、調査面積約78m²、トレンチ2はX座標-25~-28、Y座標36~52、調査面積約48m²、トレンチ3はX座標-16~-27、Y座標52~53.5、調査面積約8m²トレンチ4はX座標-27~28.3、Y座標53.5~61.5、調査面積約10m²、トレンチ5はX座標-28.3~-34、Y座標55.5~58、調査面積約14m²、トレンチ6はX座標-27~-35、Y座標52~54、調査面積約12m²である(第31図)。

調査では、礎石建物跡2棟(第19表)、不明遺構2基(第20表)を検出した。

層序は上層より、第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ i 層〉、第Ⅳ層B期遺構面構築土〈Ⅳ i 層〉〈Ⅳ ii 層〉、第VI層下館基盤土〈Ⅵ i 層〉〈Ⅵ iv 層〉、第VII層地山を確認した(第32図)。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

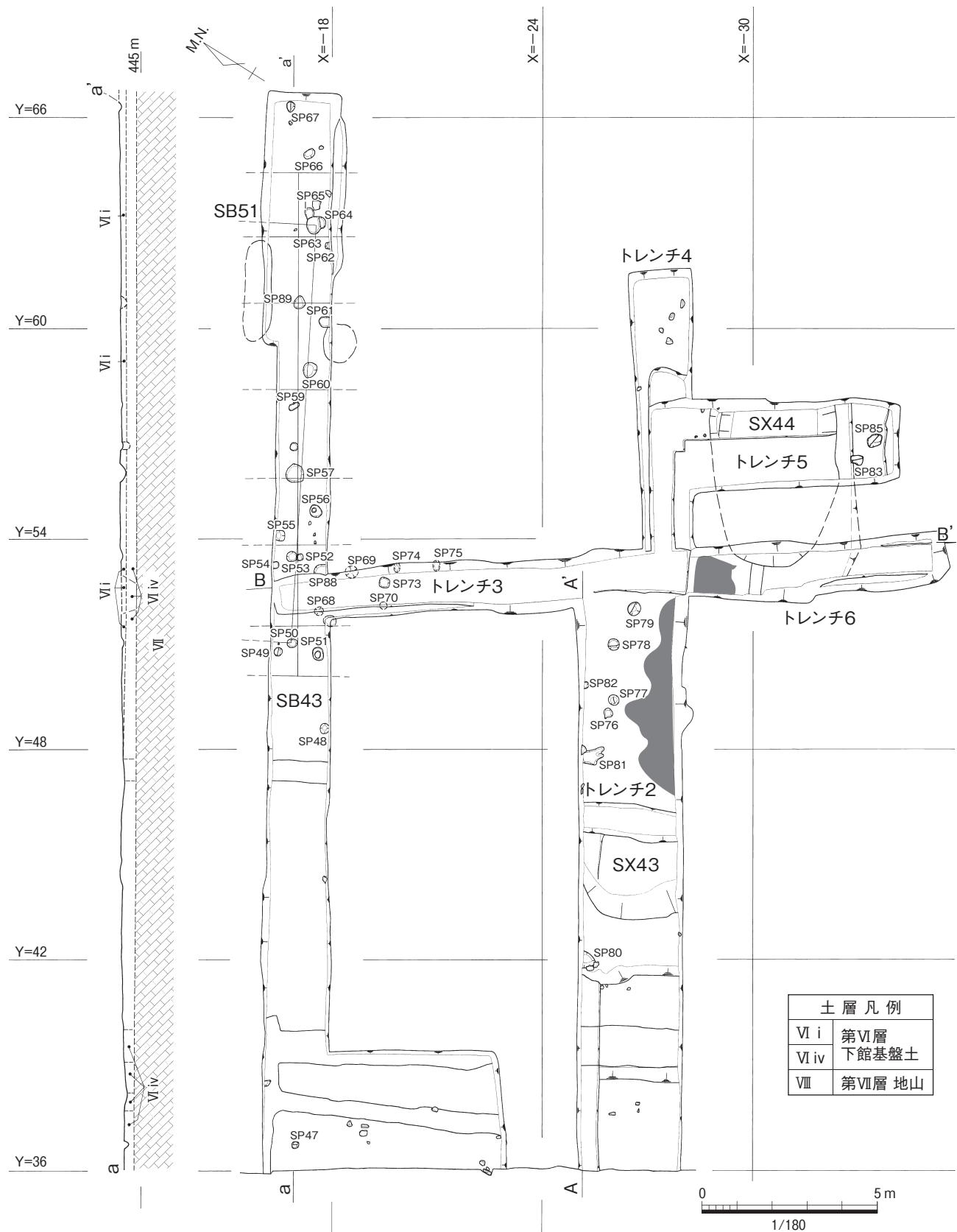
(1) 級石建物跡

礎石建物跡 SB 43 トレンチ1では1978年度概報による礎石建物跡 SB 43 の桁行南から2列目位置において、遺構検出を試みた。礎石抜き取り穴跡 SP 52、SP 57、SP 89の3基を確認したものの、明確に柱並びを確認することができなかった。トレンチ1での遺構検出面は第VI層下館基盤土〈VI i 層〉及び〈VI ii 層〉である。遺構が不明瞭な状況から、礎石建物跡 SB 43 が第IV層B期遺構面構築土とともに後世に削平を受けているからと考えられる。

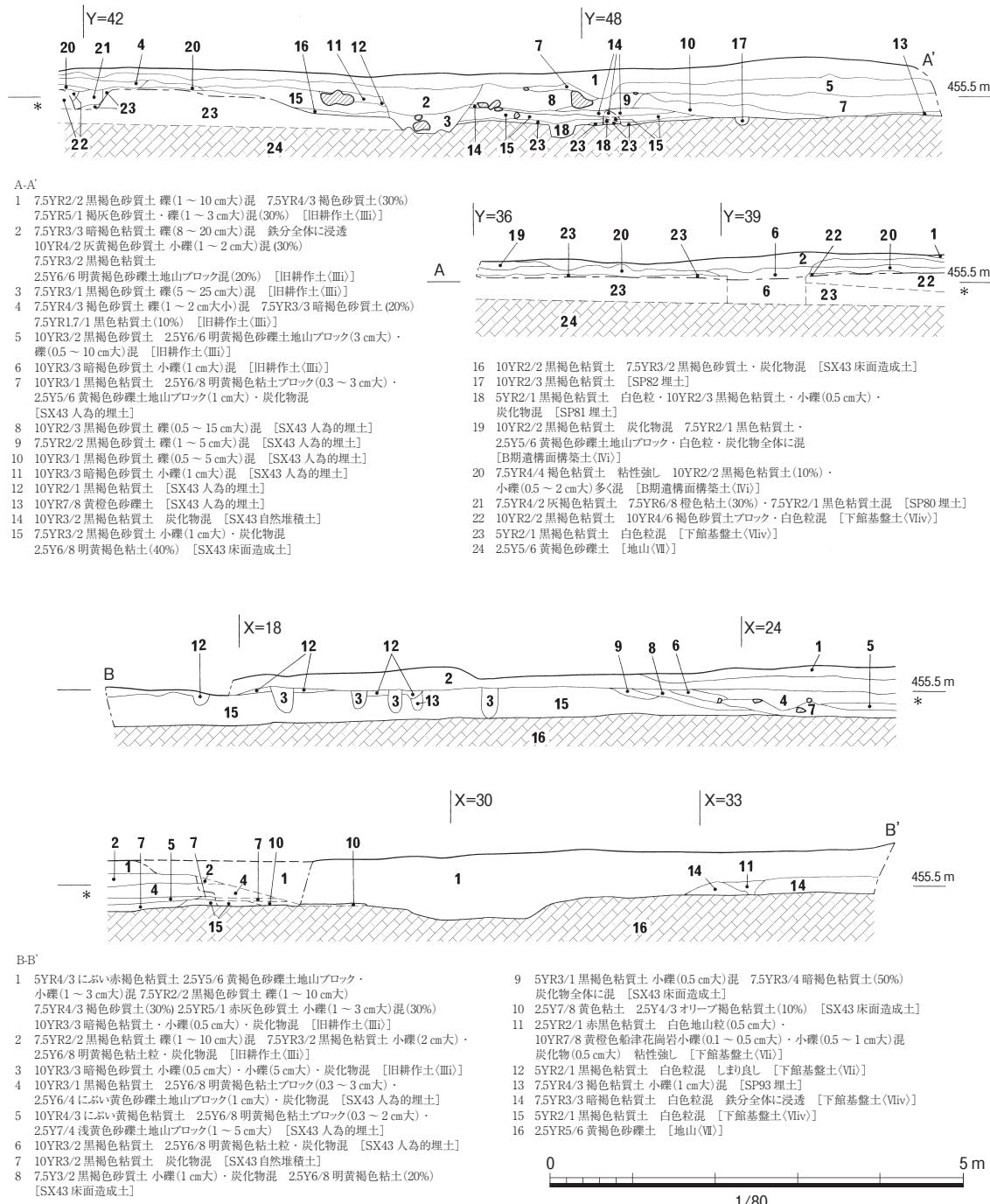
礎石建物跡 SB 51 トレンチ1では礎石建物跡 SB 51 の礎石抜き取り穴 SP 49、SP 53、SP 60、SP 63を検出した。礎石建物跡 SB 43 同様検出面は第VI層下館基盤土〈VI i 層〉である。調査面積が狭いため、全体形状は確認できなかったが、一辺は11.85m(6.6間)の建物跡と推定される。

(2) 不明遺構

不明遺構 SX 43 トレンチ2・3・6ではX座標-22.38~-30.90、Y座標43.19~53.65の範囲で不明遺構 SX 43 を検出した。埋土から中世遺物が多数出土し、底面には黄色粘土により床面を施す。トレンチ2北半分において、埋土完掘後の底面、第VI層下館基盤土〈VI i 層〉上面において、柱穴跡5基が削平を受けていることを確認した。もっとも新しい年代を示す遺物は、瀬戸美濃焼の卸目付大皿(117)である。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。調査面積が狭いため、その性格を明らかにし得なかった。



第31図 2001年度 硙石建物SB43地区調査平面図 縮尺1/180 (■は床面の範囲を示す。)



第32図 2001年度礫石建物SB43地区調査断面図 縮尺1/80

第19表 2001年度礎石建物SB43地区調査 建物跡計測表

遺構No.	桁行柱間	梁行柱間	桁行(cm)	桁行(間)	梁行(cm)	梁行(間)	平面積(m ²)	主軸
SB43	-	-	1437	-	-	-	-	Y-0.0°-S
SB51	5	-	1185	6.6	-	-	-	Y-3.0°-S

第20表 2001年度礎石建物SB43地区調査 不明遺構計測表

(単位:cm)

No.	検出長	上端幅	下端幅	深さ	埋土	主軸	出土遺物					備考
							国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
SX43	1046	848	673	32	第32図	-	152	17	2	-	1	トレンチ2で確認
SX44	452	422	283	37	-	-	1	-	-	-	-	1978年度調査で完掘

遺物は土師器の皿123点(99~114)、瓦器の風炉か火鉢26点、火鉢4点(115)、瀬戸美濃の碗1点、香炉1点(116)、卸目付大皿4点(117)、すり鉢5点、珠洲の甕1点、中国陶磁の天目茶碗1点(118)、白磁の皿1点が出土した。

99~114は土師器の皿である99・100はT-6類に、101~104はT-7類に、105~109はT-6類かT-7類に、110はR-1類に属する。111はR類に、112~114はT類に属するが、江馬館出土のこれまでの土師器皿分類にあてはまらない。112は器壁が薄い。内面に横ナデを施し、口縁部には一段の横ナデを施す。外面の調整は摩耗により不明である。113・114は内面を横ナデしたあと、口縁端部内外面をつまんで横ナデを施す。外面体部から底部にかけては無調整である。胎土は、99~106・108・109が砂粒を含む。102・109~112は口縁端部内外面にタールが、103・104は口縁端部外面から内面までタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

115は瓦器の火鉢である。口縁端部内面の炭素は失われている。胎土は気泡と白色砂粒を含み、密である。色調は断面が淡黄色を、表面が黒褐色を呈する。第II類に属する。

116・117は瀬戸美濃焼である。116は袴腰形香炉である。胴部は丸みを帯び、頸部はゆるやかに外反する。頸部内外面にはオリーブ灰色透明の灰釉を施すが、胴部は露体である。色調は浅黄橙色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。117は卸目付大皿である。体部は直線的に開き、口縁部内側に突起が形成される。体部上半内外面に浅黄色の灰釉を施すが、二次被熱により白濁している。色調は淡黄色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。

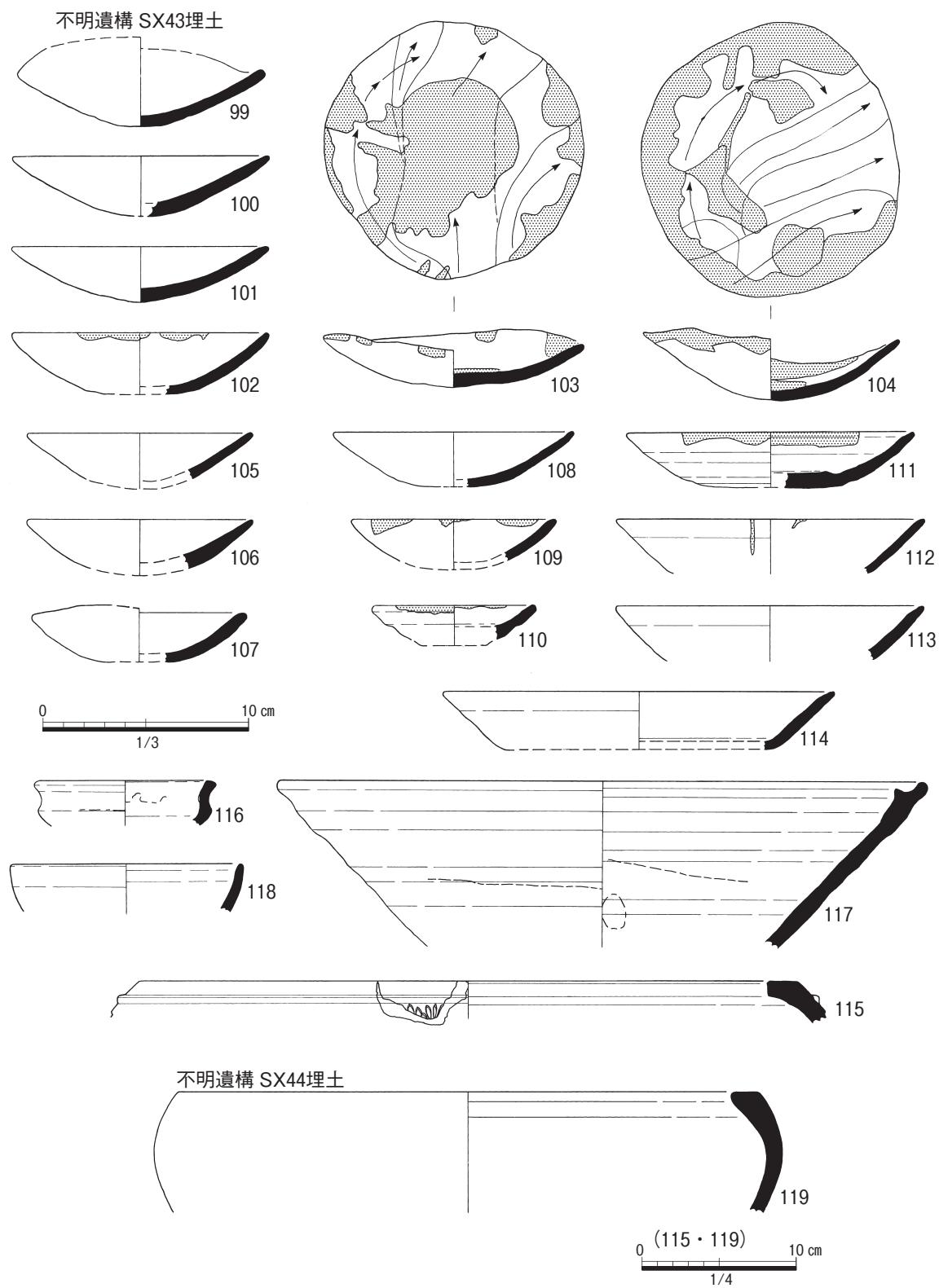
118是中国陶磁の天目茶碗である。口唇部がくびれて、底部に対して垂直方向に立ち上がる。内外面に褐色と黒色の鉄釉を施す。色調は灰白色を呈する。

不明遺構 SX44 トレンチ5・6ではX座標-28.73~-32.95、Y座標53.19~57.71の範囲で1978年度調査でも検出している堀状掘り込みSX44を再検出した。埋土は、今回の検出範囲ではほぼ完掘されていた。調査面積が狭く、その性格を明らかにすることはできなかった。

遺物は瓦器の火鉢1点(119)が出土した。119は口縁部内外面の炭素は失われている。胎土に白色砂粒を含む。色調は断面がにぶい黄橙色を、表面が褐灰色を呈する。第I類に属する。

2. 遺構外出土遺物

第III層旧耕作土〈第III i層〉(第34図の120~128) 120・121は土師器の皿である。120はT-6



第33図 2001年度礎石建物SB 43地区出土遺物実測図(1) 縮尺1/3 115・119は縮尺1/4
(矢印はナデ方向を、■は煤・タール付着範囲を示す。)

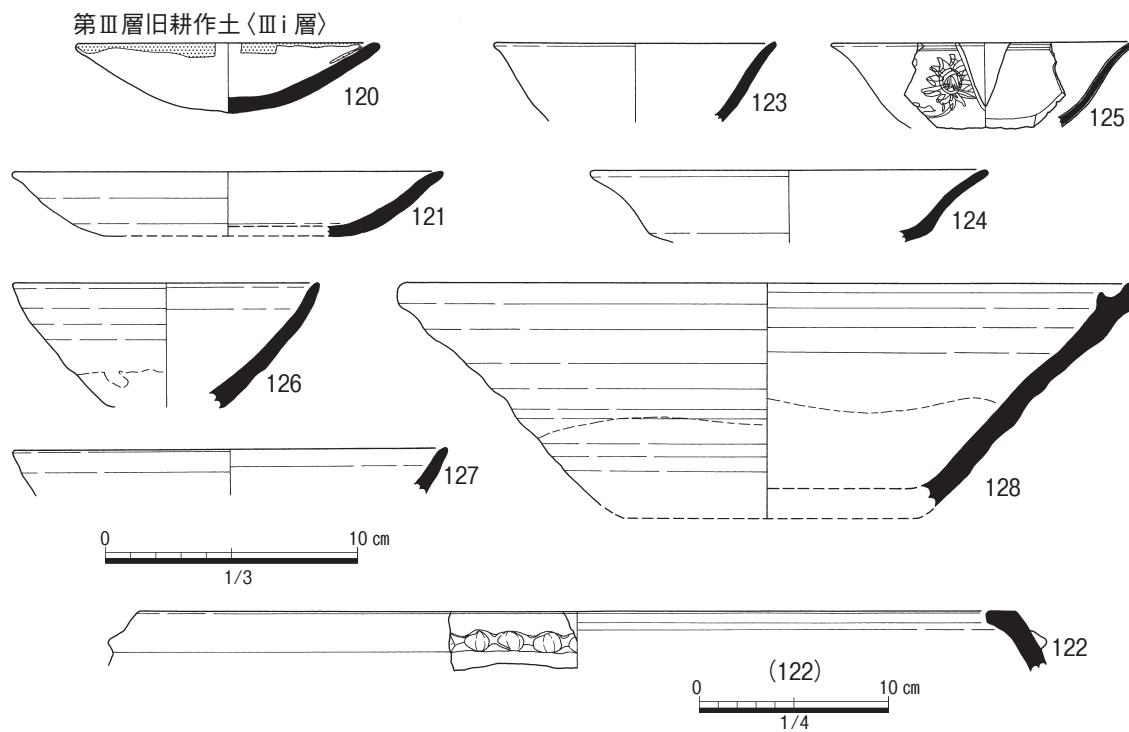
類に属し、胎土に砂粒を含む。口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。121はT-8類に属する。不明遺構SX43埋土から出土した1破片と第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲi層〉から出土した3破片が接合した。

122は瓦器の火鉢である。胎土は白色砂粒を含み、密である。色調は断面が橙色を、表面が黒色を呈する。第Ⅲ類に属する。

123・124は白磁の皿である。123は全面にガラス質の白色釉を施した後、口縁端部内外面の釉を搔き取っている。釉は細かい気泡を含む。胎土は黒粒を含み、密である。色調は白色を呈する。白磁3類に属し、13世紀中頃から14世紀前半のものである。124は、ガラス質の白色釉を施す。釉は気泡を含み、貫入が入る。胎土は気泡を少し含み、密である。色調は灰白色を呈する。断面には漆による補修痕が残る。白磁19類に属し、16世紀代のものである。不明遺構SX43埋土から出土した1破片と第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲi層〉から出土した4破片が接合した。

125は青花の皿であり、中国製染付である。体部は内湾気味に開き、口縁部が外反する。外面には口縁部に界線を巡らせ、体部に牡丹唐草文を施す。内面は口縁部に界線を巡らす。透明釉を施し、釉は細かい気泡を含む。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。染付皿B1群に属し、15世紀後半から16世紀中頃のものである。

126～128は瀬戸美濃である。126は天目茶碗である。体部は直線的に開き、口唇部がわずかにくびれる。茶褐色と黒色の鉄釉を内面と外面体部上方に施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)に属し、15世紀後半のものである。127は平碗である。口唇部が僅かにくびれる。内外面に淡黄色の灰釉を施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期に属し、15世紀初頭のものである。128は



第34図 2001年度礎石建物SB43地区出土遺物実測図 縮尺1/3 122は縮尺1/4

(■は煤・タール付着範囲を示す。)

鉢目付大皿である。体部は直線的に開き、口縁部内側に突起が形成される。体部上半内外面に淡黄色の灰釉を施すが、表面には二次被熱による細かい気泡ができている。色調は淡黄色を呈する。古瀬戸後IV期（新）に属し、15世紀後半のものである。

3. 小結

今回の調査では、トレンチ1において、礎石建物跡SB43が第IV層B期遺構面構築土とともに削平を受けていることが分かった。検出面が同じであり、遺構埋土も過去の調査で完掘しているため、礎石建物跡SB43と礎石建物跡SB51の前後関係を、層序及び切り合い関係から確認することは出来なかった。しかし礎石建物跡SB51の方が礎石建物跡SB43より遺存状態が良いことより、SB51がSB43に先行すると考えられる。またトレンチ1・2において園池の東側区画施設跡も検出できず、これも第IV層B期遺構面造成土とともに削平を受けている可能性が高い。

第5節 2002（平成14）年度I地区調査

堀内地区南西隅部において、西側・南側土塙復元工事に先立ち、西側土塙主門～南端部の土塙柱穴列及び堀内地区南西隅部の土塙位置の確認を目的として調査を行った。調査範囲は、X = -6 ~ -44、Y = -7 ~ 1.3、調査面積約300m²である。

調査では、土塙基底部盛土、土塙に伴う柱穴列跡2本（第21表）、土塙に伴う布掘り溝2条（第22表）、南堀跡の旧堀と新堀の接合地点（第23表）、土坑3基（第24表）を検出した（第35図）。

層序は上層より、第I層表土、第III層旧耕作土、第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉、第V層A期遺構面構築土〈V ii層〉、第VI層下館基盤土〈VI iv層〉、第VII層地山を確認した（第36図）。

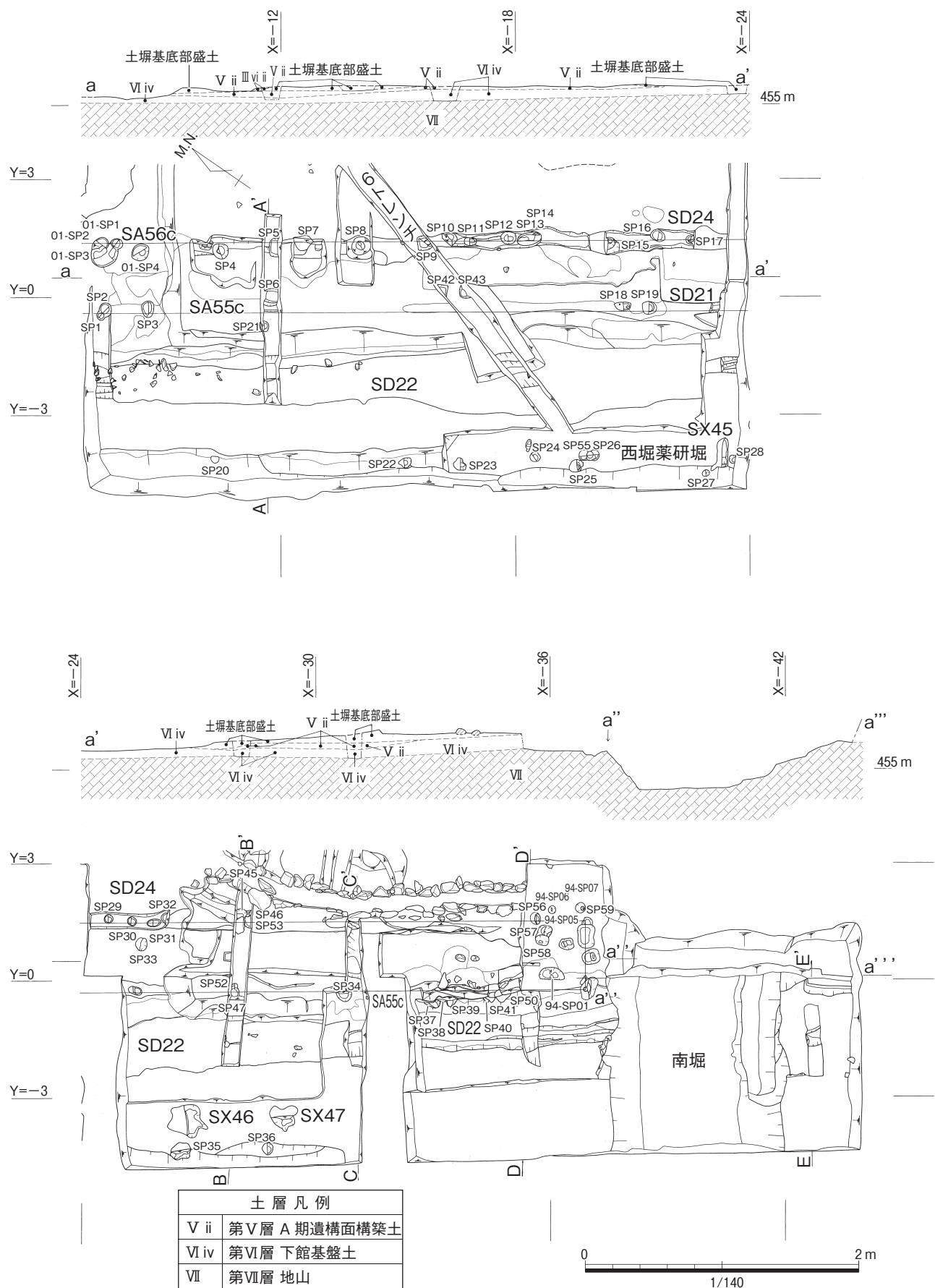
掘削は第III層までを重機掘削とし、それ以下を人力により行った。国史跡という性格上、第IV ii層上面で掘削を終え、それより下層はトレンチ掘削に止めた。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

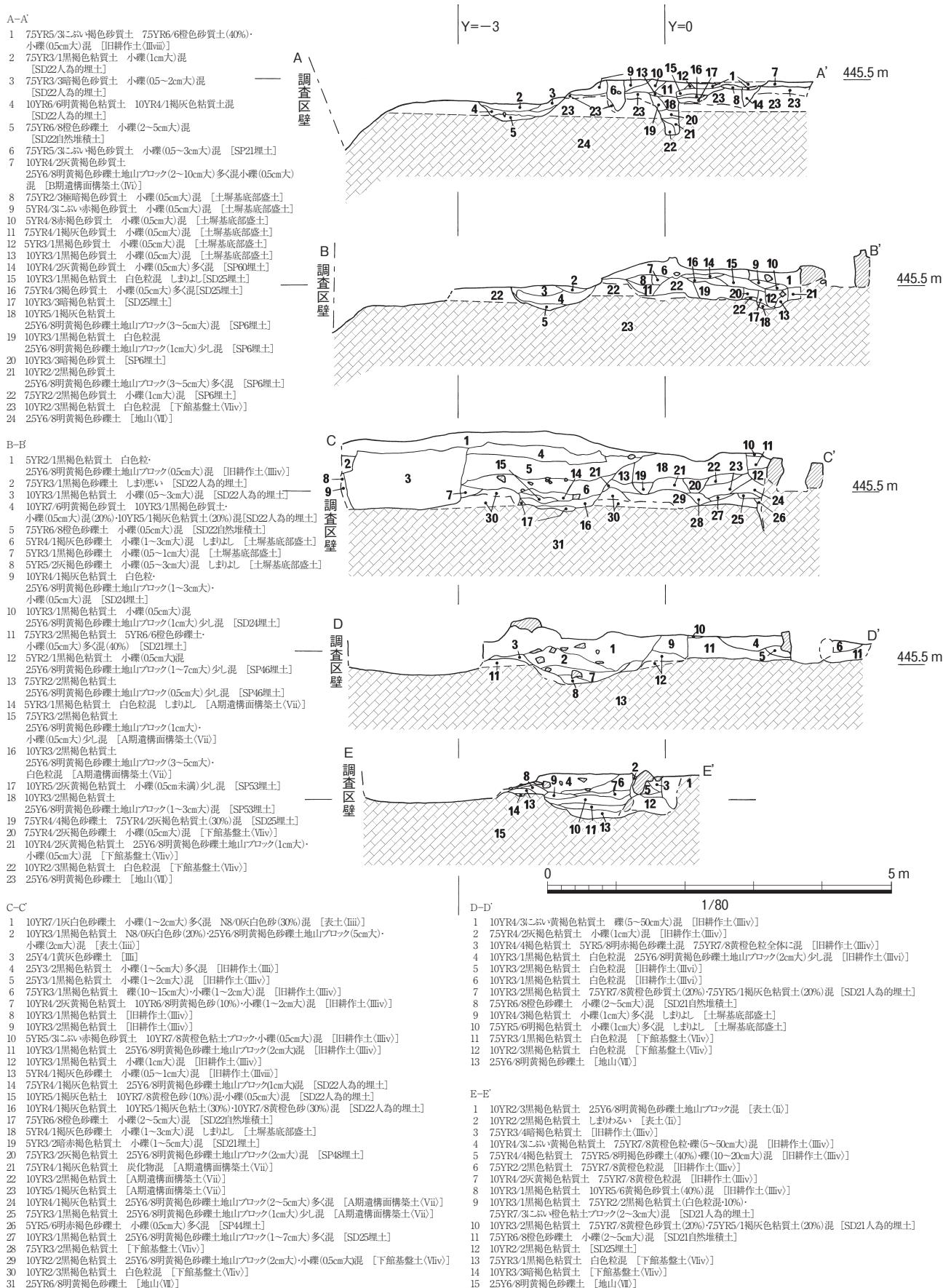
（1）柱穴列跡

西側土塙（主門以南）に伴う柱穴列跡SA55c・56c 1999年度調査では、西側土塙に伴う柱穴列SA55・56をX座標-7~48.8間に検出した。検出面は第VI層下館基盤土〈VI iv層〉である。主軸はX-0.5°-Eを測り、座標とほぼ一致する。これまでの調査で、柱穴跡の間隔が一定でないこと、重複する柱穴跡があること、東西の柱穴跡が明確に対応しないことを確認している。SA55・56の北への延長ラインは、それぞれ北堀に伴う土塙基底部石列SV01・02の西端部と交わる。SA55・56は脇門より北、脇門～主門間、主門より南を、それぞれa・b・cとしている。

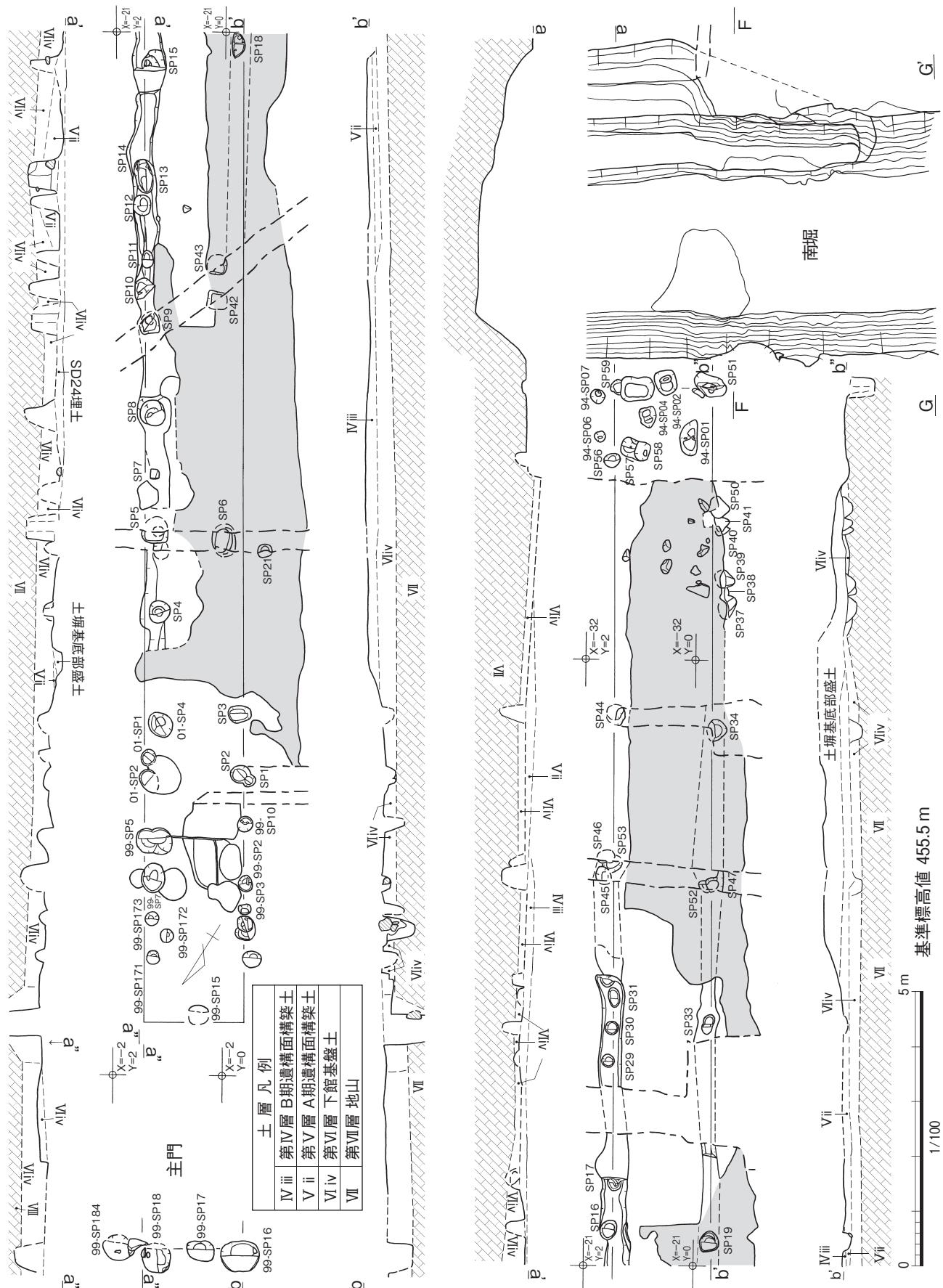
柱穴列跡SA55c・56cはX座標-36.9~-3間に位置し、全長33.9mを測る。SA55cの主軸ラインはほぼY座標-0.3ラインに、SA56cの主軸ラインはほぼY座標1.4ラインに沿う。1994・1999年度調査検出分を含め、SA55c・56cの並びに合う柱穴を合計55基確認した。柱穴列跡北端は主門に接する99-SP181であり、南端は南堀跡旧堀の北側上端から約0.5m、南堀跡新堀の北側上端から約1.6m北側の、SP51・94-SP2・SP59である（第21表）。



第35図 2002年度I地区調査平面図 縮尺1/140



第36図 2002年度T地区調査断面図 縮尺1/80



第37図 土壌に伴う柱穴列跡 SA 55・56 実測図及び南堀跡平面図 縮尺 1/100
(■は土壌基底部盛土の範囲を示す。)

SA 55 c・56 c を構成する柱穴跡は円形が多く、長径 22～51 cm、深さ 5～68 cm を測る。SA 55 c の SP 51 で径 12 cm、検出長 40 cm、SA 56 c の SP 4 で径 15 cm、検出長 22 cm、SP 9 で径 16 cm、検出長 14 cm の柱痕跡を検出した。

(2) 布掘り溝跡

西側土塀（主門以南）に伴う布掘り溝跡 SD 21・SD 24 X 座標 -21.5～-26.3において土塀に伴うと考えられる西側の布掘り溝跡 SD 21 を、X 座標 -9～-26.7 において土塀に伴うと考えられる東側の布掘り溝跡 SD 24 を検出した（第 22 表）。ともに主軸は X -0.5° -W を測り、座標とほぼ一致する。埋土はどちらとも褐色砂礫土であり、第Ⅳ層 B 期遺構面構築土〈IV iii 層〉と同質である。土塀基底部盛土跡を検出した範囲ではトレンチ断面で SD 21 及び SD 24 を確認した。SD 24 では X 座標 -12～-26 の範囲においてその埋土を掘削し、柱穴の検出および半裁を行った。

遺物は、SD 24 より中国陶磁器の天目茶碗が出土した（129）。口唇部がくびれて立ち上がり、口縁端部は細く伸びる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。色調は灰白色を呈する。

(3) 土塀基底部盛土跡

土塀基底部盛土跡 X 座標 -10～23 および -26.5～-30、Y 座標 1.3～-1.4 の範囲において、第Ⅳ層 B 期遺構面構築土〈第Ⅳ iii 層〉が最大厚約 40 cm にわたり残存している。布掘り溝跡埋土も第Ⅳ層 B 期遺構面構築土〈IV iii 層〉と同質の土層であり、4・8 トレンチ断面では東側で直に立ち上がることから、この範囲では第Ⅳ層 B 期遺構面構築土〈IV iii 層〉を土塀基底部盛土としたと考えられる。

遺物は土師器の皿 1 点、瀬戸美濃の折縁深皿 1 点（130）が出土した。130 は口縁部が一旦外折し、口縁端部は内側に折り返される。内外面に緑灰色透明の灰釉を施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅱ期に属し、14 世紀前半のものである。

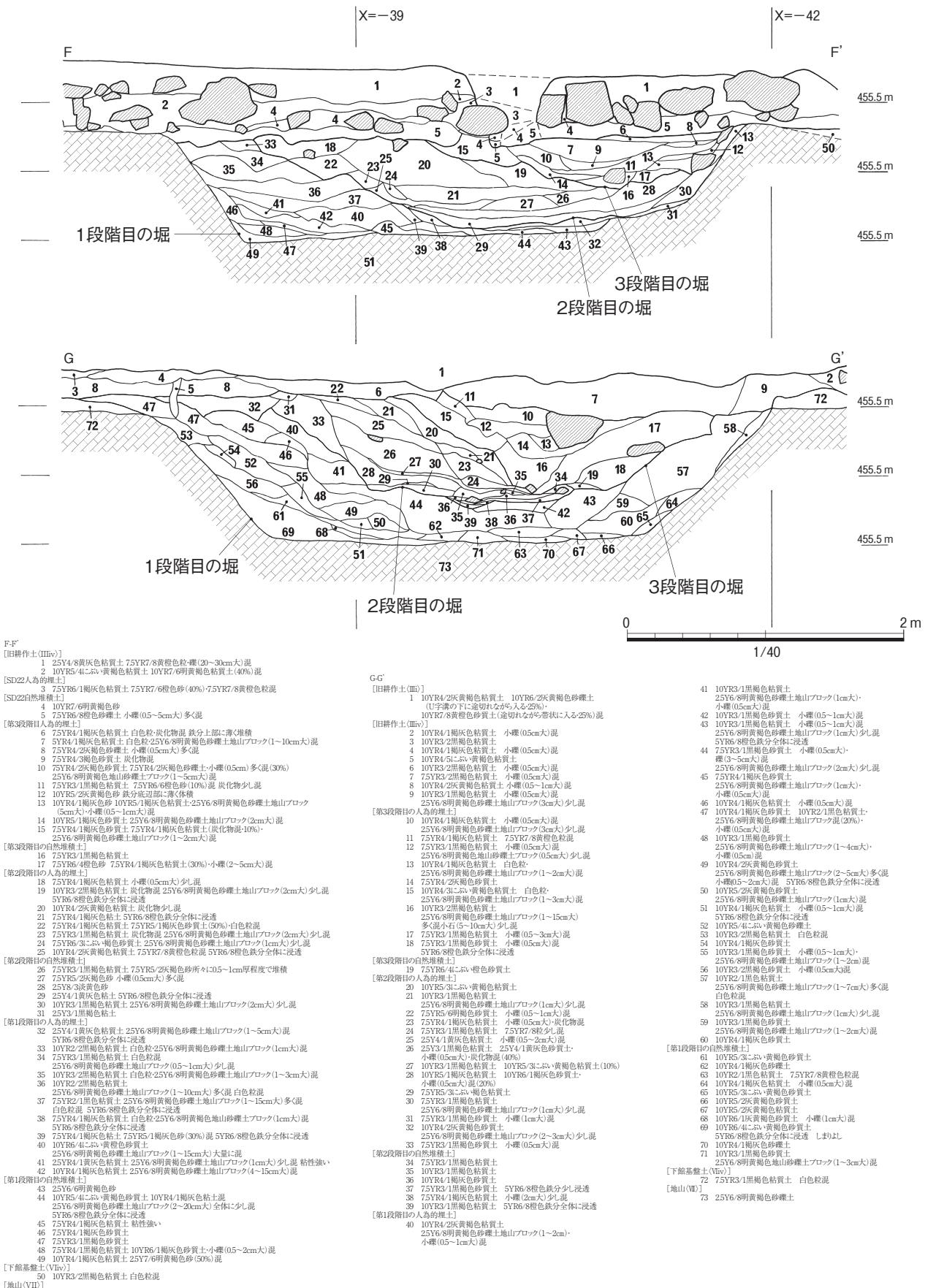
(4) 堀跡

南堀跡 X 座標 -37.4～-42.6、Y 座標 0～-4.5 の範囲で検出した。検出面は第Ⅶ層地山である。検出長は 4.5 m、主軸は Y -4.5° -N である（第 23 表）。1994 年度調査範囲と 1997 年度調査範囲に挟まれた範囲であり、1994 年度調査では南堀は大きく新旧 2 時期あり、細かい掘り込みを合わせると 6 段階の変遷を確認している。1997 年度調査では 3 段階の変遷を確認している（第 38 図）。今年度調査では 3 段階の堀の変遷を確認し、Y 座標 -3 の南側斜面において、地山面上で旧堀と新堀との接続地点を確認した。延長部においては 2004 年度にも調査を行っており、堀の埋め戻し時期については、当章第 8 節で述べる。

1 段階目の堀では、F-F' 断面図の第 43 層～第 49 層、G-G' 断面図の第 61 層～第 71 層が使用期間に自然堆積した。その後、F-F' 断面図の第 32 層～第 42 层、G-G' 断面図の第 40 層～第 60 層により人為的に埋め戻した。1994 年度調査の 1 段階目（旧堀）、1997 年度調査の 1 段階目と対応する。

第 21 表 2002 年度 I 地区調査 柵列跡計測表

遺構 No.	柱間	総長 (cm)	総長 (尺)	主 軸	出土遺物					備 考
					国産 土器	国産 陶器	中国産 陶磁器	鉄製品	その他	
SA 55 c	-	3398	112.14	X -0.5° -W	-	-	-	-	-	土塀西側柱穴列 X 座標 -2.97～-36.95
SA 56 c	-	3398	112.14	X -0.5° -W	-	-	-	-	-	土塀東側柱穴列 X 座標 -2.97～-36.95



第22表 2002年度I地区調査 布掘り溝跡・溝跡計測表

(単位:cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主軸	出土遺物					備考
								国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
SD 21	4.8	40	20	30.0	25	第36図	X -0.5° -W	-	-	1	-	-	土壙西側柱穴列跡 SA 55c の布掘り溝跡
SD 22	36.5	202	88	126.0	44	第36図	X -2.0° -W	3	14	2	1	1	近世期の遺構
SD 24	17.7	60	27	43.5	20	第36図	X -0.0° -W	-	-	-	-	-	土壙東側柱穴列跡 SA 56c の布掘り溝跡
SD 25	-	76	74	75.0	24	第36図	X -4.0° -W	-	-	-	-	-	トレンチ断面でのみ確認

第23表 2002年度I地区調査 堀跡計測表

(単位:cm)

堀名	形状	主軸	検出長	上場幅	下場幅	深さ	立ち上がり	出土遺物					備考
								国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
南堀	箱堀	Y -4.5° -N	450	897	530	186	北47° 南45°	1	5	-	1	5	断面B-B' X座標 -4.5ラインで計測

第24表 2002年度I地区調査 土坑計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土			出土遺物	備考
SX 45	-23.30	-4.00	不整形	75	27	19	454.985	黒褐色粘質土 白色粒混			-	-
SX 46	-26.76	-3.60	不整形	120	85	18	455.014	黒褐色粘質土 白色粒混			-	-
SX 47	-29.22	-3.50	不整形	65	60	26	455.027	黒褐色粘質土 白色粒混			-	-

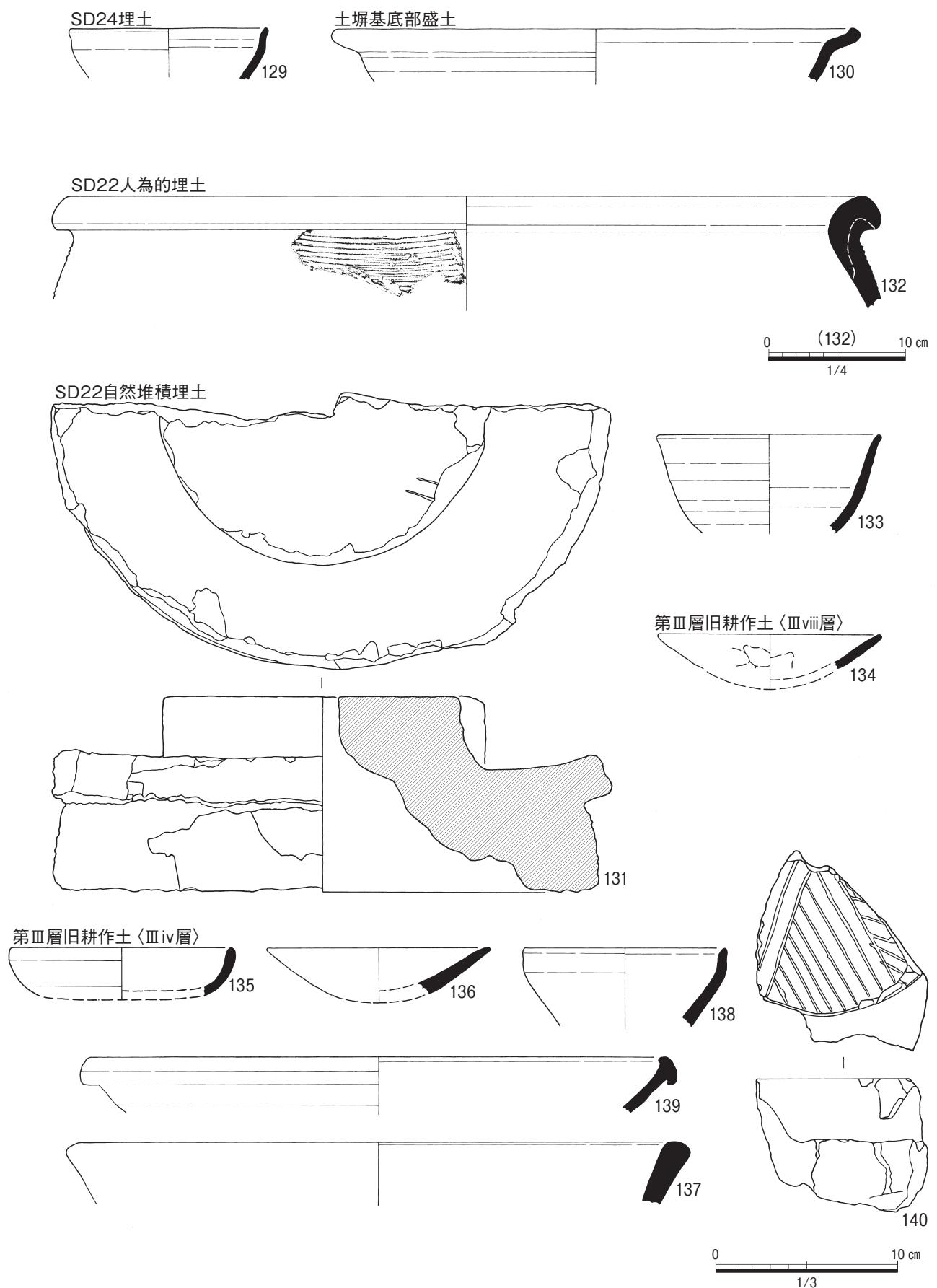
2段階目の堀では、F-F'断面図の第26層～第31層、G-G'断面図の第34層～第39層が使用期間に自然堆積した。その後、F-F'断面図の第18層～第25層、G-G'断面図の第20層～第33層により人為的に埋め戻した。1994年度調査の4段階目(新堀)、1997年度調査の2段階目と対応する。3段階目の堀では、F-F'断面図の第16層・第17層、G-G'断面図の第19層が使用期間に自然堆積した。その後、F-F'断面図の第6層～第15層、G-G'断面図の第10層～第18層により人為的に埋め戻した。1994年度調査の5段階目、1997年度調査の3段階目と対応する。

遺物は縄文土器5点、土師器1点、瀬戸美濃1点、株洲1点、鉄製品1点が出土した。第1段階の堀の自然堆積埋土から縄文土器片2点、第1段階の堀の人為的埋土から瀬戸美濃の壺瓶1点(古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期)、株洲の甕2点、縄文土器片2点が出土し、第2段階目の堀の人為的埋土から縄文土器片1点が出土し、第3段階の堀の人為的埋土から土師器の皿1点、株洲の甕2点、鉄製品の釘1点が出土した。いずれも細片であり、図示できるものは無かった。

(5) 近世以降の遺構

溝跡 SD 22 X座標-7～-43.5、Y座標-0.5～-3.6の範囲で検出した。1998・1999年度調査でも検出しており、下館Ⅲ期に伴う遺構としている。しかし、今年度調査でSD 22自然堆積土から登窯に属する遺物を確認したことから、近世期に属する遺構と考えられる(第22表)。

遺物は自然堆積土から土師器2点、瀬戸美濃3点、青花1点、近世陶器4点、鉄製品1点、石製品1点(131)、不明陶器2点が出土した。最も新しい時期を示す遺物は、細片であり図示できなかったものの、近世陶器の鉄絵大皿(登窯第8～11小期)である。131は石製品の茶臼下臼である。受け



第39図 2002年度I地区出土遺物実測図 縮尺1/3 132は縮尺1/4

部と外面の一部は磨かれている。摺り面は摩耗が激しく摺り目は失われている。人為的埋土からは瓦器1点、青磁1点、瀬戸美濃1点、珠洲1点（132）、近世陶器2点（133）、不明陶器2点が出土した。132は珠洲の甕である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部下面をしっかりと押さえているため、端部は断面四角形を呈する。胎土は白色砂粒を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅲ期に属し、13世紀中頃のものである。133は近世陶器の端反碗である。体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面に褐色と黒褐色の鉄釉を施す。色調は灰色を呈する。登窯第1～2小期に属し、17世紀前半のものである。

2. 遺構外出土遺物

第Ⅲ層旧耕作土〈第Ⅲviii層〉（第39図の134） 134は土師器の皿であり、T-6類かT-7類に属する。胎土に砂粒を含む。体部内外面に指押さえ痕が残る。

第Ⅲ層旧耕作土〈第Ⅲiv層〉（第39図の135～140） 135・136は土師器の皿である。135はT-1類に、136はT-6類かT-7類に属する。135は胎土に白色砂粒を含み、136は砂粒を含む。

137は瓦器の火鉢である。内外面の炭素は失われている。胎土は密であり、色調は浅黄橙色を呈する。分類には当てはまらない。

138・139は瀬戸美濃である。138は天目茶碗である。口唇部がくびれ、口縁部が底部に対してほぼ垂直方向に立ち上がる。内外面に褐色とぶい赤褐色の鉄釉を施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。139はすり鉢である。口縁上端部は膨らみ、縁帶は外側に丸みを持ち、底部に対してほぼ垂直方向に形成されている。内外面にぶい赤褐色の錆釉を施す。色調は淡黄色を呈する。大窯第3段階前半に属し、16世紀後半のものである。

140は石製品の茶臼下臼である。摺り面を8分画し、1画づつ画線にそって9本の副溝を刻んでいる。摺り面はよく摩耗している。

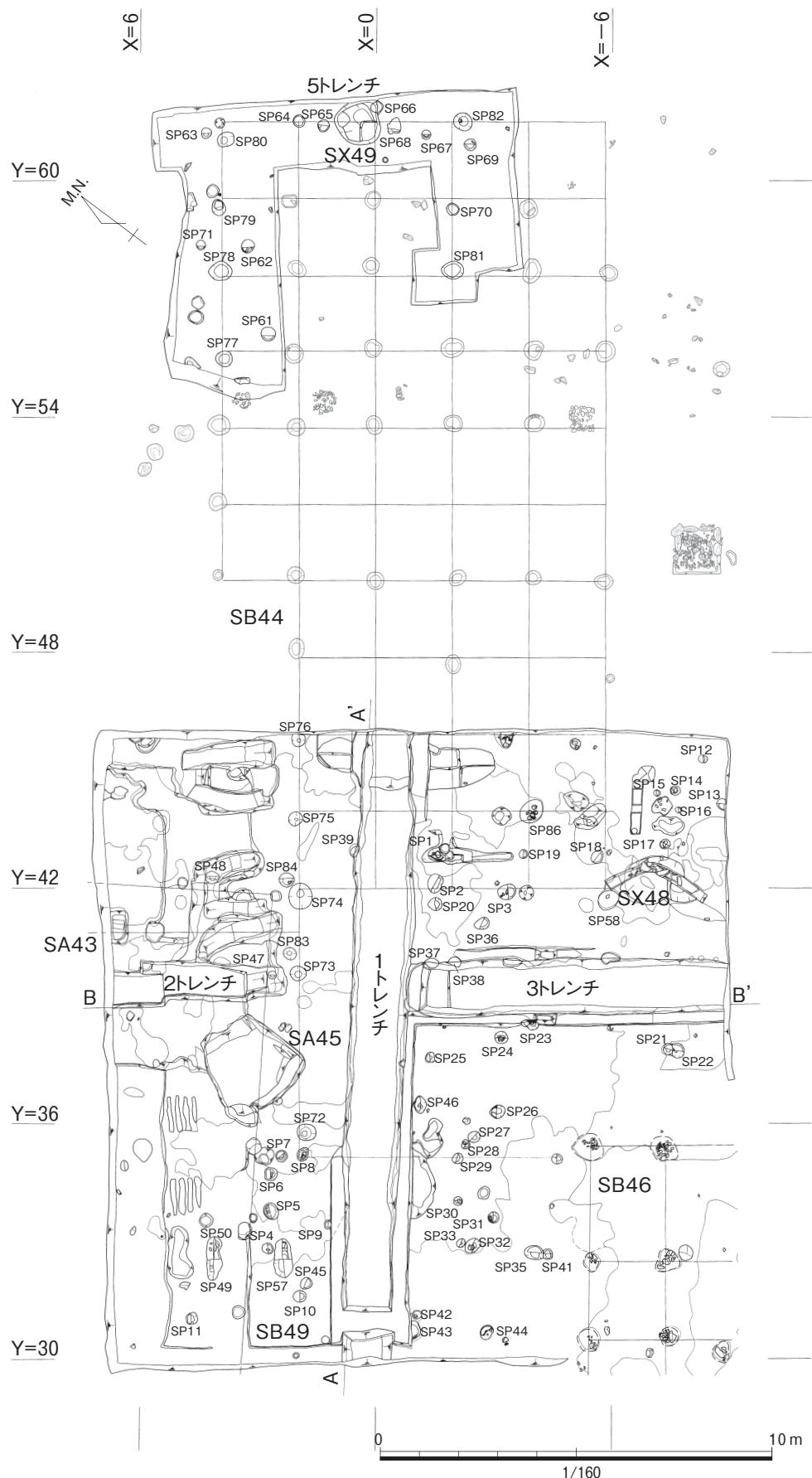
3. 小結

今年度の調査では土壙基底部盛土跡を掘削していないため、土壙に伴う柱穴列跡SA 55c・56cを構成する全ての柱穴跡を検出・掘削していない。しかし柱穴跡には、土壙基底部盛土跡直下から掘り込むもの及び埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉を含むものを8基確認し、同じ主軸ライン上で第V層A期遺構面構築土〈V ii層〉を検出面とするものを2基確認した。また、検出面が第VI層下館基盤土の範囲では、1998・1999年度調査と同じように柱穴跡に重複するものも確認した。

これらのことから、布堀り溝跡に伴う土壙跡と、それに先行する土壙跡があったことを示す。また、このことは1997年度調査による北側土壙跡と同じ知見もあり、館を囲む土壙には改修があったものと考えられる。

第6節 2002（平成14）年度II地区調査

礎石建物跡SB 44（1978年度概報A期建物）・礎石建物跡SB 49（同B期建物）重複箇所において、前後関係および立体的表示整備を行うSB 44遺構位置の再確認を目的として調査を行った。調査範囲は、X座標-5～7、Y座標30～36、X座標-9～7、Y座標36～46、調査面積232m²、SB 44東辺確認のための5トレンチがX座標-5.5～6、Y座標54～62、調査面積36m²、合計調査面積268m²である。



第40図 2002年度Ⅱ地区調査平面図 縮尺1/160 (薄いラインは1976~78年度調査範囲を示す。)

調査では、礎石建物跡2棟（第25表）、土坑3基（第26表）などを確認した（第40図）。

層序は上層より、第Ⅲ層旧耕作土、第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV iii層〉、第V層A期遺構面構築土〈V ii層〉、第VI層下館基盤土〈VI i層〉〈VI iv層〉、第VII層地山を確認した（第41図）。

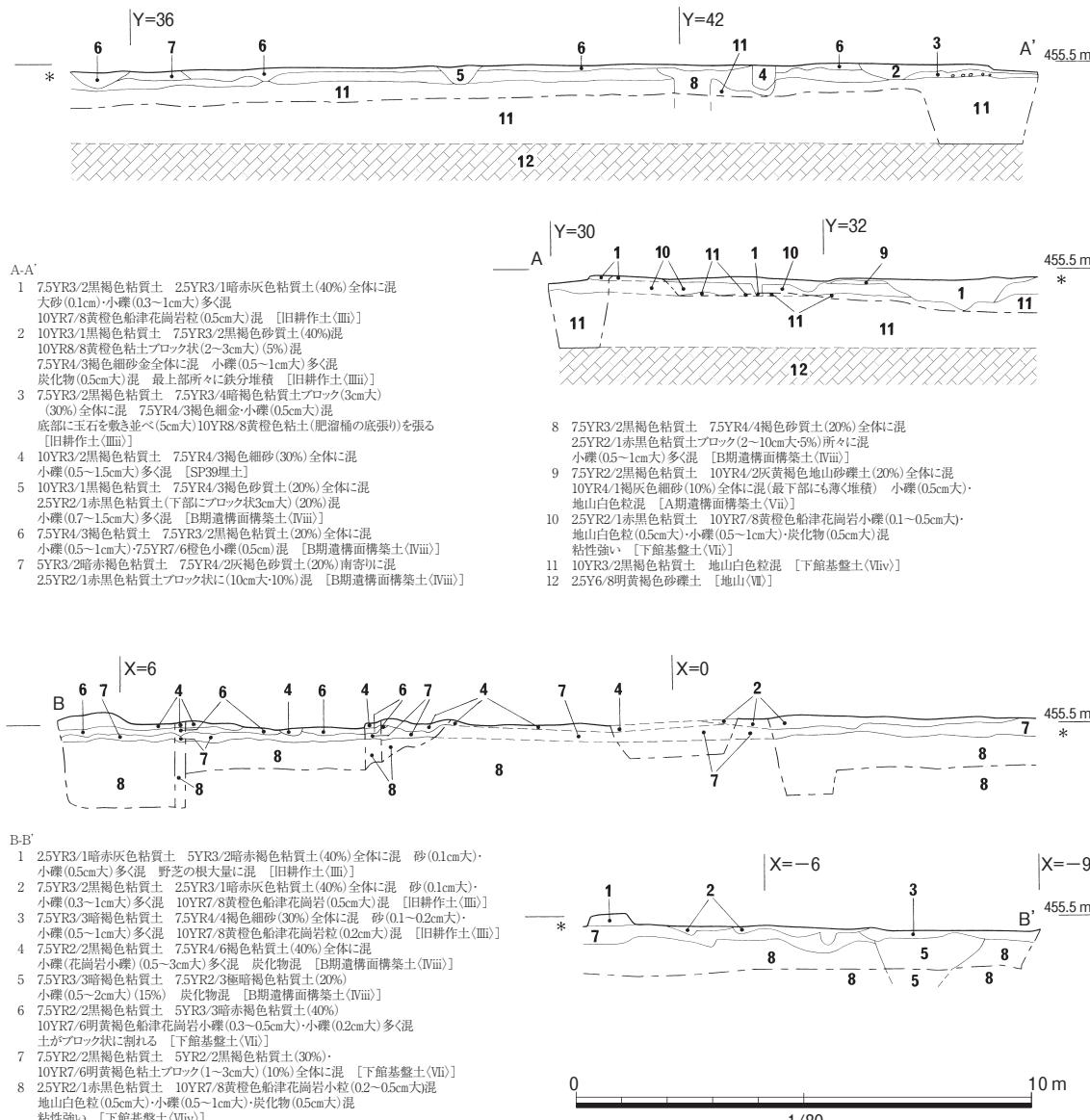
掘削は第Ⅲ層までを重機掘削とし、それ以下を人力により行った。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

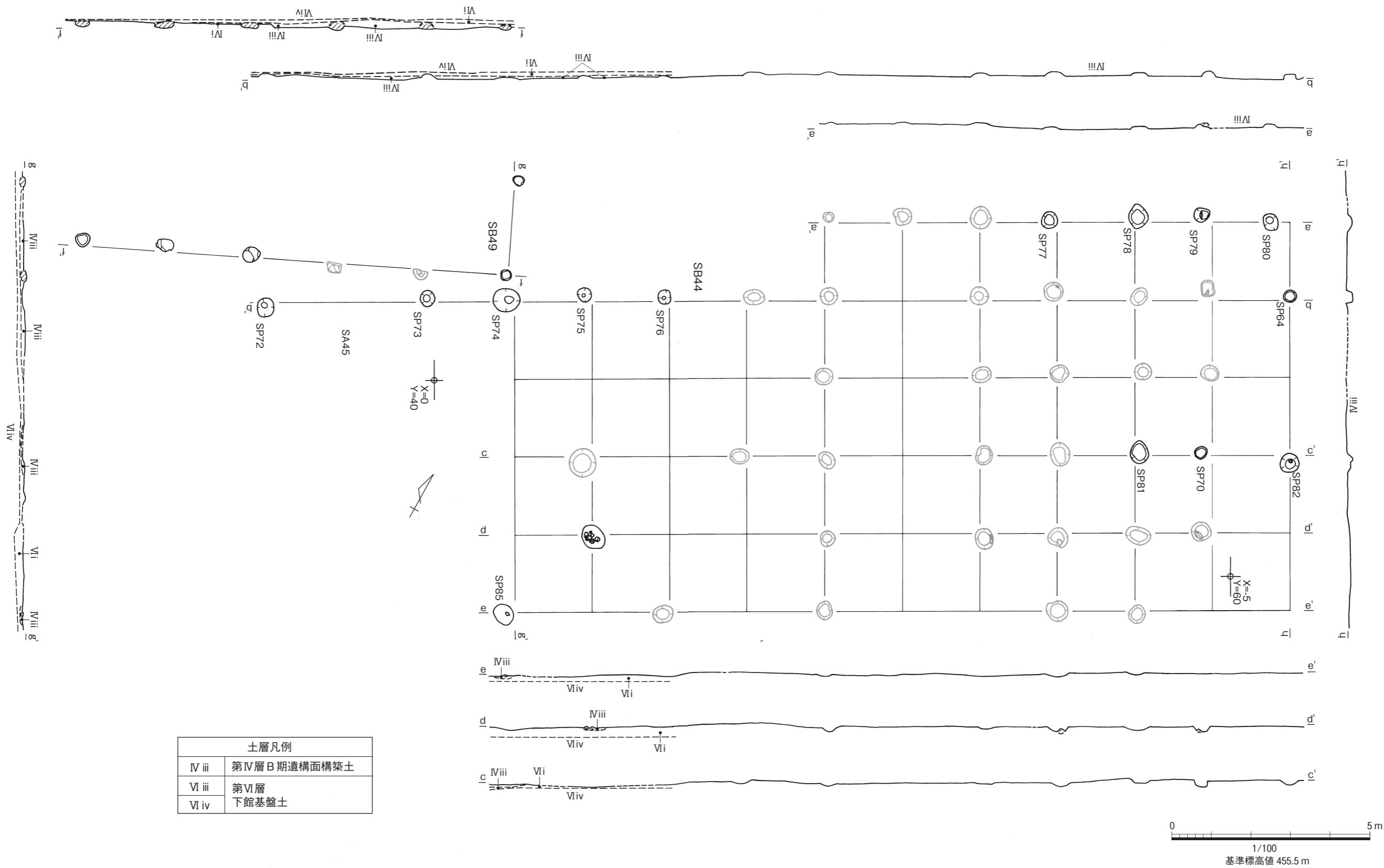
(1) 級石建物跡

礎石建物跡 SB 44 1976～78年度調査において、X座標3.9～−5.9、Y座標42～61.5の範囲で礎石建物跡SB 44を検出している。桁行10間、19.5m（10.8間）、梁行5間、7.8m（4.3間）の東西棟の建物である。北辺東側に6間×1間の張り出しがある。桁行梁行とも柱間は、全て1.95m（6.4尺）等間であり、主軸はY=0.0°−Sを測る。

今回の検出範囲はX座標−5.85～3.9、Y座標42～61.5の一部である（第42図）。礎石根石跡2ヶ所、礎石抜き取り穴跡11ヶ所を確認した。検出面は第Ⅳ層B期遺構面構築土〈IV iii層〉である。桁



第41図 2002年度II地区調査断面図 縮尺1/80



第42図 磁石建物跡 SB 44・SB 49 実測図 縮尺 1/100 (薄いラインは1978年度調査範囲を示す。)

行の南から1列目の西端及び南から2列目の西から2つ目の柱位置では、礎石根石跡を確認した。抜き取り穴跡11ヶ所については1976～78年度調査において完掘している。梁行の最東端列については、抜き取り穴跡底面が第Ⅳ層B期遺構面構築土〈Ⅳ iii層〉であることを確認した。

礎石建物跡 SB 49 1976～78年度調査において確認した礎石建物跡SB 49の再検出を行った。今回の検出範囲はX座標23.5～33、Y座標26.5～34.7である。主軸はY-6.5°-Eを測る。礎石5石を確認した。そのうち西端の2石については、礎石下端が第VI層下館基盤土〈VI i層〉に埋まっていることを確認した。

(2) その他の遺構及び整地土層出土遺物

第VI層下館基盤土〈VI iii層〉(第43図の141・142) 141は青磁の碗である。体部外面に鎬蓮弁文を施す。ガラス質の明緑灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を含む。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B1類に属し、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

142は八尾焼の甕である。口縁端部をN字状に折り曲げており、体部は火膨れしている。胎土は気泡を含み、密である。色調は黄褐色を呈する。第2群甕b類に属する。

土坑 SX 49(第43図の143～146) 143～146は土師器の皿である。143はT-8類に、144はR-5類に、145・146はR-1類に属する。144～146は胎土に砂粒と石英粒を含み、密である。146は口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

柱穴跡 SP 23(第43図の147) 147は土師器の皿であり、T-6類に属する。口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

2. 遺構出土遺物

第III層旧耕作土〈III i層〉(第43図の148・149) 148は青磁の碗である。体部外面に鎬蓮弁文を施す。ガラス質の明緑灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を含む。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B1類に属し、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

149は山茶碗の片口鉢である。体部が直線的に開き、口縁端部は断面四角形を呈する。内外面に輶轆回転ナデで調整痕が残るが、全体的によく摩耗している。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。

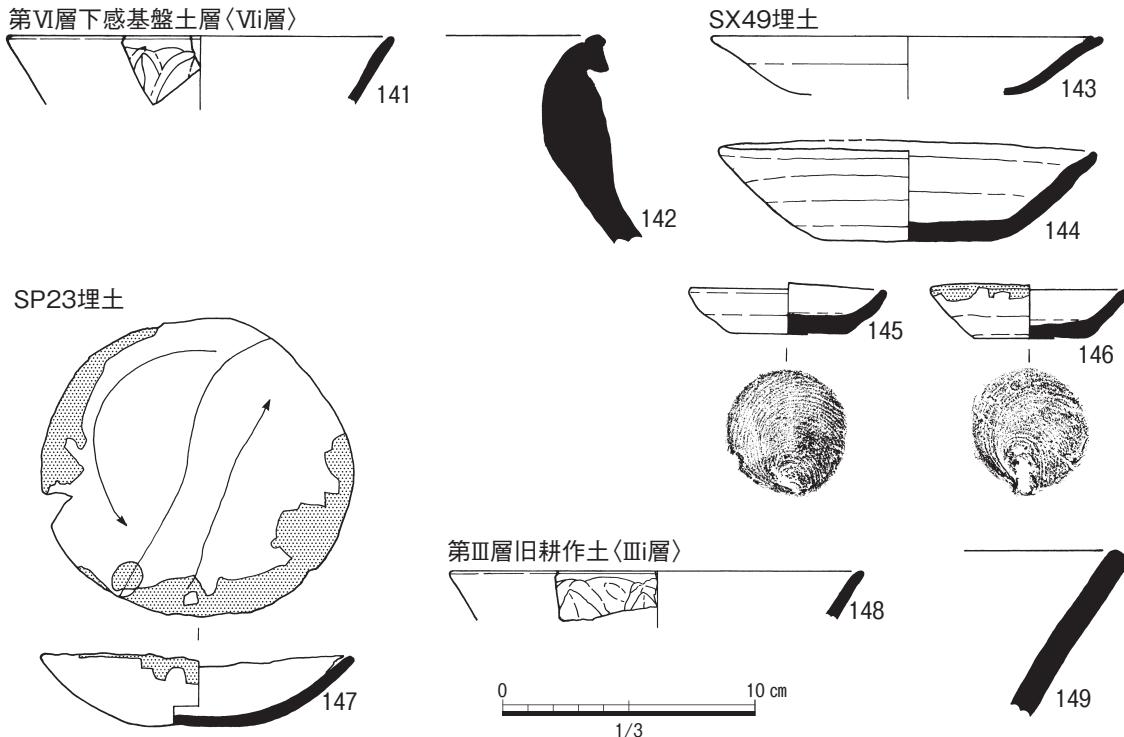
第25表 2002年度Ⅱ地区調査 建物跡計測表

遺構 No.	桁行柱間	梁行柱間	桁行(cm)	桁行(間)	梁行(cm)	梁行(間)	平面積(m ²)	主軸
SB 44	10	5	1950	10.8	975	5.4	190.125	Y-0.0°-S
SB 49	-	-	-	-	-	-	-	Y-6.5°-S

第26表 2002年度Ⅱ地区調査 土坑計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物					備考
									国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
SX 48	-3.00	42.20	不整形	166	115	24	455.162	褐色粘質土 白色粒・橙色粒・炭化物	-	2	-	-	-	-
SX 49	0.40	61.40	楕円形	114	112	38	455.169	-	17	-	-	-	-	-
SK 57	2.33	32.52	楕円形	100	45	55	454.812	黒褐色粘質土 地山ブロック混	-	-	-	-	-	-



第43図 2002年度Ⅱ地区出土遺物実測図 縮尺1/3
(矢印はナデ方向を、■は煤・タール付着範囲を示す。)

尾張型第6型式に属し、13世紀前半のものである。

3. 小結

今回の調査では礎石建物跡SB 44と礎石建物跡SB 49の前後関係の確認を目的とした。これについては、遺構検出面である第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉上面において、礎石建物跡SB 44礎石が抜き取られており、礎石建物跡SB 49礎石が埋まっていることから、SB 44よりSB 49が先行すると判断した。これに伴い、これまでの「SB 44（A期建物）の方がSB 49（B期建物）より古い」としていた調査結果が覆ることとなった。建物の時期変遷については第4章第3節で詳述する。

第7節 2003（平成15）年度Ⅰ地区調査

今回の調査は礎石建物跡SB 41の立体的表示工に伴い、遺構位置再確認および礎石建物跡SB 41～SB 42間の渡り廊下遺構の有無の確認を目的として、礎石建物跡SB 41東部分周辺において調査を行った（第44図）。調査範囲はX座標18.5～34、Y座標26.5～36.5、調査面積は約150m²である。

調査では、礎石建物跡2棟（第27表）、古錢埋納遺構1基、溝跡2条（第28表）を確認した（第44図）。層序は上層より、第I層表土〈I i層〉〈I ii層〉、第II層土地改良土、第III層旧耕作土〈III i層〉〈III ii層〉〈III iii層〉〈III iv層〉、第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉、第VI層下館基盤土〈IV ii層〉〈IV iii層〉〈VI iv層〉、第VII層地山を確認した。

掘削は第III層旧耕作土までを重機掘削とし、それ以下を人力により行った。国史跡という性格上、第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉面上で掘削を終え、それより下層はトレーナー掘削に止めた。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

(1) 磯石建物跡

磯石建物跡 SB 41 1976～78年度調査において、X座標23.5～33、Y座標21.4～34.7の範囲で磯石建物SB 41を検出している。桁行6間、13.18m(43.5尺)、梁行4間、9.70m(32.0尺)の東西棟の建物である。桁行柱間は、東より1.97m(6.5尺)、1.97m(6.5尺)、2.42m(8尺)、2.42m(8尺)、2.42m(8尺)、1.95m(6.5尺)であり、梁行柱間は北より1.95m(6.5尺)、3.00m(10尺)、2.70m(9.0尺)、1.95m(6.5尺)である。主軸はY-0.0°-Sを測る(第27表)。

今回の検出範囲はX座標23.5～33、Y座標26.5～34.7である(第45図)。磯石跡9石、磯石根石跡2ヶ所、磯石抜き取り穴跡4ヶ所を確認した。桁行の南から2～4列目では、磯石跡9石が第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉により埋められている状況を確認した。桁行の南から1列目では、磯石根石あるいは磯石抜き取り穴跡でしか柱位置を確認できなかった。南から5列目の柱位置では、第III層旧耕作土〈III iv層〉が厚く堆積し、第IV層B期遺構面構築土〈IV iii層〉及びSB 41磯石跡を確認することができなかった(第45図)。

磯石建物跡 SB 64 X座標22.0～29.9、Y座標26.5～33.1の範囲で磯石建物跡SB 64を検出した。建物は調査区西へ伸び、全体形状は不明である。確認した範囲では、桁行3間、6.6m(3.6間)、梁行3間、7.6m(4.2間)の東西棟の建物跡である。桁行柱間は、北より4.3m(7尺)等間であり、梁行柱間は北より2.85m(9.4尺)、2.25m(7.4尺)、2.50m(8.3尺)である。主軸はY-2.0°-Sを測る。磯石建物跡SB 41の磯石跡が残る状態で磯石建物跡SB 64は磯石根石跡及び磯石抜き取り穴跡しか確認できない状況より、磯石建物跡SB 41に先行する前身建物であると考えられる。

(2) 古銭埋納遺構

古銭埋納遺構 SP 15 X座標21.9、Y座標35.1に位置する。平面形は径56cmの円形であり、深さは41cmを測る。底部には20cm大の平坦な礫を据え、その上に、30～40cm大の礫2石、古銭、30cm大の礫2石の順で埋めている。時期を判断できる遺物の出土はなかった。底部の礫から上層は単層であり一度に埋めていること、埋土に大型の礫が含まれることから、意図的に埋めたと考えられる(第46図)。

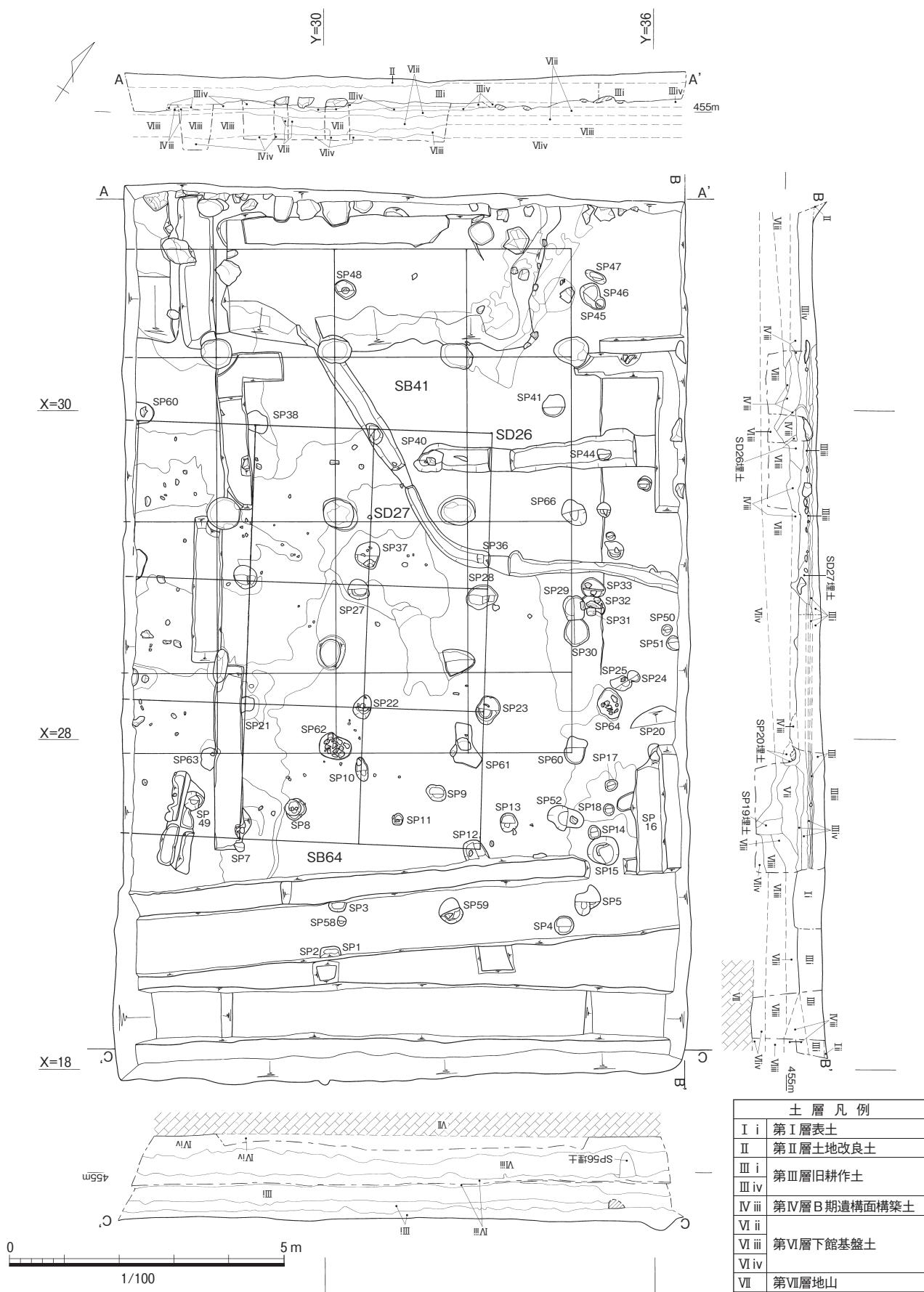
遺物は銅製品の古銭(150～153)が出土した。150は3枚が、151は3枚が、152は5枚が、153は10枚が鋳着したものである。緑青が全体を覆い、銭文字を判読することはできない。

(3) 溝跡

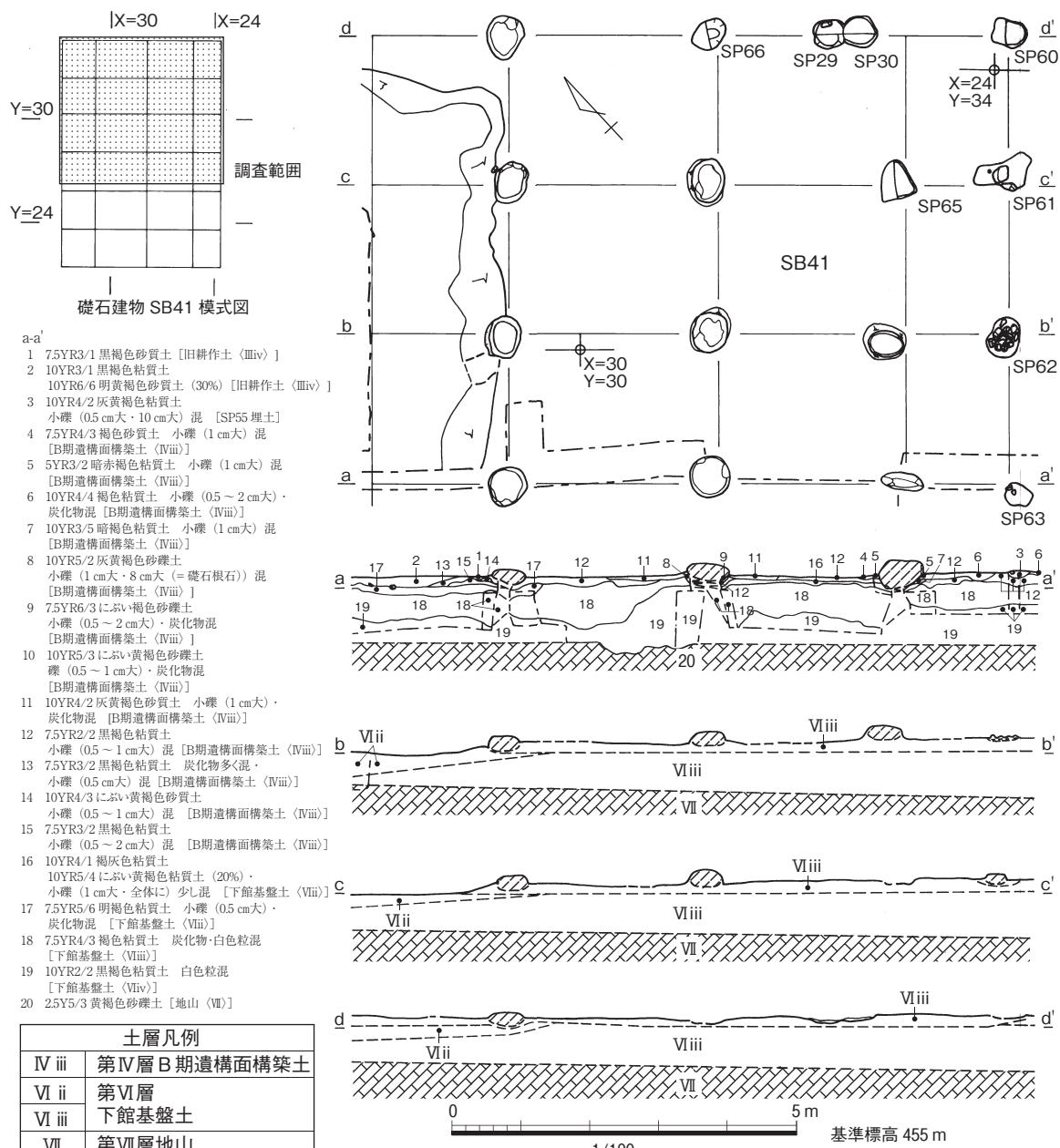
磯石建物跡 SB 41に伴う溝跡 SD 26 X座標28.85～29.7、Y座標32.1～36.5に位置する東西方向の溝である。東端は調査区の東へ続いており、今回の調査では確認していない。検出長4.4m、主軸はY-0.0°-Sを測る。埋土は小礫を含む褐灰色砂質土である。調査範囲での東端部レベル454.99m、西端部レベル455.057であり、東へ向かって傾斜している。掘り込み面が第IV層B期遺構面造成土〈IV iii層〉であり、主軸方向から、磯石建物跡SB 41に伴う溝と考えられる(第28表)。

(4) 近世以降の遺構

溝跡 SD 27 X座標26.8～31.7、Y座標29.5～36.5に位置する東西方向の溝である。東端は調査区の東へ続いており、今回の調査では確認していない。検出長9.3mを測る。第III層旧耕作土〈III iv層〉から掘り込まれ、近世以降の遺構と考えられる。



第44図 2003年度I地区調査平面図 縮尺1/100



第45図 硫石建物跡 SB 41 実測図 縮尺 1/100

第27表 2003年度I地区調査 建物跡計測表

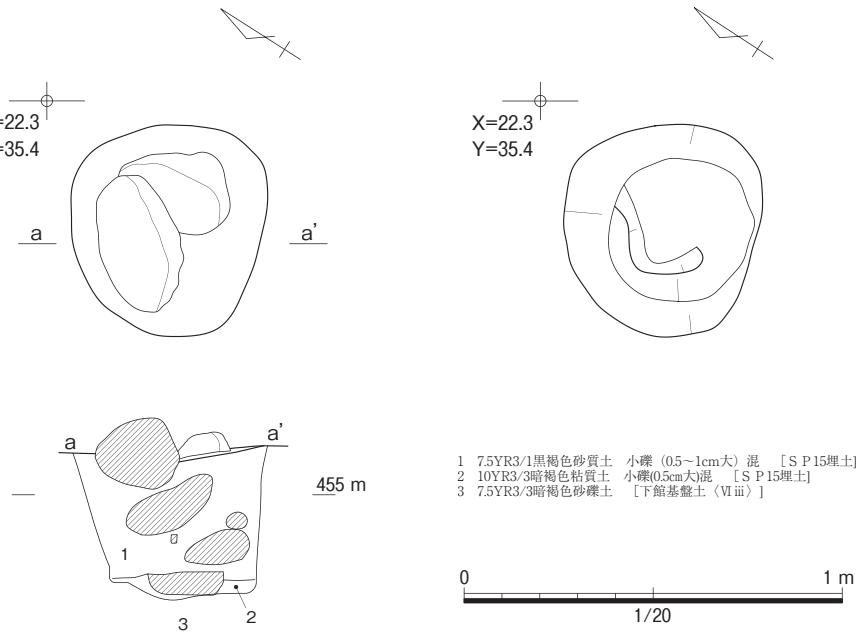
遺構 No.	桁行柱間	梁行柱間	桁行 (cm)	桁行 (間)	梁行 (cm)	梁行 (間)	平面積 (m ²)	主軸
SB 41	6	4	1305	7.3	915	5.1	119.407	Y -0.0° -S
SB 64	(3)	(3)	(655)	(3.6)	(760)	(4.2)	(49.78)	Y -2.0° -S

() 付の数字は確認できた範囲での数値。

第28表 2003年度I地区調査 溝跡計測表

(単位: cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋 土	主 軸	出土 遺 物				
								国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他の
SD 26	440	70	38	50.2	36	7.5 YR 4/1 褐灰色砂質土 0.5 ~ 2 cm大の小礫混	Y -0.0° -S	-	-	-	-	2
SD 27	930	46	15	32.2	33	10 YR 3/1 黑褐色砂質土 炭化物混		-	-	-	-	-



第46図 2003年度I地区調査 古銭埋納遺構 SP 15 実測図 縮尺1/20

2. 遺構外出土遺物

第III層旧耕作土〈III iv層〉(第47図の154～158) 154～156は土師器の皿である。154はT-1類に、155・156はT-6類かT-7類に属する。154は胎土に砂粒を、155は胎土に白色砂粒を含み、密である。156は口縁部内外面に煤・タールが付着しており、灯明皿として使用したと考えられる。

157は瓦器の火鉢である。体部内外面に籠削り調整痕が残る。口縁上部外面にスタンプ文の菊花文と菊葉文を2本の貼付突線の間に施す。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。色調は断面が浅黄橙色を、表面が褐灰色を呈する。第II類に属する。

158は中国製陶磁器の天目茶碗である。口唇部が屈曲してくびれ、口縁端部は外側に伸びる。内外面に褐色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は褐灰色を呈する。

第III層旧耕作土〈III ii層〉(第47図の159) 159は山茶碗の碗である。器壁が薄く、口縁部が直線的に開く。内外面に轆轤回転ナデで調整痕が残る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。東濃型山茶碗大洞東1～脇の島3に属し、15世紀前半のものである。

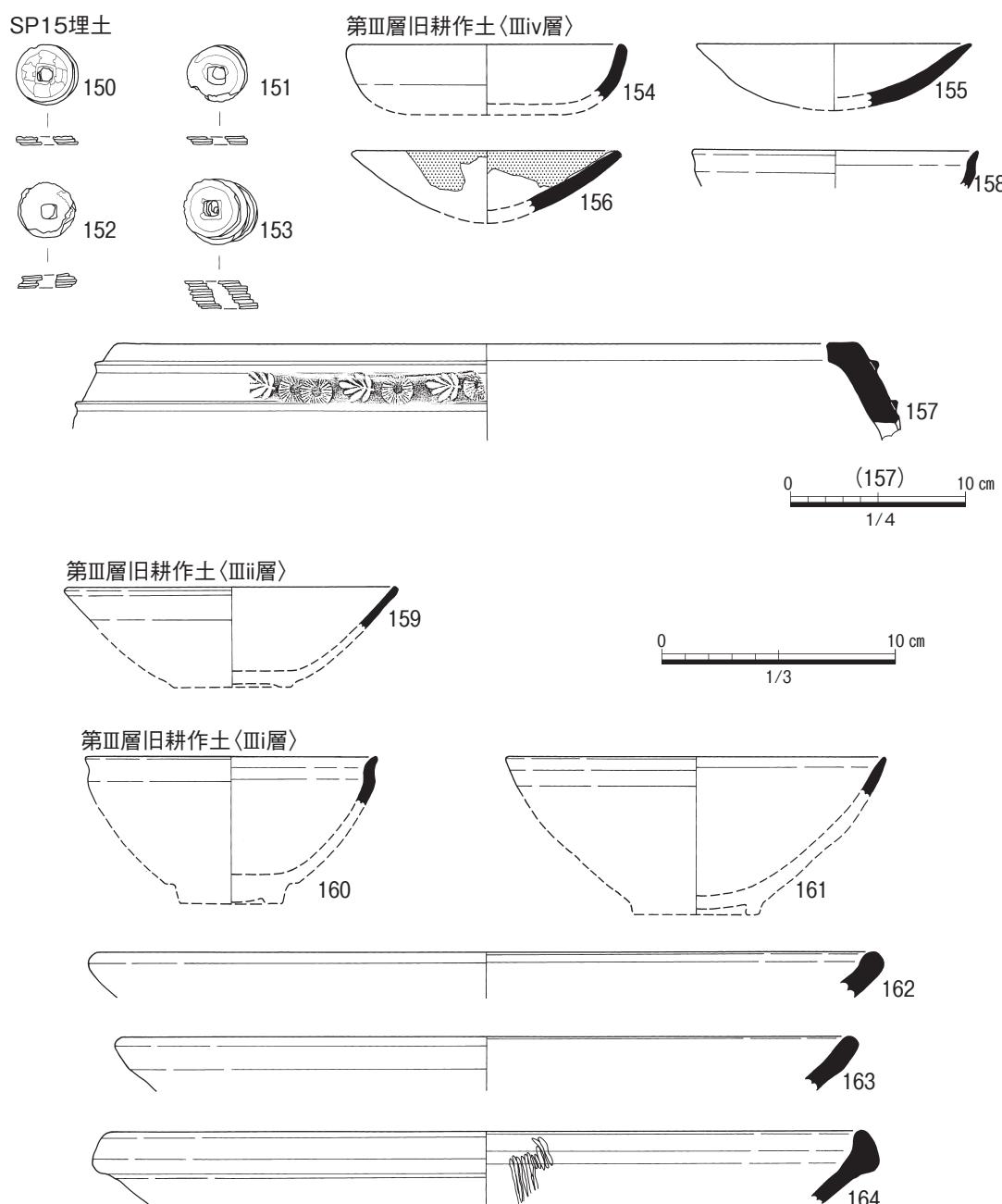
第III層旧耕作土〈III i層〉(第47図の160～164) 160～164は瀬戸美濃である。160は天目茶碗である。口唇部がくびれ、口縁端部は外反して細く伸びる。内外面に褐色と黒褐色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調はにぶい黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。161は平碗である。口縁部が直線的に開く。内外面に淡黄色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。162・163は直縁大皿である。162は口縁端部が丸く収まる。内外面に灰オリーブ色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。163は口縁端部がやや角張る。内外面に明黄橙色の灰釉を施すものの、二次被熱により白濁している。胎土は細かい気泡を少し含み、密である。色調は浅黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。164はすり鉢である。やや肥厚する口縁が上下に伸びて縁帯を形成する。内外面に暗赤灰色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は浅黄橙色を呈

する。大窯第3段階前半に属し、16世紀後半のものである。

3. 小結

礎石建物跡SB41は脇門跡を入って正面に当たり、同時代の館の構成にならうと台所と考えられる建物である。また、その前身建物と考えられる礎石建物跡SB64も検出した。

今回の調査目的の一つが、礎石建物跡SB41～42間の渡り廊下を確認することであった。1976～78年度調査では礎石建物跡SB42北側に礎石を確認しており、渡り廊下遺構は礎石建物跡SB41東辺から東へ延び、礎石建物跡SB42の北側に接続していると推定していた。今回は礎石建物跡SB41南辺から礎石建物跡SB42西辺に渡り廊下が接続するという想定のもと、遺構検出を試みた。しかし、



第47図 2003年度I地区出土遺物実測図 縮尺1/3 157は縮尺1/4
(■は煤・タール付着範囲を示す。)

礎石建物跡 SB 41 南辺は 1976～78 年度調査トレンチでは第Ⅶ層地山まで、1994 年度調査トレンチでは第Ⅵ層下館基盤土まで掘削されており、遺構面である第Ⅳ層 B 期遺構面構築土を確認することができなかった。したがってこれまでの調査知見から、渡り廊下遺構は礎石建物跡 SB 41 東辺の南より第 2～第 3 柱間から東へ延び、Y 座標 43 で南向きに折れて、SB 42 北辺に接続すると考えられる（付図）。

第 8 節 2003（平成 15）年度Ⅱ地区調査

今回の調査は北側土壠表示工及び北堀復元工に伴い、北側土壠跡の位置および北堀跡との層序関係を再確認するため 4 本のトレンチを設定して調査を行った。1 トレンチは X 座標 42～57.5、Y 座標 10～12 内で幅 1.5 m、調査面積 24 m²、2 トレンチは X 座標 44.5～54.5、Y 座標 21～22.5、調査面積 15 m²、3 トレンチは X 座標 42.5～60、Y 座標 27.5～31、調査面積 46 m²、4 トレンチは X 座標 41～57、Y 座標 37.7～41.5、調査面積 22 m²、合計調査面積 107 m² である（第 48 図）。

調査では、北堀跡（第 29 表）、北側土壠基底部跡、土坑 1 基（第 30 表）、溝跡 1 条（第 31 表）を確認したが、1998 年度調査で確認した基底部石列跡 SV 01 及び SV 02 の東への延長を確認することはできなかった。

層序は上層より、第Ⅰ層表土〈I i 層〉〈I ii 層〉、第Ⅱ層土地改良土、第Ⅲ層旧耕作土〈Ⅲ i 層〉〈Ⅲ ii 層〉〈Ⅲ iii 層〉〈Ⅲ iv 層〉、第Ⅳ層 B 期遺構面構築土〈Ⅳ iii 層〉、第Ⅵ層下館基盤土〈Ⅵ ii 層〉〈Ⅵ iii 層〉〈Ⅵ iv 層〉、第Ⅶ層地山を確認した（第 49・50 図）。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

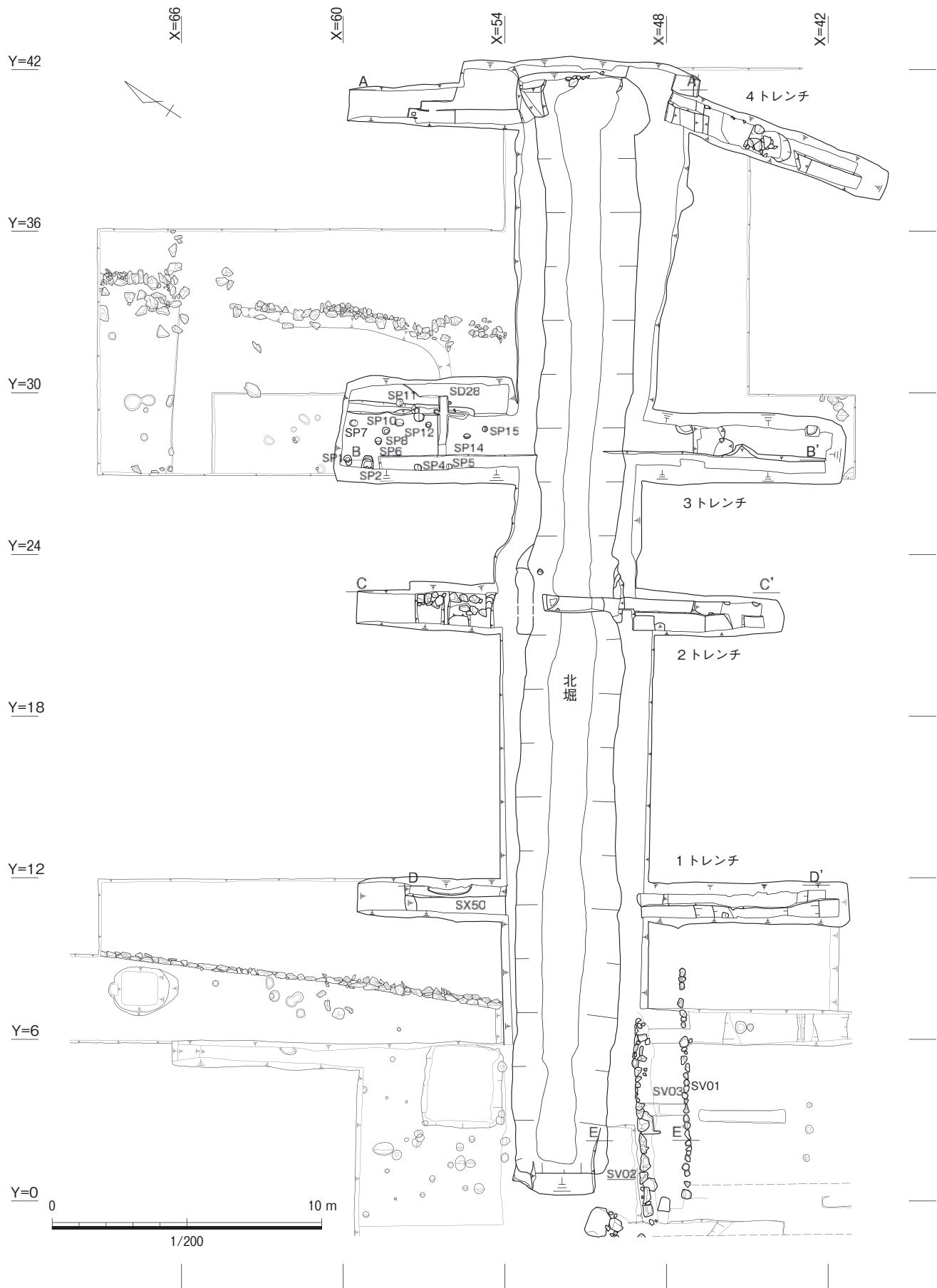
（1）堀跡

北堀跡 各トレンチ平面において検出した（第 25 表）。主軸は Y -0.5° -S である。1976～78、1994、1998 年度に調査が行われており、埋土は 2・4 トレンチ畦以外は掘削されている。埋土は上層より人為的埋土、自然堆積埋土の 2 つに大別された。人為的埋土は 2 トレンチ C-C' では第 12・13 層、4 トレンチ A-A' では第 11～17 層にあたり、自然堆積土は 2 トレンチ C-C' では第 14・15 層、4 トレンチ A-A' では第 17～19 層にあたる。今回の調査では北堀跡埋土からの遺物の出土はなかった。

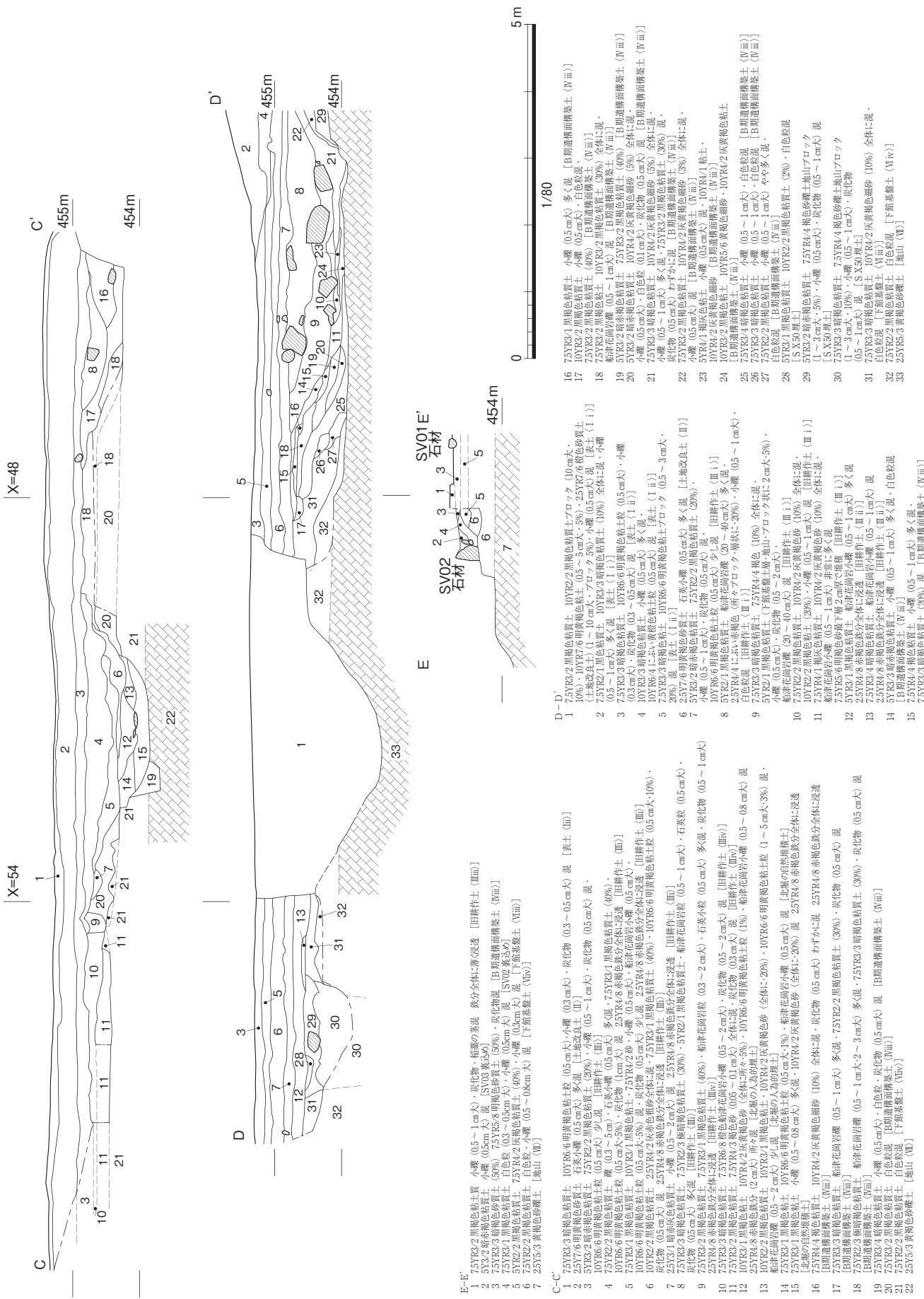
北堀跡は、西堀跡・南堀跡と同じく、館を整備した時期に掘削したと考えられる。埋め戻しの時期については近世期の耕地化の際と考えられる。これは、1994 年度調査時に人為的埋土に館内の礎石や遺物を多く含む状況を確認しており、南堀跡の同質の埋土から近世期の遺物が出土したためである。北堀跡と南堀跡は、近世期の耕地化の際に館内の土砂を移動して埋め戻されたと考えられる。

（2）土壠基底部跡

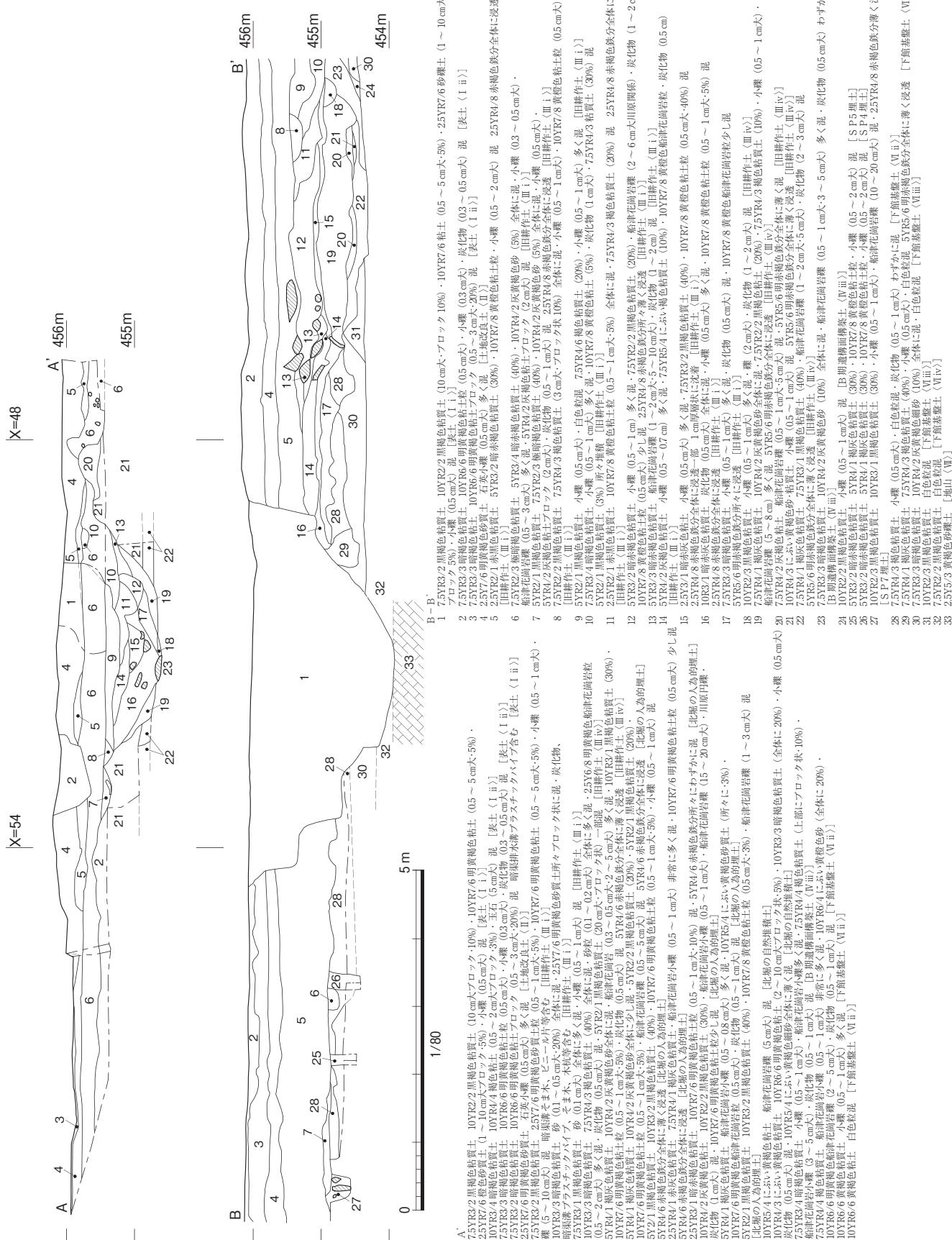
北側土壠基底部跡 1976～78、1998 年度調査では、北側土壠基底部石列跡 SV 01・SV 02 を、北堀西跡端で確認した。SV 01 は土壠基底部南側石列跡であり、Y 座標 0.4～9.0 の範囲で確認している。SV 02 は土壠基底部北側石列跡であり、Y 座標 0.1～3.6 の範囲で確認している。土層から、SV 02 は SV 01 に先行したと考えている。今回の調査では、SV 01・SV 02 の東への延長は確認できなかったが、それぞれのトレンチで第Ⅳ層 B 期遺構面造成土〈Ⅳ iii 層〉を確認した。1 トレンチ D-D' では第 25～27 層に、2 トレンチ C-C' では第 16～19 層に、3 トレンチ B-B' では第 23・24 層に、4 トレンチ A-A' では第 20 層にあたる。



第48図 2003年度Ⅱ地区調査平面図 縮尺1/200(薄いラインは1977・1998年度調査で確認した遺構を示す。)



第49図 2003年度II地区調査断面図(1) 縮尺1/80



第50図 2003年度II地区調査断面図(2) 比尺1/80

第29表 2003年度II地区調査 堀跡計測表

(単位:cm)

堀名	形状	主軸	検出長	上場幅	下場幅	深さ	立ち上がり	出土遺物					備考
								国產土器	国產陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
北堀	箱堀	Y-0.5°-S	-	395	149	106	北32° 南37°	17	4	1	-	3	断面D-D' Y座標 12ラインで計測

のことから、北側土堀跡には本来はSV01が伴っていたものの、第IV層B期遺構面造成土〈IV iii層〉の上部とともに削平を受け、1~4トレンチではその下部しか確認できなかった可能性を想定できる。SV01に先行したと考えているSV02の痕跡については確認することはできなかった。

2. 遺構外出土遺物

第III層旧耕作土〈III iv層〉(第51図の165~169) 165・166は土師器の皿である。ともにT-7類に属する口縁部に指押さえ痕が残る。

167は青磁の壺瓶類である。体部破片である。器形は胴部の一部がくびれる袋物であり、くびれ接合部から上位の部分の破片である。下側断面が接合面であり、漆による補修痕が残る。外面には接合部から上部に向かって鎬蓮弁文を施す。内外面にガラス質の明緑灰色の釉を施す。外面の釉はやや白濁し、気泡を多く含み、大きな貫入が入る。内面の釉はガラス質透明であり、強い火を受けて所々剥落している。胎土は黒粒、気泡を僅かに含む。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系に属し、14世紀代のものである。接合はしないが、1997年度調査報告第40図7の遺物と同一個体と考えられる。

168は山茶碗の碗である。器壁が薄く、口唇部は僅かにくびれ、口縁端部は丸い。内外面にロクロ回転ナデ調整痕が残るが、内面はよく摩耗している。胎土は気泡を少し含み、密である。色調は灰白色を呈する。東濃型脇の島3型式に属し、15世紀中頃のものである。

169は瀬戸美濃の平碗である。口唇部が僅かにくびれ、口縁部は外反して開く。内外面に浅黄色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。

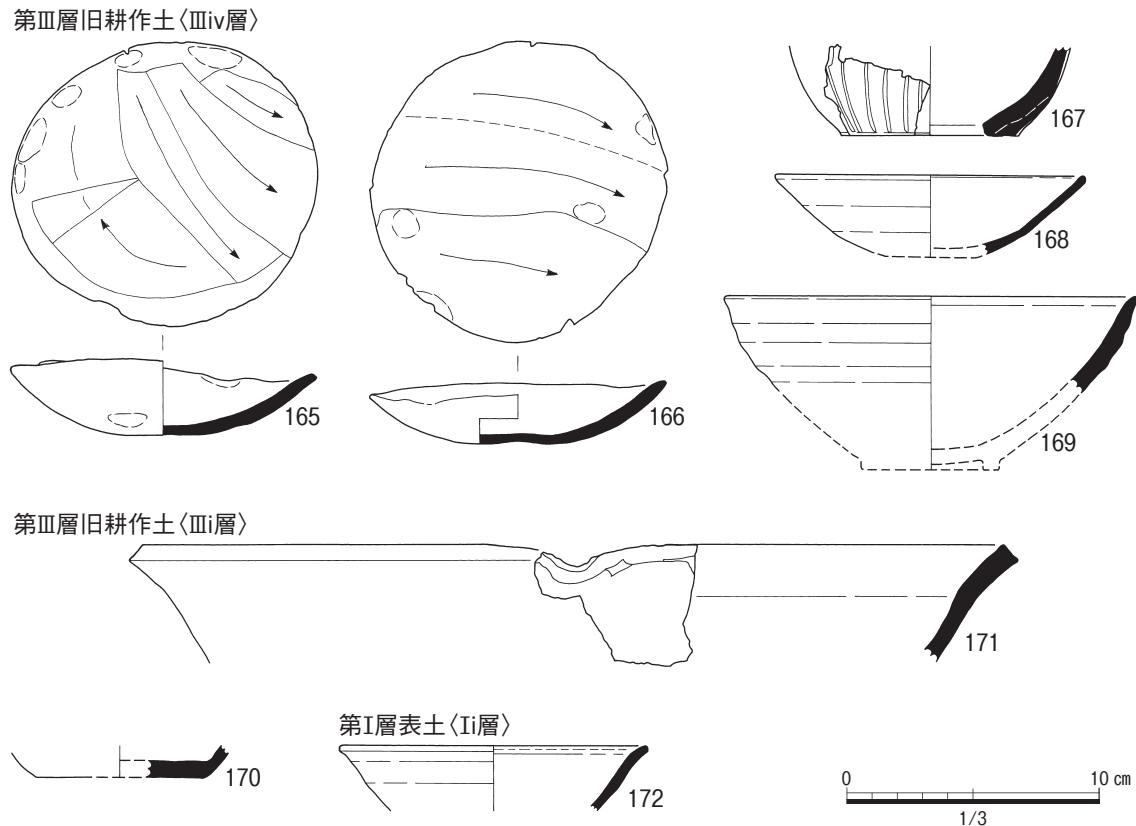
第III層旧耕作土〈III i層〉(第51図の170・171) 170は白磁の皿である。底部破片である。底部外面には静止籠削り痕が残る。釉を内外面に施すが、二次被熱により光沢は失われ、灰白色を呈して白濁している。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。色調はにぶい橙色を呈する。白磁1類に属し、13世紀中頃から14世紀前半のものである。

171は珠洲の片口鉢である。口縁端部は外傾し、断面は四角形を呈する。胎土は白色砂粒を少し含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は褐灰色を呈する。珠洲III期に属し13世紀中葉のものである。

第I層表土〈I i層〉(第51図の172) 172は白磁の皿である。全面に白濁した白色の釉を施した後、口縁端部内外面の釉を搔き取っている。胎土は気泡を含み、密である。色調は白色を呈する。白磁3類に属し、13世紀中頃から14世紀前半のものである。

3. 小結

今回の調査では、北堀跡及び北側土堀跡の再検出を行った。北堀跡について新たな知見を得ることは出来なかった。北側土堀跡については、これまでの調査で基底部石列跡を北堀跡西端で確認し、今回の調査でその基底部土層にあたる第IV層B期遺構面構築土〈IV ii層〉を各トレンチで確認すること



第51図 2003年度Ⅱ地区出土遺物実測図 縮尺1/3(矢印はナデ方向を示す。)

第30表 2003年度Ⅱ地区調査 土坑計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考
SX 50	56	11.60	-	164	-	-	-	第50図	-	1トレンチ

第31表 2003年度Ⅱ地区調査 溝跡計測表

(単位:cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主軸	出土遺物	備考
SD 28	276	44	29	34	19	-	Y-0.0°-S	-	1978年度調査で完掘

ができた。このことより北堀に沿って土塀を構築していたと想定される。

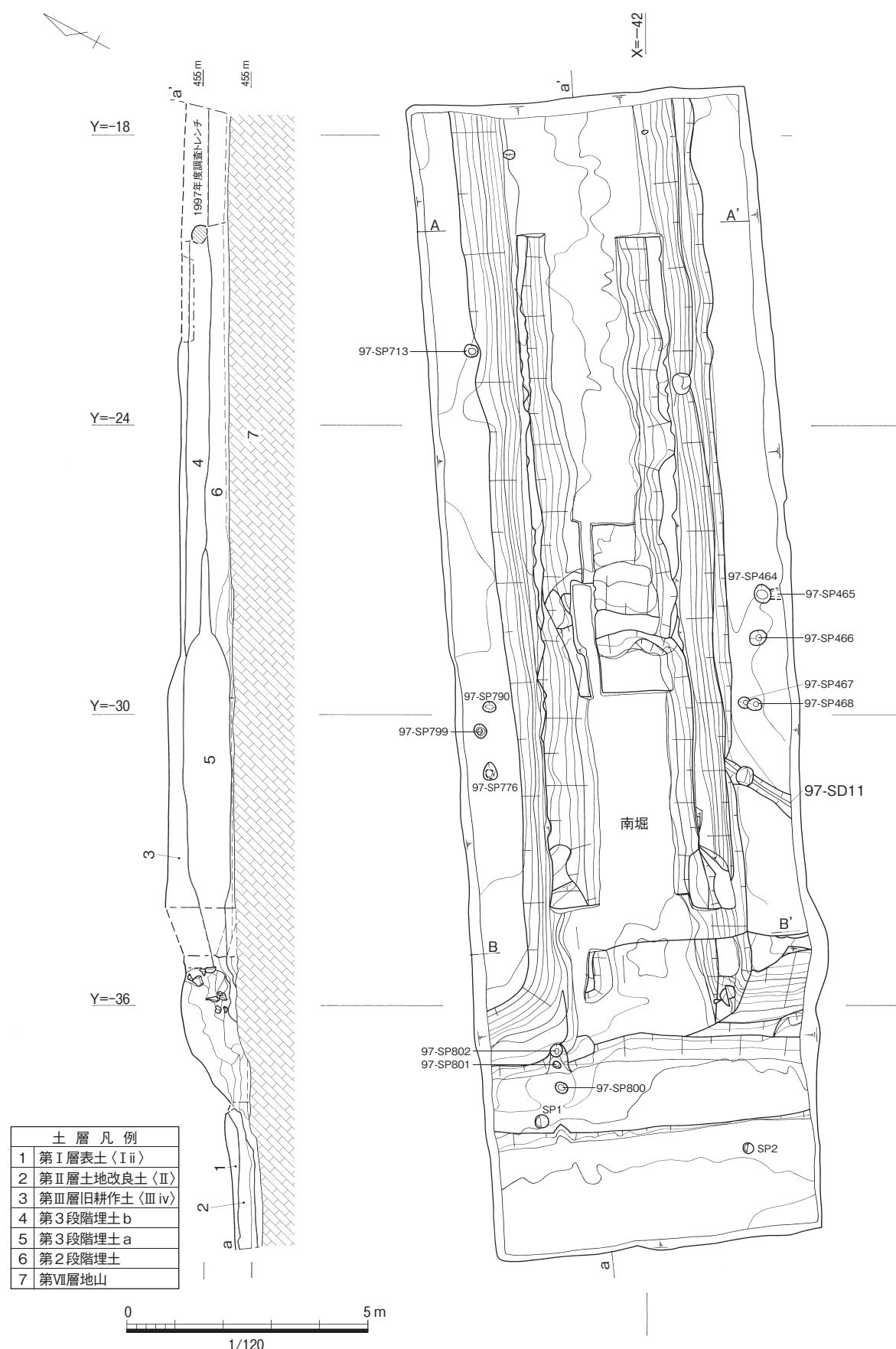
第9節 2004(平成16)年度調査

南堀整備工事に先立ち、南堀跡延長部において埋土掘削のための調査を行った。調査範囲はX座標-37~-45.5、Y座標-17~-41、調査面積110m²である。1997年度調査範囲と重複する(第52図)。

調査では、1997年度調査時に掘り残した南堀跡延長部埋土の掘削調査を行った(第32表)。

層序は上層より、第I層表土<I i層><I ii層>、第II層土地改良土、第III層旧耕作土<III ii層><III iv層>、南堀埋土、第VII層地山を確認した。

掘削は第III層までを重機により、南堀埋土を人力により行った。国史跡という性格上、埋土掘削は整備に必要なレベルまでとした。



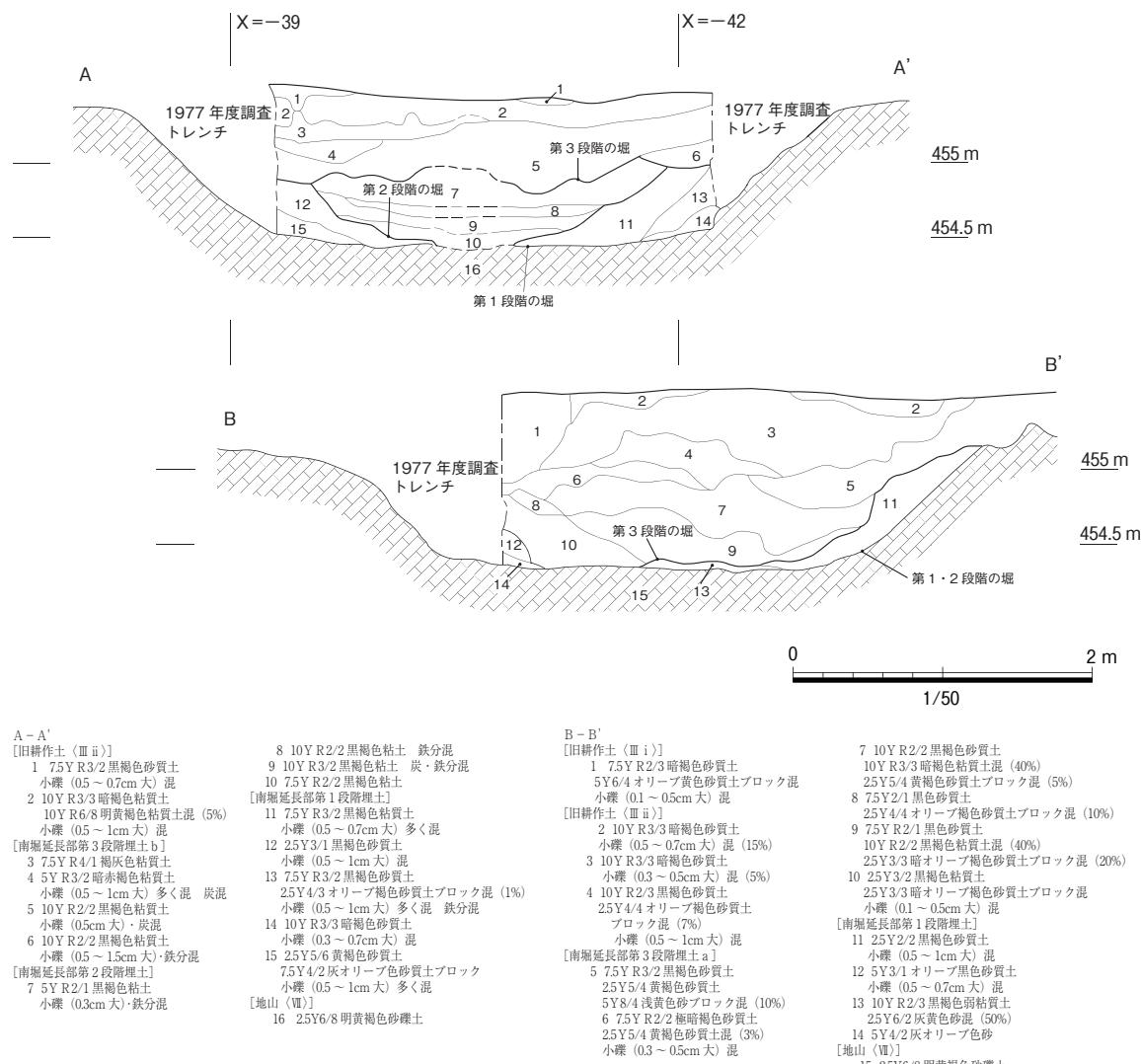
第52図 2004年度調査平面図 縮尺1/120

1. 遺構及び遺構内出土遺物

(1) 堀跡

南堀 X座標-38~-44、Y座標-17~-37の範囲で検出した。検出長は20m、主軸はY-4.5°-Nである。1994年度調査では南堀は大きく新旧2時期あり、細かい掘り込みを合わせると6段階の変遷を確認している。1997年度調査では南堀跡延長部において3段階の変遷を確認しており、今年度調査でも3段階の堀の変遷を再確認し、3段階目、2段階目の堀埋土を完掘した(第53図、第32表)。

1段階目の堀は地山を掘り込んで造っている。A-A'断面図の第11~第15層、B-B'断面図の第11層~第14層が使用期間中に自然堆積した埋土である。2段階目の堀は1段階目の堀の自然堆積土を掘り込んで造っている。A-A'断面図の第7層~第10層が使用期間に堆積した埋土である。3段階目の堀は、2段階目の堀の自然堆積土を掘り込んで造った。自然堆積にあたる土層は確認できなかった。A-A'断面図の第3~6層、B-B'断面図の第5~10層が人為的埋土である。1994年度調査の5段階目、1997年度調査の3段階目と対応する。埋土は土質により下層のa、上層のbに分けることができる。



第53図 2004年度調査南堀跡断面図

第32表 2004年度調査 堀跡計測表

(単位:cm)

堀名	形状	主 軸	検 出 長	上 場 幅	下 場 幅	深 さ	立ち上がり	出土遺物					備 考
								国産 土器	国産 陶器	中国産 陶磁器	鉄製品	その他	
南堀	箱堀	Y -4.5° -N	2000	465	320	85	北40° 南45°	56	57	7	7	3	断面A-A' Y座標 -19.8 ラインで計測

遺物は縄文土器1点、須恵器1点、土師器52点、瓦器3点、青磁1点、白磁2点、青花2点、瀬戸美濃焼13点、珠洲焼30点、八尾焼9点、鉄製品5点、石製品1点、近世陶器1点が出土した。

第1段階の堀の自然堆積土から土師器の皿2点が出土した。

第2段階目の堀の自然堆積土からは、土師器の皿7点(173・174)、瓦器の風炉か火鉢2点、青磁の碗1点、白磁の皿1点、瀬戸美濃焼の卸皿1点(175)、折縁深皿1点、珠洲焼すり鉢2点(176・177)、甕8点(178)が出土した。

173・174は土師器の皿である。173はT-2類に、174はR-5類に属する。

175は瀬戸美濃の卸皿である。口縁端部を折り返して内面に小突起を形成し、口縁上面はわずかに窪む。体部上方内外面に灰釉を施すが、二次被熱により光沢は失われ、オリーブ灰色を呈する。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。

176～178は珠洲である。176はすり鉢である。内面には原体6条以上の卸目を施し、よく摩耗している。口縁端面が外傾し、断面形が四角形を呈する。胎土は白色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀代のものである。177はすり鉢である。片口部分の破片である。内面には原体12条の卸目を施す。胎土は白色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀代のものである。178は甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は丸みを持つ。体部外面には3cm幅に8条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は白色粒を含み、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅲ期に属し、13世紀中葉のものである。

第3段階の堀の人為的埋土aからは、縄文土器1点、土師器の皿8点(179)、瓦器の風炉か火鉢1点、青磁の碗1点(180)、瀬戸美濃の平碗1点、尊式花瓶1点、珠洲の甕5点(181)、近世陶器1点(182)、鉄製品の釘1点が出土した。

179は土師器の皿であり、T-6類かT-7類に属する。口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

180は青磁の碗である。底部破片であり、高台は断面四角形を呈する。体部外面に篦描き蓮弁文を施し、内面見込みには花卉文のスタンプを施す。ガラス質の緑灰色の釉を内外面に高台内面途中まで施す。釉は気泡を含み、貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B3類に属し、15世紀中頃のものである。2段階目の堀埋土、3段階の堀埋土a及びbから出土した3破片が接合した。

181は珠洲の甕である。口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部は断面はやや丸みを持つ四角形を呈する。体部外面には3cm幅に9条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は白色粒を含み、色調は暗灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀代のものである。

182は近世陶器の腰錆湯飲みである。腰部に丸みを持ち、底部と垂直方向に口縁部が立ち上がる。高台は断面四角形を呈する。胴部外面には四条の沈線を施す。内面と外面口縁部にはガラス質透明の

灰釉を施し、胴部から下方にかけて全面に鋳釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。連房第8小期に属し、18世紀後半のものである。

第3段階の堀の人為的埋土bからは、須恵器の広口壺1点、土師器の皿34点(183~186)、青磁の碗1点、白磁の皿1点、青花の碗1点(187)、皿1点(188)、瀬戸美濃焼の平碗1点、折縁深皿1点(189)、盤類2点、すり鉢3点(190~193)、珠洲焼のすり鉢3点(194・195)、甕12点(196・197)、八尾の甕9点(198・199)、石製品の石鍋1点(199)、鉄製品の釘4点が出土した(第55図)。

183~186は土師器皿である。183はT-2類に、184はT-5類に、185・186はT-6類に属する。185・186は胎土に石英粒を含む。186は口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

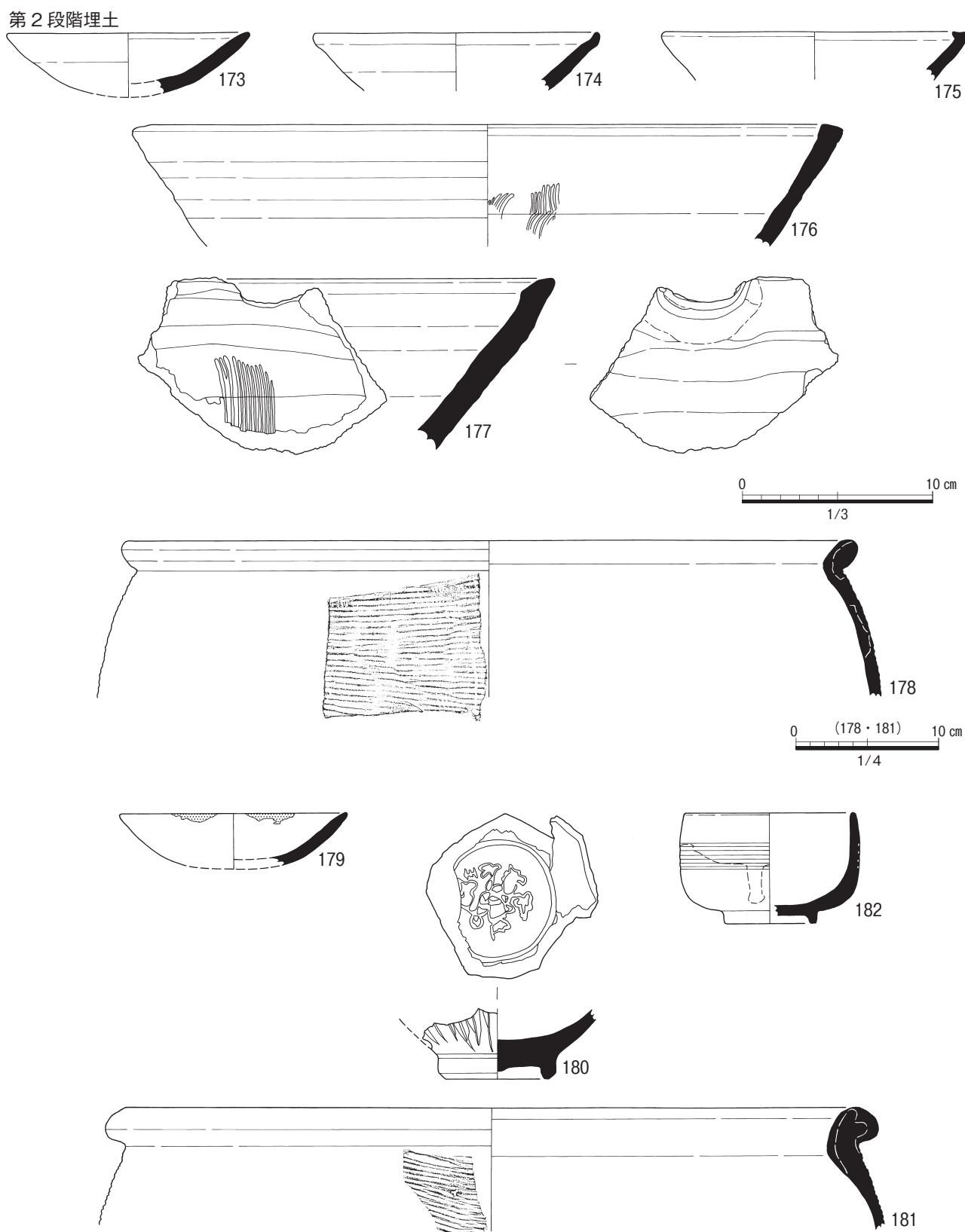
187・188は青花である。187は中国製染付碗である。体部は僅かに丸みを持ち、口縁部が外反する。外面には口縁部に界線を巡らせ、体部に唐草文を施す。内面は口縁部に界線を巡らす。透明釉を施し、釉は細かい気泡を含み、貫入が入る。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。染付碗B群に属し、14世紀末から15世紀中葉のものである。188は中国製染付皿である。腰部に丸みを持って開き、口縁部は外反する。外面には口縁部に界線を巡らせ、体部に唐草文を施す。内面は口縁部に界線を巡らす。染付皿B1群に属し、15世紀後半~16世紀中葉のものである。

189~192は瀬戸美濃である。189は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し、上端がわずかに窪む。内外面に灰赤色の鋳釉を施すが、二次被熱により釉はまだらに剥離している。色調は淡黄色を呈する。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。2段階目の堀埋土から出土した14破片と3段階目の堀埋土bから出土した2破片が接合した。190はすり鉢である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は内側に折り返される。内外面に暗紫灰色の鋳釉を施す。胎土は砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀後半のものである。191はすり鉢である。内面には原体8条以上の卸目を施す。口縁が上方に伸び端部は丸く收まり、口縁外側は浅く窪む。内外面に暗紫灰色の鋳釉を施す。胎土は砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。192はすり鉢である。口縁部外面が僅かに窪み、下端が水平方向に引き出される。端部は丸く收まる。内外面に暗紫灰色の鋳釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は黄橙色を呈する。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。

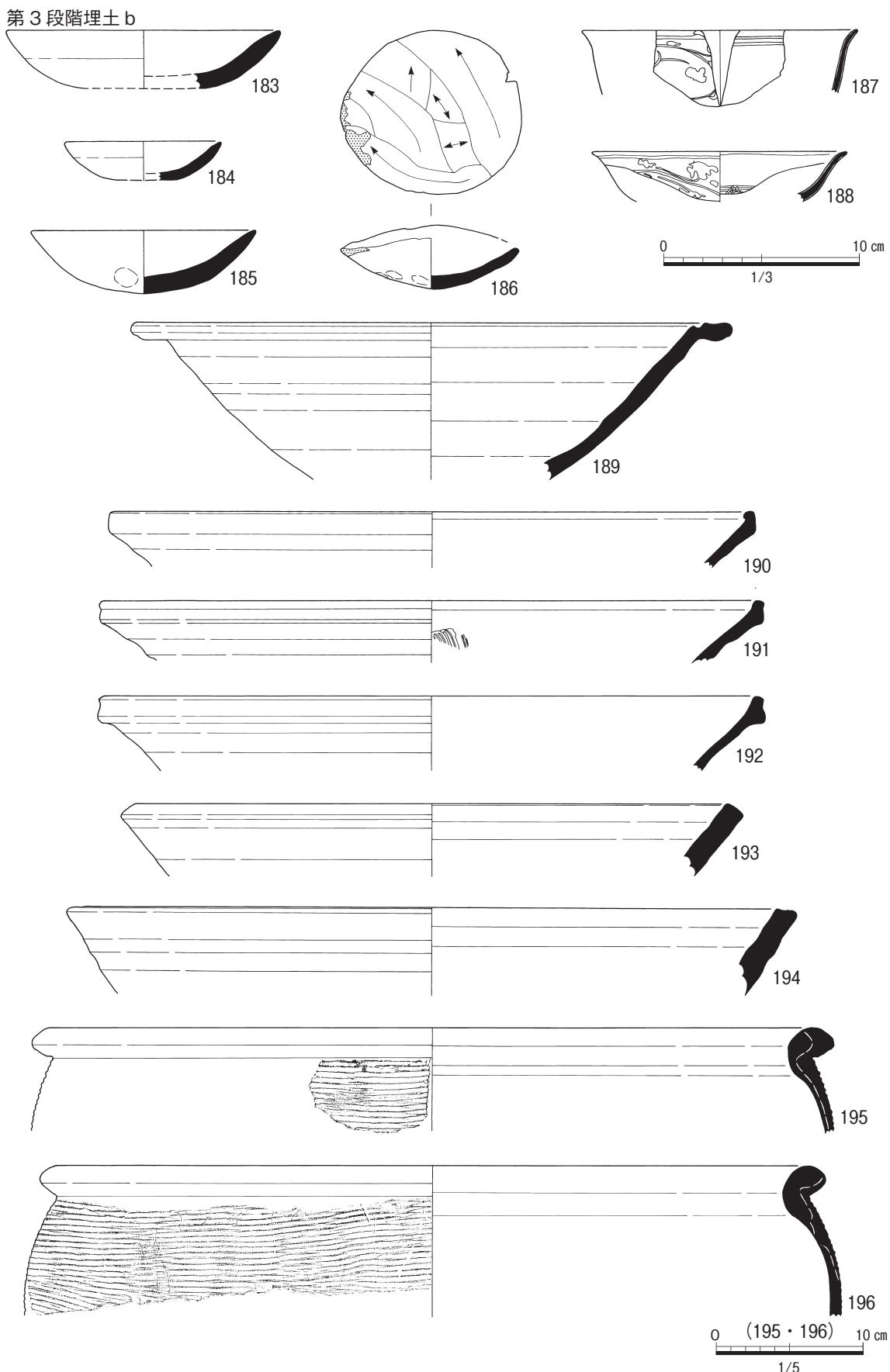
193~196は珠洲である。193はすり鉢である。口縁端面が外傾し、断面形が四角形を呈する。胎土は砂粒を含み、色調は灰色を呈する。珠洲III期に属し、13世紀中葉のものである。194はすり鉢である。口縁端面は水平であり、断面形が四角形を呈する。胎土は砂粒を含み、色調は灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。195は甕である。口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部は断面がやや丸みを持つ四角形を呈する。体部外面には3cm幅に7条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。196は珠洲の甕である。口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部は断面はやや丸みを持つ四角形を呈する。体部外面には3cm幅に6条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。1段階目の堀埋土から出土した4破片と3段階目の堀埋土bから出土した3破片が接合した。

197・198は八尾の甕である。ともに口縁端部をN字状に折り曲げる。色調は192が灰色を、193が明オリーブ灰色を呈する。ともに酒井重洋氏の分類による第1群甕Ac1類に属する。

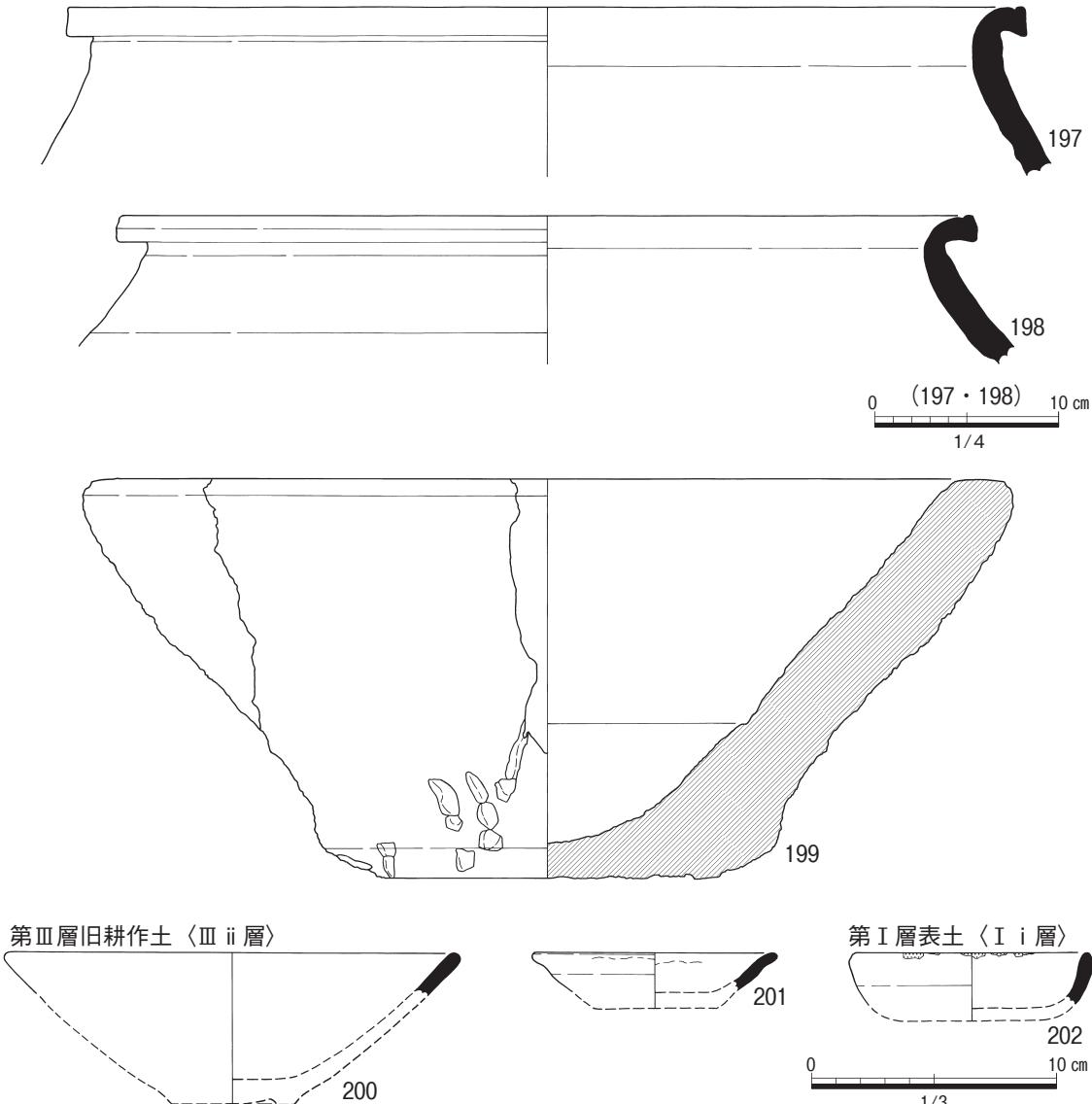
199は石製品の石鍋である。内面は摩耗し、全面に煤が付着する。外面には幅1.5cmの溝状の鑿状工具痕が残る。石材は安山岩である。



第54図 2004年度出土遺物実測図(1) 縮尺1/3 178・181は縮尺1/4
(は煤・タール付着範囲を示す。)



第55図 2004年度出土遺物実測図(2) 縮尺1/3 195・196は縮尺1/5
(矢印はナデ方向を、■は煤・タール付着範囲を示す。)



第56図 2004年度出土遺物実測図(3) 縮尺1/3 197・198は縮尺1/4
(は煤・タール付着範囲を示す。)

2. 遺構外出土遺物

第III層旧耕作土<III iv層>(第56図の200・201) 200・201は瀬戸美濃焼である。200は平碗である。口縁部が直線的に開く。内外面に浅黄色透明の灰釉を施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後IV期(古)に属し、15世紀中頃のものである。201は縁釉小皿である。口唇部がくびれ、口縁部が外反する。口縁部内外面に浅黄色透明の灰釉を施す。色調は浅黄橙色を呈する。古瀬戸後IV期(古)に属し、15世紀中頃のものである。

第I層表土<I i層>(第56図の202) 202は土師器の皿である。T-1類に属する。胎土に砂粒と石英粒を含む。口縁端部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

3. 小結

南堀は1994、1997、2002年度に調査を行っている。今年度の調査では南堀跡延長部の2段階目、3段階目の堀跡埋土を完掘した。これまでの調査も合わせ、出土遺物から埋戻し時期について検討する。1段階目の堀は今年度調査では掘削していない。これまでの調査で最も新しい年代を示す遺物は、

14世紀後葉～15世紀前半のものと考えられる珠洲V期のすり鉢(1997年度報告の遺物No.2)である。このため、15世紀前半まで使用したと考えられる。1994年度調査の1段階目(旧堀)、1997年度調査の1段階目と対応する。

2段階目の堀で最も新しい年代を示す遺物は、15世紀後半～16世紀初めのものと考えられる土師器の皿T-6類(1997年度報告の遺物No.9)である。2段階目の堀は少なくとも16世紀初めまで使用したと考えられる。1994年度調査の4段階目(新堀)、1997年度調査の2段階目と対応する。

3段階目の堀で最も新しい年代を示す遺物は、18世紀後半のものと考えられる近世陶器の腰錆湯飲み(181)である。3段階目の堀は、18世紀後半以降に埋めたと考えられる。

なお、第2章で述べているように、19世紀代の文化・文政年間に下館周辺一帯は大規模に耕地化されたことが分かっている。3段階目の堀が埋められたのも、この時である可能性が高い。また、青磁の碗(179)や瀬戸美濃の折縁深皿(188)は、それぞれ2段階目の堀埋土と3段階目の堀埋土から出土した破片が接合している。このため、耕地化の際には南堀埋土の攪拌があったものと考えられる。

また、橋に関わる遺構の確認はなかった。

第10節 2007(平成19)年度調査

西堀整備工事に先立ち、西堀跡箱堀(脇門より北側)、西堀跡薬研堀(主門より南側)において埋土掘削のための調査を行った。調査範囲は、箱堀においてはX座標33～54.5、Y座標-4～-11、薬研堀においてはX座標-4.5～-35、Y座標-2～-9.5、調査面積380m²である(第57図、第33表)。両調査地区とも1994年度調査と重複し、また薬研堀は1997年度調査範囲と、箱堀は1998年度調査範囲とも重複する。これまでの調査では、堀は館を整備した時期に設けたと考えている。

調査では、各年度調査に掘り残した堀埋土の掘削調査を行った。

層序は上層より、第I層表土〈I i層〉、第III層旧耕作土〈III ii層〉〈III iii層〉、西堀埋土、第VII層地山を確認した。

掘削は第I層を重機により、それより下層を人力により行った。国史跡という性格上、埋土掘削は整備に必要なレベルまでとした。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

(1) 堀跡

西堀跡箱堀 X座標28.4～52、Y座標-5.2～-10.2の範囲で検出した。検出長は23.38m、堀幅は最大部で上端4.56m、下端0.91mを測り、最深部での深さは1.43mを測る主軸はX-4.0°-Eである。

1994・1998年度調査では大きく3層の埋土を確認している。上層より旧耕作土、人為的埋土、自然堆積埋土である。今年度調査でも、第I層表土を重機掘削した後、同様に3層を確認した(第58図)。

箱堀は地山を掘り込んで造っている。地山と同質の砂層が最下層に厚く堆積しており、掘削後早くから堀は埋まっていたと考えられる(第58図a-a'断面の第14・15層、b-b'断面の第35～37層)。その上層に新たな自然堆積土層(第58図a-a'断面の第4～13層、b-b'断面の第30～34層)を確認できることから、埋まった堀の自然堆積土を掘り直し、a-a'断面第14・15層・b-b'断面第35層上面を堀底としていた時期があると考えられる。a-a'断面図の第2～5層、b-b'断面の18～29

層が人為的埋土である。堀外・堀内の両側からの流れ込み土層を確認できる。出土遺物が少なく、館整地土の入らない状況が確認できるため、館廃棄後の早い段階で埋められたと考えられる。

遺物は人為的埋土から縄文土器8点、土師器33点（203・204）、瓦器1点、瀬戸美濃焼2点、珠洲焼2点、八尾焼2点、鉄製品2点が出土した。203・204は土師器の皿である。どちらもT-5類に属する。

最も新しい年代を示す遺物は、14世紀後葉～15世紀前半のものと考えられる珠洲V期の珠洲の甕（1994年度報告の遺物No.157）である。

西堀跡薬研堀 X座標-37.2～-3.0、Y座標-4.0～-11.9の範囲で検出した。検出長は34.80m、堀幅は最大部で上端5.04m、下端0.24mを測り、最深部での深さは3.04mを測る主軸はX-0.0°-Eである。北端には方形の掘り込みを確認しており、南端は屈曲していることを確認している。1994・1997年度調査では大きく3層の埋土を確認している。上層より旧耕作土、人為的埋土、自然堆積埋土である。今年度調査でも、第I層表土を重機掘削した後、同様に3層を確認した（第59図）。

薬研堀は地山を掘り込んで造っている。地山と同質の砂層が最下層に厚く堆積しており、掘削後早くから堀は埋まっていたと考えられる（第59図a-a'断面の第7～13層、b-b'断面の第7～9層）。この土層は現在も風雨の影響を受け、すぐに崩れてしまう。しかし、堆積が堀内地区側に偏っていることから、崩れた堀の形状を整えて使用した時期があると考えられる。また、これまでの調査でも今回の調査でも、この砂層上面には堀底であった時の自然堆積土層を確認できない。したがって、崩れる堀を常に浚渫して堀の形状を整えながら使用していたと考えられる。

a-a'断面図の第2～6層、b-b'断面の2～6層が人為的埋土である。堀内地区側からの流れ込み土層を確認でき、出土遺物も少ないとから、館廃棄後の早い段階で土壌を崩して埋めたものと考えられる。

北端の箱堀状の掘り込みについては、過去の調査で完掘しており、薬研堀との関わりを検討することはできない。南端の屈曲部については、その埋土と薬研堀埋土との直接的な土層の繋がりを確認できない。しかし屈曲部の埋土と薬研堀人為的埋土の土質が似ることから、埋められたのは同時期と考えられる。

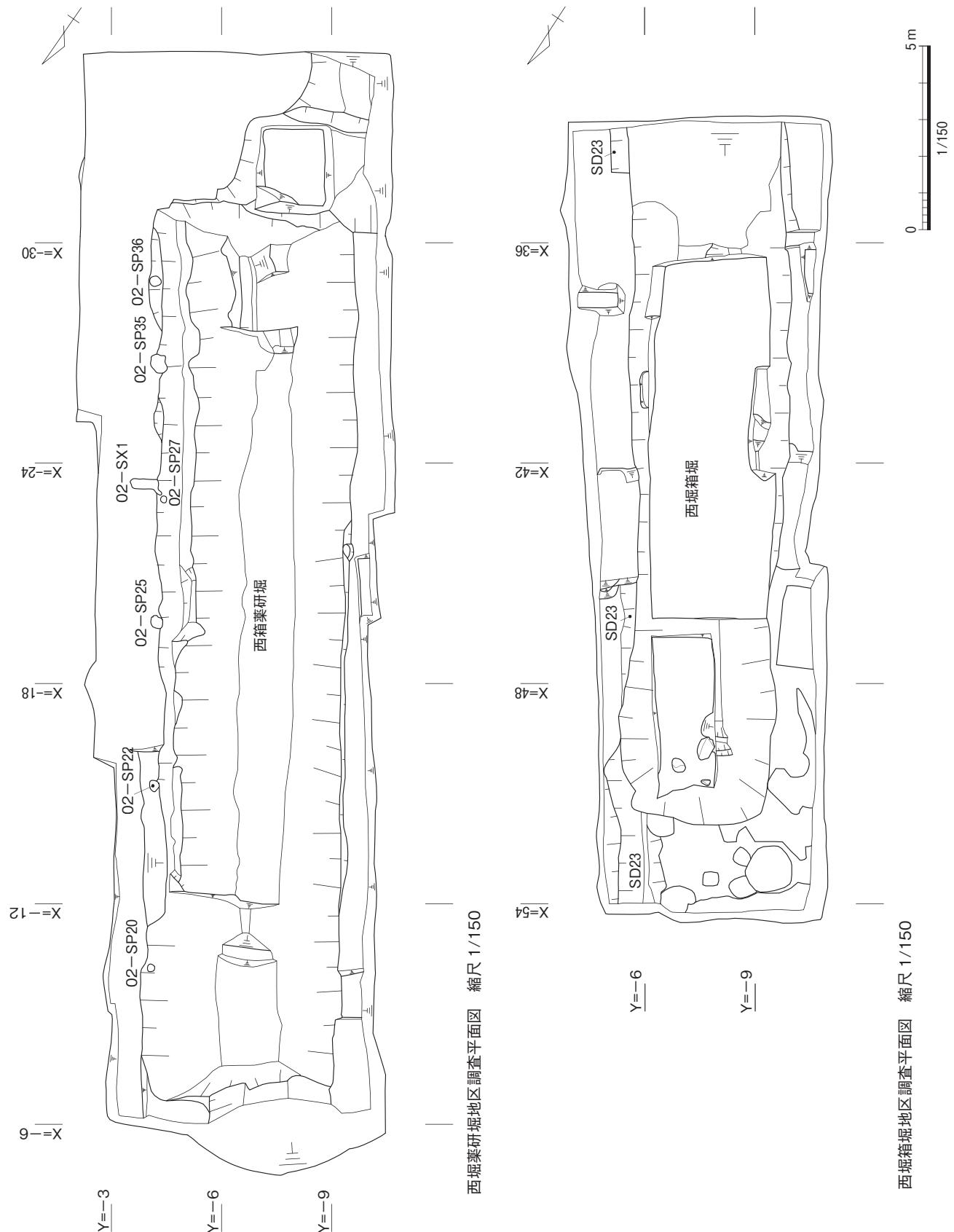
遺物は人為的埋土から縄文土器8点、土師器31点、瓦器1点、瀬戸美濃焼3点、八尾焼2点、青磁1点、白磁2点（205）、鉄製品5点、石製品1点、不明1点が出土した（第60図）。

205は白磁の皿である。全面にガラス質の白色釉を施した後、口縁端部内外面の釉を掻き取っている。釉は細かい気泡を含む。胎土は黒粒を含み、密である。色調は白色を呈する。白磁2類に属し、

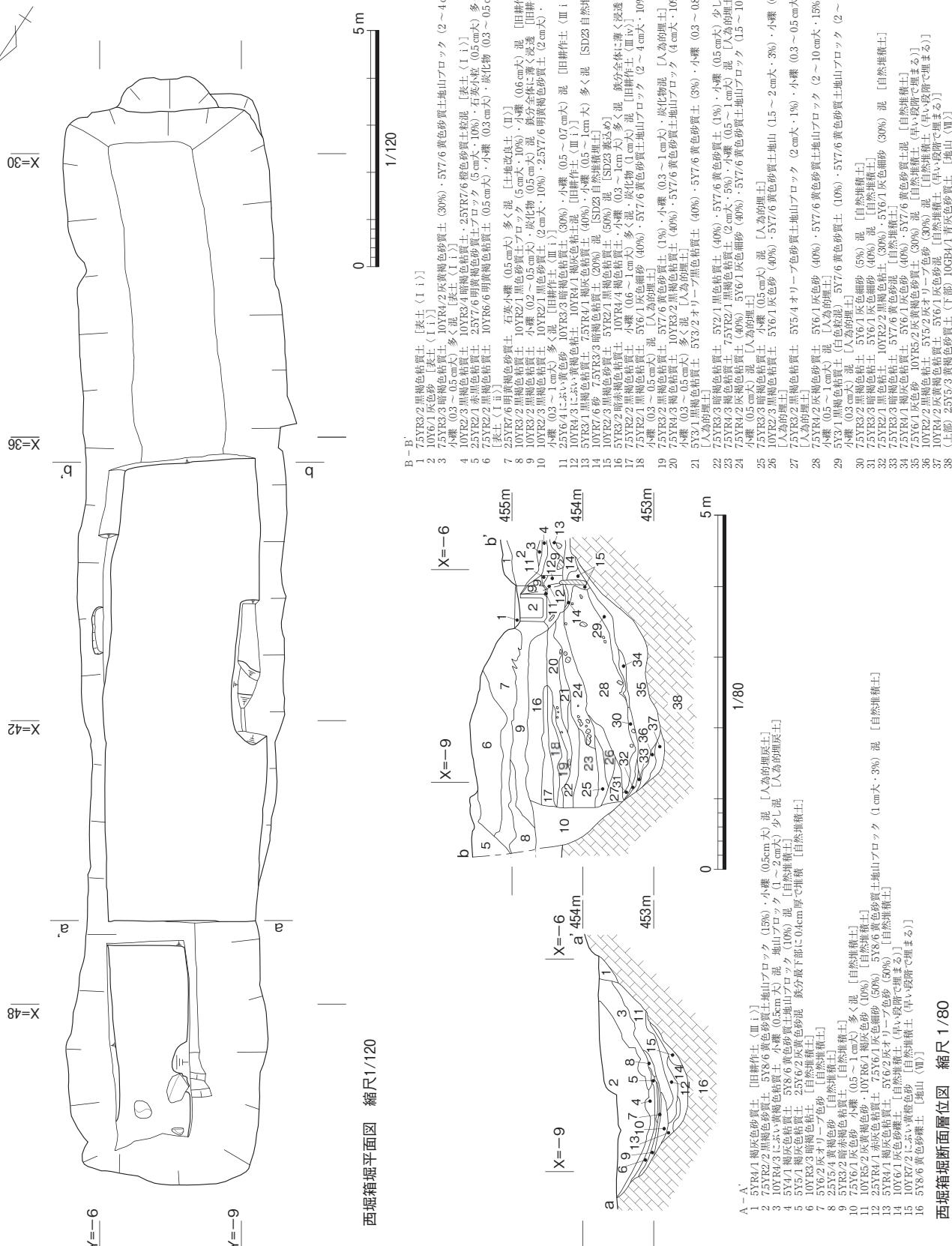
第33表 2007年度調査 堀跡計測表

(単位:cm)

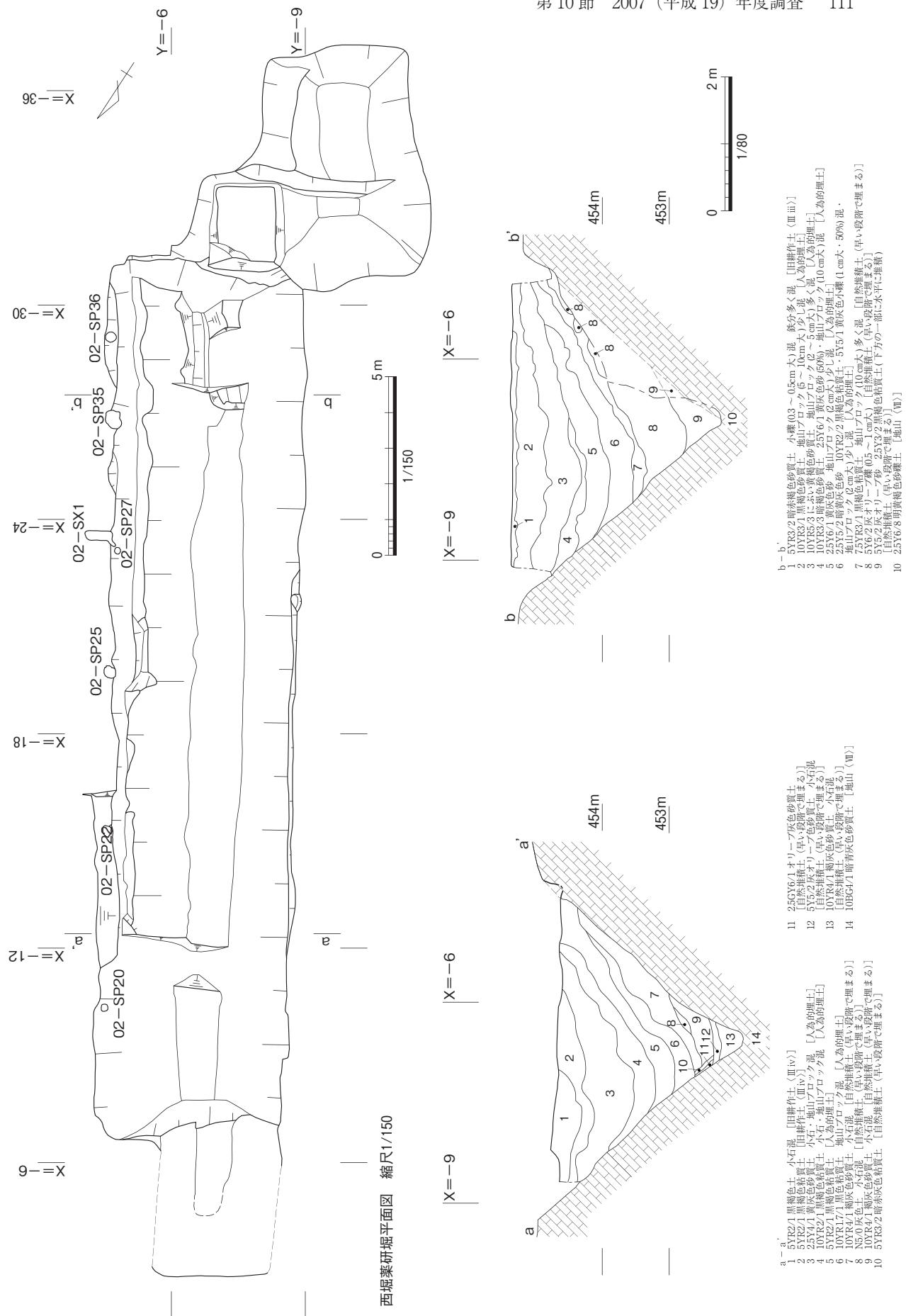
堀名	形状	主 軸	検出長	上場幅	下場幅	深さ	立ち上がり	出土遺物					備 考
								国産土器	国産陶器	中国産陶磁器	鉄製品	その他	
西堀	箱堀	X-4.0°-E	2338	456	91	143	東40°西45°	34	6	-	2	-	断面b-b' X座標36.5ラインで計測
西堀	薬研堀	X-0.0°-E	3480	504	24	304	北49°南50°	32	5	3	5	2	断面b-b' X座標-27.5ラインで計測



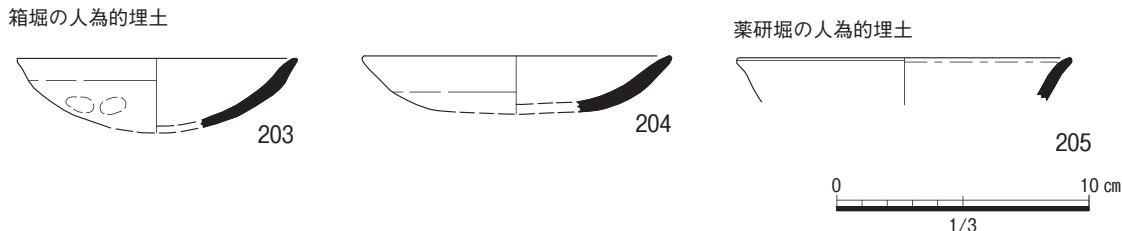
第57図 2007年度調査平面図 縮尺 1/150



第58回 2007年度調査 西堀跡箱堀実測図



第59図 2007年度調査 西堀跡薬研堀実測図



第60図 2007年度調査出土遺物実測図 縮尺1/3

13世紀中頃から14世紀前半のものである。

最も新しい年代を示す遺物は、細片で図化できなかったものの、15世紀前半～後半のものと考えられる古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期の瀬戸美濃の卸目付大皿である。

2. 小結

西堀は1994、1997、1998、2007年度に調査を行っている。今年度の調査では、西堀薬研堀（主門より南側）及び箱堀（脇門より北側）において整備工事に伴い、人為的埋土の途中まで掘削を行った。

薬研堀、箱堀ともに掘削後、使用とともに自然に埋まりつつあったものを、その都度自然堆積土層を掘り直して整備しつつ使用していたと考えられる。出土遺物から堀跡の掘削時期を断定できなかつたが、主軸方位から堀跡を掘削したのは、館を整備した時期と考えられ、その後、自然堆積土層を掘り直して形状を整えて使用したと考えられる。また、人為的埋土の流れ込みの方向から、廃棄時には、薬研堀は土壠を崩して埋め、箱堀は土壠と堀外地区の整地土で埋めたと考えられる。

第4章 総括

第1節 出土遺物と層序の関係

1. 出土遺物の傾向と下館の廃棄時期

遺物は、全ての調査地区が再調査にあたり、大半が過去の調査埋め戻し土からの出土である。また遺構掘削を半裁で止めており、中世期の造成土はトレーナーでしか掘削していないが、出土遺物について考察を行う。

まず、各調査地区における点数を見ると、① 2000～2001年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査、② 2001年度礎石建物 SB 43 地区調査、③ 2003年度I地区調査、④ 2004年度調査、⑤ 2007年度調査、⑥ 2002年度II地区調査、⑦ 2002年度I地区調査、⑧ 2003年度II地区調査の順となる（第34表）。

これに調査面積を加味したm²当たりの密度にすると、① 2001年度礎石建物 SB 43 地区地区、② 2003年度I地区調査、③ 2004年度調査、④ 2000～2001年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査、⑤ 2003年度II地区調査、⑥ 2007年度調査、⑦ 2002年度II地区調査、⑧ 2002年度I地区調査の順となる（第35表）。

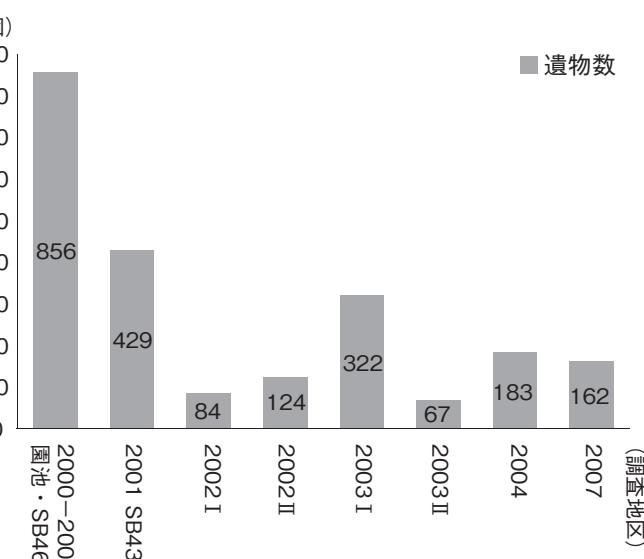
2001年度礎石建物 SB 43 地区調査においては不明遺構 SX 43 埋土を新たに掘削したため、出土遺物のm²割合が高い。また南堀延長部を調査した2004年度調査と、西堀を調査した2007年度調査のm²当たりの出土遺物点数を見ると、2004年度調査の南堀延長部においては、2007年度調査の西堀に比べ約3倍の点数が出土している。西堀薬研堀に館内から館外への流れ込み土層を確認したことからも、館に近い西堀は遺物を含まない土壌を取り壊して埋め、南堀延長部は西堀を越えて館内の造成土で埋めたためと考えられる。

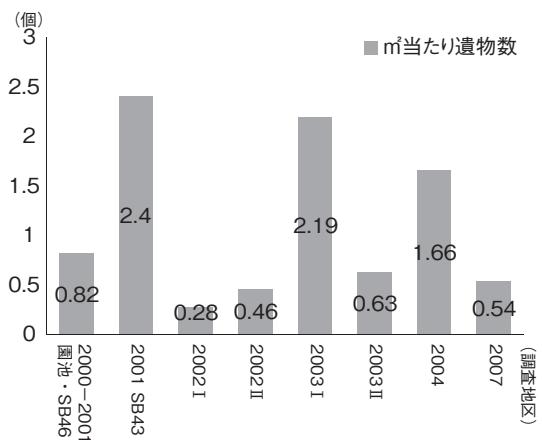
次に各調査地区の全体出土量に対する土師器の出土割合を見てみる。2001年度礎石建物 SB 43 地区調査79.7%、2000～2001年度園池・礎石建物 SB 46 地区調査68.3%の2地区が突出して高い（第36表）。このような土師器皿の出土状況は過去の調査で堀内地区の方が堀外地区より土師器皿の出土割合が高い傾向と同様である。これは、

土師器皿の使われ方と密接に関係しているものと考えられ、堀内地区には儀礼的な空間があったことを示すと考えられる。

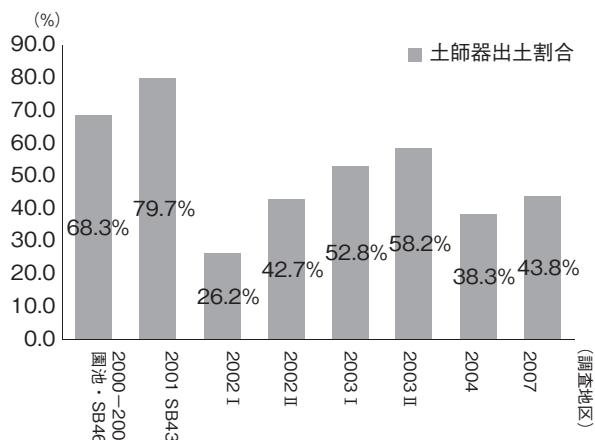
また、館周辺については、江戸時代末期の文化・文政年間（1804～1829）に大きく耕地化したという伝承が地元で残っている。園池跡の埋土からは18世紀後半のものと考えられる連房第8小期の瀬戸美濃（64）が、また、南堀延長部の埋土からは18世紀後半のものと考えられる近世陶器の腰錆湯飲み（181）が出土しており、この伝承を裏付けるもの

第34表 調査地区ごとにおける遺物数量



第35表 調査地区ごとにおけるm²当たりの遺物数量

第36表 調査地区ごとにおける土師器の出土割合



と言える。

2. 出土遺物の年代観と下館の使用期間

中世の造成土からの出土遺物についてみると、第IV層B期遺構面構築土、第V層A期遺構面構築土、第VI層下館基盤土に伴う遺物は、それぞれ160点、3点、19点である。

第IV層B期遺構面造成土の出土遺物の内訳は、土師器116点、瓦器8点、山茶碗2点、珠洲焼1点、八尾焼1点、瀬戸美濃焼6点、青磁3点、白磁1点、石製品5点、鉄製品8点、その他9点である。最も新しい年代を示す遺物は、2000・2001年度調査で確認した墨書土師器皿（24・25）であり、16世紀初めの時期を持つ。第V層A期遺構面構築土の出土遺物の内訳は、土師器2点、鉄製品1点であり、第VI層下館基盤土の出土遺物の内訳は、土師器11点、その他8点である。どちらの土層からも年代が分かる遺物の出土は無かった。

中世の造成土に伴う出土遺物では、第V層A期遺構面構築土、第VI層下館基盤土の時期を検討できる遺物は無かったものの、第IV層B期遺構面構築土で館を造成し終わった時期は16世紀初めであることが分かった。

次に、中世の造成土に伴う遺物だけでなく、今回の調査で出土した遺物についても検討を加え、館を造成した時期に検討を加える。出土遺物のうち、生産地等で編年が確立し実年代を持つ瀬戸・美濃焼、山茶碗、珠洲焼、青磁、白磁、染付について、細片で図化できなかったが分類可能なものも含めた合計167点について実年代を当てはめた（第37表）。これにより、13世紀代から遺物を確認し始め、15世紀に入ると急激に遺物量が増え、15世紀後半に遺物量が増え、16世紀前半には減少するという傾向が伺える（第38表）。なお、これまでの『江馬氏城館跡』I～Vでは、口縁部計測表により遺物の集計を行っており、それによると13世紀代から遺物を確認し始め、15世紀前半の時期の遺物量が最も多く、16世紀前半には減少しているという傾向をつかんでいる。これらのことより、下館の使用期間は、13世紀代～16世紀初めであり、本格的に館を整備したのは15世紀前半であり、最盛期を迎えたのは15世紀代～16世紀初めであると考えられる。

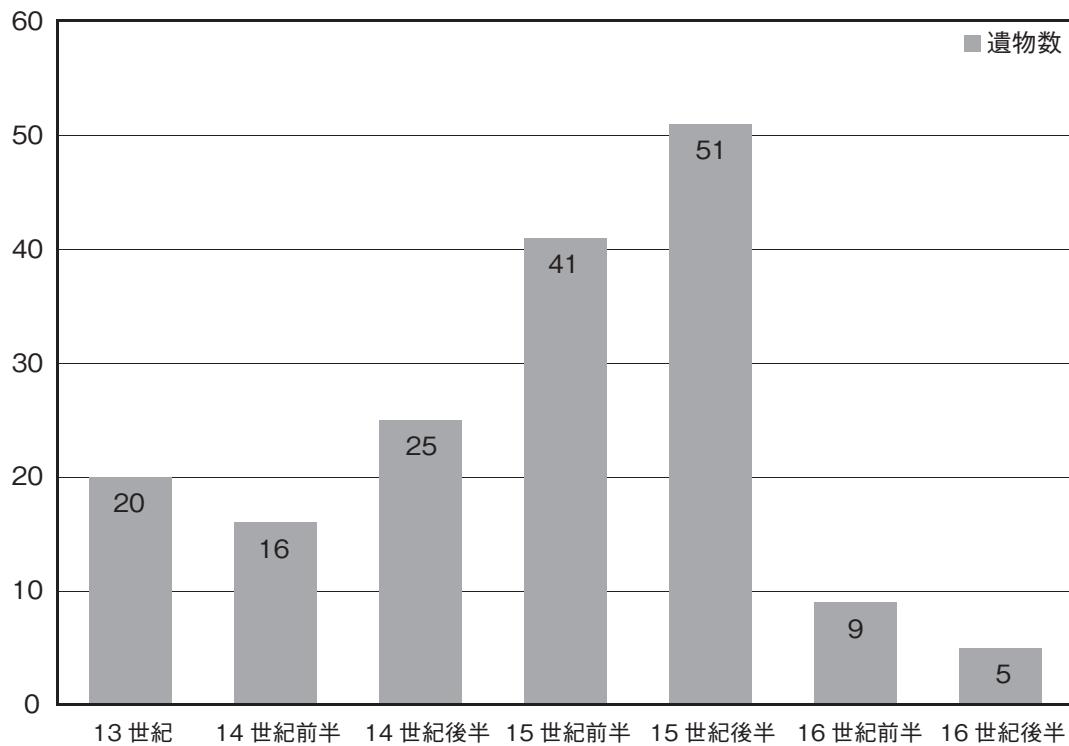
このような知見をふまえ館を整備した時期との対応を考える。

第VI層下館基盤土で造成した時期は、遺物の出土し始める13世紀～14世紀末までと考えられる。これを江馬氏下館I期とする。次はその上層の第V層A期遺構面構築土にて館を整備した時期である。出土遺物数が急激に増加しはじめる15世紀代であると考えられる。急激に遺物量が増加しているこ

第37表 遺物種類ごとにおける年代別数量

	13世紀	14世紀前半	14世紀後半	15世紀前半	15世紀後半	16世紀前半	16世紀後半	合計
瀬戸美濃	4	5	15	33	43	7	5	112
山茶碗	6	2	0	1	3	0	0	12
珠洲	5	5	6	1	0	0	0	17
青磁	0	4	4	5	3	0	0	16
白磁	5	0	0	1	2	0	0	8
染付	0	0	0	0	0	2	0	2
遺物数	20	16	25	41	51	9	5	167

第38表 遺物種類ごとにおける年代別数量



とからも、14世紀末～15世紀初めに本格的に館の整備が始まったと考えられる。この時期を江馬氏下館II A期とする。次に第IV層B期遺構面構築土にて館を整備した時期は、前述した墨書土師器皿の時期、に当たる。今回調査での遺物量を考慮すると、15世紀末～16世紀初めの時期と考えられる。この時期を江馬氏下館II B期とする。なお、16世紀中頃以降は出土遺物量が激減する。1580年に江馬氏が滅びるまでの時期を江馬氏下館III期とする。

第2節 下館跡の遺構変遷

下館跡の遺構変遷は、1994～1999年度発掘調査においては、1978年度調査の堀内地区の知見を前提として整理を行い、『江馬氏城館跡』I～Vにおいて報告してきた。しかし、第1・3章でもふれたように、2001・2002年度に実施した整備工事に伴う堀内地区の再調査において、1978年度調査概報の現場確認知見に誤認があったことを確認したことから、下館跡の遺構全体について遺構変遷の再整

理を行った。以下に、再整理を行った江馬氏下館跡の遺構変遷をまとめる。以下において、遺構の前後（切り合い）関係は「（古い）→（新しい）」（または「（新しい）←（古い）」）で示す。

1. 1978～1999年度調査における知見

1978年度までの調査において、堀内地区ほぼ全域の調査を行った。その時期変遷については、1978年度概報において、堀内地区で、第1～3期の3時期の建物跡を確認している。第1期はトレーンチの断面観察において柱穴跡を確認し、建物跡の構造については不明である。第2・3期は堀内地区で第3層褐色土層上で検出した礎石建物跡8棟、掘立柱建物跡1棟、柵列跡3列について、礎石抜き取り穴跡の切り合い関係及び礎石の検出レベル、主軸によりA期建物・B期建物に分類している。

1994～1999年度調査は主に堀外地区の調査を行った。堀外地区でも1978年度調査概報に報告されている堀内地区のA・B期の主軸に一致する建物跡が確認できた。堀外地区においては、全ての遺構検出面が地山面上であり、検出層序による遺構の前後関係、時期差は確認できなかった。またA・B期の各時期の建物跡に関わる柱穴跡等の直接の切り合いがなく、遺構の切り合い関係からA・B期の前後関係を確認することもできなかった。

一方、出土遺物からは、堀外地区のA期建物から15世紀後半～16世紀前葉の年代を示す遺物の出土を確認し、遺物の年代からは堀内地区のA期→B期へという時期変遷との矛盾を指摘していたが、遺構の直接の切り合い関係が確認できなかったことから、時期変遷については、先行する1978年度調査概報の知見を優先して整理作業を行い、その再検討は堀内地区の遺構の再調査を待つこととした（第39表）。

2. 下館跡の遺構変遷の再整理

（1）堀内地区における遺構の検出層序

2000～2004・2007年度調査により再確認した堀内地区における検出遺構と遺構検出面の基本層序の関係を整理した（第40表）。

第39表 過去の調査による遺構変遷表

1978概報		1994～1999年度調査	
主軸により時期区分		主軸により時期区分	
時期	遺構	時期	遺構
第1期		下館Ⅰ期	
		堀内地区	SB 01・06・07・08
		堀外地区	SB 21
第2期	(主軸A期)	下館ⅡA期	(主軸A期)
	SB 41・42・43・44・46 SA 47	堀内地区	SB 41・42・43・44・47・園池 SA 45・47・51・53・54・55・56・57 SV 01・02、南堀新堀、北堀
		堀外地区	SB 02・03・05・11・15・22・26 SA 01・11・12・13・21
第3期	(主軸B期)	下館ⅡB期	(主軸B期)
	SB 48・49・50・51	堀内地区	SB 48・49・60・61、主門、園池
		堀外地区	SB 04・12・16・17・23・24・27・28・29 SA 11・12・22・23・58、SI 01・11
		下館Ⅲ期	
			SB 13、SX 01、SI 21、SD 22

堀内地区の各群遺構の建て替えに伴う整地作業は、館全面において均等に行われておらず、さらに近世以降の耕地化等により整備土層が失われている箇所も多く、上層からの掘り込みの遺構が、当初の掘り込み土層の下層土層面上（第VI層 下館基盤層）においてしか検出できなかつた遺構も多い。整地作業が均等に行われていない状況からは、館の建物等の建て替えをある程度の時間をかけて順次行い、その都度、立て替え箇所において整地をし直した状況が想定される。上記のような状況ではあるが、堀内地区においては、遺構群の変遷は、検出層序から大きく変遷をたどることができる。

なお、本整理作業の過程において、保管されていた1978年度調査時のSB 43・44・51周辺の縮尺20分の1の現場実測図の再確認作業を行つたが、図面上に遺構の切り合い関係が記録されておらず、1978年度概報において「一部礎石抜き取り穴の切り合い関係」を確認したと記されている礎石抜き取り穴跡を断定できなかつた。

また1978年度調査で確認した遺構はその埋土を完掘していることから、2000年度以降の堀内地区の再調査において切り合い関係を再確認することはできなかつた。

(2) 遺物の年代観から見た遺構群の前後関係

堀外地区において、遺物を伴う遺構における出土遺物の年代観から、時期設定及び前後関係を検討した（第41表）。また、遺物の出土があった遺構との切り合い関係を伴う遺構は、その切り合い関係から時期設定を行つた（第42表）。

(3) 主軸のまとまりによる建物群の整理。

下館跡の遺構で、検出層位、遺構の切り合い関係、出土遺物の年代観において時期を設定できないものについて、主軸によるまとまりを検討した。（第61図）

下館跡の遺構は、主軸のまとまりによって大きくはa・b・cの3群と、これに属さないd群の4群に整理できる（第43表）。このうちa群は1999年度報告までの「A期建物」、b群は同「B期建物」に対応する。堀内地区の区画施設である堀跡・土塙跡は、南堀跡旧堀・北側土塙基底部石列跡SV 02はc群、南堀跡新堀・西堀跡薬研堀・北堀はa群に属する。

第40表 下館跡検出遺構と基本層序

下館機能時の層序	土層面上における検出遺構と知見	時期
第IV層 B期遺構面構築土 〈IV i〉・〈IV ii〉	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石建物跡 SB 41・42・44・46 ・西側土塙柱穴列跡 SA 55 c・56 c ・北側土塙基底部石列跡 SV 01 ・園池跡（北側汀線景石を据えつつ、SB 46の礎石根石を据えた状況を確認。） ・園池南側陸部から、墨書き師器皿（24・25）が出土。 	下館II B期
第V層 A期遺構面構築土 〈V i〉・〈V ii〉	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石建物跡 SB 49・53・64 	下館II A期
第VI層 下館基盤層 〈VI iii〉	<ul style="list-style-type: none"> ・南堀跡新堀・西堀跡薬研堀・北堀 ・土塙柱穴列 SA 55 a・b、SA 56 a・b ・掘立柱建物跡 SB 48 ・南堀跡旧堀・北側土塙基底部石列跡 SV 02 	下館I期
第VII層 地山	<ul style="list-style-type: none"> ・堀外地区（門前・工房地区）の全遺構 	—

第41表 遺物の出土を伴う遺構と遺物・遺構の年代観（堀外地区）

区画	遺構	出土遺物	遺物の年代観	時期
門前	掘立柱建物跡 SB 01 SX 01（竈跡）	土師器皿 T-4類1点 珠洲IV期（新）の珠洲焼甕1個体 ・すり鉢1点	14世紀後半	下館I期
工房	掘立柱建物跡 SB 27 SP 180	土師器皿 T-6類かT-7類1点	15世紀前半	下館II A期
工房	竪穴住居 SI 02 SP 408 SP 386	土師器皿 T類1点 土師器皿 T類1点	- -	- -
工房	掘立柱柵列 SA 26 SP 102 SP 427	土師器皿 T-6類かT-7類1点 土師器皿 T-6類かT-7類1点	15世紀前半 15世紀前半	下館II A期
工房	掘立柱建物 SB 28 SP 156 SP 375	土師器皿 T-6類かT-7類1点 土師器皿 T-6類かT-7類2点	15世紀前半 15世紀前半	下館II A期

*土師器皿の型式による年代観については、生産地での編年が整理されている陶磁器類との明確な共伴関係を確認できる出土例が少なく、型式編年の整理ができていない。その出土量から、最も出土量が多いT-6・7類が他の陶磁器の出土量が過去の調査で最も多い瀬戸美濃焼の古瀬戸後I・II期（15世紀前半代）に対応すると考えている。

第42表 遺物の出土があった遺構との切り合い関係による遺構群の年代観（堀外地区）

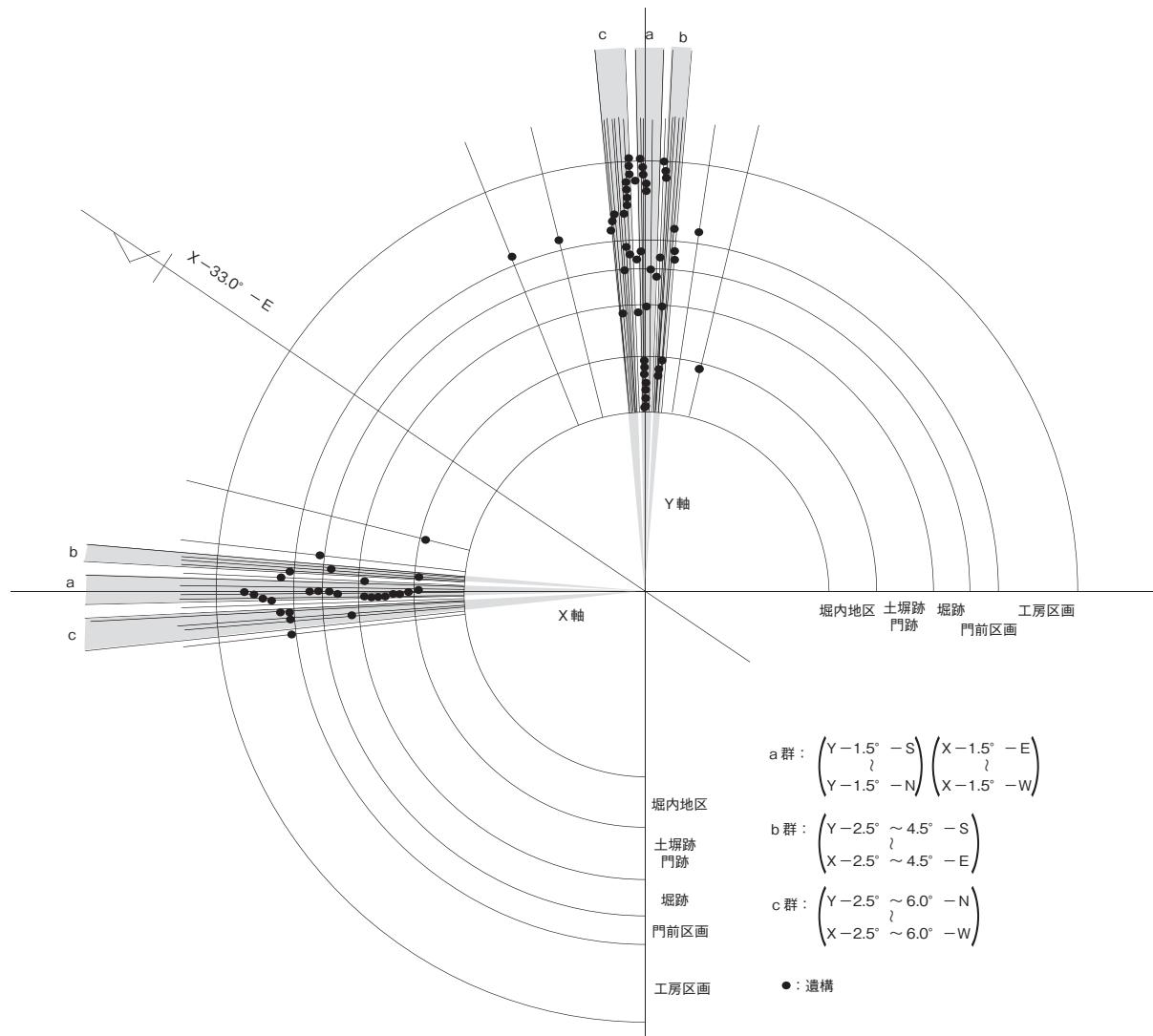
区画	遺構	遺物の出土があった遺構	遺構の年代観	時期
門前	掘立柱建物 SB 02 SP 706	・SK 10（大窯第3～4小期・16世紀前半の遺物が出土）を壊す。 ・SK 79（大窯第3小期 16世紀前半の遺物が出土）を壊す。	16世紀前半以降	下館II B期
工房	掘立柱建物 SB 23 → SB 24 〈SP 663（SB 23）→ SP 664（SB 24）〉	・SX 11（15世紀前半の土師器皿出土）を壊す。	15世紀前半以降	下館II B期

第43表 下館跡検出遺構の主軸方位による群分け

主軸方位による群分け	X軸の傾き（振れ）幅	Y軸の傾き（振れ）幅	主軸傾きの開き幅（角度）（°）	1978年度概報における建物時期分け
a	1.5° - E ~ 1.5° - W	1.5° - N ~ 1.5° - S	3	A期建物
b	2.5 ~ 4.5° - E	2.5 ~ 4.5° - S	2	B期建物
c	2.5 ~ 6.5° - W	2.5 ~ 6.5° - N	4	-
d	a ~ c群のいずれにも属さない遺構		-	-

第44表 堀外地区における遺構の切り合い関係

区画	遺構の切り合い関係
工房	掘立柱建物 SB 21（d群）→ SB 22（a群）〈SP 316（SB 21）→ SP 317（SB 22）〉
工房	掘立柱建物 SB 16（c群）→ SB 17（a群） 〈SP 411→ SP 410、SP 443→ 442、SP 513→ SP 417、SP 563→ SP 447〉
工房	掘立柱建物 SB 27（c群）→ SB 26（b群）〈SP 371（SB 27）→ SP 372（SB 26）〉
工房	竪穴住居 SI 02（配置より、掘立柱建物 SB 15（c群）と同時期） →掘立柱建物 SB 17（a群）〈SI 02→ SP 407（SB 17）〉
工房	SX 11（15世紀前半の土師器皿出土）→掘立柱建物 SB 23（c群）→ SB 24（a群） 〈SP 663（SB 23）→ SP 664（SB 24）〉



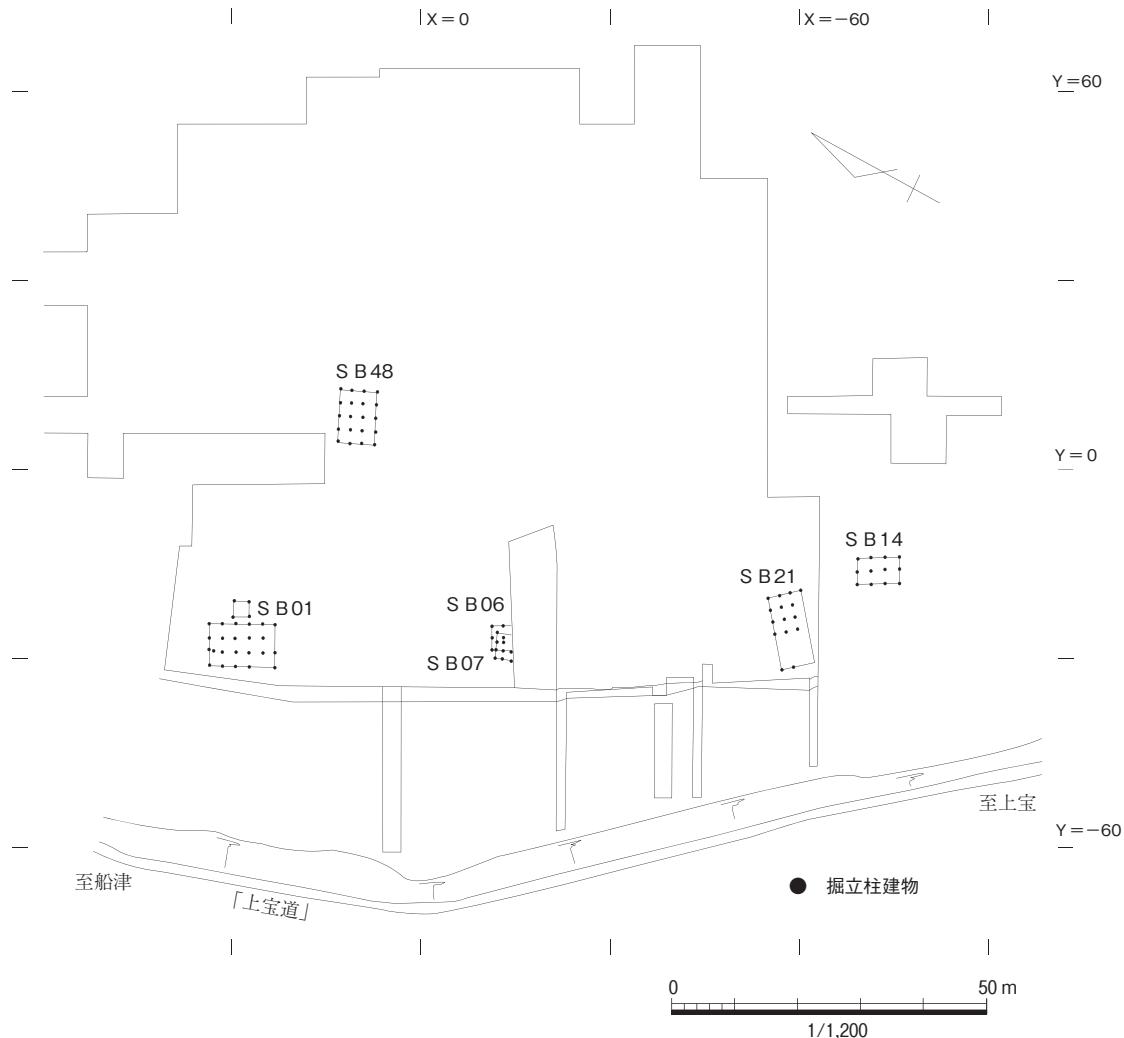
第61図 江馬氏下館跡遺構主軸図

a群遺構は堀内地区において第IV層B期遺構面構築土層上面で検出した遺構である。また、堀外地区においてはSB 02以外は14世紀後半～16世紀前半代の年代を示す遺物が出土する。このため、下館II B期に位置づける。b・d群遺構は堀内地区では第V層A期遺構面構築土層上面で検出した遺構である。また堀外地区では、出土遺物の年代観は15世紀前半までを示す。このため下館II A期に位置づける。c群遺構は堀内地区では確認できない。堀外地区では15世紀代全般の遺物が出土し、下館II A期及び下館II B期のいずれに属するかを分類することが出来なかった。

なお、堀外地区においては遺構の切り合い関係からc群→b群、c群→a群、d群→a群という遺構群の前後関係が確認でき、上記のことと矛盾はない（第44表）。a・b群遺構の直接の切り合いを確認できる遺構はなく、堀外地区では切り合い関係からa・b群遺構の前後関係を確認することはできなかった。

3. 江馬氏下館の変遷（第62～65図、第45表）

このように、検出層位、出土遺物、遺構の切り合い、主軸より遺構の変遷を理解した（第44表）。以下に各時期の下館跡について詳述する。



第62図 江馬氏下館跡I期の遺構配置図（13世紀後半～14世紀代）

第45表 遺構変遷表

時期	遺構	
江馬氏下館I期 (13世紀後半～14世紀代)	この地の利用が始まった時期	
堀内地区 SB 48		
堀外地区 SB 01・06・07・14・21		
江馬氏下館II A期 (14世紀末～15世紀後半)	館として整備した時期	
堀内地区 SB 49・53・60・61・62・64、SV 02、南堀旧堀・西堀箱堀、園池		
堀外地区 SB 03・13・15・28、SA 02・13・26・27・32・55、SI 02		
江馬氏下館II B期 (15世紀末～16世紀初め)	館として整備し、建て替えられた時期	
堀内地区 SB 41・42・43・44・46・61、SA 43・45・47・55・56、SV 01、南堀新堀、西堀、北堀、主門、園池		
堀外地区 SB 02・05・11・17・22・26、SA 01・11・12、SI 01・11		
下館III期 (16世紀中頃～末)	館として利用しなくなった時期	
堀外地区 SI 21、SD 22		

(1) 江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀代）

この地の利用が始まる時期である。総柱式掘立柱建物が散在し、堀はまだ造っていない段階である。

後の堀内地区 SB 48、門前地区の SB 01・SB 06・SB 07、工房地区の SB 21・SB 14 がこの時期の建物である。建物の主軸は一致しない。

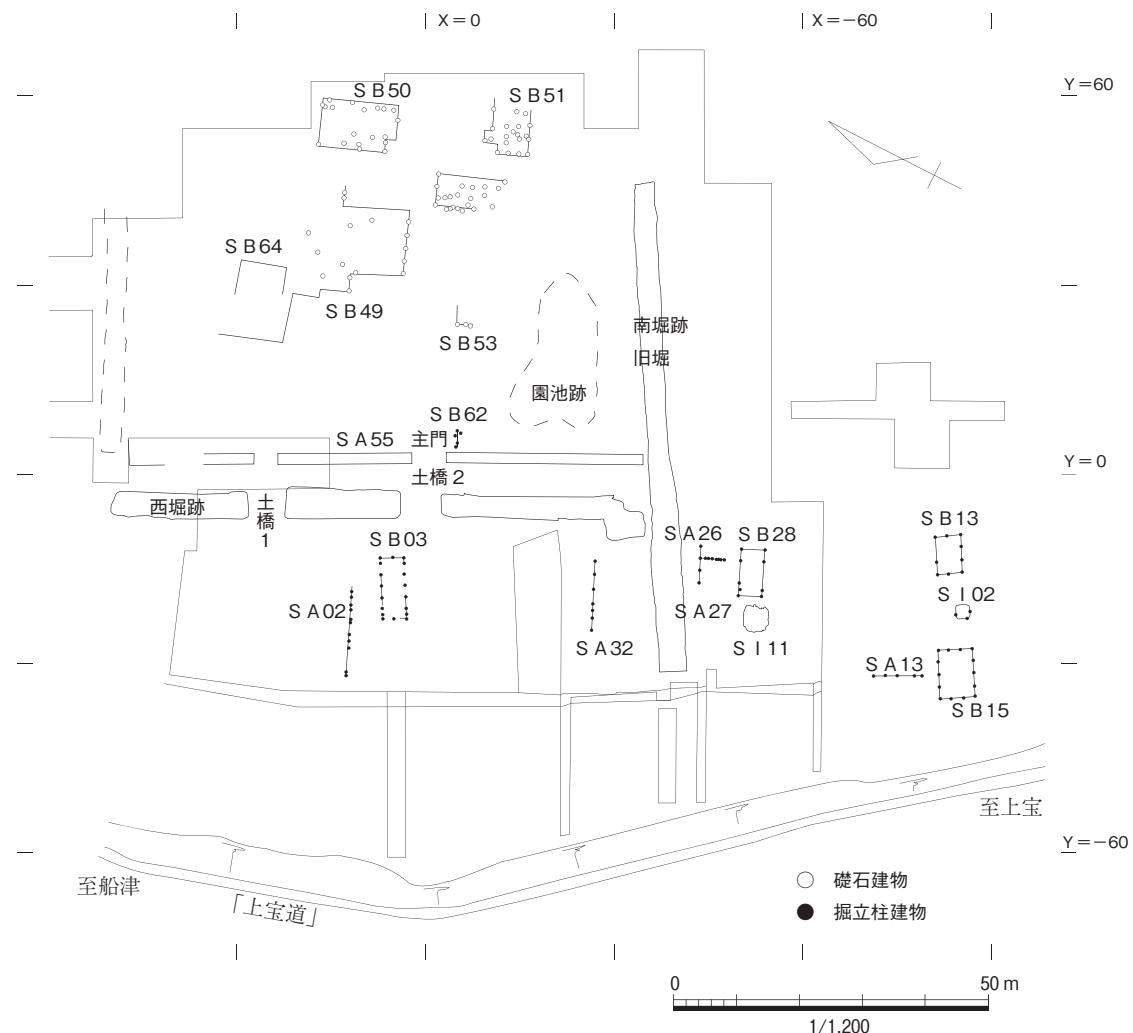
(2) 江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀後半）

館の三方向を囲む堀・土塀を設け、堀内地区では規模の大きな礎石建物・園池をつくり、堀の周辺部にも方形の区画を設けて館に必要な諸施設を計画的に配置する館の成立時期である。遺構の切り合ひ関係とその出土遺物の年代から、b・c群に属する遺構の多くがこの時期に属すると考えられる。

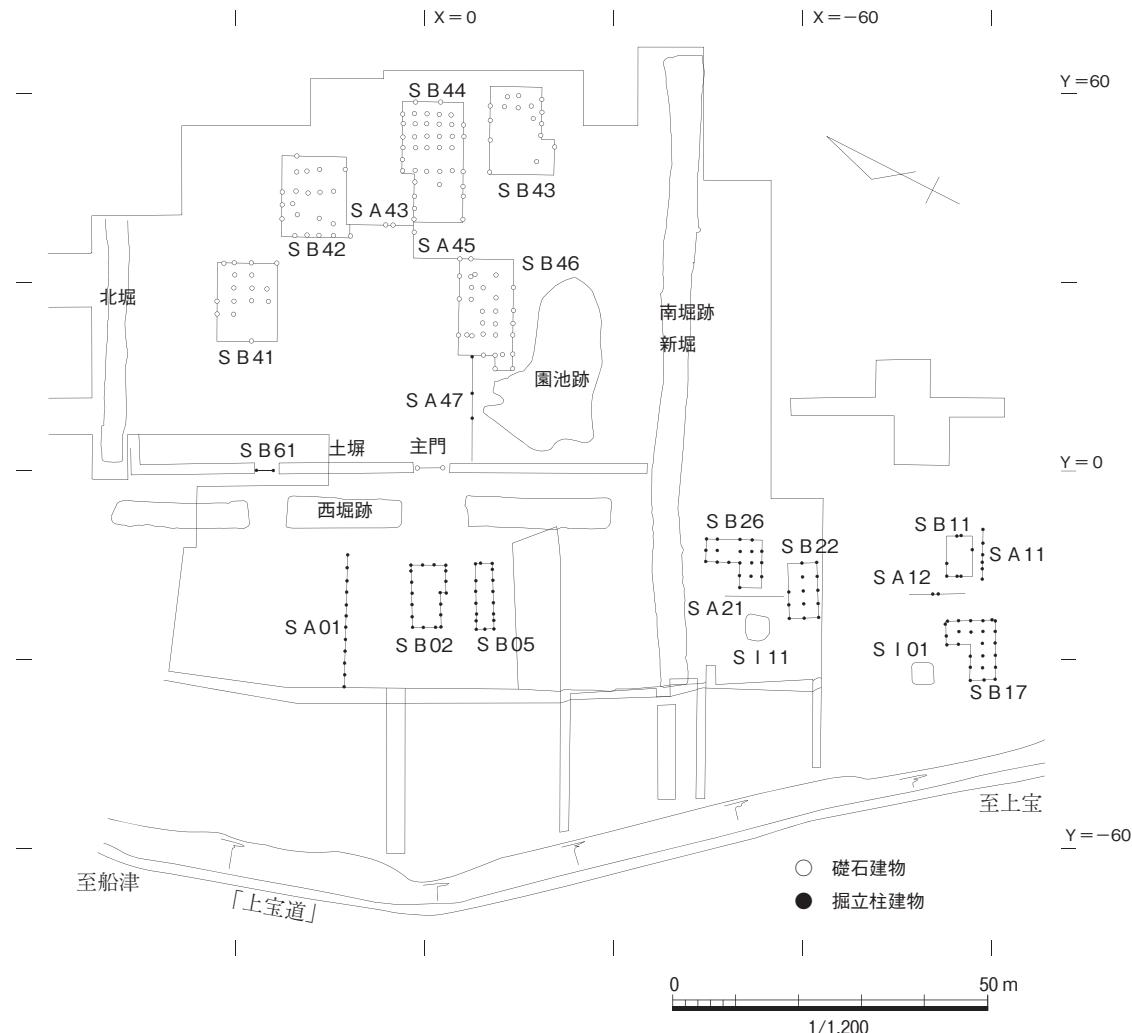
館の三方向を囲む堀はこの時期にはじめて設けたと考えられ、南堀はその主軸から旧堀が機能していたと考える。北堀・西堀はその主軸がa群に属し、遺構としては造り替え等の痕跡も確認していないが、この時期に設けたものと考えたい。

西堀は主門に面する箇所では薬研堀が設けられた。なお、土橋2の南側にも、薬研堀機能時には埋めていたと想定できる幅約3mの箱堀を長さ約4.5m分ほど確認しており、この段階には西堀全体が箱堀であった可能性も想定できるが、遺構としては確認できていない。

北堀に伴う土塀の北側基底部石列跡 SV 02 の主軸はc群にする。土塀も館の最初期に計画的に設け、



第63図 江馬氏下館ⅡA期の遺構配置図（14世紀末～15世紀後半）



第64図 江馬氏下館跡ⅡB期の遺構配置図（15世紀末～16世紀初め）

建物等の造り替えに際して改修を加えながら、ⅡB期末まで使用していたものと考えられる。

堀内地区ではb群遺構に属する基礎石建物跡を確認した。園池跡は改修・造り替え等を確認できず、また築造開始年代を断定する知見も得ていない。しかし、堀内地区のⅡA期の建物跡群（b群遺構）とⅡB期の建物跡群（a群遺構）は重複しており、同位置で建物の建て替えが行われていることより、この区画には下館ⅡA期から園池施設が計画的に配置されていたと考えられる。

堀外地区については、南堀延長部を境として、西堀前の門前区画と南堀延長部南側の工房区画に分け、各区画内においても道路や掘立柱建物・柵列等によってさらに方形に敷地を区切り、館に必要な施設を計画的に配置している。

門前区画は、西堀に平行に南北方向に延びる6m幅の道路を設け、これに直交する東西方向を行き（長辺）とする建物や柵列、道路によって西堀南端部の屈曲部前、主門前、脇門前の3つの区画に分けている。主門前区画と脇門前区画の境は柵列跡SA02であり、主門前には宿直屋跡と考えられるSB03を設ける。西堀屈曲部前と脇門前は広場跡であり、犬追物や的射などの武術の訓練、儀式等の際に武術を披露する場であったと考えられる。

工房区画は柵列と道路によって3区画に分け、各区画は掘立柱建物跡SB13・SB15・SB28、竪穴建物跡SI02・SI11、広場跡という施設の組み合わせで一作業場としての敷地を設けていた。

なお、堀外地区の建物跡等については大きくは c 群遺構から b 群遺構への作り替えが想定できるが、堀内地区では c 群遺構に属する建物群は確認できていない。堀外地区では、江馬氏下館ⅡA期と考えられる SB 04 と SA 02 を重なる形で確認しており、作り替えを行った建物跡もあると考えられる。

(3) 江馬氏下館ⅡB期（15世紀末～16世紀初め）

堀内・堀外地区ともに b 群遺構への作り替えを行う時期である。堀内地区・堀外地区とも各群の遺構は重複しており、建物等の作り替えに際して主軸は変えるものの、建物配置は継承していたと考えられる。

南堀跡はこの時期に新堀に作り替えたものと考えられる。西堀跡藁研堀は前時期に成立し、この時期には引き続き存在していた。

土塀は、北堀に伴う土塀の南側基底部石列跡 SV 01 が a 群遺構に属する建物構築時の造成土層中に含まれており、前時期の土塀基底部石列 SV 02 を利用しながら、作り替え（改修）を行い、引き続き使用していたと考えられる。

堀内地区の礎石建物跡はその配置・規模等がほぼ明らかになっており、その配置から SB 41 は台所、SB 42 は台所に付属する対屋、SB 43 は常御殿に付属する建物、SB 44 は常御殿、園池跡に面する SB 46 は会所と考えられる。

堀内地区の南西隅部に位置する園池は、この時期に建物等とともに完成している。東西約 27 m、南北約 14 m の東西に長い不整橢円形を呈するが、園池池底に水を溜めるための造作は確認できず、當時水を溜めてはいなかったと考えられる。長径 1 m 以上の大きな庭石を大量に配しており、力強く立体的な空間を演出した園池であったと考えられる。館の完成に際して館内の 5ヶ所に墨書きわらけを埋納し、地鎮を行っている。

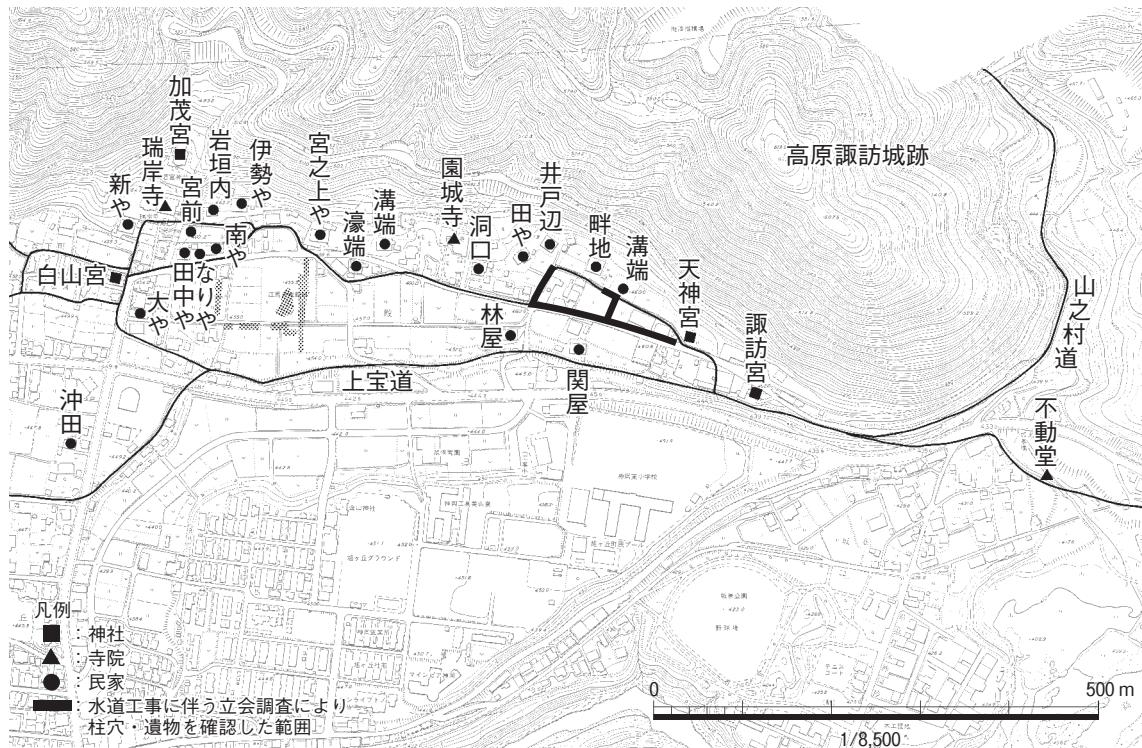
堀外地区の門前区画では、主門前区画と脇門前区画の境に柵列跡 SA 01 を、下館ⅡA期には広場跡であった主門前区画には宿直屋跡 SB 02、馬屋跡 SB 05 を確認できる。工房区画は、建物が建て替えられたが、ⅡA期に引き続き工房が存在している。

なお、下館がある殿地区の近世村落の復元を行ったところ、近世には殿段丘の南端部に諏訪社と天神社が、北東端部に加茂社が、北端部に白山社があったこと、また、現在の瑞岸寺と殿円城寺にも仏閣があったことが分かった。これらの神社は、下館の時代にこの地に勧請されたものと考えられる。また、水道工事に伴う立会調査でも柱穴や土師器皿、瀬戸美濃焼が出土している。段丘を取り巻くような神社・仏閣の配置及び立会調査結果から、段丘全体に下館に関連する武家屋敷等の施設が広がっていた可能性が想定される（第 65 図）。

(4) 下館Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀末）

この時期には、出土遺物量が激減し、館の機能を他所に移したものと考えられる。16世紀半ばから、1582 年に姉小路（三木）氏に敗れ領主としての姿を失うまでの時期である。館の移転に際し、西堀は人為的に埋めたてられ、北・南堀も自然に埋まりつつあったようである。ただし、かつての堀外地区では、竪穴建物跡 SI 21などを確認でき、館廃棄後も作業場等として使われていたものと考えられる。

以上が、現時点での江馬氏下館における遺構変遷のまとめである。



第65図 江馬氏下館跡周辺の近世村落復元図

第3節 下館跡における園池のあり方

1. 発掘調査により検出された景石

1970年代の発掘調査着手以前より、水田から5つの石が頭を出しておらず、地元では「五ヶ石（御花石）」と呼んで、それらが江馬館の庭石ではないかという伝承があった。その伝承が一つの契機となり発掘調査が行われ、1980年に史跡に指定された。

発掘調査で出土した遺物の分析から、園池跡が文化・文政年間の耕地化の際に破壊されていることが判明した。また、五ヶ石を含め庭石の大半が原位置を留めておらず、またいくつかの立石の頭頂部は破碎されて小さくなっていることが分かった。しかし、検出した庭石には1.5～2m近くある大きなものが多く、破碎される前の立石等の状況を推定すると、豪壮な園池が想像される。

庭石に用いられた石材は主に2種類である。下館跡に東接する山地及び下館跡西側に流れる高原川で採取することができる船津花崗岩と、高原川で採取することができるホルンフェルスである。どちらも近隣で入手可能な石材である。

2. 作庭技術と配石デザイン

発掘調査の過程で、園池の汀線及び岩島には、所々に立石を据え、石の底部には根石を用いた丁寧な作業をしていることが明らかになった。特に景観上重要と思われる立石については根石の入れ方も入念であり、根石の一点ではなく、面で立石を受けていた。削平されているため陸部の盛土高は確認できなかったが、庭石の配置からは築山を築き、地形に変化のある園池であったことが推測される。岩島や南汀線では、さらに庭石を安定させるため石を組んで連接させていたことが伺える（徳村2009）。このように園池は技術的にみて高度な仕上げを行っており、当時の作庭技術の高さを確認することができた。

園池は会所と考えられる礎石建物跡 SB 46 と同時に造作をしていることを土層より確認し、土壙跡と考えられる SA 55・SA 56 で囲まれていたことを確認した。これらのことから園池は、会所から座して観賞することを意図し、天端が水平な庭石と尖る庭石を組み合わせて変化を付け、土壙の背後に広がる山々との対比の効果も意識しつつ配石が施されたと考えられる。

具体的には3つの視点がある。①礎石建物 SB 46 の東側からは南東部立石が際立って見える。土壙越しに館東側の山が迫り、狭い空間に他の庭石と意図的に対比させることを主眼においた印象を受ける。②礎石建物跡 SB 46 中央部からは南側汀線に並ぶ巨石が遠く見え、土壙越しにも遠く雄大な山並みを望む。広い空間にゆったりと景石を配置した印象を持つ。③礎石建物跡 SB 46 西端からは、園池の中心に位置する立石、北西汀線の立石が間近に迫り、巨石を並べた猛々しい印象を受ける。

以上のような視覚効果をさらに高めるために、石材の使い分けも行っている。景観上重要な立石については船津花崗岩を、汀石には色彩の鮮やかなホルンフェルスを用いている。特に礎石建物跡 SB 46 に面した北側汀線では、建物を意識してホルンフェルスを直線に並べている。また、西側汀線の洲浜には拳大のホルンフェルスを混合して用いている。

3. 池泉、築山と植栽

池部では滞水時の自然体積土層や、粘土張りなど水を溜めるための構造を確認することができず、通常の池庭の構造ではなかった。導水と排水の施設も発掘調査では確認していない。現在は降水時に一時的に滯水するが、時間の経過とともに自然透水する。このことから、普段は滯水はなかったものと考えられる。池庭の形態を確認していることから、当時は必要な時にだけ掛樋等により導水した可能性が高いと考えられる。

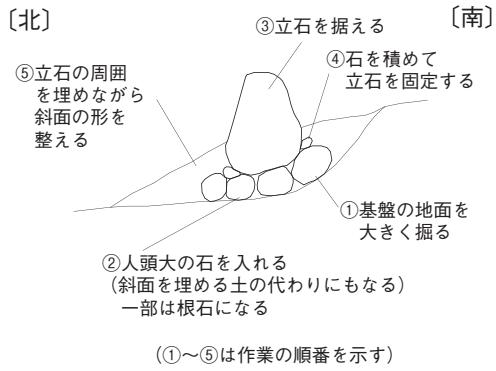
園池南側陸部については、文化・文政年間、庭園を廃棄して耕地化を行った際に築山が崩され削平を受けたことを確認した。このため、調査の検出面では樹木の痕跡を確認することができなかった。

下館跡園池では不明な点が多い築山・植栽について、文献資料に描かれる他の武家館庭園や洛中洛外図に描かれる室町將軍邸について見てみる。文献史料では『さかゆく花（花御所行幸記）』に足利義満の室町殿庭園について記述がある。「もてあそぶべきは花なり」「くわつすい（活水）池にたたえ。かざむ（仮山）には（庭）をめぐれり。」「おちあふ水音まつ風（松風）もひとえに聞こえて」「花の木のうちよりす、まる（進まる）」「花のかたはら（傍ら）のみやまぎ（深山木）」などと記されている。これらからは築山に囲まれた池に流れる水と、そこにある豊かな花木を想像することができる。植物としては松があることも分かる。また、近衛道嗣の『愚管記』では糸桜（枝垂れ桜）を義満が所望していることが分かり、邸宅に植えていたと考えられている（小島 2000）。また尾張守護所清須の庭園について『宗長手記』では、「ほりせき入て。柳の古木。藤山吹のきし（岸）。池のさ、波（さざ波）。」という記事があり、堀を堰き止めて水を流し、柳、藤、山吹が植えられていた。洛中洛外図の室町將軍邸では、紅白の梅、松が植えられていることが分かる（徳村 2009）。

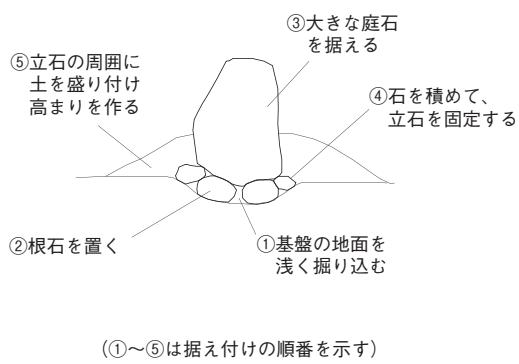
下館跡園池では柳や松、梅などと考えられる木根の痕跡を確認できなかった。また水をなみなみと湛えた池とも考えにくい。しかし、築山を築き、山吹などの草本類を植えていた可能性が高いと想像できる。

4. 庭園文化の伝播の中で造られた

15世紀初め足利義満が室町殿（花の御所）を造営し、園池とそれを鑑賞する建物を合わせた空間でのもてなしが室町幕府の儀礼として成立した。それが15世紀後半になると正式な儀礼空間として



第66図 東～南汀線立石据付断面模式図



第67図 西～北西汀線及び中島景石据付断面模式図

各地に広がっていった。特に応仁の乱以降、貴族や僧侶を始め、芸能者などの文化人が荒廃した京を離れ、地方の有力武将のもとを訪問し、その中で各地の地方武士の城館に、連歌や茶会などを行い、客人を持て成すための園池・会所を造るようになっていった（川上 2002）。

下館跡において、園池跡は下館II A期の15世紀前半の館の整備時に堀跡や土塀跡などとともに計画的に造られ、15世紀末の下館II B期の姿を今回の調査で確認した。また、天目茶碗や青磁碗、白磁皿、碁石など園池や会所でのもてなしに使用されたと考えられる遺物を多く確認した。禪僧・万里集九の日記にも、延徳元年（1489）に高原郷（現在の飛騨市神岡町）を訪れ、江馬氏の饗應を受けた記録が残っている。

これらのことから、江馬氏が会所及び庭園を使ってもてなすという室町幕府と同様の儀礼を行っていたことが分かる。また、下館跡の園池は室町時代の庭園文化の伝播の中で成立に至ったと考えられる。

5. まとめ

下館跡の園池は、5つの石を「五ヶ石」と呼び、江馬の館跡という伝承が現在まで地元に残っていた。伝承に端を発し、発掘調査により園池の存在を明らかにし、その全貌を把握することができた。もてなしの場として使用された時代から廃絶、そして伝承のみ伝わっていた園池が発掘調査により再び姿を現したのである。

また今回の発掘調査では、護岸・中島などの園池遺構だけでなく、会所・土塀など園池区画全体の様子が明らかとなった。園池区画全体の様子が明らかとなつたため、もてなしの儀礼の全体像をつかむことができた。また、戦国時代に飛騨に伝わった京の庭園文化を発掘調査で確認することができた。

これらのことより、下館跡の園池の発掘調査は、庭園文化史上、非常に意義深いものと言える。

第4節 総 括

下館跡の成立は、下館II A期の14世紀末と考えている。堀と土塀で館を囲み、その内側に建物や園池などを配置している。15世紀後半の下館II B期においてはその全体配置を明らかにすることができた。下館跡の構造は洛中洛外図に描かれた細川管領邸や「花の御所」と記された足利將軍邸に酷似している。

このような館を造ることは、当時においては社会的な階層や格式を示すステータスシンボルであつ

たと考えられる（小島 2000）。下館跡の遺構は、文献に見られる江馬氏と室町幕府の強い関係を示しているのである。また、当時の規範のあり方を確認できる点でも貴重な遺跡であると言えよう。

堀の外側においては、主門前において、馬屋・宿直屋・広場など館に必要な諸施設を計画的に配置している。さらに、工房と考えられる区画も確認し、武士以外の身分の人々も活動していたことが明らかとなっている（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996）。下館が位置する段丘の縁辺部では神社・仏閣の宗教施設を配置していたことも明らかになっている（神岡町教育委員会 1998）。下館跡と高原諏訪城跡という山城跡の麓にある館跡において関連する施設を確認したことは、16世紀の戦国城下町の成立過程を考える上で、また中世都市の成立過程を考える上で、重要な知見と言える。

出土遺物では、土師器・瀬戸美濃焼・珠洲焼などの国内産陶磁器の他に、青磁・白磁・青白磁・天目茶碗など中国製陶磁器も多く出土している。また碁石や銅製火箸なども出土している。これらの出土遺物からは、座敷飾りなどの武家儀礼も行っていたことも推察することができる。将軍邸を真似た館で将軍と同様の儀礼を行うことにより、権威を示したと考えられる。

文献では、1489年（延徳1）に禪僧・万里集九が江馬氏の饗応を受けたという記録が残っている。場所は記録にないものの、発掘調査で確認した下館跡において、園池跡・礎石建物跡SB46が舞台となつたと考えられる。

発掘調査で確認した下館跡は、遺構・遺物のあり方から、幕府と強く結びついていることが分かつた。中世の高原郷において、当時の政治の中心地である京都との強い結びつきのもと、江馬氏がこの地域を治めていたことが明らかとなつたと言えよう。

下館跡発掘調査により飛騨市の中世を明らかにする調査が端を発したばかりである。江馬氏に関わる山城跡の調査も不十分である。また下館跡や山城跡以外の中世遺跡は所在さえ明らかとなっていなものもあると考えられ、人々の生活が見えてはいない。今後は分布調査・聞き取り調査による中世遺跡の把握、また山城跡の継続的な調査に努め、神岡の地に下館跡が成立するに至った歴史的・社会的・地域的な背景をさらに明らかにしていく必要があると考えている。

引用・参考文献 (五十音順)

- 愛知県 2007『愛知県史』(別編 窯業2 中世・近世 濱戸系)
- 赤穂市教育委員会 2002『赤穂城二の丸庭園錦帯池発掘調査概要』
- 網野善彦・石井進編 1992『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 市村高男 1992「戦国期東国の城郭と城下町の実態」『北の中世 史跡整備と歴史研究』
- 日本エディタースクール出版部
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 宇治市歴史資料館 2003『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』宗教法人平等院
- 宇野隆夫 1992「食器計量の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994「考古学からみた日本生産流通史—2000年余の歴史を二分する転換点について—」『日本史研究』第380号 日本史研究会
- 宇野隆夫 1994「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』
- 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1996「木製食器と土製食器—弥生変革と中世変革—」『古代の木製食器』
(弥生期から平安期にかけての木製食器) 埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 大山町 1964『大山町史』
- 岡村利平 1912『飛騨山川』住伊書店
- 小野正敏 1984「第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.4
日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.4
日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985「出土陶磁よりみた15,16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416
東京国立博物館
- 小野正敏 1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏 1991「中世陶磁器研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』
帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 小野正敏 1994「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』531号 信濃史研究会
- 金子拓男・前川要編 1994『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』
1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集
- 鎌倉考古学研究所 1994『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部
- 神岡町 1972『神岡町史』史料編 上巻(中世・近世・近代)
- 神岡町 1982『神岡町史』特集編(飛騨国野史・国説集成)
- 神岡町教育委員会 1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
- 神岡町教育委員会 1981『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
- 神岡町教育委員会 1994『ふるさと「神岡」探検マップ』
- 神岡町教育委員会 1995『飛騨の神岡』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡』下館跡発掘調査報告書I
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996『江馬氏城館跡II』下館跡門前地区と庭園の調査

- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997『江馬氏城館跡Ⅲ』(下館跡南辺地区の調査)
- 神岡町教育委員会 1998『江馬氏城館跡Ⅳ』(下館跡南堀延長部周辺の調査)
- 神岡町教育委員会 2001『江馬氏城館跡Ⅴ』(下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査)
- 川上貢 1998『日本建築史論考』中央公論美術出版
- 川上貢 2002『日本中世住宅の研究』中央公論美術出版
- 木下密運 1984「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所
- 岐阜県 1968『岐阜県史』通史編 近世上
- 岐阜県 1969『岐阜県史』通史編 中世
- 岐阜県 1969『岐阜県史』資料編 古代・中世1
- 岐阜県 1973『岐阜県史』史料編 古代・中世4
- 岐阜県郡上郡大和村教育委員会 1984『東氏館跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡』
- 葛谷鮎彦 1970『中世江馬氏の研究』神岡町
- 国立歴史民俗博物館 1993『日本出土の貿易陶磁』
- 国立歴史民俗博物館 1994『中世都市十三湊と安藤氏』
- 国立歴史民俗博物館 2000『天下統一と城』読売新聞社
- 小島道裕 1984「戦国期城下町の構造」『日本史研究』第257号 日本史研究会
- 小島道裕 2003「江馬氏館と江馬氏—室町期国人領主と館—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第104集 国立歴史民俗博物館
- 小島道裕 1990「平地城館跡と寺院・村落—近江の事例から—」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 小島道裕 2003「江馬氏館と江馬氏—室町期国人領主と館—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第104集 国立歴史民俗博物館
- 小林幹 1972「信州街道」『飛驒の街道』飛驒運輸株式会社
- 酒井重洋 1990「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯—生産と流通の諸問題—』北陸中世土器研究会
- 坂井秀弥 1991「絵図にみる城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 嶋谷和彦 1992「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ
- 千田嘉博 1994「古城探検隊」『歴史読本』第39巻 新人物往来社
- 多賀秋五郎 1941「第5編 第2章 社会経済」『飛驒史の研究』下巻 濃飛文化研究会
- 高橋與右衛門 1992「発掘された中世の建物跡」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- 竹内理三 1980『角川日本地名大辞典』21(岐阜県) 角川書店
- 東海埋蔵文化財研究会 1989『清須—織豊期の城と都市—』研究報告編
- 徳村高秀 2009『史跡江馬氏城館跡下館跡庭園における整備手法に関する考察』京都造形芸術大学大学院修士論文
- 富山県井口村教育委員会 1990『井口城跡発掘調査概要』
- 中井均 1987「中世城館の発生と展開」『物質文化』48 物質文化研究会
- 中井均 1990「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 中井均 1991「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 長野県中野市教育委員会 1993『高梨氏館跡発掘調査報告書』

- 奈良国立文化財研究所 1998『発掘庭園資料』
- 橋口定志 1987「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古学談話会
- 橋口定志 1991「中世居館研究の現状と問題点」『争点日本の歴史』4 新人物往来社
- 飛騨運輸株式会社 1972『飛騨の街道』
- 飛騨市 2004『飛騨市市勢要覧』
- 飛騨市教育委員会 2007『神岡町史』自然編
- 飛騨市教育委員会 2009『神岡町史』通史編 I
- 兵庫県教育委員会 2001『二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
- 福井県教育委員会 1979『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』 I
- 福井県教育委員会 1990『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』 III
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983『一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 藤澤良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群II - 古瀬戸後期様式の編年 - 」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1995「瀬戸古窯址群III - 古瀬戸前期様式の編年 - 」『研究紀要』第3輯
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 北陸中世土器研究会 1991『城館遺跡出土の土器・陶磁器』
- 北陸中世土器研究会 1993『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
- 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 1990『中近末から近世のまち・むらと都市』第1分冊 発表要旨編
- 水野和雄 1984「中世城郭都市一乗谷における地鎮の諸例」『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所
- 水野正好 1984「近世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所
- 村瀬一郎 1979「岐阜県・概説」『日本城郭大系』9 新人物往来社
- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 湯本軍一 1991「信濃高梨氏城下の景観復元」『中世の村落と現代』吉川弘文館
- 横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉岡泰英 1983「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 脇田晴子 1981『日本中世都市論』東京大学出版会
『鳥鳥丸家本書』
『北野社家日記』
『天龍寺造営記』
『梅花無尽藏』
『山科家文書』
『山科家礼記』

別表 1 遺構一覧表

地区・ 区分	建物番号	建物形式	所属時期	主軸角度	主軸群 性	性 格	最も新しい 遺物の分類	最も新しい 遺物の年代	【() 括弧内のアルファベットは、主軸群を示す】	切り合い等	検出 年度
堀内	南堀跡(旧堀)	—	下館 II A 期	Y - 40° - N	C	南堀	—	—	—	—	1978
堀内	南堀跡(新堀)	—	下館 II B 期	Y - 15° - S	a	南堀	—	—	—	—	1978
堀内	北堀跡	—	下館 II A・B 期	Y - 05° - S	a	北堀	—	—	—	西堀跡箱堀と直交	1978
堀内	西堀跡薬研堀	—	下館 II A・B 期	X - 0° - W	a	西堀	—	—	—	—	1978
堀内	西堀跡箱堀	—	下館 II A・B 期	X - 05° - W	a	西堀	—	—	—	北堀跡と直交	1998
堀内	西堀跡箱堀	—	下館 II A・B 期	X - 0° - W	a	西堀	—	—	—	南堀跡旧堀と直交	1998
堀内	SA 55	柱穴列跡	下館 II A・B 期	X - 05° - W	a	土坪	—	—	—	—	1999
堀内	SA 56	柱穴列跡	下館 II A・B 期	X - 05° - W	a	土坪	—	—	—	—	1999
堀内	SV 01	土坪基底部石列跡	下館 II B 期	Y - 15° - N	a	土坪	—	—	—	—	1998
堀内	SV 02	土坪基底部石列跡	下館 II A 期	Y - 50° - N	c	土坪	—	—	—	—	1998
堀内	SB 61	掘立柱門跡	下館 II A・B 期	X - 10° - W	a	脇門	—	—	—	—	1999
堀内	SB 41	礎石建物跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	台所	—	—	—	—	1978
堀内	SB 42	礎石建物跡	下館 II B 期	Y - 05° - N	a	灶屋	—	—	—	—	1978
堀内	SB 43	礎石建物跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	常御殿の付属建物か、 常御殿	—	—	—	—	1978
堀内	SB 44	礎石建物跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	常御殿	—	—	—	—	1978
堀内	SB 46	礎石建物跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	会所	—	—	—	—	1978
堀内	SA 45	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	Y - 05° - N	a	—	—	—	—	—	1978
堀内	SA 47	掘立柱板解跡	下館 II B 期	Y - 05° - N	a	板解	—	—	—	—	1978
堀内	SA 42	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	X - 05° - E	a	—	—	—	—	—	1994
堀内	SA 43	礎石柵列跡	下館 II B 期	X - 00° - E	a	—	—	—	—	—	1999
堀内	SB 52	礎石建物跡	帰属未確定	Y - 13.5° - S	d	—	T - 6	15世紀前半	—	—	1994
堀内	SA 41	掘立柱柵列跡	帰属未確定	X - 13.0° - E	d	—	T - 6 · 7	15世紀前半	—	—	1994
堀内	SB 48	総柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	Y - 30° - S	b	—	—	—	—	—	1978
堀内	SB 49	礎石建物跡	下館 II A 期	Y - 35° - S	b	—	—	—	—	—	1978
堀内	SB 50	礎石建物跡	下館 II A 期	X - 35° - E	b	—	T - 6 · 7	15世紀前半	—	—	1978
堀内	SB 51	礎石建物跡	下館 II A 期	Y - 30° - S	b	—	—	—	—	—	1978
堀内	SB 53	礎石建物跡	下館 II A 期	計測不能	—	—	—	—	SB 46 の下層に位置する 主軸方位は SB 46 と同じ可能性あり (全面の検出をしていない。)	2001	
堀内	SB 62	掘立柱門跡	下館 II A 期	Y - 00° - N	a	庭園への通用門	—	—	—	—	1999
堀内	SB 64	礎石建物跡	下館 II A 期	Y - 20° - S	b	—	—	—	—	—	2003
堀内	SD 01	溝跡	帰属未確定	X - 1.5° - E	a	—	T - 6 · 7	15世紀前半	SD 01 (a) → SB 50 (b) · SE 52 (?)	—	1994
堀内	SA 51	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 2.0° - E	a	—	—	—	= ? SA 52 (a) (SA 51 (a) → SA 53 (a)) → SA 54 (a)	—	1999
堀内	SA 52	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 1.0° - W	a	—	T - 5	—	= ? SA 51 (a)	—	1999
堀内	SA 53	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 1.0° - W	a	—	—	—	(SA 51 (a) = SA 53 (a)) → SA 54 (a)	—	1999
堀内	SA 54	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 1.0° - W	a	—	—	—	SA 54 (a) ← (SA 51 (a) = SA 53 (a))	—	1999
堀内	SA 57	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	—	—	—	—	—	1999

地区・ 区分	建物番号	建物形式	所属時期	主軸角度	主軸 軸群	性 格	最も新しい 遺物の分類	最も新しい 遺物の年代	() 括弧内のアルファベットは、主軸群を示す】	切り合い等	検出 年度
堀内	SA 58	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	Y - 30° - S	b	-	-	-	-	-	1998
門前	SB 02	側柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 15° - N	a	宿直屋	-	16世紀半ば	大窯第3～4小期(16世紀前半)の遺物が出土したSK 10、 大窯第3小期(16世紀前半)の遺物が出土したSK 79を接す	1995	
門前	SB 03	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 30° - N	c	-	-	-	-	-	1995
門前	SB 04	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 45° - S	b	馬屋	-	-	SP 359 → SP 360, SP 383 → SP 382 より SA 02(b) → SB 04(b)	1995	
門前	SB 05	側柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 10° - N	a	馬屋	-	-	-	-	1995
門前	SB 06	縦柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	X - 00° - E	a	-	-	-	-	-	1995
門前	SB 07	縦柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	X - 60° - E	d	-	-	-	-	-	1995
門前	SB 08	側柱式掘立柱建物跡	帰属未確定	Y - 35° - N	c	-	-	-	-	-	1995
門前	SA 01	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	Y - 20° - S	d	-	-	-	-	-	1995
門前	SA 02	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	Y - 45° - S	b	-	-	-	SP 359 → SP 360, SP 383 → SP 382 より SA 02(b) → SB 04(b)	1995	
門前	SB 01	縦柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	X - 00° - E	a	-	珠洲IV後半	14世紀後半	= 竪跡 SX 01	SB 12(c) と重複するが切り合う柱穴を1978年度調査で完掘。	1995
工房	SB 11	側柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 15° - N	a	-	-	-	SB 13(c) と重複するが直線切り合はず。	= SX 01(遺物の年代はSX 01からのもの) SX 01からT-6・7 類の出土はない) → SB 12(c) SB 11(a) と重複するが切り合はず。	1996
工房	SB 12	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 25° - N	c	-	-	-	SB 12(c) → SX 01 = SB 13(c)。SB 11(a) と重複するが切り合う柱穴を1978年度調査で完掘、新旧関係不明。	SB 12(c) と重複するが切り合う柱穴を1978年度調査で完掘。	1996
工房	SB 13	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 30° - N	c	-	珠洲V期	15世紀前半	-	SB 12(c) と重複するが切り合はず。	1996
工房	SB 14	縦柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	X - 45° - W	c	-	-	-	-	-	1996
工房	SA 11	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	Y - 00° - N	a	-	-	-	-	-	1996
工房	SA 12	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	X - 10° - W	a	-	T-1	14世紀後半	-	-	1996
工房	SB 15	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 25° - N	c	-	-	-	配置より SI 02(c) とセット SB 16(c) · SB 17(a) と重複するが切り合はず。	-	1996
工房	SB 16	縦柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 50° - N	c	-	-	-	SP 411 → SP 440, SP 443 → SP 442, SP 513 → SP 417、 SP 363 → SP 447 より SB 16(c) → SB 17(a) SB 15(a) · SI 02(c) と重複するが切り合はず。	-	1996
工房	SB 17	縦柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 10° - N	a	-	T-6・7	15世紀前半	SP 410 → SP 411, SP 442 → SP 443, SP 417 → SP 513、 SP 447 → SP 563 より SB 17(a) ← SB 16(c) SB 17(a) ← SI 02(c) SB 15(c) と重複するが切り合はず。	-	1996
工房	SI 01	豎穴住居跡	下館 II B 期	Y - 05° - N	a	-	大窯第1～2小期	16世紀初頭	-	-	1996
工房	SI 02	豎穴住居跡	下館 II A 期	Y - 30° - N	c	-	T	-	配置より SB 15(c) とセット SI 02(c) → SB 17(a) SB 16(c)	配置するが切り合はず。	1996
工房	SB 21	縦柱式掘立柱建物跡	下館 I 期	Y - 22.5° - N	d	-	-	-	SP 316 → SP 317 から SB 21 (?) → SB 22 (a) SB 23 (c)	SB 317 → SP 316 から SB 22 (a) ← SB 21 (?) SP 267 → SP 268 から SB 22 (a) → SA 25 (a) SB 23 (c) · SB 24 (a)	1997
工房	SB 22	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 05° - N	a	-	-	-	-	SB 268 から SB 22 (a) → SA 25 (a) SB 23 (c) · SB 24 (a)	1997

地区・ 区分	建物番号	建物形式	所属時期	主軸角度	性 格	最も新しい 遺物の分類	最も新しい 遺物の年代	【()括弧内のアルファベットは、主軸群を示す】	切り合ひ等	検出 年度	
工房	SB 23	縦柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 2.5° - N	c	-	古瀬戸戸後 IV (新)	15世紀後半	SP 663 → SP 664 から SB 23 (c) → SB 24 (a) SP 87 ← SX 11 から SB 23 (c) ← SX 11 (15世紀前半の土師器Ⅲ出土) SB 22 (a) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 24	側柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	Y - 0.0° - N	a	-	T - 6	15世紀前半	SA 25 とセットの可能性あり SP 664 → SP 663 から SB 24 (a) ← SB 23 (c)	-	1997
工房	SB 25	側柱式掘立柱建物跡	帰属未確定	X - 1.5° - E	a	-	古瀬戸戸後 III ~ IV	15世紀後半	-	-	1997
工房	SB 26	縦柱式掘立柱建物跡	下館 II B 期	X - 0.5° - W	a	-	-	-	SB 25 (a) ・ SB 27 (c) ・ SB 28 (b) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 27	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 3.0° - N	c	-	T - 6 · 7	15世紀前半	SP 371 → SP 372 から SB 27 (c) → SB 28 (b) SB 25 (a) · SB 26 (a) ・ SA 24 (a) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 28	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 2.5° - S	b	-	T - 6 · 7	15世紀前半	SP 372 ← SP 371 から SB 28 (b) ← SB 27 (c) SB 25 (a) · SB 26 (a) ・ SA 24 (a) とも重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 29	側柱式掘立柱建物跡	下館 II A 期	Y - 3.0° - N	c	-	-	-	SA 24 (a) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 30	側柱式掘立柱建物跡	帰属未確定	Y - 5.5° - N	c	-	T - 6 · 7	15世紀前半	石組み焼SX 22 の小屋掛けの可能性あり SP 507 → SX 17 SP 460 → SI 11 から SB 30 (c) → SI 11 (b)	-	1997
工房	SI 11	竪穴住居跡	下館 II A 期	Y - 4.0° - S	b	-	古瀬戸戸後 III、 T - 6 · 7、 T - 8	15世紀前半	SI 11 ← SP 164 から SI 11 (b) ← SA 28 (?)	-	1997
工房	SA 21	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 0.5° - W	a	-	T - 6 · 7	15世紀前半	SB 22 (a) に付属 SP 384 → SP 383 から SA 21 (a) → SA 24 (a)	-	1997
工房	SA 22	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 3.5° - W	c	-	-	-	SB 27 (c) に付属 SA 22 (c) ・ SA 24 (a) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SA 23	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 3.5° - W	c	-	-	-	SB 30 (c) ・ SA 28 (?) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SA 24	掘立柱柵列跡	下館 II B 期	X - 0.0° - E	a	-	古瀬戸戸後 IV (新)	15世紀後半	SP 383 ← SP 384 から SA 24 (a) ← SA 21 (a) SB 21 (?) · SA 23 (c) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SA 25	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	Y - 0.5° - N	a	-	-	-	SB 24 とセットの可能性あり SP 267 → SP 268 から SB 22 (a) → SA 25 (a) SB 21 (?) ・ SB 23 (c) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SA 26	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	Y - 2.0° - S	d	-	T - 6 · 7	15世紀前半	SP 102 → SP 247 から SA 26 (?) → SA 27 (b) SA 26 (?) · SA 27 (b) とセット	-	1997
工房	SA 27	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	X - 3.0° - E	b	-	T - 6 · 7	15世紀前半	SP 247 ← SP 102 から SA 27 (b) ← SA 26 (?) SA 26 (?) · SA 27 (b) とセット	-	1997
工房	SA 28	掘立柱柵列跡	帰属未確定	Y - 14.5° - N	d	-	-	-	SP 164 → SI 11 から SA 28 (?) → SI 11 (b) SA 23 (c) と重複するが切り合わず	-	1997
工房	SB 31	側柱式掘立柱建物跡	帰属未確定	Y - 3.0° - N	c	-	-	-	性格不明 建物ではない可能性有り	-	1997
工房	SA 29	掘立柱柵列跡	帰属未確定	Y - 3.5° - N	c	-	-	-	-	-	1997
工房	SA 30	掘立柱柵列跡	帰属未確定	X - 7.0° - W	d	-	-	-	-	-	1997
工房	SA 31	掘立柱柵列跡	帰属未確定	Y - 6.0° - N	c	-	-	-	-	-	1997
工房	SA 32	掘立柱柵列跡	下館 II A 期	Y - 2.5° - S	b	-	-	-	-	-	1997
工房	SA 33	掘立柱柵列跡	帰属未確定	Y - 8.5° - S	d	-	-	-	-	-	1997

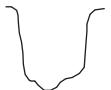
別表2 2000・2001年度園池・礎石建物SB46地区調査、2001年度礎石建物SB43地区調査 柱穴跡計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備 考	調査
SP 1	-7.84	1.38	円 形	23	22	22	455.17	-	B	SA 47 の続き SP1 > SP3 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 2	-7.42	1.35	楕円形	41	33	6	455.16	-	A	SP2 > SP3 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 3	-7.49	1.13	楕円形	69	70	2	455.18	柱抜き取り穴	A	-	未
SP 4	-8.42	1.16	円 形	46	40	16	455.06	柱抜き取り穴	-	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 5	-9.38	32.97	楕円形	41	30	28	455.23	-	C-2	15cm 大船津花崗岩礫 礫より下層を掘削せず	半
SP 6	-8.56	5.62	楕円形	37	29	12	455.21	-	B	-	半
SP 7	-7.97	6.75	円 形	26	22	36	455.31	-	A	SA 47 柱穴	半
SP 8	-5.50	5.67	円 形	46	41	22	455.09	-	B	SA 59 柱穴	半
SP 9	-4.74	6.16	円 形	22	22	7	455.19	-	-	-	未
SP 10	-5.25	6.28	楕円形	48	33	33	454.94	-	C-2	-	半
SP 11	-5.49	7.02	楕円形	40	32	13	455.17	-	C-2	SA 59 柱穴	半
SP 12	-5.51	7.59	不整形	69	48	22	455.09	-	C-2	SA 59 柱穴 20cm 大船津花崗岩礫1、 20cm 大ホルンフェルス1	半
SP 13	-5.42	8.10	不整形	50	35	37	454.97	-	B	10cm 大川原石1	半
SP 14	-5.64	8.59	円 形	44	39	17	455.19	-	B	SA 59 柱穴 10cm 大川原石1 石より下層を掘削せず	半
SP 15	-5.64	10.08	楕円形	42	34	49	454.86	-	A	-	半
SP 16	-5.60	9.48	楕円形	100	67	55	454.88	-	B	SA 59 柱穴	半
SP 17	-5.93	10.47	楕円形	50	46	24	455.05	-	B	SA 59 柱穴	完
SP 18	-4.67	9.52	円 形	9	9	-	-	-	-	-	未
SP 19	-6.57	7.54	楕円形	37	30	14	455.24	-	B	-	半
SP 20	-6.43	8.02	楕円形	40	36	10	455.26	-	A	-	半
SP 21	-6.52	10.28	方 形	40	22	7	455.29	-	B	-	半
SP 22	-6.84	10.41	円 形	24	24	11	455.25	-	B	-	半
SP 23	-7.96	8.78	円 形	25	26	22	455.33	-	B	SA 47 柱穴	半
SP 24	-8.07	12.92	楕円形	32	26	20	455.32	-	B	SA 47 柱穴	半
SP 25	-7.97	15.09	円 形	30	28	23	455.30	-	C-2	SA 47 柱穴 1978年度調査時に完掘	完
SP 26	-7.99	17.03	方 形	38	34	30	455.32	-	A	SA 47 柱穴	半
SP 27	-7.98	19.14	円 形	24	20	10	455.27	-	A	SA 47 柱穴 1978年度調査時に完掘	完
SP 28	-7.71	18.93	楕円形	28	16	8	455.27	-	C-2	1978年度調査時に完掘	完
SP 29	-8.00	17.70	方 形	32	19	6	455.29	-	A	-	完
SP 30	-5.75	17.53	円 形	38	34	31	454.97	-	B	-	半
SP 31	-5.76	17.87	楕円形	61	50	30	454.99	円形 径9	-	礫板石1 細板石より下層を掘削せず	半
SP 32	-5.72	19.47	楕円形	59	-	9	455.25	-	-	礫板石1 細板石より下層を掘削せず 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 33	-5.86	20.08	円 形	41	37	4	455.27	円形 径17	-	礫板石1 細板石より下層を掘削せず 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 34	-5.77	19.71	円 形	52	28	6	455.23	-	B	10cm 大船津花崗岩礫 礫より下層を掘削せず	半
SP 35	-7.45	26.61	楕円形	40	30	3	455.34	-	-	-	未
SP 36	-9.69	36.27	楕円形	44	34	3	455.49	-	-	-	未
SP 37	-12.62	36.64	楕円形	38	35	31	455.04	円形 径13	B	礫板石1	半
SP 38	-12.21	36.66	楕円形	-	-	40	455.14	-	A	-	半
SP 39	-	-	楕円形	-	-	30	-	-	B	-	半
SP 40	-13.01	32.78	楕円形	32	26	8	455.39	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 41	-13.44	33.82	楕円形	46	36	40	455.12	-	A	-	半
SP 42	-13.33	34.72	楕円形	30	26	38	455.16	-	B	-	半
SP 43	-15.34	34.44	楕円形	-	26	3	455.45	-	B	-	半
SP 44	-15.18	32.40	楕円形	-	-	4	455.46	-	B	-	半
SP 45	-17.67	32.30	円 形	28	26	23	454.99	-	B	-	半
SP 46	-16.70	34.50	-	-	-	22	455.26	-	B	-	半
SP 47	-16.14	38.53	楕円形	24	20	8	455.37	-	B	-	半
SP 48	-17.79	48.62	楕円形	30	-	7	455.47	-	B	1978年度調査時に完掘	完
SP 49	-16.26	50.79	円 形	24	24	8	455.45	-	A	-	半
SP 50	-16.66	51.05	楕円形	28	25	6	455.47	-	A	1978年度調査時に完掘	完
SP 51	-17.60	50.71	楕円形	38	31	6	455.47	楕円形 長径18 短径15	-	-	未
SP 52	-17.09	53.48	楕円形	21	18	3	455.52	-	-	1978年度調査時に完掘	完
SP 53	-16.85	53.50	円 形	30	30	6	455.49	-	A	-	完
SP 54	-16.39	53.26	楕円形	-	-	5	455.50	-	-	1978年度調査時に完掘	完
SP 55	-16.49	54.10	楕円形	-	-	14	455.44	-	A	1978年度調査時に完掘	完
SP 56	-17.55	54.83	楕円形	38	33	3	455.53	円形 径12	-	-	未

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備 考	調査
SP 57	-16.93	55.84	楕円形	53	50	16	455.42	-	A	1978 年度調査時に完掘	完
SP 58	-16.90	56.62	円 形	24	24	2	455.52	-	-	-	未
SP 59	-16.90	57.78	楕円形	34	16	3	455.52	-	-	-	未
SP 60	-17.31	58.81	楕円形	45	39	20	455.39	-	B	1978 年度調査時に完掘	完
SP 61	-17.82	60.19	楕円形	-	-	2	455.56	-	-	1978 年度調査時に完掘	未
SP 62	-17.86	62.35	楕円形	-	-	6	455.49	-	-	-	未
SP 63	-17.47	62.98	楕円形	49	39	6	455.51	-	-	-	未
SP 64	-17.70	62.99	楕円形	-	-	4	455.53	-	-	-	未
SP 65	-17.32	63.28	楕円形	-	26	3	455.54	-	-	-	未
SP 66	-17.32	64.97	楕円形	34	24	15	455.46	-	A	1978 年度調査時に完掘	半
SP 67	-16.78	65.85	楕円形	30	24	8	455.54	-	B	-	半
SP 68	-17.62	51.96	-	-	-	27	455.22	-	B	1978 年度調査時に完掘	完
SP 69	-18.56	53.06	円 形	36	35	33	455.21	-	B	-	完
SP 70	-19.46	52.11	円 形	22	20	-	455.13	-	-	-	未
SP 71	-20.00	52.06	-	-	-	28	455.20	-	B	-	完
SP 72	-20.70	52.30	-	-	-	-	455.20	-	B	-	完
SP 73	-19.48	52.76	円 形	34	33	8	455.09	-	A	-	完
SP 74	18.84	53.18	-	-	-	28	455.21	-	B	1978 年度調査時に完掘	完
SP 75	-20.95	53.23	-	-	-	37	455.14	-	B	1978 年度調査時に完掘	完
SP 76	-25.88	49.04	楕円形	30	28	12	455.11	-	A	SX 43 > SP 76	半
SP 77	-26.05	49.40	円 形	31	30	14	455.11	-	A	SX 43 > SP 77	半
SP 78	-26.02	50.99	円 形	32	32	15	455.13	-	B	SX 43 > SP 78	半
SP 79	-26.58	52.00	円 形	40	37	11	455.19	-	B	SX 43 > SP 79	半
SP 80	-25.29	41.99	楕円形	-	-	22	455.38	-	A	-	半
SP 81	-25.42	47.80	不整形	-	-	22	454.93	-	A	-	半
SP 82	-25.23	49.85	楕円形	-	-	6	455.20	-	B	-	半
SP 83	-32.95	56.23	不整形	36	27	13	455.30	-	C-2	-	半
SP 84	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番	-
SP 85	-33.44	56.78	楕円形	-	-	1	455.35	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 86	-6.07	16.09	不整形	40	24	11	455.20	-	A	-	半
SP 87	-17.00	51.93	-	-	-	27	455.22	-	-	-	半
SP 88	-17.69	53.12	楕円形	-	-	7	455.48	-	-	-	半
SP 89	-17.05	60.73	楕円形	37	33	3	455.54	-	-	1978 年度調査時に完掘	完
SP 90	-8.08	18.92	円 形	22	20	11	455.28	-	-	-	完
SP 91	6.49	9.16	楕円形	64	33	11	455.29	-	-	-	半
SP 92	-5.27	4.31	楕円形	36	35	3	455.27	-	-	-	未
SP 93	-20.12	53.22	-	-	-	24	455.24	-	B	-	半
SP 94	-31.68	22.10	楕円形	24	18	9	455.67	-	B	墨書き土器皿埋納穴	完
SP 95	-25.12	19.42	不整形	24	18	9	-	-	B	墨書き土器皿埋納穴	未

第 46 表 柱穴跡断面形分類表

形態・分類	備 考
A 類 	・底面が平坦で、断面形が方形を呈するもの。
B 類 	・底面が丸もしくは尖り、断面形が方形・三角形を呈するもの。
C-1 類  C-2 類 	・底面に段を有するもの。 { 底面中央に段を有するもの (C-1 類)。 壁面に段を有するもの (C-2 類)。

別表3 2002年度I地区調査 柱穴跡計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備考	調査
SP 1	-7.37	-0.44	円形	24	20	27	454.83	-	B	SP 2 > SP1 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 2	-7.50	-0.29	円形	34	30	18	454.96	-	A	SP 2 > SP1 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 3	-8.58	-0.28	楕円形	42	28	26	454.98	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土	半
SP 4	-10.44	1.19	円形	40	38	20	455.10	円形 径 15 cm	B	SA 56 c 柱穴 埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 5	-11.82	1.28	-	48	-	63	454.79	径 18 cm	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 6	-11.73	0.01	楕円形	-	44	53	454.78	径 16 cm	A	SA 56 c 柱穴 埋土は地山ブロック混黒褐色系 断面確認のため柱痕跡平面形確認できず。	完
SP 7	-12.62	1.40	不整形	50	38	10	455.35	-	-	-	未
SP 8	-14.04	1.32	円形	49	47	45	454.73	-	B	埋土は地山ブロック混黒褐色砂礫土	半
SP 9	-15.67	1.37	方形	47	38	56	454.87	円形 径 16 cm	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 10	-16.37	1.45	-	41	-	68	454.81	-	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 11	-16.83	1.43	楕円形	31	20	47	454.94	-	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 12	-17.82	1.51	円形	37	32	56	454.85	-	B	-	半
SP 13	-18.28	1.45	不整形	29	22	53	454.81	-	B	埋土は黒褐色砂礫土	半
SP 14	-18.51	1.50	円形	35	33	56	454.82	-	A	埋土は黒褐色砂礫土	半
SP 15	-20.49	1.27	-	43	-	61	454.88	-	C-2	埋土は黒褐色砂礫土	半
SP 16	-21.66	1.56	円形	35	31	40	455.09	-	B	埋土は黒褐色砂礫土	半
SP 17	-22.46	1.45	-	28	-	17	455.17	-	礫 1	-	未
SP 18	-20.77	-0.23	楕円形	44	23	15	455.37	-	A	-	半
SP 19	-21.44	-0.31	楕円形	40	33	17	455.35	-	A	-	半
SP 20	-10.34	-4.14	円形	21	18	21	454.76	-	B	-	未
SP 21	-11.58	-0.73	円形	26	21	43	455.05	-	B	-	半
SP 22	-15.17	-4.25	不整形	32	26	35	454.71	-	B	-	半
SP 23	-16.58	-4.28	不整形	33	31	27	454.70	-	B	-	半
SP 24	-18.52	-4.08	円形	27	26	15	454.87	-	B	-	半
SP 25	-19.57	-4.31	円形	39	32	25	454.80	-	C-2	-	半
SP 26	-20.06	-4.01	不整形	32	29	29	454.78	円形 径 16 cm	C-2	SP 26 > SP 55	半
SP 27	-22.87	-4.25	円形	19	16	17	454.85	-	B	-	半
SP 28	-23.57	-4.13	-	28	-	15	454.97	-	B	-	半
SP 29	-24.72	1.56	円形	23	22	6	455.22	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	半
SP 30	-25.31	1.49	円形	24	24	20	455.00	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	半
SP 31	-25.86	1.46	楕円形	35	19	13	455.28	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	半
SP 32	-26.15	1.59	-	26	-	26	455.18	-	A	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	半
SP 33	-25.41	-0.28	楕円形	36	20	5	455.46	-	B	-	半
SP 34	-30.71	-0.38	楕円形	38	30	16	455.19	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 35	-26.54	-4.34	不整形	51	39	22	454.91	-	C-2	-	半
SP 36	-28.76	-4.30	円形	30	27	17	455.03	-	B	-	半
SP 37	-33.00	-0.64	-	44	-	8	455.30	-	A	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	未
SP 38	-33.26	-0.57	-	-	-	5	455.32	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	未
SP 39	-33.49	-0.60	-	30	-	14	455.33	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	未
SP 40	-34.38	-0.51	-	-	-	13	455.37	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	未
SP 41	-34.50	-0.53	不整形	27	24	17	455.38	-	B	埋土に第VI層下館基盤土〈VI iv〉混	未
SP 42	-16.18	0.23	方形	39	-	67	454.70	方形 径 23 cm	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 43	-16.71	0.09	円形	38	-	48	454.85	円形 径 10 cm	A	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 44	-30.99	1.43	-	-	-	48	454.93	-	B	埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 45	-28.13	1.69	円形	34	-	49	454.99	-	A	-	半
SP 46	-28.32	1.72	-	43	-	29	455.18	-	B	SP 46 > SP 53 埋土は地山ブロック混黒褐色土	半
SP 47	-27.95	-0.32	円形	22	21	32	455.17	-	A	SP 47 > SP 52 埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 48	-31.08	0.48	-	37	-	21	455.48	-	B	-	半
SP 49	-31.24	-0.28	-	-	-	17	455.45	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 50	-34.79	-0.50	楕円形	41	34	13	455.38	-	C-2	第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混より下層	未
SP 51	-36.99	-0.23	楕円形	52	40	59	454.92	円形 径 12 cm	A	SA 55 c 柱穴 硫酸石 1	半
SP 52	-27.96	-0.15	円形	15	-	25	455.17	-	A	SP 47 > SP 52 埋土は黒褐色土	半
SP 53	-28.31	1.50	-	47	-	27	455.16	-	A	SP 46 > SP 53	半
SP 54	-25.53	0.92	円形	35	30	7	455.34	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半
SP 55	-19.80	-4.00	円形	29	29	23	454.81	-	A	SP 26 > SP 55	半
SP 56	-35.64	1.51	楕円形	30	26	26	455.18	-	B	-	半
SP 57	-35.87	1.20	円形	36	36	26	455.16	-	B	-	半
SP 58	-35.80	0.95	楕円形	34	26	19	455.22	-	C-2	1994年度調査時に完掘	完
SP 59	-36.96	1.46	円形	26	-	9	455.31	-	B	1994年度調査時に完掘	完
SP 60	-11.81	0.89	-	28	-	3	455.10	-	B	埋土に第IV層B期遺構面構築土〈IV iii〉混	半

別表4 2002年度II地区調査 柱穴跡計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備考	調査
SP 1	-1.55	42.87	円形	17	13	39	455.06	円形 径15	-	底面に礎板石1	半
SP 2	-1.49	42.14	円形	48	39	45	455.00	柱抜き取り穴	C-2	-	半
SP 3	-3.34	41.91	円形	47	40	53	454.92	柱抜き取り穴	A	5cm 大船津花崗岩礫2	半
SP 4	2.74	32.81	円形	29	23	21	455.16	柱抜き取り穴	B	7cm 大船津花崗岩礫1	半
SP 5	2.65	33.77	円形	48	39	65	454.72	柱抜き取り穴	A	-	半
SP 6	2.64	34.70	円形	35	35	27	455.12	-	A	礫1	半
SP 7	2.40	35.16	円形	29	29	19	455.23	-	C-1	-	半
SP 8	1.87	35.20	楕円形	42	27	12	455.29	-	A	礫1	半
SP 9	1.10	33.43	楕円形	23	-	20	455.17	柱抜き取り穴	A	-	半
SP 10	1.92	31.61	円形	33	30	20	455.13	-	B	-	半
SP 11	4.67	31.04	円形	30	28	47	454.82	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 12	-8.28	45.30	円形	24	21	13	455.22	-	A	-	半
SP 13	-8.76	44.14	-	30	24	16	455.22	-	A	-	半
SP 14	-7.59	44.49	円形	26	22	27	455.10	-	B	10cm 大船津花崗岩礫1 15cm 大船津花崗岩礫1	半
SP 15	-7.11	44.44	円形	18	17	20	455.22	-	B	-	半
SP 16	-7.67	44.01	円形	17	16	10	455.30	-	A	-	半
SP 17	-7.35	43.16	円形	27	25	17	455.23	円形 径12cm	A	礎板石1 炭化した木質出土	半
SP 18	-5.61	42.82	円形	36	30	31	455.10	柱抜き取り穴	A	-	半
SP 19	-3.75	42.88	円形	23	22	35	455.09	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 20	-1.48	41.62	円形	36	33	33	455.13	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 21	-7.40	37.92	円形	30	25	39	455.02	柱抜き取り穴	B	SP 21 > SP 22	半
SP 22	-7.63	37.87	円形	40	35	35	455.05	-	B	SP 21 > SP 23	半
SP 23	-3.90	38.51	楕円形	-	-	44	455.09	-	B	瓦器1 10cm 大船津花崗岩礫3	半
SP 24	-3.19	38.19	円形	35	32	67	454.78	-	B	-	半
SP 25	-1.38	37.63	円形	23	14	27	455.10	-	B	-	半
SP 26	-3.09	36.31	円形	38	33	56	454.87	柱抜き取り穴	C-1	-	半
SP 27	-2.50	35.62	円形	32	28	54	454.82	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 28	-2.27	35.44	円形	24	22	9	455.26	-	B	5cm 大川原石1	半
SP 29	-2.08	35.07	円形	29	27	50	454.84	柱抜き取り穴	B	瓦器小片1	半
SP 30	-2.10	34.01	円形	23	22	22	455.16	-	A	-	半
SP 31	-2.99	33.62	円形	28	27	61	454.82	柱抜き取り穴	B	瓦器小片1 15cm 大川原石1	半
SP 32	-2.47	32.89	円形	41	36	34	455.06	柱抜き取り穴	C-2	川原石片4	半
SP 33	-2.16	32.94	方形	21	21	20	455.07	-	A	-	半
SP 34	-4.60	35.12	円形	28	27	68	454.73	-	B	-	半
SP 35	-4.04	32.76	-	47	36	41	454.90	-	A	41cm	半
SP 36	-2.68	41.11	楕円形	39	29	77	454.68	柱抜き取り穴	A	-	半
SP 37	-1.20	40.12	-	-	56	454.90	柱抜き取り穴	C-1	-	半	
SP 38	-1.97	40.12	-	-	37	455.10	柱抜き取り穴	C-1	-	半	
SP 39	0.56	42.93	-	-	30	455.19	-	B	-	半	
SP 40	0.98	44.85	-	21	-	39	454.97	-	A	-	半
SP 41	-4.39	32.71	円形	28	25	23	455.17	-	B	-	半
SP 42	-1.05	31.13	円形	24	22	74	454.65	-	B	15cm 大川原石1 1.5cm 大川原石1	半
SP 43	-1.02	30.74	-	-	28	455.08	-	A	10cm 大川原石1	半	
SP 44	-2.82	30.68	円形	45	29	56	454.82	円形 径12	C-1	-	半
SP 45	1.79	31.92	円形	31	29	9	455.26	-	A	6cm 大船津花崗岩礫1	半
SP 46	-1.12	36.42	方形	44	35	5	455.37	円形 径12	B	5cm 大船津花崗岩礫1	半
SP 47	2.65	39.80	円形	21	20	21	455.07	-	A	-	半
SP 48	4.19	42.29	円形	34	30	32	454.98	-	B	1976・77年度調査時に完掘	完
SP 49	4.10	32.32	楕円形	55	50	7	455.23	円形 径14	C-2	SP 50 > SP 49	半
SP 50	4.10	32.82	楕円形	57	33	8	455.25	柱抜き取り穴	A	礎板石1 SP 50 > SP 49	半
SP 61	2.78	56.12	円形	37	36	4	455.15	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 62	3.30	58.30	円形	34	32	35	455.17	-	A	-	半
SP 63	4.34	61.18	円形	27	25	34	455.16	-	B	-	半
SP 64	1.98	61.50	円形	32	30	14	455.40	-	A	SB 44 磨石抜き取り穴 1978年度調査時に完掘	完
SP 65	1.35	61.47	円形	32	30	35	455.16	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 66	0.02	61.81	円形	37	32	22	455.31	-	-	SP 66 < SX 49	半
SP 67	-1.24	61.13	円形	25	24	32	455.22	-	B	-	半
SP 68	-0.44	61.41	楕円形	38	35	27	455.28	-	C-2	-	半
SP 69	-2.36	60.91	円形	31	31	38	455.13	柱抜き取り穴	B	-	半
SP 70	-1.92	59.28	円形	33	31	17	455.34	-	A	1978年度調査時に完掘	完
SP 71	4.49	58.37	円形	25	22	12	455.39	-	A	-	半
SP 72	1.73	35.74	円形	48	41	8	455.33	-	-	1978年度調査時に完掘	完
SP 73	2.00	39.84	円形	42	37	11	455.35	-	-	1978年度調査時に完掘	完
SP 74	1.92	41.83	円形	68	59	6	455.43	-	-	SB 44 磨石抜き取り穴 1978年度調査時に完掘	完

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備 考	調査
SP 75	2.06	43.76	円 形	36	36	8	455.39	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 76	1.98	45.75	円 形	34	31	5	455.41	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 77	-3.89	55.50	円 形	43	42	4	455.47	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 78	-3.96	57.72	楕円形	62	47	5	455.48	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 79	-4.02	59.31	楕円形	41	36	11	455.41	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 磯 1 1978 年度調査時に完掘	完
SP 80	-3.83	61.02	楕円形	46	36	11	455.40	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 81	1.92	57.74	楕円形	58	46	9	455.44	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 82	2.18	61.47	円 形	47	46	13	455.39	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 1978 年度調査時に完掘	完
SP 83	2.20	40.35	円 形	33	30	6	455.42	—	—	1978 年度調査時に完掘	完
SP 84	1.29	42.24	円 形	40	36	8	455.42	—	—	—	半
SP 85	-5.91	41.70	楕円形	56	45	5	455.41	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 磯 1	半
SP 86	-3.97	43.97	楕円形	68	54	10	455.43	—	—	SB 44 硙石抜き取り穴 磯 7	半

別表 5 2003 年度 I 地区調査 柱穴計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備 考	調査
SP 1	20.16	30.18	円 形	25	19	30	454.82	—	B	SP 1 > SP 2	半
SP 2	20.16	30.04	円 形	27	18	31	454.81	—	B	SP 1 > SP 2	半
SP 3	21.00	30.24	方 形	33	17	13	454.92	—	A	—	半
SP 4	20.66	34.34	円 形	35	35	27	454.85	—	A	—	半
SP 5	20.10	35.75	不整形	50	34	21	454.92	—	C-2	—	半
SP 6	21.69	35.70	円 形	—	—	27	454.88	—	B	—	半
SP 7	22.30	28.52	円 形	44	37	2	455.22	—	B	—	半
SP 8	22.74	29.45	円 形	40	35	35	454.90	—	B	10 cm 大礫 2 埋土に黄橙色粘土多く混	半
SP 9	23.02	32.05	円 形	37	29	10	455.15	—	B	—	半
SP 10	23.48	30.68	楕円形	45	22	40	454.85	—	B	埋土に炭化物・黄橙色粘土多く混	半
SP 11	22.55	31.34	円 形	21	17	15	455.12	—	—	10 cm 大礫 1 磯より下層は掘削せず 埋土に黄橙色粘土多く混。	未
SP 12	22.00	32.73	不整形	54	40	33	454.90	—	A	—	半
SP 13	22.52	33.32	円 形	33	29	31	454.90	—	A	埋土に黄橙色粘土多く混	半
SP 14	22.31	34.89	円 形	25	20	18	454.83	—	A	埋土に黄橙色粘土多く混	半
SP 15	21.98	35.05	—	56	49	41	454.72	—	A	20 cm 大川原石 1	未
SP 16	22.86	35.45	楕円形	40	26	19	454.84	—	B	—	半
SP 17	23.17	35.19	円 形	24	20	19	454.94	—	A	—	半
SP 18	22.73	35.15	円 形	23	19	14	454.91	—	A	—	半
SP 19	22.80	36.20	円 形	24	24	20	454.48	—	A	—	半
SP 20	23.80	36.00	—	—	—	—	455.00	—	B	—	半
SP 21	24.68	28.60	不整形	27	23	45	454.76	—	C-2	—	半
SP 22	24.64	30.68	円 形	42	32	1	455.20	—	A	埋土に 10 ~ 20 cm 大礫多く混	半
SP 23	24.57	32.91	円 形	52	37	35	454.89	—	A	10 cm 大礫 1	半
SP 24	25.17	35.57	円 形	24	18	14	455.18	—	A	SP 24 > SP 25	半
SP 25	25.04	35.36	円 形	38	27	20	455.16	—	B	SP 24 > SP 25	半
SP 26	27.02	28.54	円 形	42	39	20	454.63	—	A	—	半
SP 27	26.78	30.60	円 形	42	38	26	454.90	—	C-2	—	半
SP 28	26.62	32.85	楕円形	57	40	49	454.68	—	C-2	—	半
SP 29	26.41	34.52	楕円形	47	40	7	455.08	—	A	礎石抜き取り穴	半
SP 30	26.00	34.55	楕円形	49	43	10	455.09	—	A	礎石抜き取り穴	半
SP 31	26.35	34.83	方 形	20	15	—	—	—	A	埋土に炭化物多く混	半
SP 32	26.51	34.83	楕円形	47	22	—	—	—	—	10 ~ 20 cm 大礫 1 磯より下層は掘削せず	未
SP 33	26.80	34.85	楕円形	45	33	22	454.95	—	B	—	半
SP 34	27.49	35.23	楕円形	41	25	40	454.78	—	B	10 cm 大礫 2	半
SP 35	27.71	35.19	円 形	18	16	18	455.00	—	B	—	半
SP 36	27.31	32.87	方 形	—	—	6	454.98	—	A	—	半
SP 37	27.40	30.78	円 形	49	44	22	454.93	柱抜き取り穴	C-2	—	半
SP 38	29.80	28.75	円 形	47	35	20	454.95	—	B	—	半
SP 39	29.61	30.90	楕円形	40	26	19	454.87	—	B	—	半
SP 40	29.13	31.96	円 形	57	47	11	455.02	—	C-2	15 cm 大礫 1	半
SP 41	30.10	34.16	円 形	45	38	15	454.93	—	A	—	半
SP 42	28.19	35.08	円 形	26	26	19	455.02	—	B	—	半
SP 43	28.68	35.80	円 形	28	25	22	455.01	—	C-1	—	半

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備考	調査
SP 44	29.19	35.08	円形	26	19	9	454.96	—	A	—	半
SP 45	32.10	34.80	円形	38	38	17	454.98	—	A	—	半
SP 46	31.92	35.00	円形	30	23	19	454.94	—	B	—	半
SP 47	32.40	34.90	円形	42	18	12	454.93	—	B	—	半
SP 48	32.21	30.37	円形	41	30	34	454.64	円形 径 12	C-1	—	半
SP 49	22.89	27.65	円形	38	32	30	454.63	—	B	埋土に黄橙色粘土混	半
SP 50	26.01	36.20	円形	21	18	5	455.18	—	B	—	半
SP 51	25.78	36.32	円形	28	21	7	455.18	—	A	掘り込み面は第Ⅲ層旧耕作土(Ⅲ iv)	半
SP 52	22.56	34.41	楕円形	67	33	13	455.05	—	B	15 cm 大礫 1	半
SP 53	22.50	28.44	—	—	—	15	455.00	—	—	掘り込み面は第VI層下館基盤土(Ⅵ iii)	半
SP 54	23.50	28.55	—	—	—	20	454.94	—	B	掘り込み面は第VI層下館基盤土(Ⅵ iii)	半
SP 55	23.40	28.50	—	—	—	13	455.02	—	—	掘り込み面は第VI層下館基盤土(Ⅵ iii)	半
SP 56	18.64	35.55	—	—	—	48	454.62	—	B	—	半
SP 57	19.50	27.90	—	—	—	—	—	—	A	—	半
SP 58	20.72	30.30	円形	20	15	21	454.81	—	B	—	半
SP 59	20.94	32.60	円形	46	40	34	454.72	—	—	—	未

別表6 2003年度Ⅱ地区調査 柱穴計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備考	調査
SP 1	59.78	27.62	円形	27	25	21	454.71	—	A	—	完
SP 2	59.72	27.50	円形	22	21	8	454.82	—	A	—	完
SP 3	59.00	27.46	長方形	46	40	48	454.63	—	C-2	—	半
SP 4	58.10	27.40	円形	27	22	40	454.54	—	A	—	半
SP 5	55.05	27.40	円形	22	21	37	454.52	—	A	—	半
SP 6	58.65	28.31	円形	28	26	11	454.75	—	A	—	半
SP 7	59.56	28.96	円形	33	25	12	454.76	—	A	—	半
SP 8	58.36	28.68	円形	28	26	13	454.69	—	B	—	完
SP 9	58.20	28.96	円形	21	20	18	454.75	—	B	—	半
SP 10	57.87	28.98	円形	22	25	18	454.75	—	B	—	半
SP 11	57.88	29.69	円形	28	25	19	454.70	—	A	—	半
SP 12	57.19	29.22	円形	28	27	22	454.77	—	C-1	—	完
SP 13	56.80	28.93	円形	22	20	10	454.72	—	A	—	半
SP 14	55.36	28.50	楕円形	26	18	21	454.72	—	B	—	半
SP 15	54.61	28.78	円形	21	20	13	454.77	—	B	—	半

別表7 2004年度調査 柱穴計測表

(単位:cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	備考	調査
SP 1	-39.41	-38.20	円形	28	27	10	453.01	—	B	—	半
SP 2	-44.04	-38.47	円形	21	21	12	453.71	—	B	—	半

別表8 遺物一覧表

(単位:cm)

No.	種類	器種	X	Y	レベル	遺構	報告書層位	口径	器高	底径	分類	備考	整理No.
1	土師器	皿	-19.24	35.78	455.540	園池跡	IV iii	12	-	-	T-2類	タール付着、灯明皿。	00-426
2	土師器	皿	-17.83	35.68	455.428	園池跡	IV iii	9	-	-	T-5類	タール付着、灯明皿。	00-658
3	土師器	皿	-18.96	35.68	455.476	園池跡	IV iii	8	-	-	T-6類	タール付着、灯明皿。	00-511
4	土師器	皿	-18.86	35.92	455.477	園池跡	IV iii	13	-	-	T-8類	煤・タール付着、灯明皿。	00-533
5	土師器	皿	-17.66	35.71	455.443	園池跡	IV iii	16	-	-	T-8類	-	00-513
6	土師器	皿	-19.28	35.78	455.380	園池跡	IV iii	16.5	-	-	T-8類	-	00-527
7	土師器	皿	-18.39	35.99	455.440	園池跡	IV iii	-	-	4	R-2類	外面底部回転糸切り。	00-520
8	青磁	碗	-16.52	29.37	455.579	園池跡	IV iii	16	-	-	龍泉窯系碗B 1類	-	00-436
9	土師器	皿	-19.54	35.83	455.551	園池跡	IV iii	10	-	-	T-6類かT-7類	タール付着、灯明皿。	00-430
10	土師器	皿	-19.34	34.73	455.537	園池跡	IV iii	16	-	-	T-8類	-	00-509
11	土師器	皿	-19.37	34.49	455.546	園池跡	IV iii	17	-	-	T-8類	-	00-510
12	土師器	皿	-18.14	12.39	454.833	園池跡	IV i	17	-	-	T-8類	446と接合。	00-445
13	土師器	皿	-18.55	9.92	454.744	園池跡	IV i	12.2	3.5	-	保留(ヘソ)	-	00-656
14	土師器	皿	-16.33	10.44	454.874	園池跡	IV i	8.2	2.3	-	R-1類	-	01-84
15	土師器	皿	-30.15	10.67	456.006	園池跡	IV i	-	-	5	R類	-	00-493
16	土師器	皿	-20.47	8.85	454.910	園池跡	IV i	11	-	-	R類	分類に該当なし。	00-453
17	土師器	皿	-20.38	8.79	454.909	園池跡	IV i	12	-	-	R類	分類に該当なし。	00-454
18	土師器	皿	-27.75	7.9	455.735	園池跡	IV i	-	-	42	R類	外面底部回転糸切り。	00-363
19	瓦器	風炉・火鉢	-18.41	7.63	455.084	園池跡	IV i	46.8	-	-	第V類	-	00-444
20	瀬戸美濃	碗	-28.69	7.75	455.690	園池跡	IV i	17.5	-	-	古瀬戸後IV期(新)	平碗。灰釉。	00-362
21	珠洲	すり鉢	-13.44	13.25	455.398	園池跡	IV i	-	-	-	第I~II類	-	00-345
22	山茶碗	碗	-13.3	16.74	455.532	園池跡	IV i	13.9	-	-	北部系第8型式	-	00-505
23	鉄製品	釘	-28.33	15.14	455.109	園池跡	IV i	-	-	-	長さ15.0cm以上。	-	00-682
24	土師器	皿	-30.68	22.11	455.678	01-SP 94	SP 94 埋土	11.4	1.7	4.5	伊野分類I a-2類	外面に墨書きあり。	01-1
25	土師器	皿	-30.68	22.11	455.667	01-SP 94	SP 94 埋土	11.3	2	4.3	伊野分類I a-2類	内面に墨書きあり。	01-2
26	土師器	皿	-19.58	15.72	454.949	-	III vii	12	-	-	T-2類	-	01-30
27	土師器	皿	-27.03	30.58	455.635	-	III vii	12	-	-	T-2類	-	01-7
28	土師器	皿	-28.09	28.56	455.887	-	III vii	13	-	-	T-2類	-	00-616
29	土師器	皿	-26.82	18.53	455.275	-	III vii	14	-	-	T-2類	タール付着、灯明皿。	00-105
30	土師器	皿	-19.21	11.7	455.130	-	III vii	10	-	-	T-5類	タール付着、灯明皿。	00-152
31	土師器	皿	-26.43	30.17	455.817	-	III vii	7.5	-	-	T-6類	タール付着、灯明皿。	01-5
32	土師器	皿	-24.99	29.07	455.377	-	III vii	10	-	-	T-6類	タール付着、灯明皿。	00-587
33	土師器	皿	-17.2	28.8	455.548	-	III vii	12	-	-	T-6類	-	00-556
34	土師器	皿	-18.51	33.02	455.431	-	III vii	13	-	-	T-6類かT-7類	-	00-575
35	土師器	皿	-22.86	8.09	455.217	-	III vii	11	-	-	T-7類	-	00-203
36	土師器	皿	-19.32	29.7	-	-	III vii	12	2.3	-	T-7類	タール付着、灯明皿。	01-31
37	土師器	皿	-18.16	15.53	455.286	-	III vii	12.4	2.7	-	T-7類	-	00-625
38	土師器	皿	-25.46	21.86	455.225	-	III vii	10	-	-	T-6類かT-7類	-	00-338
39	土師器	皿	-19.25	25.05	455.048	-	III vii	12	-	-	T-6類かT-7類	-	00-279
40	土師器	皿	-28.14	19.03	455.227	-	III vii	12	-	-	T-6類かT-7類	-	00-306
41	土師器	皿	-17.72	33.93	455.452	-	III vii	15	-	-	T-8類	-	01-17
42	土師器	皿	-16.31	16.09	455.361	-	III vii	-	-	6	R-3類	-	00-272
43	土師器	皿	-16.99	14.3	454.900	-	III vii	11.2	3.2	-	保留(ヘソ)	-	01-36
44	土師器	皿	-19.73	16.65	454.962	-	III vii	11.5	3.1	-	保留(ヘソ)	内面に漆付着。	01-35
45	土師器	皿	-17.44	15.07	454.982	-	III vii	11.5	3.3	-	保留(ヘソ)	-	01-33
46	青磁	碗	-22.68	10.15	455.096	-	III vii	13.8	-	-	龍泉窯系B 3類	-	00-208
47	青磁	碗	-18.32	14.8	454.916	-	III vii	-	-	-	-	-	00-255
48	白磁	皿	-15.85	14.78	455.242	-	III vii	10	-	-	16類	透明釉。	00-202
49	青白磁	梅瓶	-	-	-	-	III vii	-	-	-	二次被熱。	-	00-633
50	青花	碗	-30.29	18.93	455.752	-	III vii	12	-	-	染付碗B群	端反碗。透明釉。	00-298
51	山茶碗	碗	-19.13	16.26	455.085	-	III vii	12	-	-	北部系第11型式	-	00-157
52	瀬戸美濃	碗	-19.57	22	455.120	-	III vii	11.8	-	-	古瀬戸後III期	天目茶碗。鉄釉。	00-140
53	瀬戸美濃	碗	-19.03	14.15	454.958	-	III vii	18.8	-	-	古瀬戸後IV期(古)	平碗。灰釉。二次被熱。	00-257
54	瀬戸美濃	碗	-26.43	24.49	455.531	-	III vii	17.6	-	-	古瀬戸後IV期	平碗。灰釉。	00-112
55	瀬戸美濃	皿	-24.75	30.9	455.324	-	III vii	-	-	-	古瀬戸中期	丸皿。灰釉。二次被熱。	01-56
56	瀬戸美濃	皿	-19.14	22.36	455.128	-	III vii	11.8	-	-	古瀬戸後IV期	端反皿。	00-97
57	瀬戸美濃	皿	-26.66	13.8	455.221	-	III vii	8	2	-	大窯第3段階	灰釉。	00-30
58	瀬戸美濃	壺	-21.17	23.71	455.145	-	III vii	4.2	-	-	古瀬戸後IV期	耳付き合子。鉄釉。二次被熱。	00-145
59	瀬戸美濃	瓶	-19.16	23.79	455.167	-	III vii	4.3	-	-	古瀬戸後IV期	耳付水滴。鉄釉。内面に付着物あり、お歯黒か。	00-191
60	瀬戸美濃	すり鉢	-18.52	16.58	455.131	-	III vii	29.7	-	-	古瀬戸後IV期(新)	鉄釉。	00-254
61	瀬戸美濃	すり鉢	-18.13	15.46	455.084	-	III vii	32	-	-	大窯第3段階	鉄釉。	01-96
62	瓦器	火鉢	-25.73	30.88	455.364	-	III vii	35	-	-	第II類	口縁上部2本の貼付突線間にスタンプ紋有り。	01-39
63	瓦器	火鉢	-21.14	23.77	455.093	-	III vii	32.2	-	-	第III類	-	00-139
64	珠洲	壺	-19.83	8.65	455.081	-	III vii	-	-	-	第IV期	-	00-195
65	その他	るつぼ	-22.86	30.47	455.241	-	III vii	8	-	-	-	内面に付着物あり。銅か。	00-606
66	近世陶磁	碗	-17.86	15.19	455.061	-	III vii	12	-	-	連房式登窯第1小期	瀬戸美濃。天目茶碗。	01-76
67	近世陶器	碗	-23.01	28.52	455.279	-	III vii	11	-	-	連房式登窯第3~4小期	鉄釉。	00-400
68	近世陶磁	碗	-21.39	27.3	455.100	-	III vii	-	-	4.5	連房式登窯第8小期	灰釉。	00-559
69	近世陶磁	碗	-21.69	23.26	455.085	-	III v	15	-	-	不明	肥前。	00-118
70	近世陶磁	碗	-26.9	20.55	455.256	-	III vii	12.6	-	-	产地不明	灰釉。	00-654
71	銅製品	銅錢	-26.39	24.19	455.185	-	III vii	-	-	-	-	-	00-689
72	銅製品	銅錢	-20.08	18.41	455.046	-	III vii	-	-	-	-	-	00-690
73	銅製品	火箸	-19.28	26.22	455.113	-	III vii	-	-	-	長さ20.7cm、最大幅0.55cm、最小幅0.2cm。銅以外の金属が付着。	-	00-683
74	土師器	皿	-17.45	26.24	455.620	-	III v	12.5	-	-	T-6類かT-7類	-	00-464
75	土師器	皿	-17.12	19.45	455.446	-	III v	15	-	-	R-5類	-	00-93
76	近世陶磁	皿	-18.71	24.21	455.223	-	III v	13	-	-	越中瀬戸房式登窯	越中瀬戸。鉄釉。	01-78
77	近世陶磁	碗	-19.39	18.04	455.103	-	III v	-	-	5.3	产地不明	丸碗。越中瀬戸か。	00-653

No.	種類	器種	X	Y	レベル	遺構	報告書層位	口径	器高	底径	分類	備考	整理 No.
78	近世陶磁	碗	-19.83	22.81	455.333	-	III ii	-	-	3.6	連房式登窯第8小期	湯飲み茶碗。瀬戸産。灰釉。	00-40
79	土師器	皿	-26.61	22.67	455.320	-	III vii	8.5	-	-	T-4類	-	00-110
80	土師器	皿	-	-	-	-	III i	12	-	-	T-6類かT-7類	-	00-4
81	土師器	皿	-30.56	26.9	455.832	-	III i	16	-	-	T-3類	-	00-610
82	土師器	皿	-16.28	10.37	454.932	-	III i	9	2.3	6	R-1類	タール付着。	00-449
83	土師器	皿	-	-	-	-	III i	16	-	-	R-5類	-	00-28
84	青磁	碗	-	-	-	-	III i	15.6	-	-	龍泉窯系碗B1類	-	00-9
85	中国陶器	碗	-30.3	26.68	455.800	-	搅乱	12	-	-	-	天目茶碗。鉄釉。	00-416
86	瀬戸美濃	皿	-18.65	5.85	-	-	III i	11.8	-	-	大窯第1段階	端反皿。灰釉。灯明皿。	00-245
87	瀬戸美濃	皿	-28.63	18.89	455.268	-	搅乱	7.5	-	-	古瀬戸前Ⅲ～中Ⅱ期	入子。無釉。二次被熱。内面に付着物あり、紅か。	00-294
88	石製品	碁石	-	-	-	-	III i	-	-	-	長径1.85cm、短径1.45cm、最大厚0.65cm。	-	00-696
89	石製品	碁石	-	-	-	-	I i	-	-	-	-	-	00-698
90	瀬戸美濃	すり鉢	-9.37	32.92	455.380	01-SP 5	SP 5 埋土	28	-	-	大窯第2段階	鍛釉。	01-546
91	土師器	皿	-	-	-	SX 42	SX 42 埋土	8	-	-	T-4類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-559
92	土師器	皿	-10.96	31.69	455.293	SX 42	SX 42 埋土	12	-	-	T-6類かT-7類	-	01-552
93	土師器	皿	-10.83	31.1	455.352	SX 42	SX 42 埋土	11	-	-	T-6類かT-7類	-	01-548
94	土師器	皿	-	-	-	-	III i	11	-	-	T-1類	-	01-591
95	山茶碗	碗	-	-	-	-	III i	14	-	-	東濃型大烟大洞	-	01-586
96	瀬戸美濃	香炉	-	-	-	-	III i	11	-	-	古瀬戸後I期	筒形香炉。灰釉。断面漆継ぎ痕。二次被熱。	01-594
97	瀬戸美濃	碗	-5.68	30.77	455.403	-	III i	11.2	-	-	古瀬戸後I期	天目茶碗。鉄釉。	01-568
98	石製品	硯	-25.00	43.70	-	-	III i	-	-	-	漆継ぎ痕。	-	01-349
99	土師器	皿	-26.47	45.33	455.310	SX 43	SX 43 埋土	12	-	-	T-6類	-	01-391
100	土師器	皿	-26.15	44.84	455.326	SX 43	SX 43 埋土	11.5	-	-	T-6類	-	01-368
101	土師器	皿	-26.72	44.88	455.337	SX 43	SX 43 埋土	12.5	2.7	-	T-7類	-	01-401
102	土師器	皿	-26.48	44.73	455.339	SX 43	SX 43 埋土	12.5	-	-	T-7類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-378
103	土師器	皿	-26.2	45.03	455.295	SX 43	SX 43 埋土	12.5	2.8	-	T-7類	口縁端部、内外底面にタール付着、灯明皿。	01-399
104	土師器	皿	-27.42	44.8	455.388	SX 43	SX 43 埋土	13	3.2	-	T-7類	口縁端部、内面にタール付着、灯明皿。	01-400
105	土師器	皿	-25.91	48.81	455.240	SX 43	SX 43 埋土	10	-	-	T-6類かT-7類	-	01-453
106	土師器	皿	-27.37	49.98	455.290	SX 43	SX 43 埋土	11	-	-	T-6類かT-7類	-	01-483
107	土師器	皿	-26.1	48.02	455.197	SX 43	SX 43 埋土	10.5	-	-	T-6類かT-7類	内面が黒く変色。	01-485
108	土師器	皿	-25.96	44.93	455.337	SX 43	SX 43 埋土	11.5	-	-	T-6類かT-7類	-	01-364
109	土師器	皿	-26.06	48.1	455.184	SX 43	SX 43 埋土	10	-	-	T-6類かT-7類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-452
110	土師器	皿	-26.57	44.9	455.352	SX 43	SX 43 埋土	8	-	-	R-1類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-376
111	土師器	皿	-26.31	48.76	455.223	SX 43	SX 43 埋土	14	-	-	R類	口縁端部にタール付着、灯明皿。 (48.7-450) (454-457-464)と接合しないが同一個体。	01-448
112	土師器	皿	-26.37	45.32	455.296	SX 43	SX 43 埋土	15	-	-	T類	T-2類か。口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-415
113	土師器	皿	-27.18	45.24	455.369	SX 43	SX 43 埋土	15	-	-	T類	T-2類か。	01-414
114	土師器	皿	-26.91	45.29	455.328	SX 43	SX 43 埋土	19	-	-	T類	T-2類か。	01-411
115	瓦器	火鉢	-	-	-	SX 43	SX 43 埋土	-	-	-	第II類	-	01-373
116	瀬戸美濃	香炉	-27.51	47.2	455.440	SX 43	SX 43 埋土	8	-	-	古瀬戸後III期	拘腰形香炉。灰釉。	01-446
117	瀬戸美濃	盤	-27.37	49.98	455.290	SX 43	SX 43 埋土	31	-	-	古瀬戸後IV期(新)	卸目付大皿。灰釉。二次被熱。	01-525
118	中国陶器	碗	-27.62	45.33	455.356	SX 43	SX 43 埋土	11	-	-	-	天目茶碗。鉄釉。	01-447
119	瓦器	火鉢	-30.03	53.06	455.100	SX 44	SX 44 埋土	34	-	-	第I類	-	01-595
120	土師器	皿	-25	43.7	-	-	III i	12	-	-	T-6類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	01-137
121	土師器	皿	-26.72	44.88	455.337	SX 43	SX 43 埋土	17	-	-	T-8類	-	01-402
122	瓦器	火鉢	-25	43.7	-	-	III i	43.5	-	-	第III類	口縁下の2本の隆帯間にスタンプ文有り。	01-335
123	白磁	皿	-25	43.7	-	-	III i	11	-	-	白磁3類	-	01-353
124	白磁	皿	-25	43.7	-	-	III i	15.4	-	-	白磁19類	断面漆継ぎ痕。	01-350
125	青花	皿	-25	43.7	-	-	III i	12	-	-	B1群	染付。	01-354
126	瀬戸美濃	碗	-46.5	26.5	-	-	III i	-	-	-	古瀬戸後IV期(新)	天目茶碗。鉄釉。	01-542
127	瀬戸美濃	碗	-25	43.7	-	-	III i	17	-	-	古瀬戸後II期	平碗。灰釉。	01-352
128	瀬戸美濃	盤	-25	43.7	-	-	III i	-	-	-	古瀬戸後IV期(新)	卸目付大皿。灰釉。二次被熱。	01-351
129	中国陶器	碗	-18.45	1.35	455.301	SD 24	SD 24 埋土	10.7	-	-	-	中国製天目茶碗。鉄釉。	02-31
130	瀬戸美濃	盤	-16.02	-0.08	455.475	第IV層B期 遺構面構築土	IV iii	28	-	-	古瀬戸中II期	折線深皿。灰釉。	02-35
131	石製品	茶臼	-39.18	-0.85	455.500	-	III iv	-	-	-	-	-	02-183
132	珠洲	甕	-40.12	-0.85	455.209	SD 22	SD 22 人為の埋土	58	-	-	珠洲III期	白色砂粒含む。	02-27
133	瀬戸美濃	碗	-35.98	-1.01	455.315	SD 22	SD 22 人為の埋土	12	-	-	連房式登窯第1～2期	端反碗。鉄釉。	02-26
134	土師器	皿	-10.68	0.69	455.429	第IV層B期 遺構面構築土	IV iii	12	-	-	T-6類かT-7類	-	02-38
135	土師器	皿	-39.37	-1.08	455.510	-	III iv	12	-	-	T-1類	-	02-46
136	土師器	皿	-34.74	-2.57	455.738	-	III iv	11	-	-	T-6類かT-7類	-	02-43
137	瓦器	鳳炉・火鉢	-36.72	-2.31	455.542	-	III iv	32	-	-	-	外面の炭素は消失している。	02-48
138	瀬戸美濃	碗	-	-	-	-	III iv	11	-	-	古瀬戸後III期	天目茶碗。鉄釉。	02-63
139	瀬戸美濃	すり鉢	-11.58	-3.58	455.201	-	III iv	31	-	-	大窯第3段階前期	鉄釉。	02-57
140	石製品	茶臼	-42.27	-0.61	455.347	SD 22	SD 22 自然堆積埋土	-	-	-	-	-	02-185
141	青磁	碗	-2.15	37.86	455.408	第IV層B期 遺構面構築土	IV iii	15	-	-	龍泉窯系碗B1類	-	02-98
142	瓷器系陶器	甕	-3.3	35.92	455.374	第IV層B期 遺構面構築土	IV iii	28	-	-	第2群甕b類	八尾焼。	02-82
143	土師器	皿	0.21	61.32	455.267	SX 49	SX 49 埋土	15.5	-	-	T-8類	-	02-130
144	土師器	皿	0.65	61.43	455.302	SX 49	SX 49 埋土	15	3.9	-	R-5類	-	02-120
145	土師器	皿	0.88	61.53	455.471	SX 49	SX 49 埋土	7.8	3.5	-	R-1類	-	02-141
146	土師器	皿	0.21	61.32	455.267	SX 49	SX 49 埋土	7.8	-	-	R-1類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	02-131
147	土師器	皿	-3.96	38.44	455.461	02-SP 23	SP 23 埋土	12.3	2.9	-	T-6類	口縁端部にタール付着、灯明皿。	02-105
148	青磁	碗	-	-	-	-	III i	16	-	-	龍泉窯系碗B1類	ガラス質釉。	02-158
149	山茶碗	鉢	-7.43	45.78	455.408	-	III i	25	-	-	尾張型第6式	片口鉢。	02-114
150	銅製品	錢	22.03	34.98	454.888	03-SP 15	SP 15 埋土	-	-	-	-	-	03-315
151	銅製品	錢	22.03	34.98	454.888	03-SP 15	SP 15 埋土	-	-	-	-	-	03-315

No.	種類	器種	X	Y	レベル	構造	報告書層位	口径	器高	底径	分類	備考	整理 No.
152	銅製品	銭	22.03	34.98	454.888	03-SP 15	SP 15 埋土	-	-	-	-	-	03-315
153	銅製品	銭	22.03	34.98	454.888	03-SP 15	SP 15 埋土	-	-	-	-	-	03-315
154	土師器	皿	31.11	32.07	455.150	-	III iv	12	-	-	T-1類	-	03-1
155	土師器	皿	31.5	31.82	455.030	-	III iv	9.5	-	-	T-6類かT-7類	-	03-21
156	土師器	皿	31.9	31.01	455.049	-	III iv	11	-	-	T-6類かT-7類	煤・タール付着、灯明皿。	03-5
157	瓦器	火鉢	31.56	36.19	455.376	-	III iv	39	-	-	第II類	口縁部に菊花、菊葉のスタンプ文有り。	03-85
158	中国陶器	碗	32.79	28.47	455.167	-	III iv	13	-	-	-	中国産天目茶碗。鉄釉。	03-45
159	山茶碗	碗	30.02	36.5	455.436	-	III ii	14	-	-	北部系第10~11型式	-	03-143
160	瀬戸美濃	碗	-	-	-	-	III i	12	-	-	古瀬戸後IV期(新)	天目茶碗。鉄釉。	03-225
161	瀬戸美濃	碗	-	-	-	-	III i	14	-	-	古瀬戸後I期	平碗。灰釉。	03-182
162	瀬戸美濃	盤	-	-	-	-	III i	-	-	-	古瀬戸後III期	直縁大皿。灰釉。	03-190
163	瀬戸美濃	盤	-	-	-	-	III i	31	-	-	古瀬戸後IV期(新)	直縁大皿。灰釉。二次被熱。	03-191
164	瀬戸美濃	すり鉢	-	-	-	-	III i	32	-	-	大窯第3段階前期	鉄釉。	03-176
165	土師器	皿	42.01	27.5	455.002	-	III iv	11.7	-	-	T-7類	-	03-141
166	土師器	皿	42.01	7.5	455.002	-	III iv	11.8	-	-	T-7類	-	03-142
167	青磁	瓶子	43.55	28.1	455.235	-	III iv	-	-	-	-	『江馬城館跡』IV第40図7と同一個体。	03-135
168	山茶碗	碗	46.97	28.94	454.599	-	III iv	12	-	-	北部系第11型式(古)	-	03-136
169	瀬戸美濃	碗	37.31	30.74	455.094	-	III iv	-	-	-	古瀬戸後I期	平碗。灰釉。	03-137
170	白磁	皿	-	-	-	-	III i	-	6.6	1類	外面底部静止箝削り痕。二次被熱。	03-116	
171	珠洲	片口鉢	-	-	-	-	III i	-	-	-	-	-	03-118
172	白磁	皿	-	-	-	-	I i	12	-	-	A群	-	03-304
173	土師器	皿	-41.91	-23.84	454.717	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	12.8	-	-	T-2類	-	04-208
174	土師器	皿	-41.58	-26.39	454.493	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	15	-	-	R-5類	-	04-207
175	瀬戸美濃	皿	-41.15	-22.39	454.565	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	16	-	-	古瀬戸後III期	鉄皿。灰釉。二次被熱。	04-196
176	珠洲	すり鉢	-40.71	25.61	454.463	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	35	-	-	IV期	-	04-178
177	珠洲	すり鉢	-41.87	-21.66	454.668	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	-	-	-	IV期古い方	片口部分のため口径計測不能。	04-179
178	珠洲	甕	-41.68	-23.22	454.741	南堀跡延長部	第2段階の堀の 人為的埋土	50	-	-	III期	182と接合しないが同一個体。	04-180
179	土師器	皿	-41.39	-29	454.999	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土a	12	-	-	T-6類かT-7類	口縁部にタール付着、灯明皿。	04-169
180	青磁	碗	-40.75	-30.76	455.328	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土a	-	-	52	龍泉窯系B3類	内底見込みに花文あり。	04-156
181	珠洲	甕	-40.4	-31.3	455.048	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土a	51	-	-	IV期新しい方	-	04-152
182	近世陶磁	碗	-42.79	-35.88	454.334	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土a	88	-	-	連房式登窯第8小期	腰錆溝のみ(美濃産)。	04-157
183	土師器	皿	-42.39	-23.43	454.998	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	14	-	-	T-2類	-	04-140
184	土師器	皿	-41.2	-22.12	454.838	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	8	-	-	T-5類	-	04-128
185	土師器	皿	-40.88	-26.34	455.089	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	11.5	26	-	T-6類	-	04-131
186	土師器	皿	-42.09	-25.8	454.860	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	9.1	33	-	T-6類	口縁部にタール付着、灯明皿。	04-146
187	青花	碗	-40.89	-26.87	455.127	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	14	-	-	染付碗B群	染付。	04-107
188	青花	皿	-42.4	-23.89	455.214	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	13	-	-	染付皿B1群	染付。	04-106
189	瀬戸美濃	盤	-42.32	-23.71	454.968	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	30.6	-	-	古瀬戸後II期	折縁深皿、灰釉。二次被熱により釉の大部分が剥離している。94-186~195-197~199と接合。	04-93
190	瀬戸美濃	すり鉢	-40.99	-26.7	455.121	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	32	-	-	古瀬戸後IV期(新)	鉄釉。	04-101
191	瀬戸美濃	すり鉢	-40.94	-26.91	455.062	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	33	-	-	大窯第1段階	鉄釉。102と接合。	04-100
192	瀬戸美濃	すり鉢	-41.29	-26.28	454.851	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	33	-	-	大窯第1段階	鉄釉。	04-103
193	珠洲	すり鉢	-39.91	-20.66	454.873	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	30	-	-	III期	-	04-69
194	珠洲	すり鉢	-40.35	-23.73	455.126	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	35	-	-	IV期	-	04-60
195	珠洲	甕	-40.8	-20.43	454.925	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	64	-	-	IV期の新しい方	-	04-72
196	珠洲	甕	-42.17	-22.06	454.984	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	63	-	-	IV期新しい方	-	04-67
197	瓷器系陶器	甕	-40.63	-26.56	455.009	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	52	-	-	第1群土器甕A c1類	八尾焼。	04-79
198	瓷器系陶器	甕	-41.49	-20.96	454.955	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	46	-	-	第1群土器甕A c1類	八尾焼。	04-80
199	石製品	石鍋	-42.16	-21.56	455.099	南堀跡延長部	第3段階の堀の 人為的埋土b	33	16.2	14	-	石鍋。外面に鼈状工具による成形痕。口縁部と内面に煤付着。	04-76
200	瀬戸美濃	碗	-43.52	-37.19	454.407	-	III ii	18	-	-	古瀬戸後IV期(古)	平碗。灰釉。	04-48
201	瀬戸美濃	皿	-41.3	-32.91	455.375	-	III ii	10	-	-	古瀬戸後IV期(古)	綠釉小皿。灰釉。	04-44
202	土師器	皿	-	-	-	-	I i	10	-	-	T-1類	口縁部に煤付着、灯明皿。	04-15
203	土師器	皿	44.66	-8.98	453.531	西堀跡箱堀	西堀箱堀 の人为的埋土	11	-	-	T-5類	-	07-89
204	土師器	皿	44.98	-8.44	453.636	西堀跡箱堀	西堀箱堀 の人为的埋土	12	-	-	T-5類	-	07-94
205	白磁	皿	-18.17	-6.31	454.846	西堀跡葉研堀	西堀葉研堀 の人为的埋土	13	-	-	白磁2類	-	07-144



神岡町遠景写真：1978年撮影（北から）



下館跡全景写真：2002年12月撮影（西から）

図版2 遺構（2）



2000年度調査 園池跡東汀線景石検出状況（北から）



2000年度調査 園池跡中央部岩島景石検出状況（北から）



2000 年度 園池跡南汀線転倒石除去状況（北から）



2001 年度 園池跡南汀線完掘状況（北から）



2000 年度 園池跡東～北汀線景石検出状況（南東から）



2000 年度 園池 SB 46 地区 B-B'断面層位 X 座標-18付近(南西から)

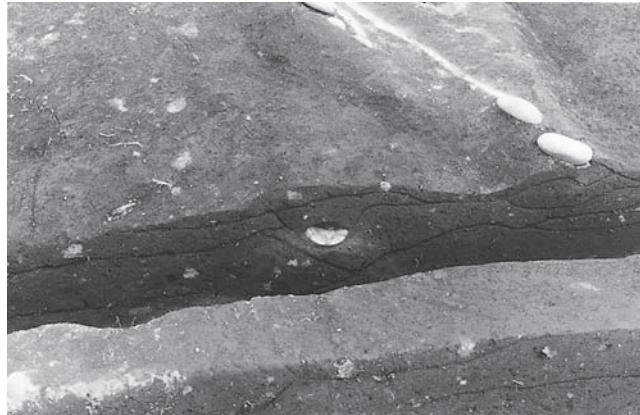


2000 年度 園池跡南汀線検出状況（南東から）

図版 4 遺構 (4)



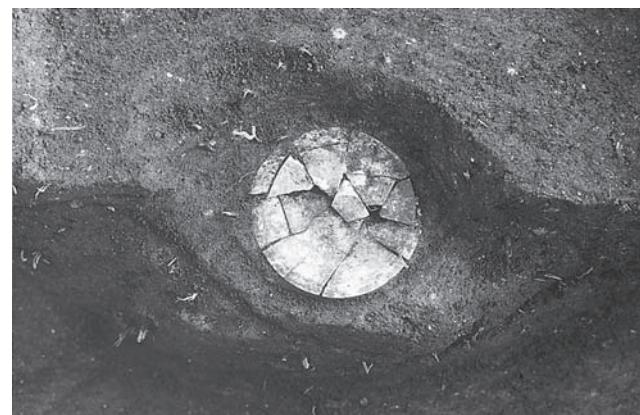
2001年度 園池跡・礎石建物跡 SB 46 完掘状況(北東から)



2001年度 地鎮遺構 SP 94 墨書き土師器検出状況(西から)



2001年度 础石建物跡 SB 46・板堀跡 SA 47 検出状況(西から) 2001年度 地鎮遺構 SP 94 墨書き土師器皿出土状況(1枚目の土師器皿、西から)



2001年度 園池跡・礎石建物跡 SB 46 完掘状況(西から)



2001年度 磐石建物跡 SB 43 磐石抜き取り穴跡検出状況（西から）



2001年度 不明遺構 SX 43 遺物検出状況（北東から）



2002年度 土堀基底部盛土跡検出状況（北から）



2002年度 土堀に伴う柱穴列跡 SA 55c・SA 56c 完掘状況（北から）



2002年度 I地区完掘状況（西から）

図版6 遺構 (6)



2002年度 I地区調査 土壌に伴う柱穴列跡 SA 55c・SA 56c 南端部完掘状況（北東から）



2002年度 I地区調査 南堀跡 G-G' 断面層位（東から）



2002年度 II地区調査 磁石建物跡 SB 44 西端部検出状況（南東から）



2002年度 II地区調査 磁石建物跡 SB 44 東端柱列検出状況（南東から）



2002年度 II地区調査 磁石建物跡 SB 44・SB 49 完掘状況（西から）



2003年度 I地区調査 古銭埋納遺構 SP 15 断面層位（西から）



2003年度 I地区調査 磁石建物跡 SB 41・SB 64 完掘状況（西から）



2003年度 I地区調査 磁石建物跡 SB 41・SB 64 南端柱列検出状況（西から）



2003 年度 II 地区調査 北堀跡 A-A' 断面層位（西から）



2003 年度 II 地区調査 北堀跡完掘状況（西から）



2004 年度 南堀跡延長部第 2 段階埋土完掘状況（東から）



2004 年度 南堀跡延長部南端の状況（西から）



2007 年度 西堀跡薬研堀完掘状況（北から）



2007 年度 西堀跡薬研堀 b-b' 断面層位（北から）

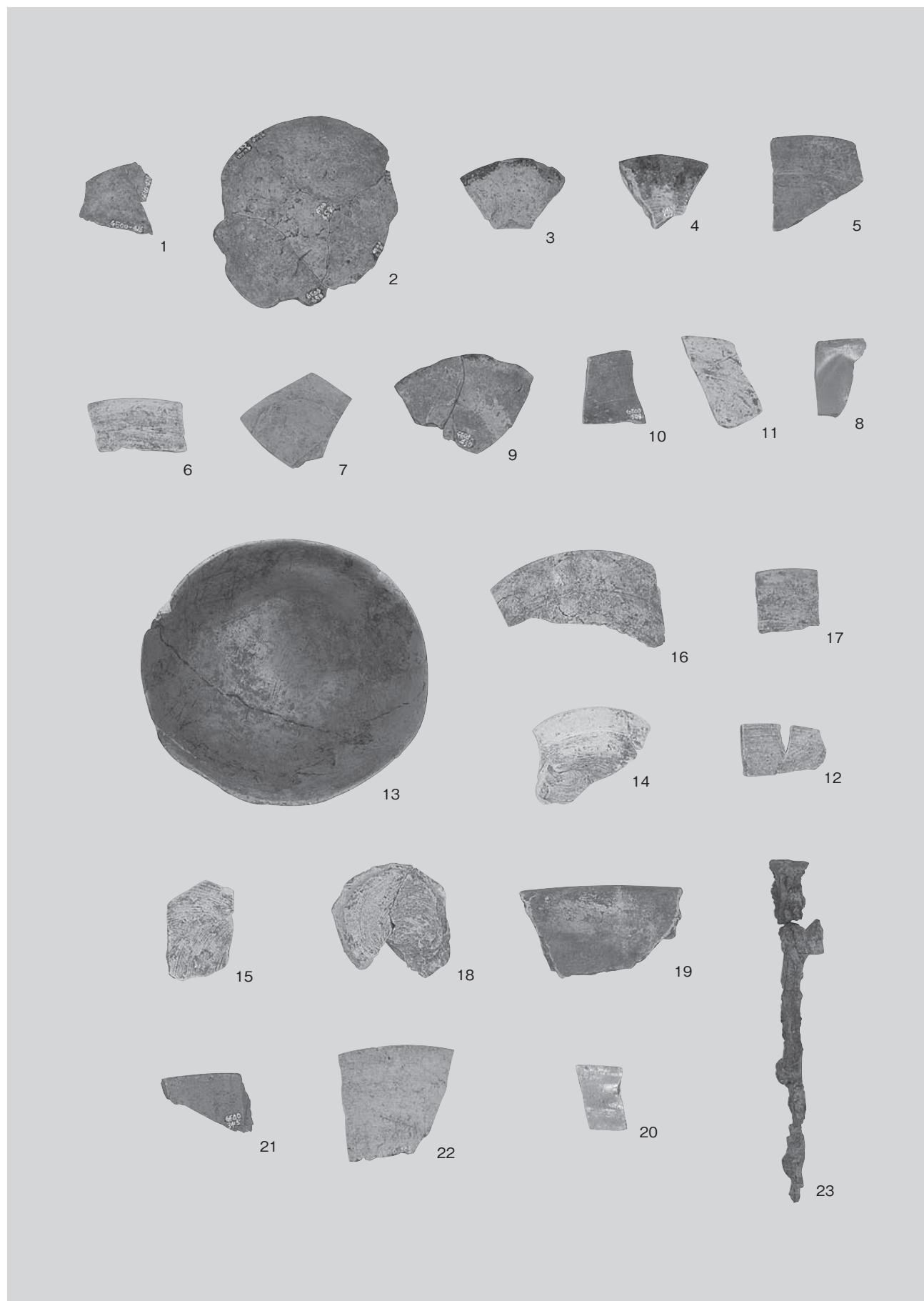


2007 年度 西堀跡箱堀完掘状況（北から）

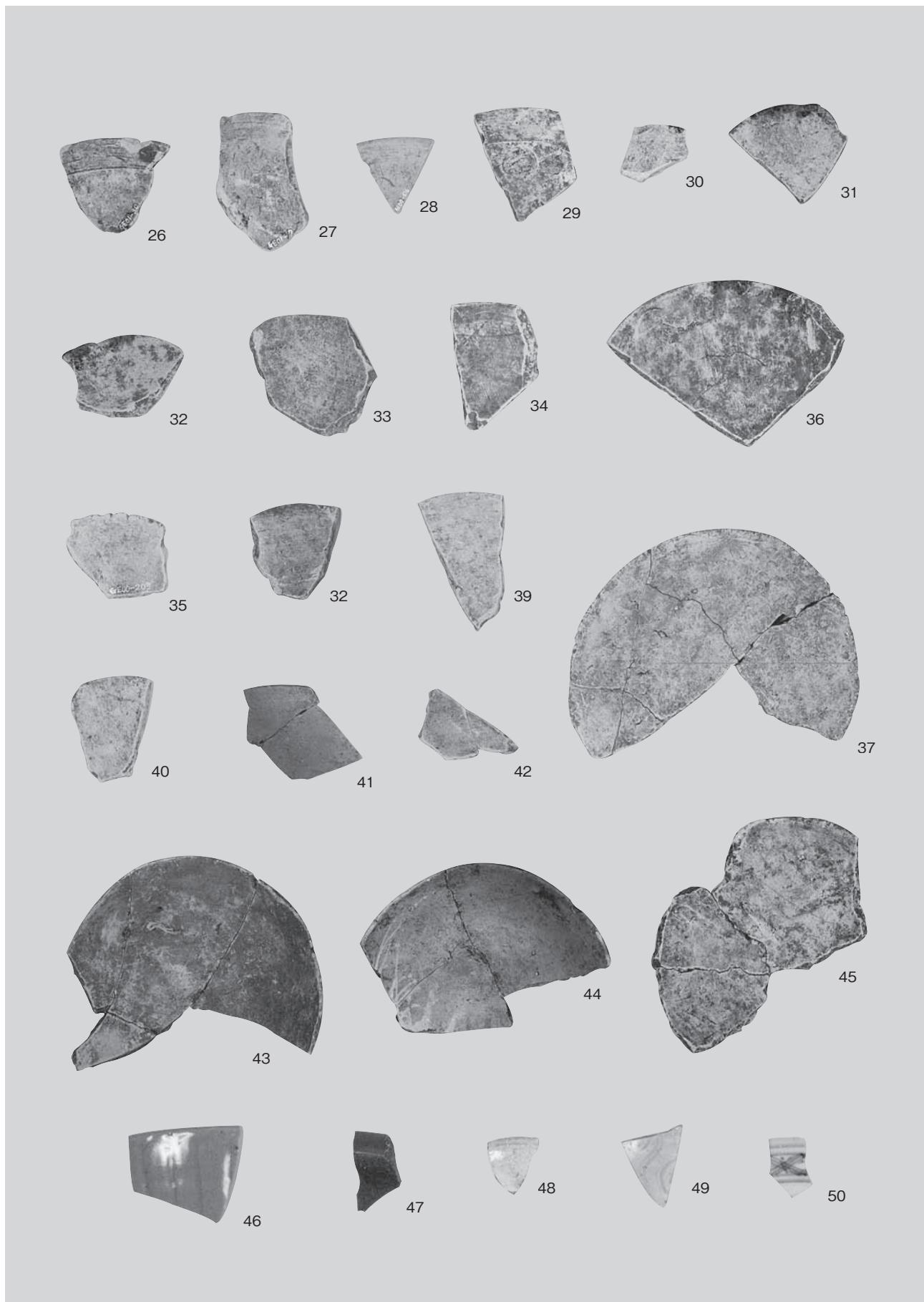


2007 年度 西堀跡箱堀 b - b' 断面層位（南から）

図版8 遺物 (1)

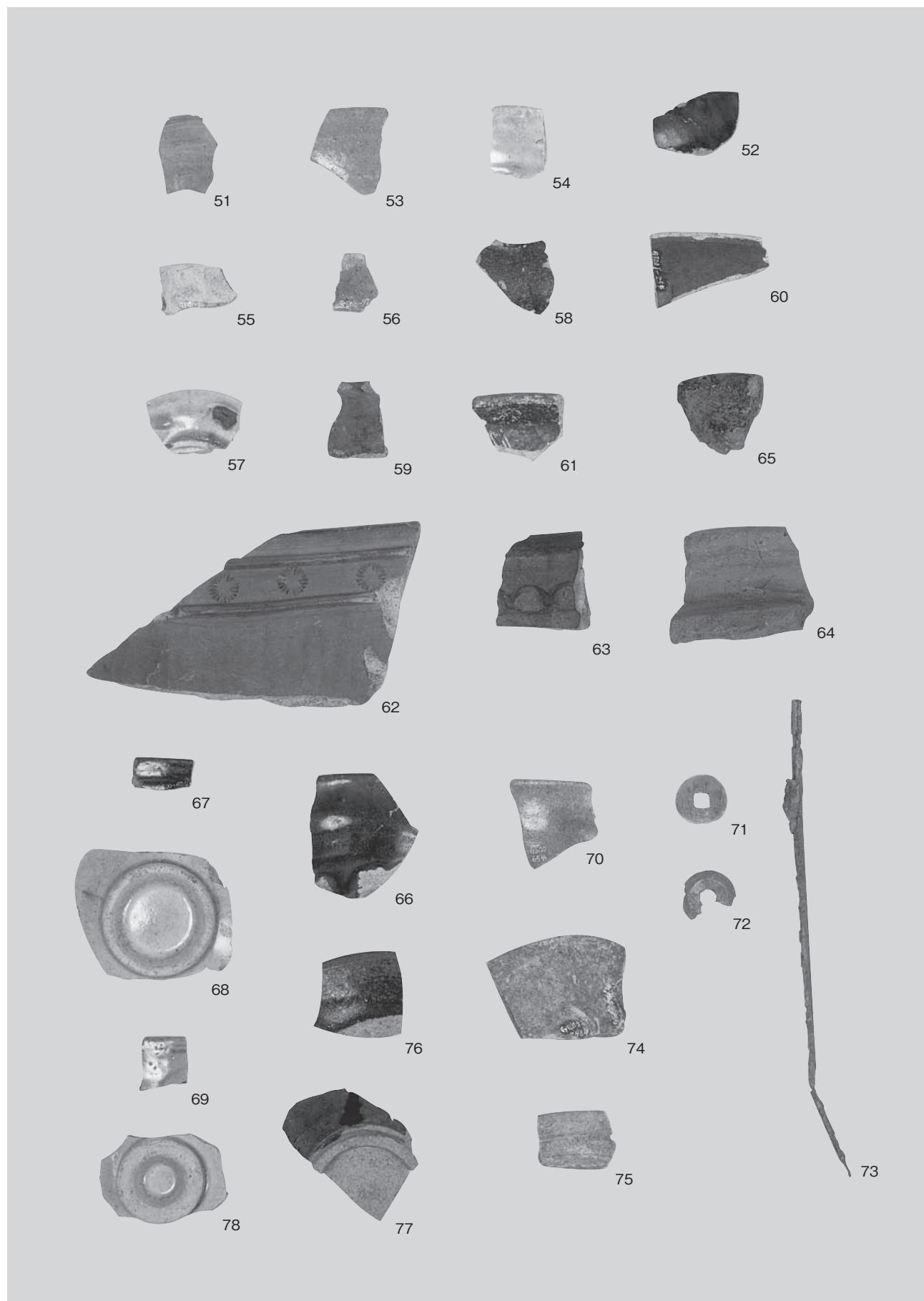


2000～2001年度 園池・SB 46地区出土遺物 (1)

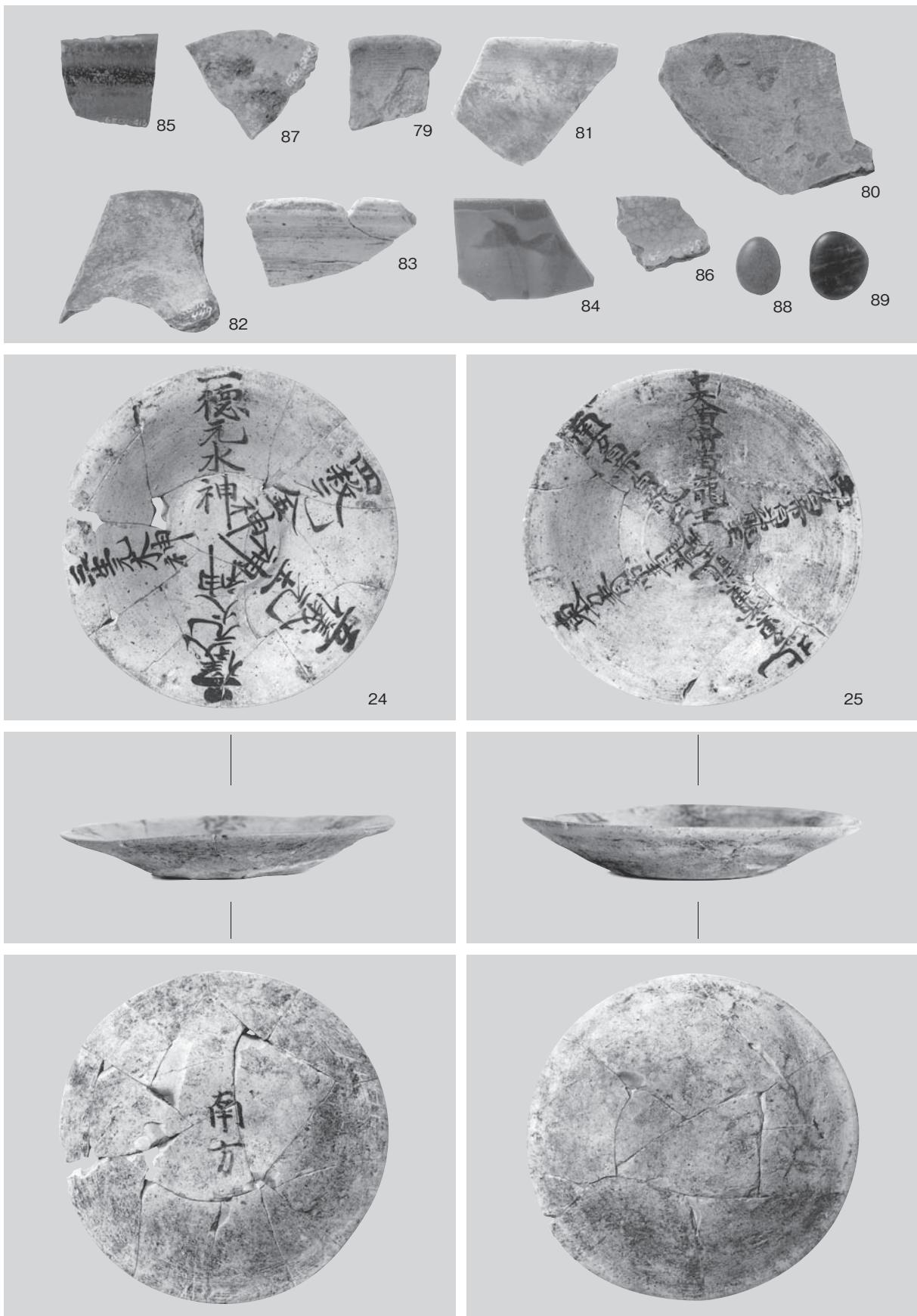


2000～2001年度 園池・SB 46地区出土遺物 (2)

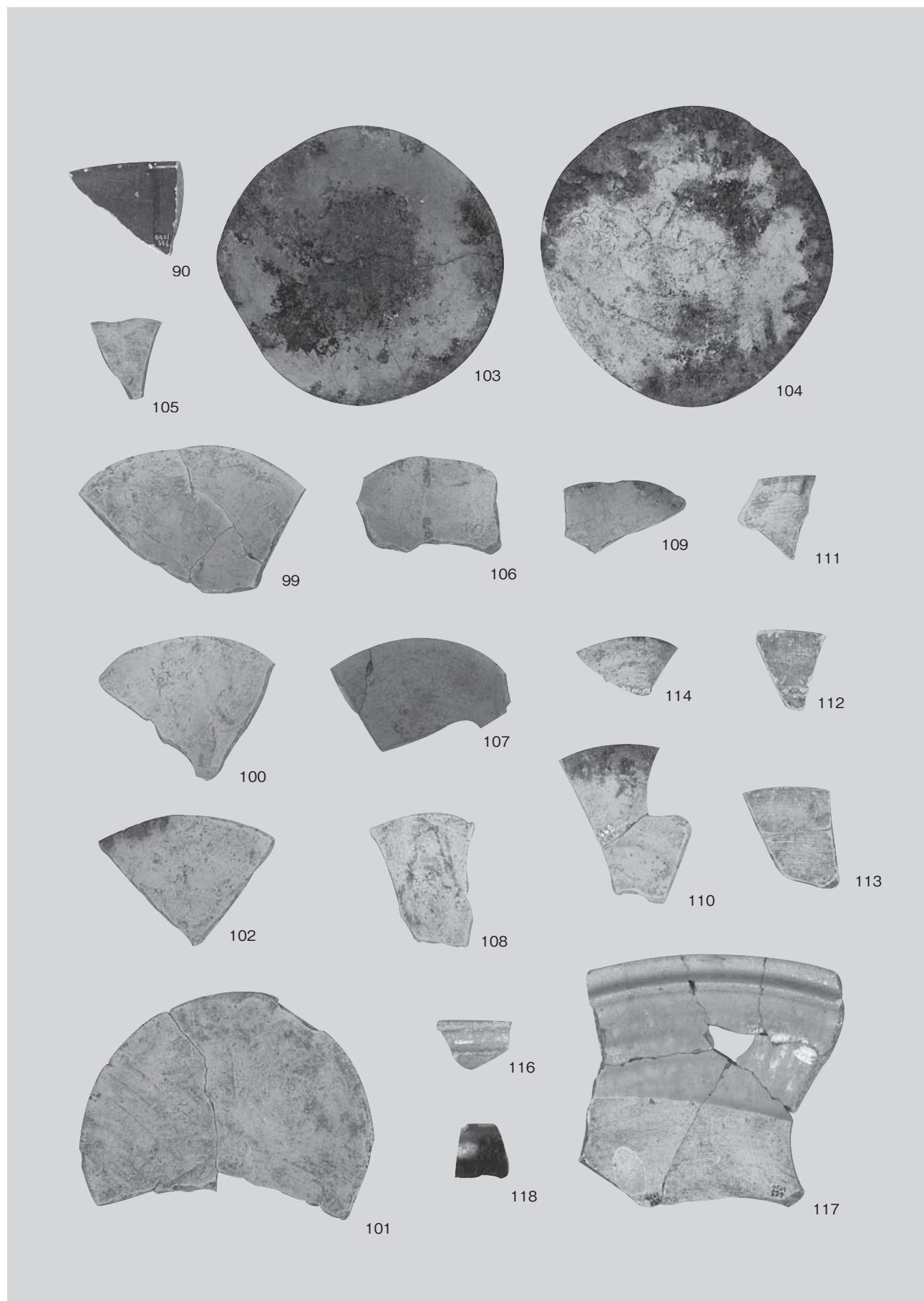
図版 10 遺物 (3)



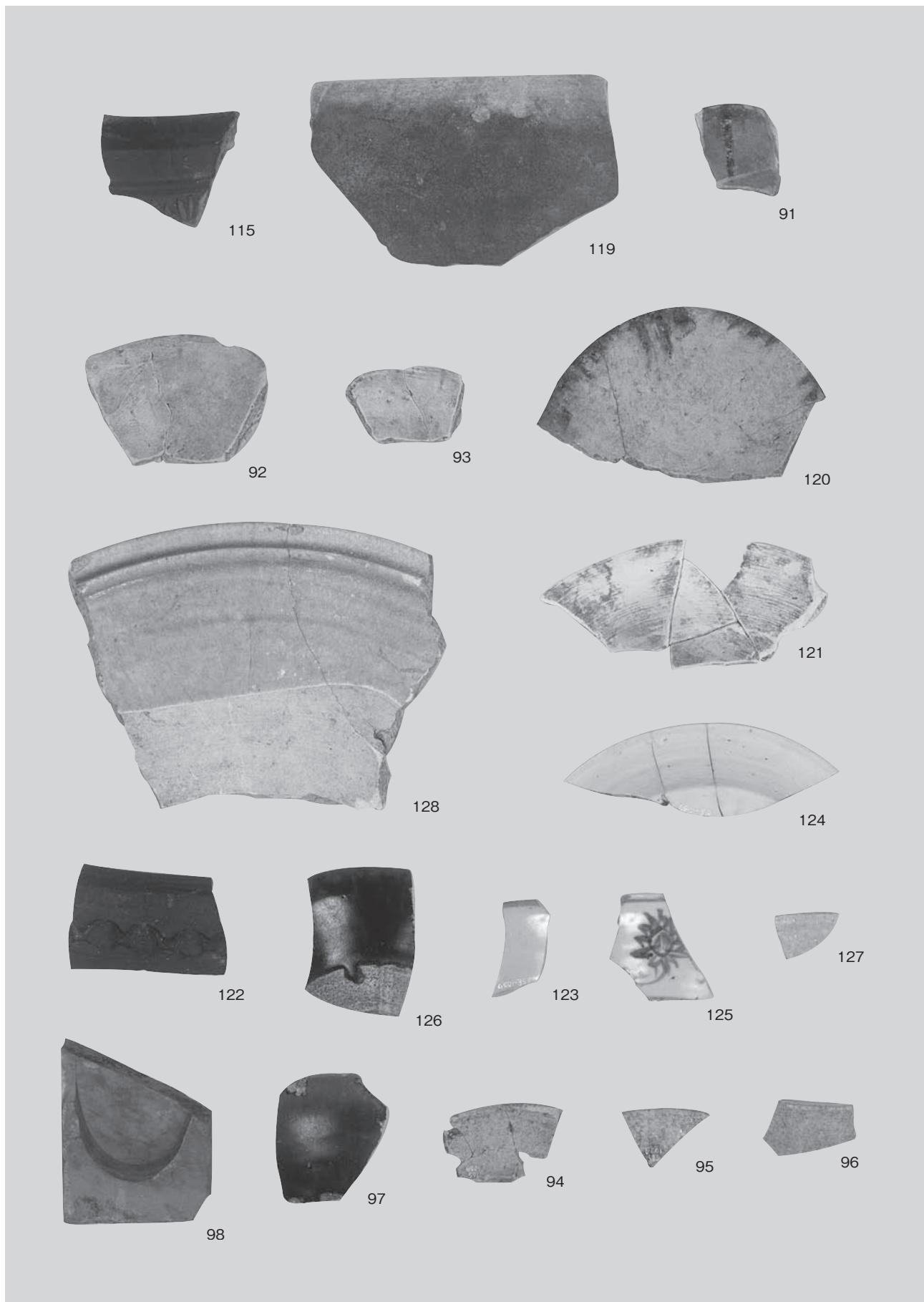
2000～2001年度 園池・SB 46地区出土遺物 (3)



図版 12 遺物 (5)

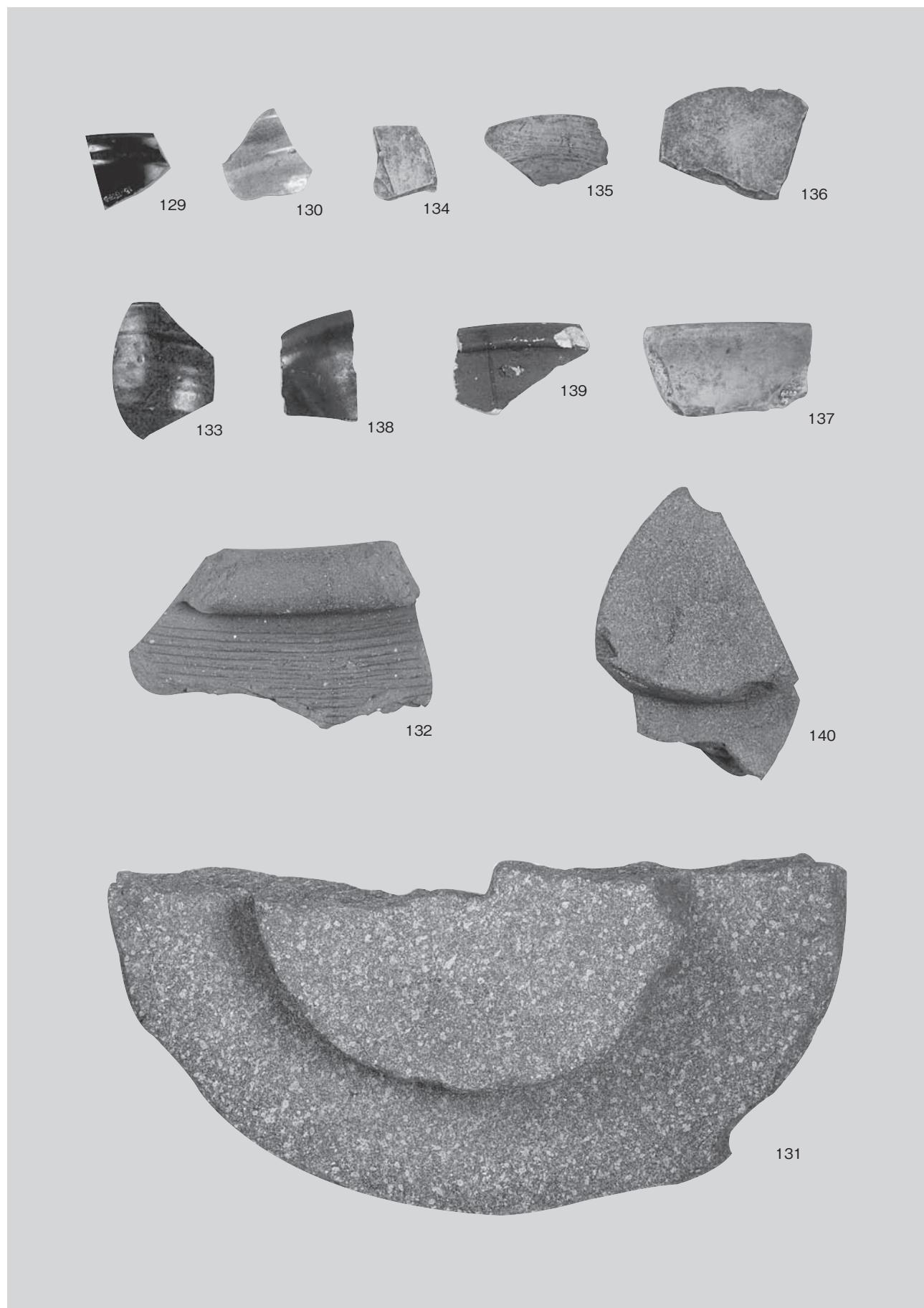


2001 年度 SB 43 地区出土遺物 (1)

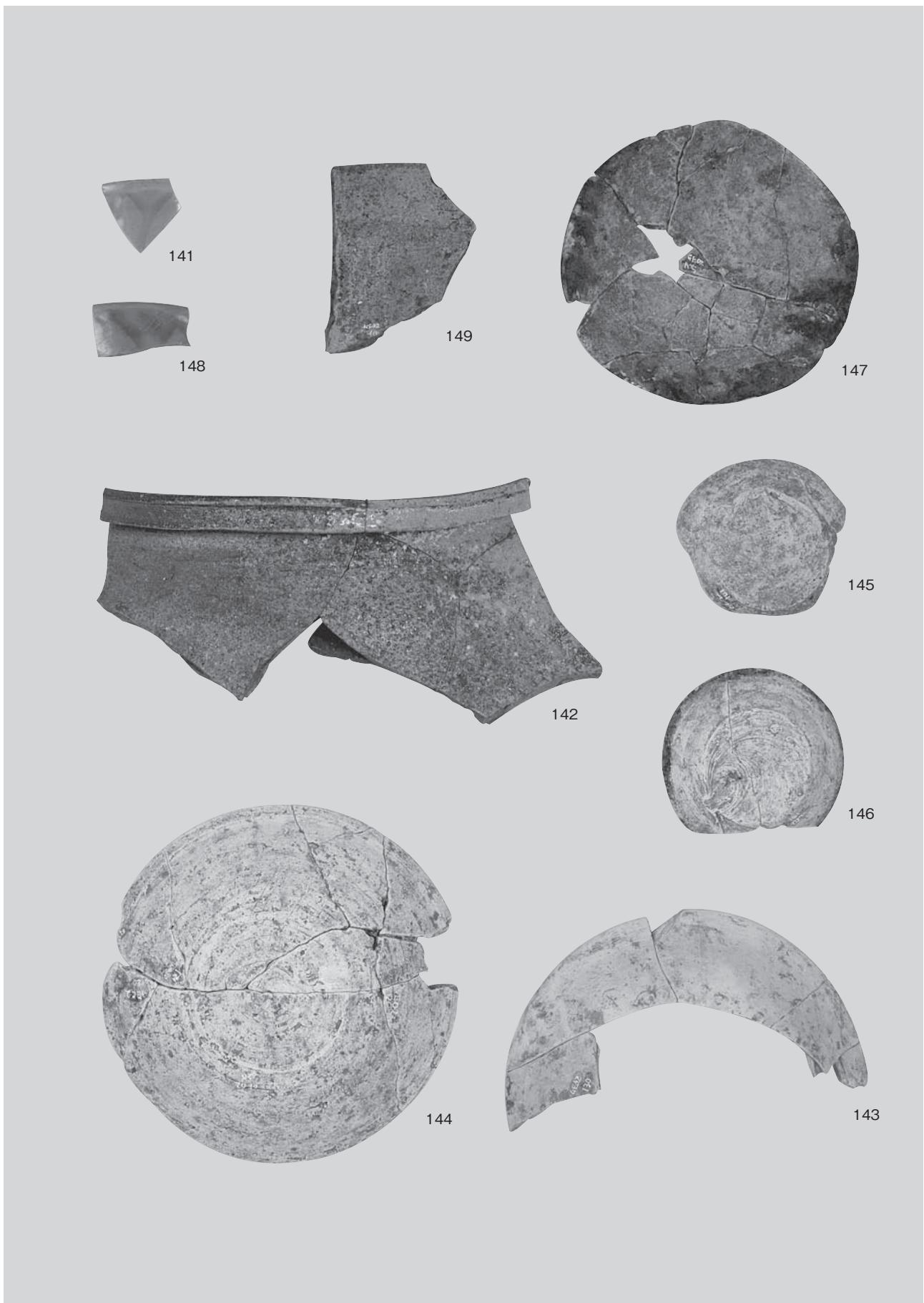


2001 年度 SB 43 地区出土遺物 (2)

図版 14 遺物 (7)

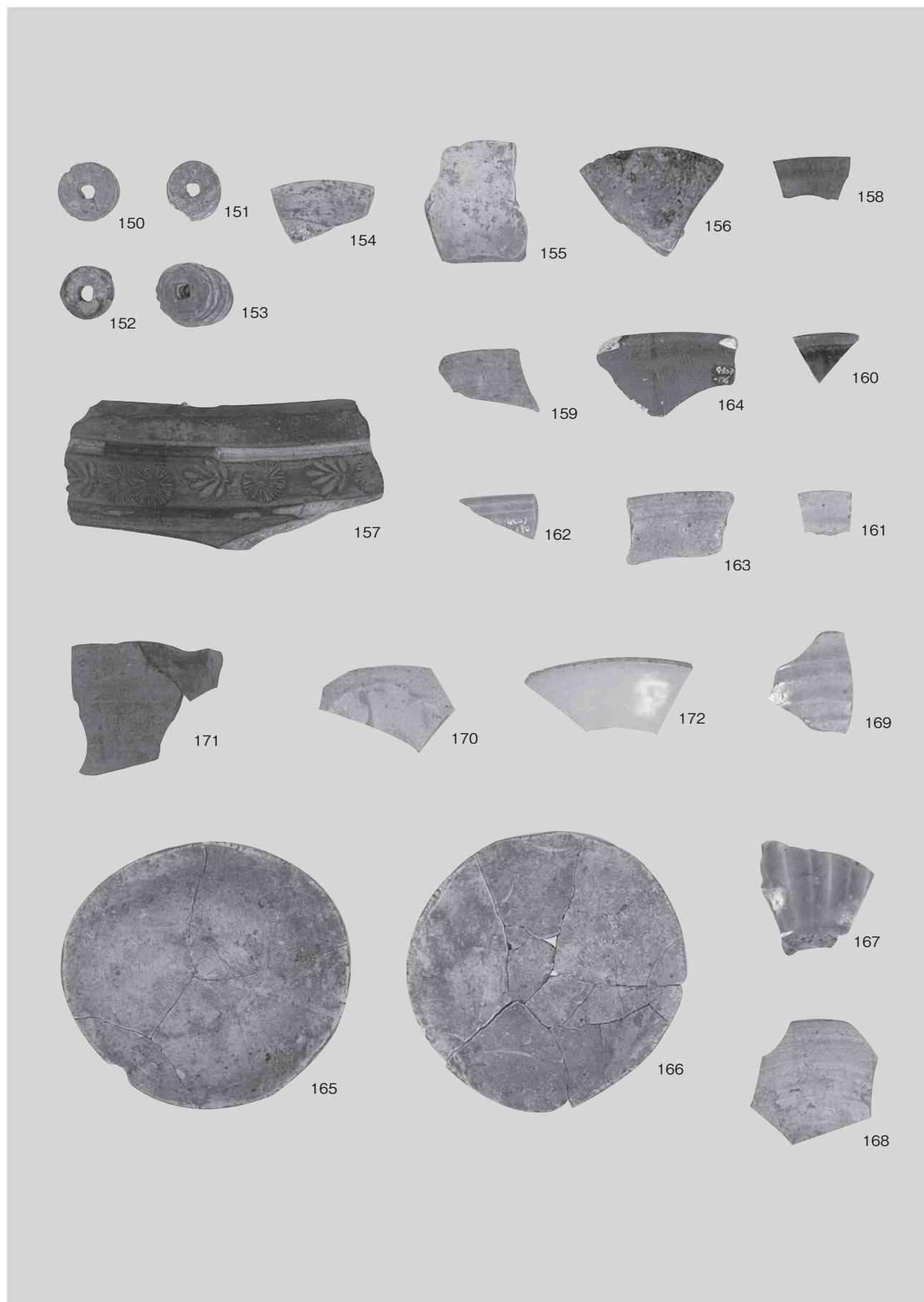


2002 年度 I 地区出土遺物

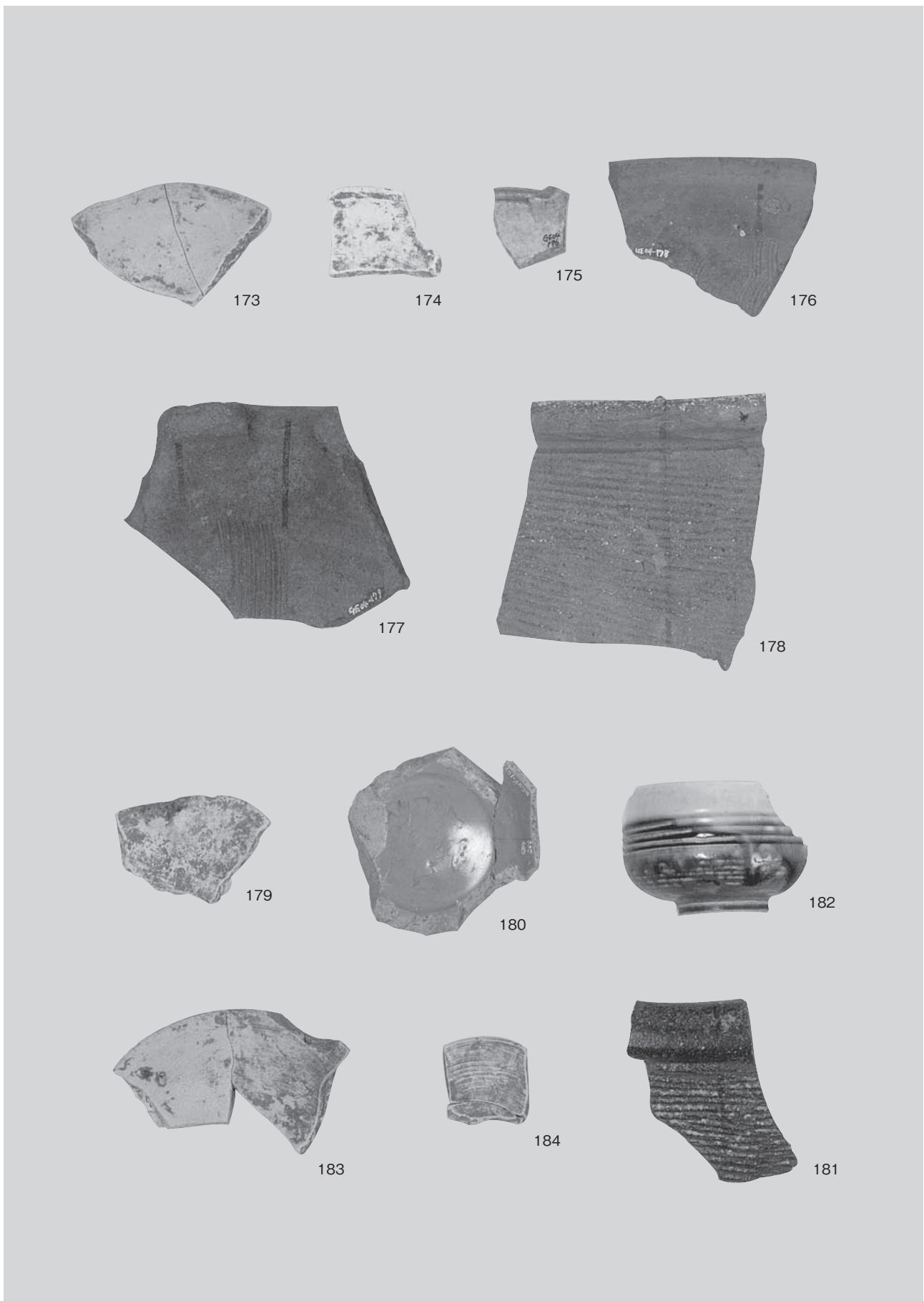


2002 年度 II 地区出土遺物

図版 16 遺物 (9)

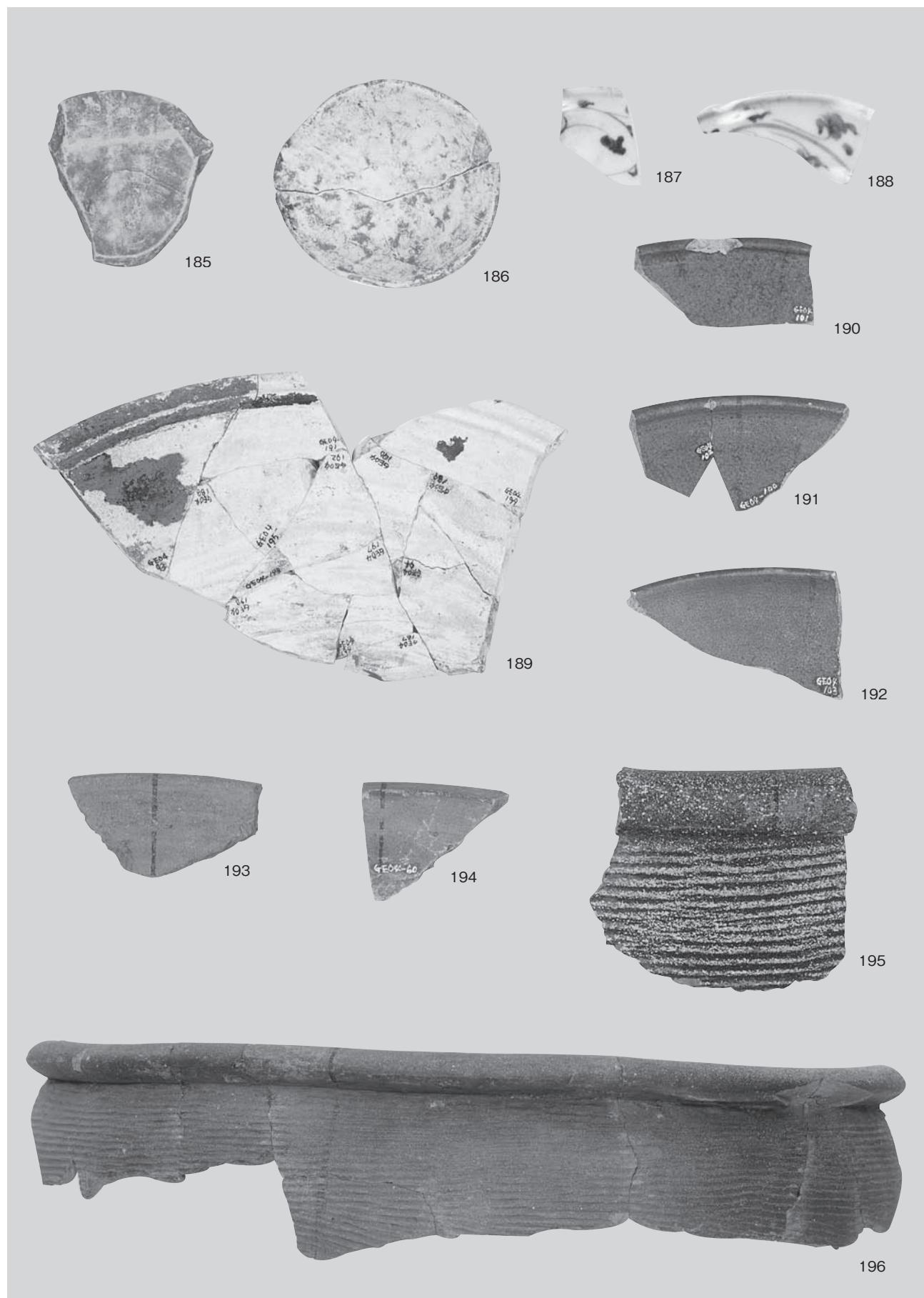


2003 年度 I・II 地区出土遺物

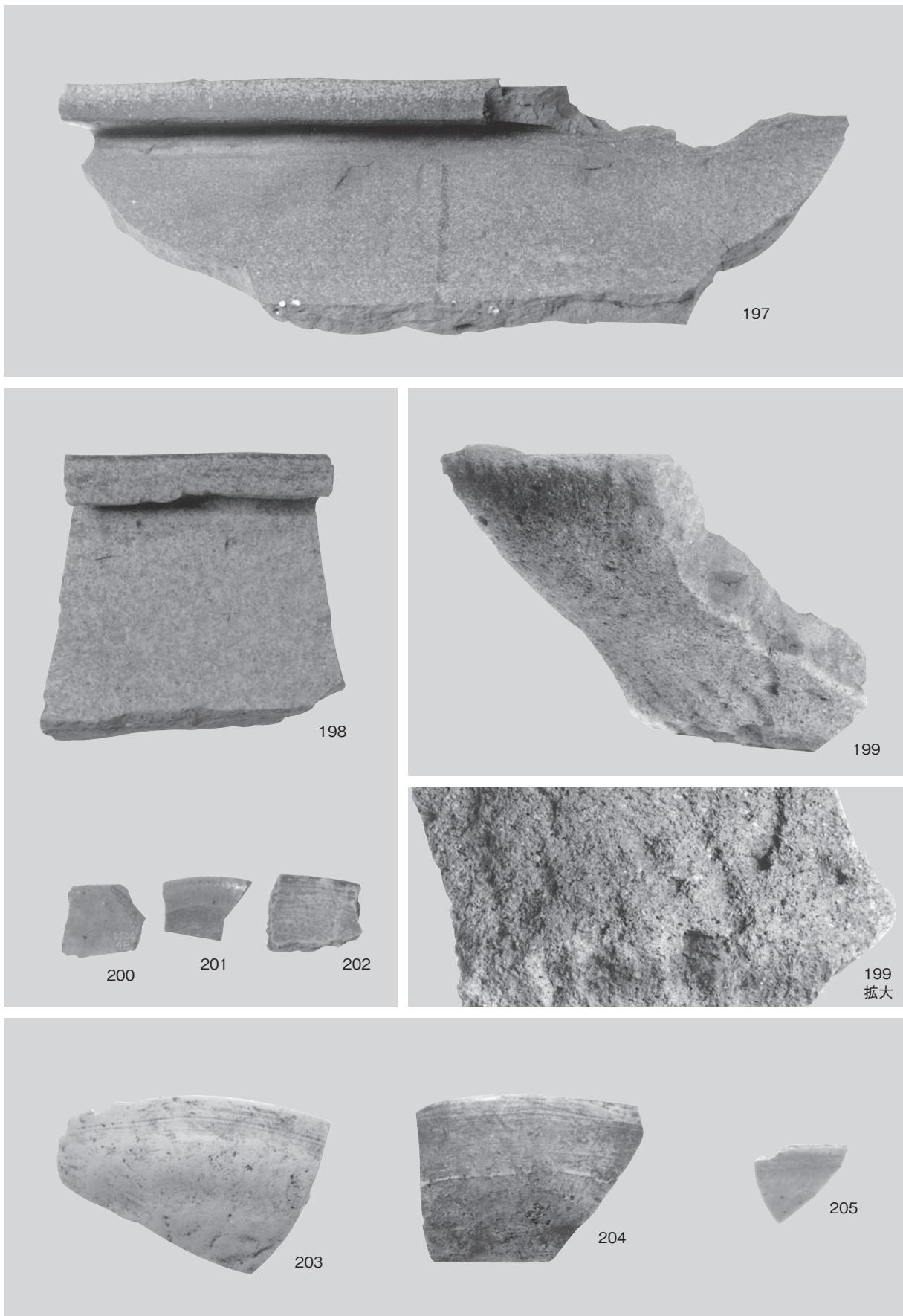


2004 年度 南堀地区出土遺物 (1)

図版 18 遺物 (11)



2004 年度 南堀地区出土遺物 (2)



2004 年度 南堀地区出土遺物 (3)

図版 20 遺物 (13)



産出した花粉化石

1. クリ属、試料 5、PAL. MN 1613
2. トチノキ属、試料 4、PAL. MN 1611
3. ナデシコ科、試料 2、PAL. MN 1610
4. ヨモギ属、試料 5、PAL. MN 1614
5. タンボポ亜科、試料 4、PAL. MN 1612

報告書抄録

飛驒市文化財調査報告書 第1集
江馬氏城館跡調査報告書 第7集

江馬氏城館跡 VI

発行日 2010年3月10日

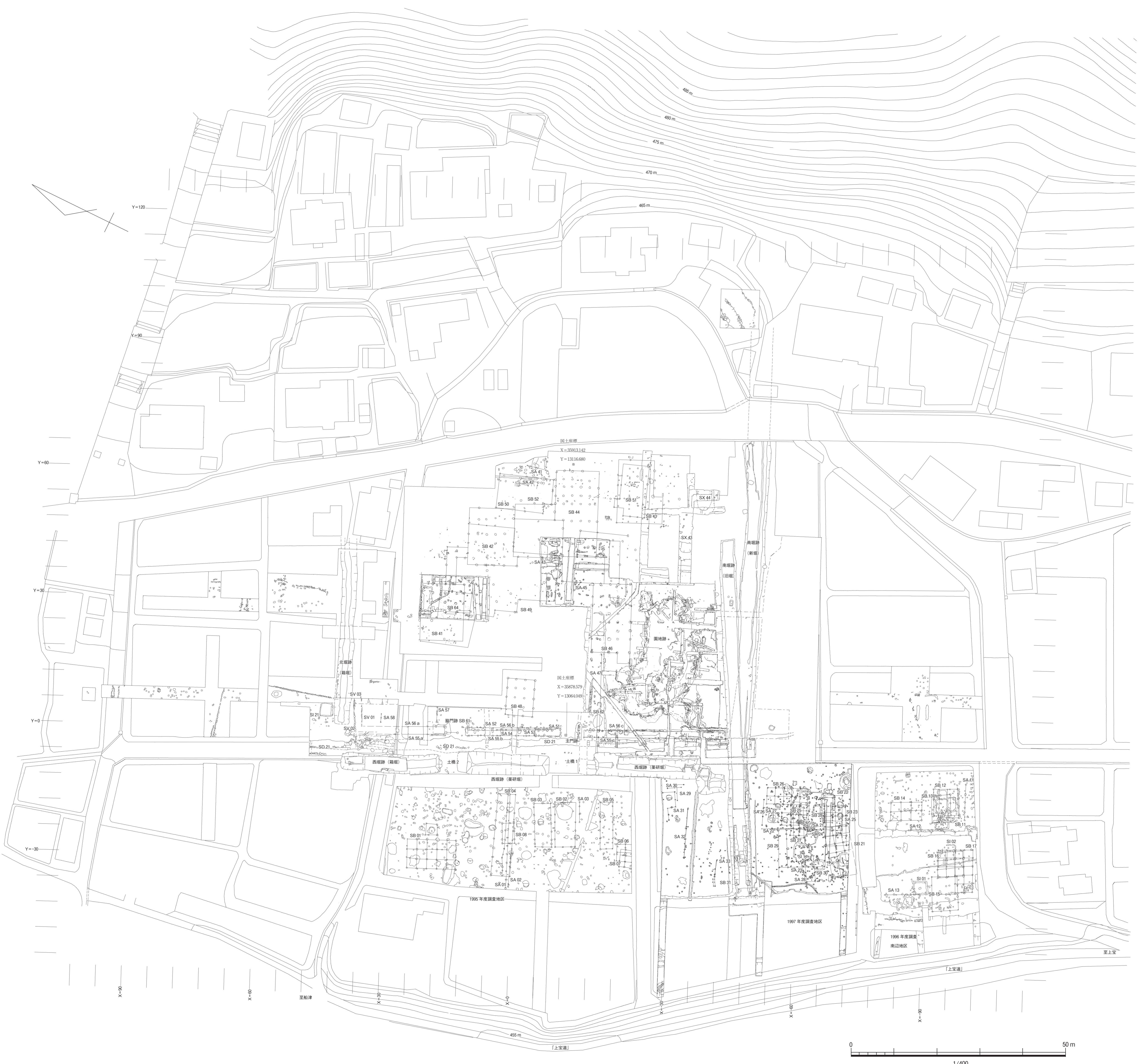
編集・発行 飛驒市教育委員会

〒 509-4292

岐阜県飛驒市古川町本町2番22号

TEL 0577(73)7496

印 刷 有限会社村坂印刷



付図 江馬氏城館跡下館跡遺構平面図